

下月隈C遺跡

V

— 福岡空港周辺整備工事に伴う
下月隈C遺跡第6次発掘調査報告 —

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第839集

— 本文編 —

2005

福岡市教育委員会

第839集 下月隈C遺跡V 正誤表(本文編)

頁	行	誤	正
3	Tab.1	市報第839週	市報第839集
3	Tab.1	2000.4.1~	2000.4.11~
9	21	4月10日に着手し、	4月11日に着手し、
39	14	であ	である。器形の歪みは大きい。
136	35	335~341は弥生土器。	336~341は弥生土器。
138	5	342~348は	335・342~348は
138	11	348は中期中頃の	335・348は中期中頃の
141	Fig.120	遺物番号335がSD444	遺物番号335はSD451
142	Fig. 121	遺物番号374	遺物番号364
200	Fig. 172	遺物番号882	遺物番号822
212	表1(その1)	SD318	SE318
213	表1(その3)	SX559	SK559
250	Fig. 177	板付 I 式古階段	板付 I 式古段階
251	Fig. 178	板付 I 式古階段、新階段	板付 I 式古段階、新段階
260	24~25	比恵遺跡第2次調査、蒲田水ヶ元遺跡第Ⅲ地点、	比恵遺跡第2次調査註1、蒲田水ヶ元遺跡第Ⅲ地点註2、
260	26	片岡宏二氏によって注目され集成されている。	片岡宏二氏によって注目され集成されている註3。
264	Tab1-1、110	1/6残存	1/5残存
265	Tab1-1、187	PL. 欄 空欄	70を追記
265	Tab1-1、184	PL. 欄 70	70を削除
266	Tab1-1、205	PL. 欄 71	71を削除
266	Tab1-1、231	1/2強残存	1/4片
267	Tab1-3、W28	PL. 欄 空欄	72を追記
267	Tab1-3、W38	PL. 欄 空欄	71を追記
268	Tab2-1、014	PL. 欄 73	73を削除
271	Tab2-1、40	PL. 欄 79	79を削除
272	Tab2-1、114	PL. 欄 空欄	80を追記
273	Tab2-1、162	PL. 欄 81	80に変更
274	Tab2-1、201	PL. 欄 空欄	81を追記
278	Tab3-1、123	PL. 欄 空欄	89を追記
278	Tab3-1、132	PL. 欄 89	89を削除
283	Tab3-1、335	PL. 欄 90	90を削除
283	Tab3-1、329	出土遺構欄 SD344	SD451
284	Tab3-1、380	PL. 欄 92	92を削除
285	Tab3-1、427	PL. 欄 95	94に変更
288	Tab3-1、538	突帯文土器	弥生土器
288	Tab3-1、574	PL. 欄 99	99を削除
295	Tab3-2、S42	PL. 欄 空欄	108を追記
295	Tab3-2、S75	PL. 欄 空欄	110を追記
295	Tab3-2、S76	PL. 欄 109	110に変更
296	Tab3-3、W67	PL. 欄 96	96を削除
報告書抄	調査期間	2000.4.1~2001.3.30	2000.4.11~2001.3.30

SHIMOTSUKIGUMA

下月隈C遺跡

V

—福岡市博多区月隈所在の
下月隈C遺跡第6次発掘調査報告—

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第839集

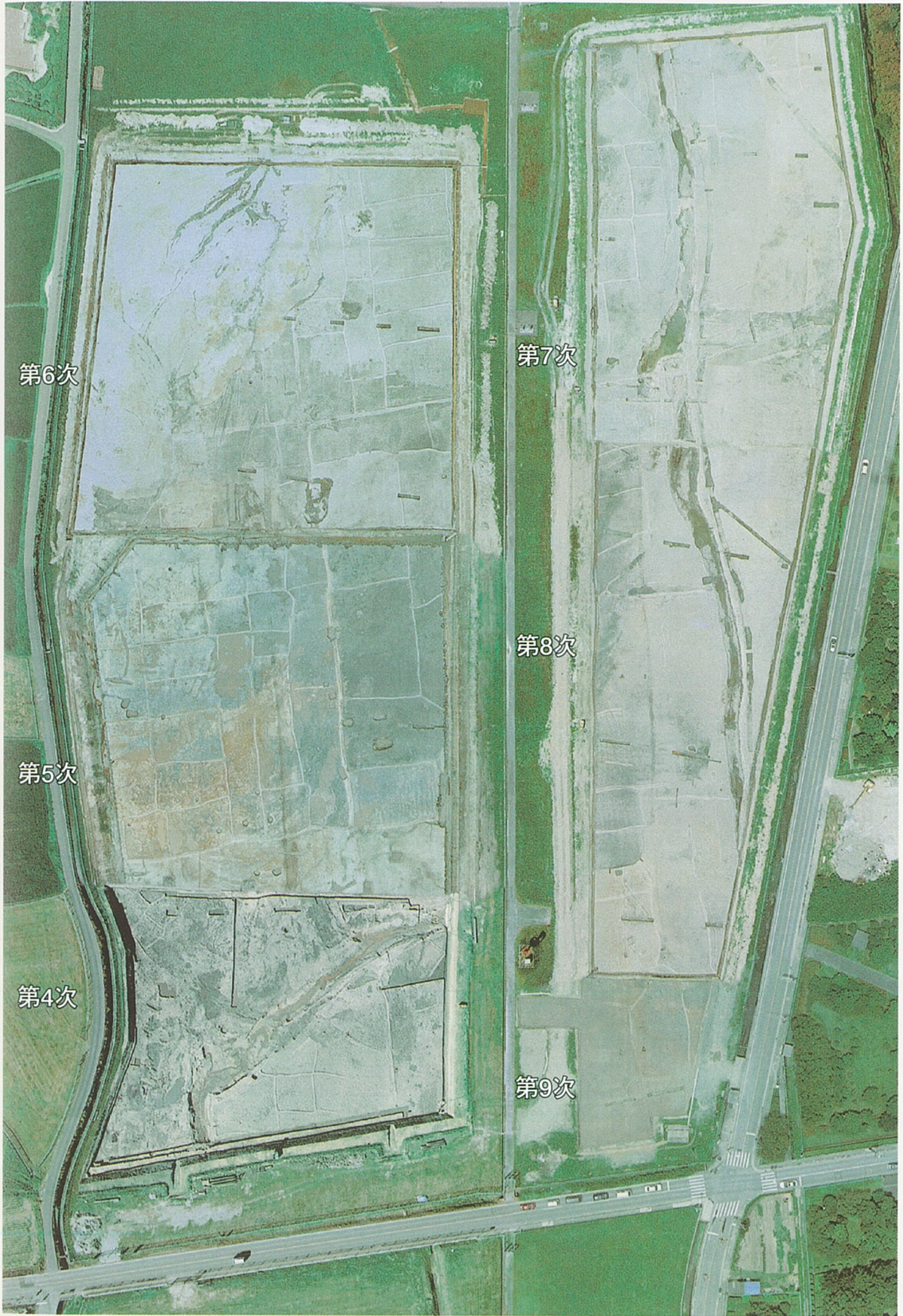
—本文編—



調査番号 0018
調査略号 SHC-6

平成17年

福岡市教育委員会



図版1 第4～9次調査古代～中世遺構全景



図版2 第4～9次調査古墳時代後期～古代前期遺構全景



図版3 第4～9次調査弥生時代前期～古墳時代前期遺構全景

序

博多湾を抱いてアジア大陸と向かい合う福岡市は、古くから大陸文化の受け入れ窓口として栄えてきた地域で、各時代の重要な遺跡が数多く分布しています。特に、福岡市の中心部を南北に流れる那珂川・御笠川流域の博多区・南区から南に隣接する春日市にかけては、弥生時代の「奴国」の中心地域であり、博多区の国史跡の板付遺跡・金隈遺跡、那珂遺跡群や比恵遺跡群、南区の井尻B遺跡群など著名な遺跡が集中しています。

同様な遺跡の存在が予想された福岡空港南側に隣接する博多区月隈地区に、今回、空港周辺の洪水対策用の調節池が建設されることになりました。事前調査を行った結果、遺跡が確認され、記録保存の為に発掘調査を平成10年～15年まで実施いたしました。6年にわたる調査の結果、弥生時代前期から中世にかけての各時代の遺構・遺物が出土し、多大な成果を上げることが出来ました。

本書は、平成12年度に実施した第6次調査の報告書ですが、第6次調査では中世の集落、古代の条里水田や川跡で検出された大規模な水利遺構、弥生時代前期から後期にかけての集落が検出されました。

本書が、市民の皆様の文化財保護に対するご理解とご認識を深める一助になり、また研究資料としてご活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで国土交通省九州地方整備局博多港湾・空港整備事業所および大阪航空局福岡空港事務所をはじめ、多くの方々にご理解とご協力を賜りましたことに対し、心から感謝の意を表します。

平成17年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 植木 とみ子

例 言

1. 本書は福岡市教育委員会が博多区月隈4丁目地内の月隈調節池工事予定内において、2000年度(平成12年度)に実施した下月隈C遺跡第6次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は埋蔵文化財調査第2係主任文化財主事 山崎龍雄と同文化財主事 上角智希(現大規模事業等担当)が担当した。
3. 本書では遺構番号は前年度と重ならぬよう番号を付し、番号の前にSB(建物)、SC(竪穴住居)、SD(溝・河川)、SE(井戸)、SK(土坑)、SS(水田)などの遺構の性格を示す記号を付した。またピット・柱穴については調査面毎に付した。
4. 遺構実測図に使用した方位は磁北である。また全体図に使用した座標は平面直角座標第Ⅱ系で、磁針方位は西偏約6°30'である。座標は旧日本測地系を使用した。
5. 本書の執筆は下記のとおりである。
 第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章-1 ……山崎龍雄
 第Ⅲ章-2 ……上角智希
 第Ⅲ章-3 ……山崎龍雄
 第Ⅲ章-4-2)-①・②・⑦ ……上角智希
 第Ⅲ章-4-1)、2)-③・④・⑤・⑥・⑧~⑩…所一男・山崎龍雄
 第Ⅳ章-1 ……佐藤洋一郎
 第Ⅳ章-2・3・4・5・6 ……株式会社パレオ・ラボ、パリオ・サーヴェイ株式会社
 第Ⅴ章-1 ……所一男
 第Ⅴ章-2 ……山崎龍雄
6. 自然科学分析については、炭化稲種子については総合地球環境学研究所研究部の佐藤洋一郎氏に、種実・動物骨同定は株式会社パレオ・ラボ、樹種同定と放射性炭素年代測定を株式会社パレオ・ラボとパリオ・サーヴェイ株式会社に委託し、分析結果については第Ⅳ章に収録した。
7. 本書では、遺構の撮影は山崎・上角が行い、遺物の撮影については一部を山崎・上方高弘が、一部をフォトハウスOKAに委託した。遺構の実測は各面の遺構全体図を写測エンジニアリング株式会社に委託し、個別遺構などその他については調査担当者と瀬戸啓治が行い、遺物の実測は土器・石器類は調査担当者の他、上方・所一男・藤野雅基・平ノ内武が行った。木器の実測は調査担当者と犬丸陽子が行った。トレースは調査担当者と所・山野祥子・西嶋奈美・松永栄子が行った。
 遺物観察表については調査担当者と澤玲子・木藤直子・所一男が作成した。
8. 本文上層の色調や遺物の色調は新版標準上色帖によっている。
9. 本書編集は山崎龍雄が上角智希と協議のうえ行った。編集に当たっては所一男の協力を受けた。
10. 発掘調査にかかる遺物・記録類の全ては、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である

本文目次

第Ⅰ章	はじめに	1
1	調査に至る経過	1
2	調査の組織	1
第Ⅱ章	遺跡の立地と歴史的環境	5
1	遺跡の位置と立地	5
2	遺跡の歴史的環境	5
第Ⅲ章	調査の記録	9
1	調査の概要	9
2	第Ⅰ面の記録	13
3	第Ⅱ面の調査	40
4	第Ⅲ面の調査	62
5	第Ⅳ面の調査	93
第Ⅳ章	自然科学分析	
1	第6次調査出土のイネ種子およびその他の植物遺体の分析	205
2	第6次調査出土の大型植物化石	211
3	第6次調査出土骨片について	218
4	第6次調査出土材の樹種からみた木材利用	221
5	第6次調査出土炭化物の放射性炭素年代測定	223
6	第6次調査出土柱根の放射性炭素年代測定	236
第Ⅴ章	総括	
1	下月隈C遺跡第6次調査出土刻目突帯文土器の位置付けについて	247
2	調査のまとめ	255
付表	遺物観察表	261

挿 図 目 次

Fig.1	下月隈C遺跡の位置(1/100,000) ……………4	Fig.54	SD198・373・375・376・378・383・387・390出土土器(1/4) 67
Fig.2	下月隈C遺跡周辺の遺跡(1/50,000) ……………7	Fig.55	SD390・396・433出土土器(1/4) ……………68
Fig.3	下月隈C遺跡の旧地形図(大正末～昭和初頃1/10,000) ……8	Fig.56	SK381・418・419と出土土器(1/40・1/4) ……………69
Fig.4	下月隈C遺跡調査地点位置図(1/6,000) ……………11	Fig.57	SX389と出土土器(1/100・1/4) ……………70
Fig.5	下月隈C遺跡調査区配置図(1/2,000) ……………12	Fig.58	SX368・399出土土器(1/4) ……………71
Fig.6	SB608(1/100) ……………13	Fig.59	SD190・谷部・SX389出土木製品(1/8) ……………72
Fig.7	第I面遺構全体図(1/400) ……………折り込み	Fig.60	SX389・423出土木製品(1/8) ……………73
Fig.8	SD305・322・SX330土層図(1/60) ……………15	Fig.61	第5次・6次水田配置図(1/800) ……………75
Fig.9	SD305・316・322出土土器(1/4) ……………16	Fig.62	水田配置図(1/300) ……………折り込み
Fig.10	SD322・335・344出土土器(1/4) ……………17	Fig.63	各畦断面図(1/40) ……………77
Fig.11	SE303・304・306・309・311～313・315(1/40) ……………19	Fig.64	水口SX397・423・428(1/50) ……………78
Fig.12	SE318・320・321・325・334・339・408・409(1/40) ……21	Fig.65	SS192・200出土土器(1/4) ……………79
Fig.13	SE315・320・339井筒(1/5) ……………22	Fig.66	SS200・410・424出土土器(1/4) ……………80
Fig.14	SE304・309・311・315・318・320・409出土土器(1/4) 24	Fig.67	遺構面出土土器①(1/4) ……………81
Fig.15	SE304・306出土木製品(1/8・1/4・1/5・1/6) ……………25	Fig.68	遺構面出土土器②(1/4) ……………82
Fig.16	SE306・315・318・321出土木製品(1/5・1/4・1/6) ……26	Fig.69	SX429・430,遺構面下包含層出土土器群①(1/4) ……84
Fig.17	SE334出土土器(1/4) ……………27	Fig.70	SX431・432,遺構面下包含層出土土器群②(1/4) ……85
Fig.18	SE334出土木製品・井戸枠(1/5・1/6・1/8) ……………28	Fig.71	遺構面下包含層出土土器①(1/4) ……………86
Fig.19	SE334井戸枠(1/8) ……………29	Fig.72	遺構面下包含層出土土器②(1/4) ……………87
Fig.20	SK302・314・324・327(1/40) ……………30	Fig.73	遺構面下包含層出土土器③(1/5・1/6・1/4) ……88
Fig.21	SK302・314・319・329・331・332・336・338出土土器(1/4) 31	Fig.74	各遺構出土土製品(1/3・1/4) ……………89
Fig.22	SD322・SK317(1/60) ……………32	Fig.75	各遺構出土石器・石製品①(1/4・1/3) ……………90
Fig.23	SK317出土土器①(1/4) ……………33	Fig.76	各遺構出土石器・石製品②(1/3・2/3) ……………91
Fig.24	SK317出土土器②(1/4) ……………34	Fig.77	建物・竪穴住居遺構配置図(1/400) ……………93
Fig.25	SK317出土土器③(1/4),SD322,SE303,SK313・314・317出土石製品(1/3) 35	Fig.78	第IV面遺構全体図(1/400) ……………折り込み
Fig.26	SD305・322,SK317出土木製品(1/4・1/6) ……………36	Fig.79	SB579・580・581・582(1/80) ……………95
Fig.27	SK317・324出土木製品(1/8) ……………37	Fig.80	SB584・585・586(1/80) ……………96
Fig.28	ピット・遺構面・包含層出土土器(1/4) ……………38	Fig.81	SB588・589・590・591(1/80) ……………97
Fig.29	第II面水田配置図(1/750) ……………40	Fig.82	SB592・593・598・599(1/80) ……………98
Fig.30	水田出土土器(1/4) ……………41	Fig.83	SB600・601・605(1/80) ……………99
Fig.31	第5・6次調査古代水田面合成図(1/800) ……………43	Fig.84	SB606・607(1/80) ……………100
Fig.32	第II面遺構全体図(1/400) ……………折り込み	Fig.85	掘立柱建物出土遺物(1/4・1/3・1/6) ……………100
Fig.33	堰・護岸杭列平面図(1/400) ……………45	Fig.86	SB579・584出土礎板・柱根(1/10) ……………102
Fig.34	SX395部分A築造過程復元図(1/100・1/60) ……………46	Fig.87	SB588・581・582出土礎板・柱根(1/10) ……………103
Fig.35	SX395部分B築造過程復元図(1/100・1/60) ……………47	Fig.88	SB589・598・607出土礎板・柱根(1/10) ……………104
Fig.36	SX395土層図(1/60) ……………48	Fig.89	調査区遺構図(1/250) ……………折り込み
Fig.37	SX395出土土器①(1/4) ……………49	Fig.90	SC504(1/60) ……………105
Fig.38	SX395出土土器②(1/4) ……………50	Fig.91	SC504・522出土遺物(1/4・1/1) ……………105
Fig.39	SX395出土木製品①(1/8) ……………50	Fig.92	SC522・532(1/60) ……………106
Fig.40	SX395出土木製品②(1/6) ……………51	Fig.93	SD369遺物取上げ図(1/600) ……………107
Fig.41	SX395出土木製品③(1/10・1/8) ……………52	Fig.94	SD369・388・471土層(1/60) ……………108
Fig.42	堰SX403・421(1/60) ……………54	Fig.95	SD369出土土器①(1/4) ……………109
Fig.43	SX403・421出土土器(1/4) ……………55	Fig.96	SD369出土土器②(1/4) ……………110
Fig.44	SX403出土木製品(1/6) ……………55	Fig.97	SD369出土土器③(1/4) ……………111
Fig.45	河川流路配置図(1/750) ……………56	Fig.98	SD369出土土器④(1/4) ……………112
Fig.46	SD362出土遺物(1/4・1/6) ……………57	Fig.99	SD369出土木製品①(1/6) ……………113
Fig.47	SD402出土遺物(1/4・1/6) ……………58	Fig.100	SD369出土木製品②(1/8) ……………114
Fig.48	SD398・404・411・414出土遺物(1/4・1/8) ……………59	Fig.101	SD369出土木製品③(1/8) ……………115
Fig.49	古墳・弥生時代の遺物(1/4・1/6・1/3) ……………60	Fig.102	SD369出土木製品④(1/10・1/12) ……………116
Fig.50	SD190・198・396溝土層図(1/80・1/40) ……………63	Fig.103	SD388遺物取上げ図(1/500) ……………119
Fig.51	第III面遺構全体図(1/400) ……………折込	Fig.104	SD388-1区上層出土土器(1/4・1/8) ……………123
Fig.52	SD190出土土器(1/4) ……………65	Fig.105	SD388-1区上層・中層出土土器(1/4) ……………124
Fig.53	SD190・390出土木製品(1/4) ……………66	Fig.106	SD388-1区中層下層出土土器(1/4・1/6) ……………125

Fig. 107	SD388-1区下層・底面出土土器(1/4) ……	127	Fig. 144	SK488出土土器㊸(1/4) ……	168
Fig. 108	SD388-1区底面・土器群出土土器(1/4) ……	128	Fig. 145	SK495・496・500・503・511・517・531・538・544・557(1/40) ……	171
Fig. 109	SD388-1区土器群上層・下層出土土器①(1/4) ……	129	Fig. 146	SK492・494～496出土土器(1/4) ……	172
Fig. 110	SD388-1区土器群下層出土土器②(1/4) ……	130	Fig. 147	SK500出土土器(1/4) ……	173
Fig. 111	SD388-1区土器群下層出土土器③(1/4) ……	131	Fig. 148	SK500～502・508・511出土土器(1/4) ……	174
Fig. 112	SD388-1区土器群下層出土土器④(1/4) ……	132	Fig. 149	SK517・519・530・539・544・548・551・553出土土器(1/4) ……	176
Fig. 113	SD388-1区土器群下層出土土器⑤(1/4) ……	133	Fig. 150	SK555・597(1/40) ……	177
Fig. 114	SD388-1区土器群下層出土土器⑥(1/4) ……	134	Fig. 151	SK555出土土器(1/4) ……	178
Fig. 115	SD388-1区土器群下層⑦・1区出土土器①(1/4) ……	135	Fig. 152	SK555出土木製品(1/4) ……	179
Fig. 116	SD388-1区出土土器②(1/4) ……	137	Fig. 153	SK557・562・564・594・596出土土器(1/4) ……	180
Fig. 117	SD388-1区出土土器③(1/4) ……	138	Fig. 154	SK460・463・495・500・555出土土製品(1/3) ……	180
Fig. 118	SD388-2～4区・土層ベルト出土土器(1/4) ……	139	Fig. 155	SK384・460・468・475・495・496・500・SX559出土土器(1/3) ……	181
Fig. 119	SD388出土木製品(1/4) ……	140	Fig. 156	SK460・488出土石器(2/3)、SK384出土玉(1/1) ……	182
Fig. 120	SD444・451・471・481出土土器(1/4) ……	141	Fig. 157	SX434・436出土土器(1/4) ……	185
Fig. 121	SD482・493・497・510・521・540・543出土土器(1/4) ……	142	Fig. 158	SX435・436出土土器(1/4) ……	186
Fig. 122	SD506出土土器(1/4) ……	144	Fig. 159	SX436・443・445・458・472・484出土土器(1/4) ……	188
Fig. 123	SD507(1/40) ……	145	Fig. 160	SX523・534(1/40) ……	189
Fig. 124	SD507出土土器①(1/4) ……	146	Fig. 161	SX528及びび出土土器(1/60・1/4) ……	189
Fig. 125	SD507出土土器②(1/4) ……	147	Fig. 162	SX523出土土器①(1/4) ……	190
Fig. 126	SD505(1/100・1/60) ……	148	Fig. 163	SX523出土土器②(1/4) ……	191
Fig. 127	SD505出土土器①(1/4) ……	149	Fig. 164	SX527・533・534・536出土土器(1/4) ……	192
Fig. 128	SD505出土土器②(1/4) ……	150	Fig. 165	SX559出土土器(1/4) ……	193
Fig. 129	SD505出土土器③(1/4) ……	151	Fig. 166	SX565・568・571・575・576・604出土土器(1/4)、SX434・436出土土製品(1/3) ……	194
Fig. 130	SD505出土鉄製品(1/3) ……	151	Fig. 167	SX435・436・565・559出土木製品(1/3・1/4・1/8) ……	195
Fig. 131	SD388・471・507出土土製品(1/3) ……	152	Fig. 168	SX434・435・436・534出土石器・石製品(1/3) ……	196
Fig. 132	SD369・388出土石器・石製品(1/3) ……	153	Fig. 169	SX533・536・570・573出土石器(1/3・2/3) ……	197
Fig. 133	SD388・471・505・506・602出土石器(1/3) ……	154	Fig. 170	SP467及びび出土土器(1/20・1/6) ……	199
Fig. 134	SD308・388・481・505～507出土石器(2/3)、出土玉(1/1) ……	155	Fig. 171	ピット出土木製品(1/2) ……	199
Fig. 135	SK448・463・468・469・473・477・487・490・492(1/40) ……	158	Fig. 172	ピット出土土器(1/4・1/6) ……	200
Fig. 136	SK384・448・459出土土器(1/4) ……	160	Fig. 173	遺構面・攪乱出土土器(1/4)・土製品(1/3) ……	201
Fig. 137	SK460(1/40) ……	161	Fig. 174	遺構面出土土器①(1/3) ……	202
Fig. 138	SK460出土土器①(1/4) ……	162	Fig. 175	遺構面出土石器②(1/2・1/3)、出土玉(1/1) ……	203
Fig. 139	SK460出土土器②(1/4) ……	163	Fig. 176	SK491・492追加出土遺物(1/4) ……	204
Fig. 140	SK462・463・468出土土器(1/4) ……	164	Fig. 177	板付I式古段階の遺構(SK488、SK500)出土土器(1/8) ……	250
Fig. 141	SK488(1/40) ……	165	Fig. 178	板付I式古段階(SD507)、 新段階の遺構(SK460、SK548)出土土器(1/8) ……	251
Fig. 142	SK488出土土器①(1/4) ……	166	Fig. 179	席田群条里・官邸復元図 ……	256
Fig. 143	SK488出土土器②(1/4) ……	167			

表 目 次

Tab. 1	下月隈C遺跡第1次～第9次調査概要 ……	3	Tab. 4	第IV面掘立柱建物一覽表 ……	94
Tab. 2	第I面出土土井戸一覽表 ……	39	Tab. 5	古代風水書年表 ……	257
Tab. 3	第II面水田一覽表 ……	42	付表	第I～IV面遺物観察表 ……	261

本文編巻頭図版目次

図版1	第4～9次調査古代～中世遺構全景
図版2	第4～9次調査古墳時代後期～古代前期遺構全景
図版3	第4～9次調査弥生時代前期～古墳時代前期遺構全景

第Ⅳ章 自然科学分析目次

1 第6次調査出土のイネ種子およびその他の植物遺体の分析	
表1 分析試料一覧…209	表2 イネ種子計測値…209
表3 現存イネおよび出土イネにおけるPS-ID領域の塩基配列…209	
表4 出土した種子の種の固定…210	
表5 雀居遺跡におけるイネ計測値…209	
表6 日本各地の弥生時代の遺跡から出土したイネ(玄米)の長さ,S.D.,およびc.v.値…209	
2 第6次調査出土の大型植物化石	
表1 大型植物化石一覧表(その1)…212	表2 大型植物化石一覧表(その2)…213
表3 大型植物化石一覧表(その3)…213	
図版1 出土した大型植物化石…216	図版2 出土した大型化石…217
3 第6次調査出土骨片について	
表1 地点別出土骨片部位観察表…218	
図版1 第6次調査出土骨片1…220	図版2 第6次調査出土骨片2…220
4 第6次調査出土材の樹種から見た木材利用	
表1 弥生中期～後期の建物建築材の用材…222	表2 建物別にみた柱・礎板の用材…222
表3 古墳前期～奈良時代の建物建築材の用材…223	表4 遺構別にみた古墳時代頃の抗の用材…223
表5 遺構・グリッド別にみた古代の抗の用材…224	表6 抗材の伐採時期…225
表7 欠板の用材…225	表8 流木の樹種…225
表9 弥生後期～古墳中期の木製品の用材…226	表10 古墳後期～奈良時代の木製品の用材…226
表11-1 古代の木製品の用材(1)…227	表11-2 古代の木製品の用材(2)…227
表12 中世の木製品の用材…227	
図1 古墳・古代における丸太木材の径の分布…223	図2 古代における杭材の組成図…224
図版1 出土材・木材組織光学顕微鏡写真1…229	図版2 出土材・木材組織光学顕微鏡写真2…230
5 第6次調査出土炭化物の放射性炭素年代測定結果	
表1 放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果…232	
図1 暦年代較正グラフ1…233	図2 暦年代較正グラフ2…234
図2 暦年代較正グラフ3…235	
6 第6次調査出土建物柱根の放射性炭素年代測定結果	
表1 放射性炭素年代測定結果…237	表2 暦年代較正結果…238
図1 暦年代較正グラフ1…239	図5 暦年代較正グラフ5…243
図2 暦年代較正グラフ2…240	図6 暦年代較正グラフ6…244
図3 暦年代較正グラフ3…241	図7 暦年代較正グラフ7…245
図4 暦年代較正グラフ4…242	図8 暦年代較正グラフ8…246

図版編巻頭図版目次

図版1 調査地と福岡空港周辺(2004年撮影)	(2) 同木製人形出土状況
図版2 (1) 福岡空港と調査地(南から)	図版10 (1) 第Ⅳ面SD506出土の弥生時代前期土器
(2) 調査地南東側から福岡市街を臨む	(2) 第Ⅳ面SK488出土の弥生時代前期土器
図版3 第Ⅱ遺構面(古代)全景	図版11 (1) 第Ⅳ面出土の弥生時代石器
図版4 第Ⅱ遺構面旧河川の状況	(2) 第Ⅳ面出土のガラス玉 (3) SD505から出土した鉄斧
図版5 第Ⅱ遺構面旧河川内遺構全景	図版12 (1) 第Ⅰ面検出の区画溝 (2) 第Ⅰ面で検出した方形井戸
図版6 第Ⅲ遺構面(古墳時代後期)全景	(3) SK317木製品出土状況
図版7 第Ⅳ遺構面(弥生時代～古墳時代前期)全景	図版13 (1) 第Ⅱ面条里水田検出状況(北から)
図版8 第Ⅳ遺構面高所部遺構検出状況	(2) 条里に伴う東西大畦(北東から)
図版9 (1) 第Ⅱ面護岸遺構SX395から出土した木製人形	図版14 (1) 護岸遺構SX395検出状況(北から)

図版15 (2) SX395構築状況 (3) 第Ⅲ面SX389検出状況(南から)
 (1) 第Ⅳ面高所部遺構全景(南東から)
 (2) 掘立柱建物検出状況(南東から)

図版16 (1) 方形周溝状遺構SD505(北東から)
 (2) 同 鉄斧出土状況 (3) SK488検出状況(北西から)

遺 構 図 版

- | | | | |
|--------|---|--------|---|
| PL. 1 | 1937年(昭和14年)の調査地と周辺 | | |
| PL. 2 | 1947年(昭和22年)の調査地と周辺 | | |
| PL. 3 | 1948年(昭和23年)の調査地と周辺 | | |
| PL. 4 | 1960年(昭和35年)の調査地と周辺 | | |
| PL. 5 | 1969年(昭和44年)の調査地と周辺 | | |
| PL. 6 | 1993年(平成5年)の調査地と周辺 | | |
| PL. 7 | (1) 調査区北側全景(東から) (2) 調査区東側全景(北から) | | |
| PL. 8 | (1) SD322(東から) (2) SD322(北から) | | |
| PL. 9 | (1) SD308(北から) (2) SD326(北から) | | |
| PL. 10 | (1) SE303(南から) (2) SE309(北から)
(3) SE304(西から) (4) 同 井戸枠の状況(北から)
(5) SE306(南から) (6) SE306井筒(北東から) | | |
| PL. 11 | (1) SE311(北から) (2) SE312(西から)
(3) SE313(南東から) (4) SE315(北から)
(5) SE318(西から) (6) SE318遺物出土状況 | | |
| PL. 12 | (1) SE321(南から) (2) 同 井戸枠の状況(南から)
(3) SE334(東から) (4) 同 検出状況(南から)
(5) SE339(南から) (6) SE409(北から) | | |
| PL. 13 | (1) SK317(東から) (2) 同 遺物出土状況
(3) 同 遺物出土状況 (4) 同遺物出土状況
(5) 同 遺物出土状況 | | |
| PL. 14 | (1) SK314(南東から) (2) SK324(東から)
(3) SK327(東から) (4) SK354(南から)
(5) SX330土層(北から) | | |
| PL. 15 | (1) 水田検出状況(北から) (2) 水田検出状況(北東から) | | |
| PL. 16 | (1) 水田検出状況(北西から) (2) 東側水田検出状況(西から) | | |
| PL. 17 | (1) SS348・349水田(南から) (2) SS351水田(南西から) | | |
| PL. 18 | (1) 東西条里大畦(北東から) (2) 南北条里大畦(南東から) | | |
| PL. 19 | (1) SX360(北西から) (2) SX360に伴う杭列(北西から) | | |
| PL. 20 | (1) SX364杭列(東から) (2) SX355水田(南から)
(3) SD359(西から) (4) SX347(西から) | | |
| PL. 21 | (1) SS349水田(西から) (2) 同 水田(西から)
(3) 同 水田(西から) (4) 同 水田(西から)
(5) 同 水田(西から) (6) SS349・350水田(西から) | | |
| PL. 22 | (1) SD362埋没状況(北西から)
(2) SX395護岸杭列検出状況(北から) | | |
| PL. 23 | (1) SX395(南から) (2) 同西側(南西から) | | |
| PL. 24 | (1) SX395西側状況(北西から)
(2) 同 東側検出状況(北東から) | | |
| PL. 25 | (1) SX395構築状況(西から)
(2) 同R-26区構築状況(西から) | | |
| PL. 26 | (1) SX395 R-27区構築状況(北から)
(2) 同R-27区構築状況(西から)
(3) 同T-24区構築状況(北から) (4) 同 構築状況(西から)
(5) 同 構築状況(西から) | | |
| PL. 27 | (1) SX395 S-24区構築状況①(北から)
(2) 同S-24区構築状況③(北から)
(3) 同S-24区構築状況⑤(北から) | | |
| | | PL. 28 | (1) SX395齋申出土状況 (2) 同 曲物底板出土状況
(3) 同 人形出土状況 (4) 同 板材出土状況
(5) 同 横木に転用の建築材 (6) 同 加工の状況 |
| | | PL. 29 | (1) SX395 R-25区木製祭祀具出土状況
(2) 同R-26区曲物底板出土状況 (3) 同 曲物出土状況
(4) 同 曲物蓋出土状況 (5) SX403漆器出土状況
(6) 同木製祭祀具出土状況 |
| | | PL. 30 | (1) SD402(北東から) (2) SX403堰(南東から) |
| | | PL. 31 | (1) SX403(北西から) (2) 同構築状況(南東から) |
| | | PL. 32 | (1) SD362内で検出した杭列(南西から)
(2) SD398(北東から) (3) SX412構築状況(南西から) |
| | | PL. 33 | (1) SD190・390(北東から) (2) SD190木器出土状況
(3) 同 須恵器出土状況 (4) SD198・396(南東から) |
| | | PL. 34 | (1) SD190、SX389(南から)
(2) SX389杭列北側(西から) (3) 同 南側(西から) |
| | | PL. 35 | (1) SX389完掘状況(南西から) (2) 同 完掘状況(南東から) |
| | | PL. 36 | (1) SS192・424水田(南西から) (2) SS192水田(東から) |
| | | PL. 37 | (1) SS200上層水田(南から) (2) 同 上層水田(北から) |
| | | PL. 38 | (1) SS200上層水田(南西から)
(2) SS192水田上層(南東から) (3) SX397水田(西から)
(4) SX423水田(南から) |
| | | PL. 39 | (1) SS200下層水田(南から)
(2) 同 下層水田(南東から) |
| | | PL. 40 | (1) SK418(南から) (2) SK419(北から)
(3) SS192 R-27区子持勾玉出土状況
(4) SX429土器群(北から) (5) SX430土器群(南東から)
(6) SX431土器群(北から) |
| | | PL. 41 | (1) 調査区東側遺構検出状況(南西から)
(2) 同 検出状況(南から) |
| | | PL. 42 | (1) 調査区東側遺構検出状況(南から)
(2) 同 検出状況(西から) |
| | | PL. 43 | (1) 調査区西側遺構検出状況(南西から)
(2) 同 検出状況(南東から) |
| | | PL. 44 | (1) 26ライン東壁土層(西から)
(2) 東側高所部建物検出状況(南西から) |
| | | PL. 45 | (1) SB580(南から) (2) SB579(西から)
(3) SB581・582(南から) (4) SB584・585(北から)
(5) SB585・588(北西から) (6) SB586・SC504(北から) |
| | | PL. 46 | (1) SB586(西から) (2) SB589(北から)
(3) SB588(西から) (4) SB590(北から)
(5) SB589-2柱根(南から) |
| | | PL. 47 | (1) SB591(北から) (2) SB592(北から)
(3) SB593(東から) (4) SB598(北から)
(5) SB599(北東から) (6) SB601(北から)
(7) SB605(南西から) |
| | | PL. 48 | (1) SC504(北から) (2) 同 (東から) |

- PL.49 (1) SC522(北西から) (2) 同 (北東から) (3) 同 遺物出土状況 (4) SK448(北西から)
- PL.50 (1) SC532(北西から) (2) 同 (南西から) (5) SK463(北から)
- PL.51 (1) SC522遺物出土状況 (2) SC532遺物出土状況 (3) SC578(西から) (4) 同 (南から) (5) 同 炉跡(西から)
- PL.52 (1) SD369北側(北東から) (2) 同 南側(南から)
- PL.53 (1) SX533(東から) (2) SD369 1号ハコ土層(北から) (3) 同 土器出土状況(北西から) (4) 同 土器出土状況(東から)
- PL.54 (1) SD369木製品等出土状況(南から) (2) 同 木製品出土状況(南東から) (3) 同 農具の鋤出土状況(西から) (4) 同 建築材出土状況(西から) (5) 同 建築材出土状況(西から) (6) 同 礎板出土状況
- PL.55 (1) SD388(南西から) (2) 同-1区東壁(西から)
- PL.56 (1) SD388-1区東壁土器群(西から) (2) 同 下層土器群(西から) (3) SD507(北から) (4) 同 土器出土状況(東から)
- PL.57 (1) SD505方形周溝遺構(東から) (2) 同 完掘状況(東から) (3) 同-2区遺物出土状況(南から) (4) 同 鉄斧出土状況
- PL.58 (1) SD505-1区遺物出土状況(南東から) (2) 同-2区遺物出土状況(南西から) (3) 同-4区遺物出土状況 (4) 同-5区遺物出土状況 (5) SD471・482(西から) (6) SD493(北から) (7) SD510(南西から)
- PL.59 (1) SK384(南東から) (2) SK460(北から)
- PL.60 (1) SK468(西から) (2) SK469(西から) (3) SK475(東から) (4) SK488(北から) (5) SK488(東から) (6) 同 遺物出土状況
- PL.61 (1) SK491(北東から) (2) SK492(南西から) (3) SK492(北西から) (4) SK494(東から) (5) SK495(北から) (6) SK496(北西から)
- PL.62 (1) SK500(東から) (2) 同 遺物出土状況(南から) (3) SK511・596(西から) (4) SK517(北から) (5) SK544(南から) (6) SK557(東から)
- PL.63 (1) SK558(南から) (2) 同 遺物出土状況 (3) SK594(南から) (4) SK594(南から) (5) SX435・436(南から)
- PL.64 (1) SX523土器群(西から) (2) 同 土器群(北から) (3) 同 土器群(南西から) (4) SX528(北西から) (5) SX534(西から) (6) 同 遺物出土状況(北から)
- PL.65 (1) SX559(北から) (2) 同 流木出土状況(東から) (3) SX565(北から) (4) 同 流木出土状況(西から) (5) SX569~575(西から)
- PL.66 (1) SX566(北西から) (2) SX570(北から) (3) SP031(東から) (4) SP467(北西から) (5) SP609炉跡(南から)

遺物図版

- PL.67 SD316・322、SE309・320・409出土土器
- PL.68 SE315・318・334出土土器
- PL.69 SK314・317 ①・331・332出土土器
- PL.70 SK317 ②、遺構面、包含層出土土器
- PL.71 (1) SK317、SD322出土石製品 (2) SD305、SE315・320・339井筒曲物
- PL.72 SE306・315・334、SK317出土木製品
- PL.73 SX395、SD362出土土器
- PL.74 SD402・404・411出土土器
- PL.75 第II面出土の弥生、古墳時代遺物
- PL.76 SX395出土木製品①
- PL.77 SX395出土木製品②
- PL.78 SX403、SD362・398出土木製品
- PL.79 SD190・387・396、SX368・389、水田SS192・200出土土器
- PL.80 SD200・410、遺構面、SX429・430出土土器
- PL.81 (1) SX430~432出土土器 (2) 包含層出土土器①
- PL.82 包含層出土土器②
- PL.83 (1) 包含層出土土器③ (2) 各遺構出土土製品 (3) 溝出土石器
- PL.84 各遺構出土石器
- PL.85 (1) 各遺構出土石器 (2) SD190、SX389・423
- PL.86 SB579・582・SC504出土遺物
- PL.87 SD369出土土器①
- PL.88 (1)SD369出土土器② (2)SD388出土土器①
- PL.89 SD368出土土器②
- PL.90 SD388出土土器③
- PL.91 SD388出土土器④
- PL.92 (1)SD388出土土器⑤ (2)SD482・497・507出土土器
- PL.93 SD507出土土器
- PL.94 SD505出土土器①
- PL.95 (1)SD505出土土器② (2)SD388・507出土土製品 (3)SD505出土鉄器
- PL.96 SD369出土木製品
- PL.97 SK384・460・463出土土器
- PL.98 Sk488出土土器①
- PL.99 SK488②、SK495・500①出土土器
- PL.100 SK500②・511・555・557、SX435出土土器
- PL.101 SX434・435・436出土土器、SX434・436出土土製品
- PL.102 SX523出土土器
- PL.103 SX523・528・534・565・604出土土器
- PL.104 SP260・467出土遺物
- PL.105 ビット出土土器
- PL.106 SD369・388・481・505出土石器
- PL.107 SD505・506・602、SK384・468出土石器
- PL.108 (1)SK460・488・495・500出土石器、SK384出土玉 (2)SX434・435出土石器
- PL.109 SX436・534出土石器
- PL.110 SX559・573・536、遺構面出土石器

第 I 章 はじめに

1. 調査に至る経過

1994年(平成6年)3月31日付(四港建博第159号)で、運輸省第四港湾建設局博多港工事事務所長(現・国土交通省九州地方整備局博多港湾・空港整備事務所)より、福岡市博多区月隈4丁目7丁目における月隈調節池建設事業計画地内の埋蔵文化財事前審査願いが福岡市教育委員会に提出された。申請地周辺は御笠川東側の低地部の、水害を受けやすい地域であったため、その対策事業の一環として計画されたものであった。

申請地は福岡空港南側に南隣する約8万㎡の空地で、埋蔵文化財包蔵地域の「下月隈C遺跡」として登録されている地域であり、過去に行われた周辺の調査では、弥生時代から中世にかけての集落跡や水田跡などが検出されており、申請地においても遺跡の存在が予想された。このことから埋蔵文化財課としては、申請地において試掘調査を実施した。試掘調査は1994年5月19日～6月17日にかけて申請地全域に63ヶ所の試掘坑を設定し実施した。試掘調査では、申請地全域に重層する弥生時代から中世にかけての遺構や遺物を検出した。

試掘結果では申請地全域に遺構が存在し、開発工事によってそれらの遺構が破壊されることが予想されたので、試掘調査の結果を平成6年7月6日付け(福市教埋第52号)文書で依頼者に回答し、今後の取り扱いについて協議を行った。協議の結果、月隈調節池建設工事に先立って記録保存の為の埋蔵文化財調査を実施することとし、第四港湾建設局長(現・九州整備局長)を委託者、福岡市長を受託者とする契約が締結された。発掘調査、資料整理及び発掘調査報告書作成費用については第四港湾建設局が全額負担し、調査を福岡市教育委員会が実施することとなった。当初の事業計画では、事業地全面を対象とした発掘調査を、平成10年度から4年計画で実施することとなっていた。しかし初年度(平成10年度)の調査により遺構濃度が試掘調査で想定されていた以上に高いことが判明したため、原局側と協議を行い、調査計画を5年間に変更した。5年度を終了した時点で、調査事務所部分が残っていたのと、新たに調節池に伴う通水管部分の調査が必要となった為、再度原局側と調査についての協議を行い、平成15年10月迄調査を行うこととなった。

本書は第3年度(平成12年度調査、平成14年度から16年度整理)に実施した第6次調査の報告である。調査・整理作業に当たっては九州地方整備局の皆様をはじめ、地元の皆様にご理解とご協力を得ました。この場を借りてお礼申し上げます。

2. 調査の組織

紙面上の都合から、第6次調査の調査組織について述べる。下月隈C遺跡第1次～第9次の調査概要についてはTab. 1のとおりである。

(1) 委託者

運輸省第四港湾建設局博多港湾空港工事事務所

国土交通省九州地方整備局博多港湾空港工事事務所

《平成6年度》	第四港湾建設局長	石田省三	博多港工事事務所長	鹿籠雅純
《平成12年度》	第四港湾建設局長	江頭和彦	博多港湾空港工事事務所長	古市正彦
《平成14年度》	九州地方整備局長	渡辺茂樹	博多港湾空港工事事務所長	角 浩美
《平成15年度》	九州地方整備局長	岡山和生	博多港湾・空港整備事務所長	酒井洋一
《平成16年度》	九州地方整備局長	岡山和生	博多港湾・空港整備事務所長	元野一生

(2) 調 査 主 体

福岡市教育委員会

《平成6年度》

	教 育 長	尾 花 剛
	文 化 財 部 長	後 藤 直
	埋蔵文化財課長	折 尾 学
事前審査	主任文化財主事	濱 石 哲 也
試掘調査	文 化 財 主 事	長 家 伸
経理担当	事 務 吏 員	内 野 保 基

《平成12年度》

	教 育 長	西 憲 一 郎
	文 化 財 部 長	柳 田 純 孝
	埋蔵文化財課長	山 崎 純 男
	調査第2係長	力 武 卓 治
調査担当	主任文化財主事	山 崎 龍 雄
	文 化 財 主 事	上 角 智 希
整理担当	文 化 財 主 事	瀧 本 正 志
経理担当	文 化 財 整 備 課	河 野 敦 美

《平成14年度》

	教 育 長	生 田 征 生
	文 化 財 部 長	堺 徹
	埋蔵文化財課長	山 崎 純 男
	調査第2係長	力 武 卓 治
調査担当	主任文化財主事	山 崎 龍 雄
	文 化 財 主 事	荒 牧 宏 行
整理担当	文 化 財 主 事	瀧 本 正 志
経理担当	文 化 財 整 備 課	中 岳 圭

《平成15年度》

	教 育 長	生 田 征 生
	文 化 財 部 長	堺 徹
	埋蔵文化財課長	山 崎 純 男
	調査第2係長	田 中 寿 夫
整理担当	主任文化財主事	山 崎 龍 雄
整理担当	文 化 財 主 事	上 角 智 希
経理担当	文 化 財 整 備 課	鈴 木 由 喜

《平成16年度》

	教 育 長	植 木 と み 子
	文 化 財 部 長	山 崎 純 男
	埋蔵文化財課長	山 口 讓 治

	調査第2係長	池崎 讓二
整理担当	主任文化財主事	山崎 龍雄
	文化財主事	上角 智希
経理担当	文化財整備課	鈴木 由喜

《調査指導》 佐藤洋一郎（総合地球環境学研究所教授）、日野尚志（佐賀大学名誉教授）
金子裕之（独立行政法人 奈良文化財研究所）

《調査・整理協力者》

調査・整理補助 犬丸陽子、上方高弘、瀬戸啓治、所一男（東京大学大学院）、藤野雅基、岩下郁子、大賀順子、大神真理子、大村千春、木藤直子、清永啓子、久家春美、黒柳恵美、澤 玲子、篠崎 綾、篠原明美、高田美穂、取違美佐子、西嶋奈美、平ノ内 武、平山景将、松尾信子、増永好美、松永栄子、宮坂 環、村上信子、村田梨絵、本村幸代、山野祥子、持原良子

調査協力 荒牧幸子、荒牧テルオ、石井雅之、井出 昇、井上一雄、井上利弘、井上英子、井上佳子、岩崎良隆、岩永崇史、植松雅子、牛島正和、内山和子、榎田信一、大賀 一、大下真輝、大嶋健司、大田功司、大橋由美子、奥田弘子、尾園絢一、小野千佳、甲斐康完、笠置美奈子、兼田ミヤ子、河野一一、北原由紀子、木村真理、久保登喜子、黒瀬千鶴、黒田良太郎、桑原美津子、高着一夫、児島泰代、後藤タミ子、小松富美、酒井次憲、坂口三輝子、坂元紀乃、佐藤アイ子、真田弘二、沢田悦子、志堂寺堂、芝田達郎、渋谷留雄、高手伸行、高手與志子、高松 智、武田潤子、立山清二、田中茂孝、田上智雄、堤 正子、豊丸秀二、長野嘉一、永田八重子、中村桂子、西尾直也、二宮白人、根岸 洋、野口リュウ子、野中英明、野村道夫、畠中千恵美、濱フミコ、淵上正法、廣永清隆、廣永隆子、福田すなを、別府俊美、前田勉、松井一美、松永七朗、の場淑子、丸山勝江、水野由美子、宗像正勝、本山 啓、森川寿美、安高邦晴、安高精一、安高久子、山下嘉人、吉田博昭、吉野悌二、渡辺淑子

Tab. 1 下月隈C遺跡第1次～第9次調査概要

調査次数	調査番号	調査地番	調査面積	調査原因	調査期間	調査担当	備告書
1次	9404	福岡市博多区下月隈地内	885㎡	道路拡張	1994.4.8～6.27	白井克也	市報第457集
2次	9515	博多区大字上月隈地内	8,900㎡	空港周辺整備	1995.6.6～96.3.21	宮井善朗	市報第566集
3次	9610	博多区大字上月隈地内	3,575㎡	空港周辺整備	1996.5.7～10.18	久住猛雄	〃
4次	9828	博多区月隈4丁目	6,500㎡	月隈調節池建設	1998.9.2～99.3.25	瀧本正志・田上勇一郎	市報第750集
5次	9922	〃 〃	10,000㎡	〃	1999.4.6～2000.3.25	瀧本・山崎龍雄	市報第795集
6次	0018	〃 〃	10,710㎡	〃	2000.4.1～2001.3.30	山崎・上角智希	市報第839週
7次	0115	〃 〃	9,139㎡	〃	2001.4.1～2002.3.29	山崎・荒牧宏行	
8次	0219	〃 〃	7,400㎡	〃	2002.4.1～2003.3.31	山崎・荒牧	
9次	0327	〃 〃	2,000㎡	〃	2003.4.～10.31	山崎	

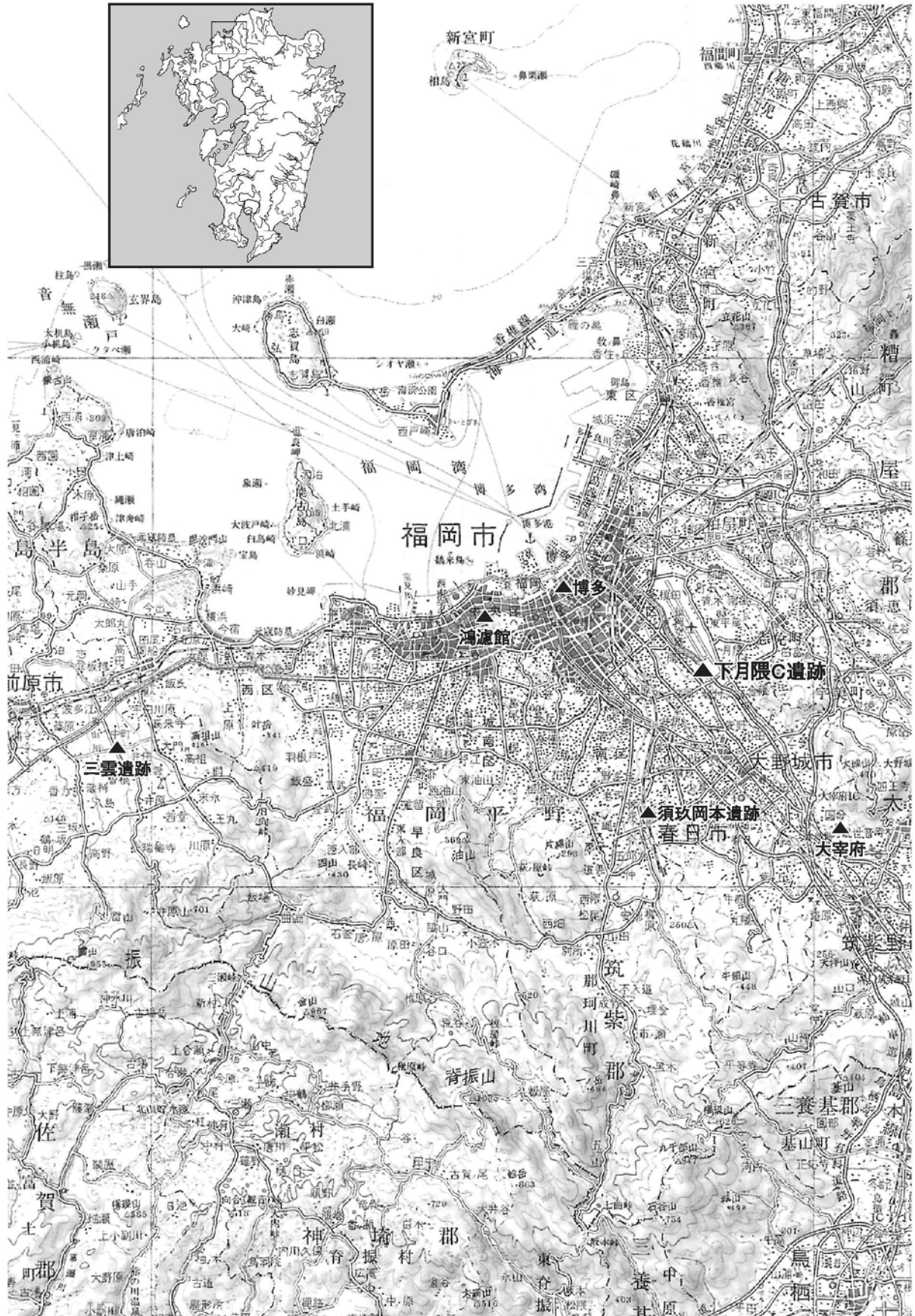


Fig. 1 下月隈C遺跡の位置 (1/100,000)

第II章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の位置と立地(Fig.1)

下月隈C遺跡は、福岡市の中央部を北流して博多湾に注ぐ、那珂川・御笠川の沖積作用によって形成された福岡平野の南東部に位置する。この平野は北東側を糟屋郡境となる席田・志免丘陵(標高50~200m)で限定され、西から南側を油山(標高569.4m)と片縄山(標高293.0m)とそれから北側に派生する低平な丘陵・台地に限定される。市内の位置的環境としては中心部の天神より約6km離れた位置にある。遺跡は福岡空港の南側に隣接する場所にあり、御笠川の東岸の沖積地に立地する。現地の標高は10m前後を測る。遺跡の東側は席田丘陵となる。御笠川西側の板付地区は春日市から続く低平な丘陵部である。

2. 遺跡の歴史的環境(Fig.2~4)

下月隈C遺跡周辺の歴史的環境について述べる。周辺には席田丘陵や西側の板付の低丘陵を中心に弥生時代前期から古代・中世に亘る各時期の遺跡が分布しているが、それらについては第5次調査報告書などで既に詳細に記述されているので、本章では遺跡の継続時期に関わる、遺跡周辺の特に御笠川東岸席田地区の中世に至る迄の通史的な概要について述べる。

旧石器・縄文時代については、御笠川東岸部では今のところ明確な遺跡は確認されていないが、西岸部では諸岡遺跡や板付遺跡、那珂遺跡群などで確認されている。遺跡が明瞭に確認されるのは、縄文時代晩期末~弥生時代前期ころである。この頃の遺跡としては、低地部に雀居遺跡、下月隈C遺跡がある。席田丘陵部には甕棺墓や土坑墓・木棺墓などからなる墳墓遺跡の宝満尾遺跡、天神森遺跡、金隈遺跡(国史跡)、上月隈遺跡、席田青木遺跡があり、集落遺跡としては大型建物などを検出した久保岡遺跡、銅鐸鋳型が出土した赤穂ノ浦遺跡など、弥生時代前期から後期にかけての遺跡が点在している。特に、遺跡東側丘陵部の上月隈遺跡は、道路建設の調査で甕棺墓群が見つかり、中期後半の甕棺墓内には細形銅剣1口とガラス製管玉20数点などが副葬されていた。また平成13年度に調査された上月隈B遺跡では弥生時代前期後半期の貯蔵穴群や柱穴などが検出されている。

古墳時代には首長墓の前方後円墳は存在しないが、丘陵部には直径34m、高さ9mを測る墳丘を持ち、全長11.2mの長大な横穴式石室を持つ後期円墳の今里不動古墳(市史跡)や、持田浦古墳群、堤ヶ浦古墳群など後期の群集墳が分布している。集落遺跡としては御笠川東岸沿いの低地部に立花寺B遺跡があり、微高地上に5~6世紀にかけての堅穴住居群が確認されている。

古代律令期は席田郡となる。席田郡は『和名類聚抄』によれば石田・大国・新居(にひい)の3郷からなる郡であり、規模としては小さい。同じ郡名は他に美濃国に1箇所存在する。那珂郡から分離した郡であると言われる。郡内の西側には大宰府水城東門に続く西海道(官道)が通り、郡内には『延喜式兵部省』によると久爾駅が置かれている。久爾駅には伝馬十疋が置かれている。久爾駅の所在地については確定していないが、駅家については大国郷にあったといわれている。大国郷は現在の席田村の月隈あたりと推定されている。鎌倉時代中期の説話集『古今著門集』(1254年)によれば、平安時代の寛治8年(1094)に大宰府権帥に任じられて下向中の源経信卿が、8月15日夜に筑前国筵田驛について観月の宴を開いた時に、館の前の大きな榎の木があり枝葉が生い茂げり観月の邪魔になっていたので、人を集めて木を切り払わせたとあり、そこから月隈の地名が起ったといわれている。この筵田驛は久爾駅のことと考えられる。『平安遺文158・160・162』の中に貞観10年席田郡にある大宰府観世音寺一切経料田中で故高子内親王寄進の博多荘が混在しているとして観世音寺

と内蔵寮との間に相論がおこっているとして係争地を大宰府田文所は仁寿2年の席田郡班図について検田している。このことから席田郡が中央権門と何らかの関わりがあったことが考えられる。該期の遺跡としては、周辺に立花寺B遺跡や井相田遺跡(大野城市の仲島遺跡)、立花寺遺跡(平成12・13年度の調査では飛鳥～奈良時代の柵や大型建物などが検出されている)、雀居遺跡などが存在する。官道跡と思われる道路状遺構が御笠川西側の高畑遺跡、那珂君休遺跡などで確認されている。

中世の席田は南北朝時代～室町期には席田荘となる。席田荘は大宰府安楽寺の所領である。大東側の志免町には吉原荘がある。室町から戦国時代は少弐氏が衰退した後、福岡地方は一部博多の沖の濱部が大友氏で、その他の地域は大内氏の支配下になり、席田は大内氏の支配下に入る。大内氏が滅亡後は大友氏の支配に入る。席田郡内には現在2箇所の山城が知られている。1箇所は『筑前国続風土記』にある稲居塚城、1箇所は席田青木遺跡で確認された山城である。立花氏の旧家臣宮崎座主城戸清種が記した『豊前覚書』によれば、「天正8年、庭田郡月隈村一貫古野山に、立花城主の立花道雪が自ら出向いて、切寄せを造る」とある。これは月隈が、古来の官道沿いの交通の要衝であったため、博多や立花城防衛の備えとして当地に出城が築かれたことが考えられる。

参考文献

福岡県地名大辞典 1988年 角川書店



写真① 調査区上空から太宰府方面を見る(北西から)



- | | | | | |
|-----------|------------|-------------|-----------|------------|
| 1. 下月限C遺跡 | 2. 立花寺B遺跡 | 3. 雀居遺跡 | 4. 下月限A遺跡 | 5. 下月限B遺跡 |
| 6. 天神森遺跡 | 7. 立花寺遺跡 | 8. 金隈遺跡 | 9. 仲島遺跡 | 10. 井相田遺跡 |
| 11. 板付遺跡 | 12. 高畑遺跡 | 13. 麦野A遺跡 | 14. 比恵遺跡 | 15. 那珂遺跡 |
| 16. 五十川遺跡 | 17. 諸岡A遺跡 | 18. 諸岡B遺跡 | 19. 横手遺跡 | 20. 宝満尾遺跡 |
| 21. 大橋E遺跡 | 22. 三宅B遺跡 | 23. 博多遺跡 | 24. 堅粕遺跡 | 25. 箱崎遺跡 |
| 26. 鳥越古墳 | 27. 今里不動古墳 | 28. 持田ヶ浦古墳群 | 29. 剣塚古墳 | 30. 那珂八幡古墳 |

Fig. 2 下月限C遺跡周辺の遺跡 (1/50,000)

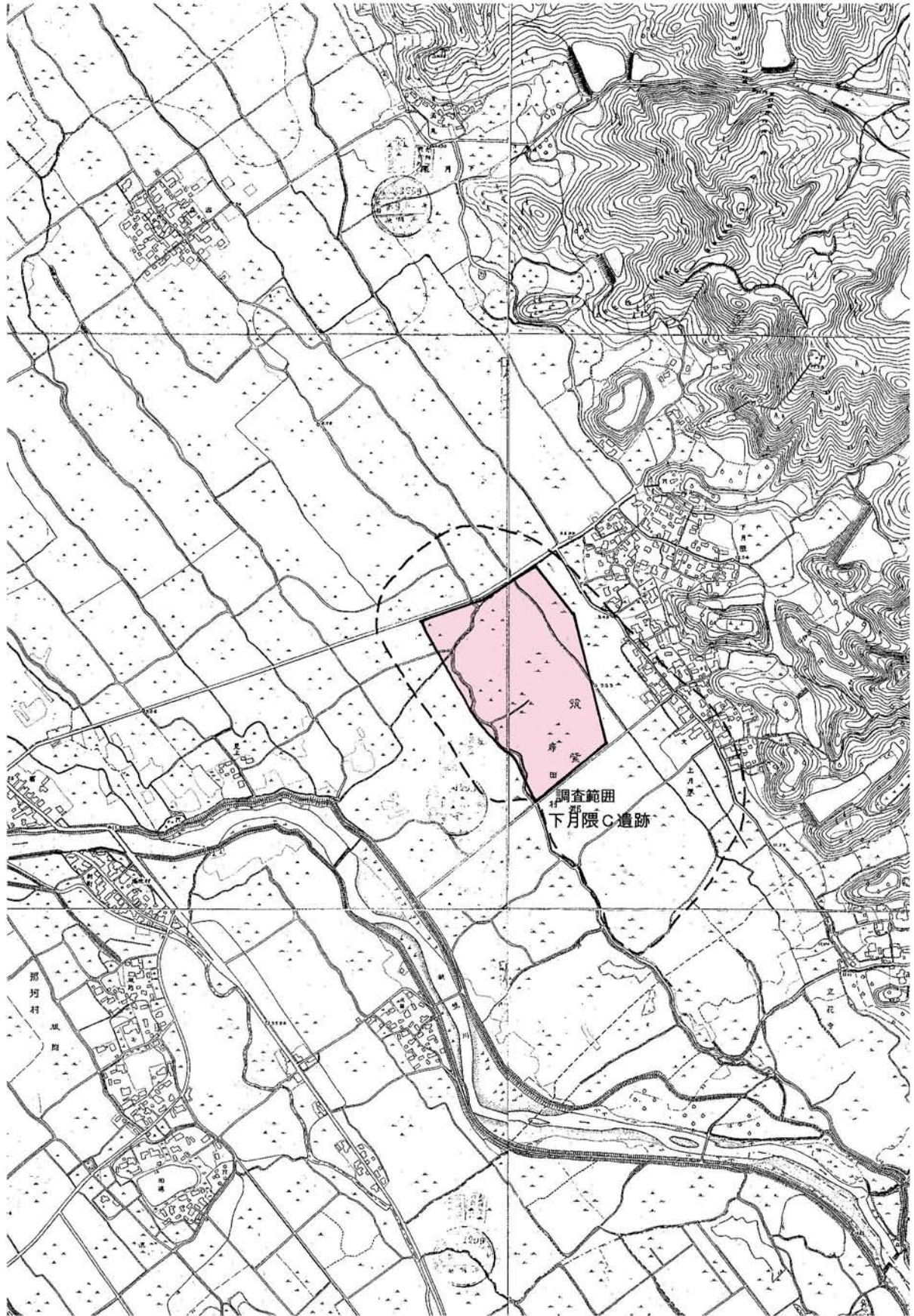


Fig. 3 下月隈C遺跡の旧地形図 (大正末～昭和初頃1/10,000)

第Ⅲ章 調査の記録

1. 調査の概要 (Fig.5)

第6次調査部分は調査対象地の西側中央部分である。調査は前年度の調査結果を基に、当初第Ⅰ面古代(奈良～平安)、第Ⅱ面古墳時代後期、第Ⅲ面弥生時代のⅢ面の調査を予定していたが、第Ⅰ面上に中世前半(平安末～鎌倉時代)の遺構面が検出されたので、中世を第Ⅰ面として4時期の面について調査を実施した。第Ⅰ面までの掘削は空港周辺の高度規制の関係から、重機による掘削と廃上の運搬が昼間に出来なかったため、業者に委託して夜間に行った。第Ⅱ面以下の掘削は高度規制内であったため、重機掘削は昼間に実施した。また全体の遺構図や写真撮影は時間的な都合からセスナ機による航空写真測量を写測エンジニアリング株式会社に委託して行った。

遺構面の深さについては調査区東壁で、第Ⅰ面は、掘削委託で表土下0.8mまで掘下げたので、第Ⅱ面水田面上の洪水砂上。第Ⅱ面は表土から-1.1m前後の面。第Ⅲ面は-1.3~1.7mの深さで、第Ⅱ面との間層に砂などを挟む。第Ⅳ面は深さ-1.7~2mであり、Ⅲ面との間に黒色粘土の包含層を挟む。

第Ⅳ面終了後、だめ押しの確認調査を実施したが、砂礫層で湧水がひどく、遺構・遺物は確認出来なかった。

調査区の基準は第4次調査で設定した基準に準じて、申請地の長軸に沿って、東西南北10mの方眼を組み、東西は東からA～Z迄、南北は南から1～32区迄グリッドを設定し、10mグリッドの番号は右下隅の杭番号とした。第6次調査は杭番号として東西はM～W、南北は19～29の範囲である。

1) 調査日誌抄

第6次調査は平成12(2000)年4月10日に着手し、平成13(2001)年3月30日に終了した。

以下調査の経緯を述べる。

2000年

- 5月 29日から夜間表土掘削作業を開始する。作業時間は空港の離着陸が終了する午後10時以降朝5時迄である。夜間なので投光機を点けて作業するが、遺構面などがよく判らない。
- 6月 3日梅雨入り。雨で表土掘削作業は進まず19日にやっと終了。20日からベルトコンベアーを導入し、第Ⅰ面調査を始める。古代の水田埋没砂上に中世の井戸や溝などを確認する。
- 7月 第Ⅰ面、中世面の調査。17日梅雨明け。
21日第Ⅰ面の調査終了。引き続き第Ⅱ面の古代水田面の調査を行う。時間的な関係から、水田洪水砂が厚く堆積する所は重機で掘削し、第Ⅱ面を検出する。
- 8月 4日、佐賀大学の日野尚志先生に糸里の水田面現地視察。調査についての様々な助言を頂く。11日に第Ⅱ面遺構の空中写真測量を行う。



写真② 夜間作業風景



写真③ 第Ⅱ面水田面検出作業

- 26日から重機で第II面の遺構面検出作業に入る。
- 9月 第III面、古墳時代水田面遺構検出作業。西側は古代の旧河川部で水田はないが、護岸杭列SX395や堰などを検出する。木製品が多数は入っている。
- 10月 調査区西側旧河川内の護岸杭列SX395の検出作業。31日に第III面空中写真測量を行う。
- 11月 第III面の補足調査後、10日より重機による第IV面検出作業を始める。並行して護岸杭列SX395や堰SX389の実測・調査。25日広報課による体験発掘講座を行う。
- 12月 第IV面、弥生時代から古墳時代前期の調査。SD369掘削で木器や南端部で古墳時代前期の遺物多数出土。後半から東側台地部の調査。弥生前期の土坑などが確認される。

2001年

- 1月 東側台地部の調査。方形周溝状遺構SD505から鉄斧2点出土。柱穴には柱根や礎板などが良好に残り、高床建物として復元出来る。
- 2月 13日、第IV面の空中写真測量と個別遺構撮影を行う。22日遺跡の成果について記者発表を行う。遺構実測作業とだめ押し調査。
- 3月 31日に現地説明会開催、見学者約300名。柱穴などのだめ押し調査を行う。16日から埋め戻し作業開始する。無事調査終了。



写真④ 雪が降りしきる現場



写真⑤ 記者発表風景



写真⑥ 3月に行われた現地説明会

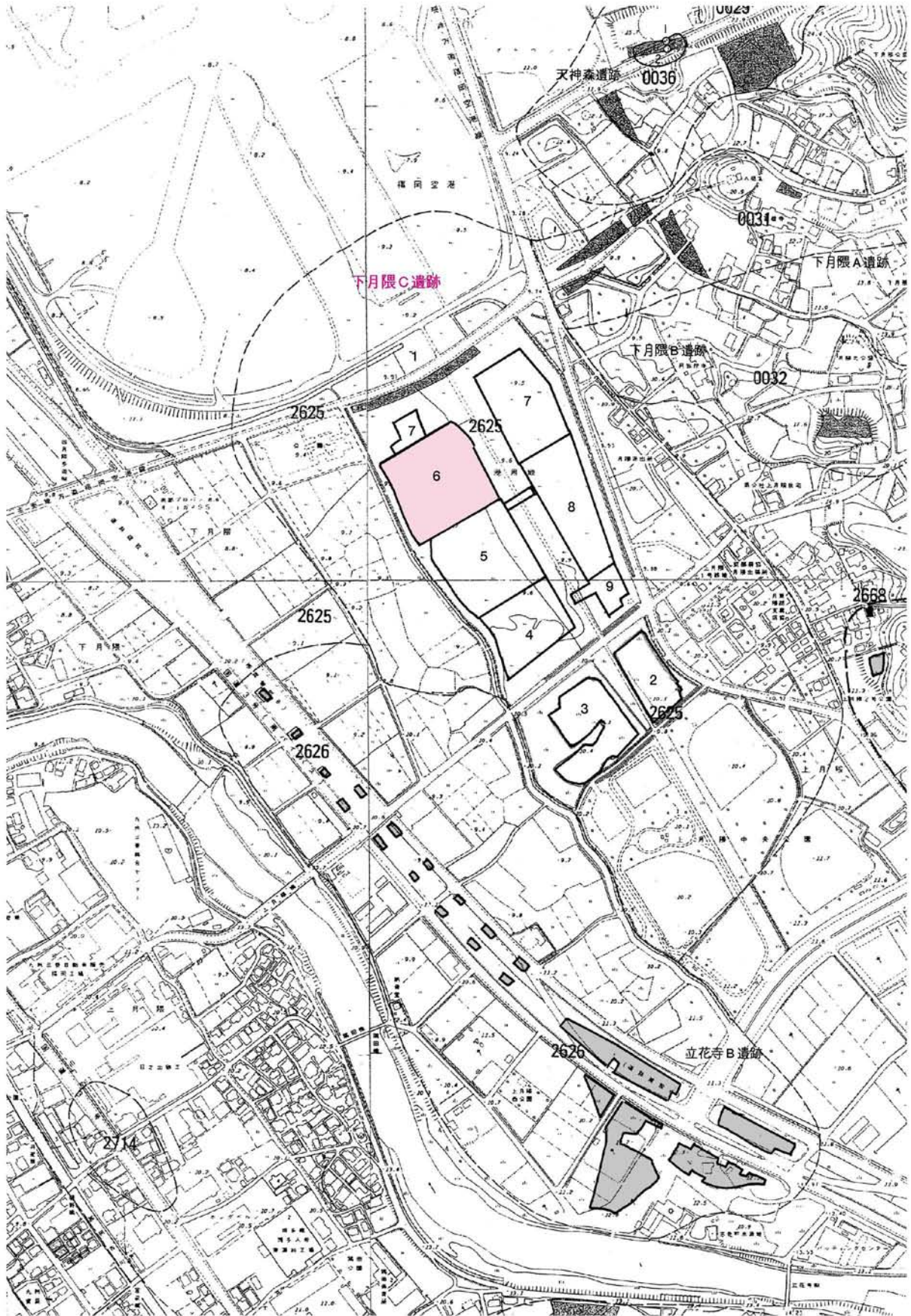


Fig. 4 下月隈C遺跡調査地点位置図 (1/6,000)

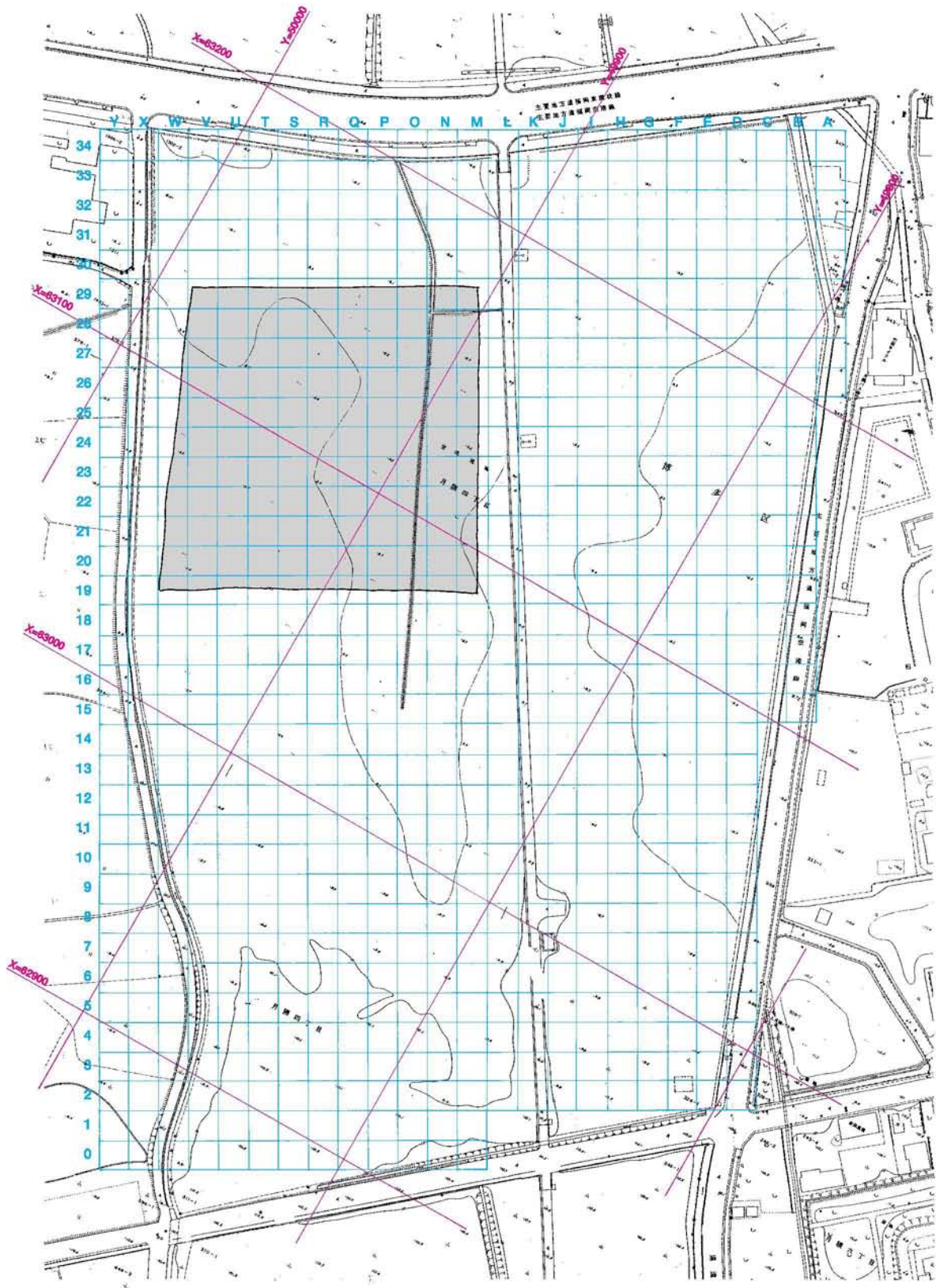


Fig. 5 下月隈C遺跡調査区配置図 (1/2,000)

2 第I面の調査

1) 調査の概要

第I面は古代末から中世前期の時期である。当初は工期の都合から地表より-80cmの深さまで表土を鋤取り、古代の水田面からの調査を予定していたが、水田を埋めた粗砂上面、西側では旧河川上面に井戸や溝、ピット、一部包含層などの遺構が確認されたので、この面を第I面として調査を行った。主な検出遺構は建物1棟、溝9条、井戸16基、土坑10基、ピットである。遺構は全域に確認されたが、分布としては西側に多い。南西隅ではこの時期の包含層を検出している。中世面の調査を予想せず、表土除去を深くしているため、実施にはピットなどの浅い遺構は飛ばしている可能性がある。

2) 遺構と遺物

① 掘立柱建物 (SB)

SB608(Fig.6) 調査区北東隅N-28区で検出した、主軸をN-89°-Eに取る1×3間の建物である。残りは良くないが、四隅の柱穴があり、柱筋の歪みがあるが柱としてまとまるので建物とした。規模は図上で、長軸桁側で北側5.2m、南側5.1m、桁側西側で3.4m、東側で3.3mを測る。確認した柱穴は7基で形状は円形で、大きさは直径30~60cm前後、深さは7~20cm程である。柱痕跡は確認出来なかった。柱穴からの遺物の出土はなかった。

② 溝状遺構(SD)

第I面で検出した溝状遺構は9条である。主なものについて述べる。

SD305(Fig.8, PL.7) 調査区北東側でY状を呈し、南北に伸びる溝。確認長は25m、溝幅は北側が約1.3m、南側が0.6~1.2m、深さは0.06~0.4m程で、Y型に分岐する部分は深くなる。埋土は分岐部分で上層が灰色シルト、下層が暗灰色粘質シルトから砂質粘土となる。断面は逆台形を呈する。

出土遺物(Fig.9・26, PL.71) 弥生時代前期~中期土器片、古代の須恵器細片、古墳時代から中世の土師器片が少量出土している。

1は土師器の坏底部2/3片。体部は底部から斜め外方に開く形態で、古代の時期である。外底部に墨書痕が認められるが、判読出来ない。焼成は良い。

W38は剣型の木製品。右端は欠損するが、左端は剣先状に削り出す。残存長17cm、刃部幅2.4cmを測る。表面は一部焦げる。スギの板目材を使用。

SD308(PL.9) 調査区北側で南北に直に伸びる溝。確認長は22mを図る。幅は0.7~1.3m、深さは最大0.2m程で浅い。埋土はオリブ灰色粘質シルトである。調査区南側のSD326と方向がほぼ同じであり、一連のもの可能性が有る。遺物

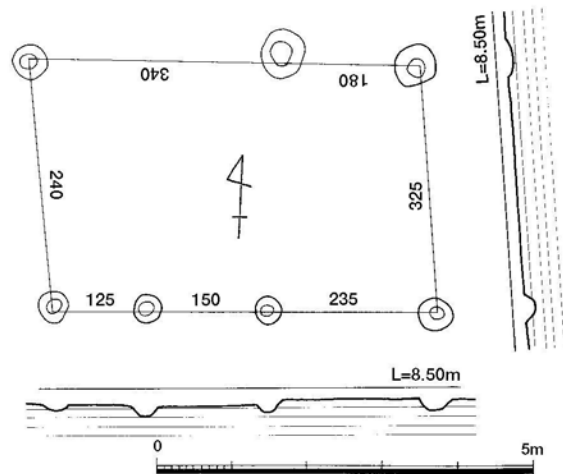


Fig. 6 SB608 (1/100)

の出土はなかった。

SD316 調査区西壁中央部W-24区あたりで検出した北側のSD322と並行する溝。確認規模は長さ5m、幅1m程である。深さは最大で0.15mと浅い。埋土は暗褐色土である。

出土遺物(Fig.9、PL.67・71) 弥生土器から古代の土師器、中世の土師器が少量出土するが、出土量の割に図示出来るものは多い。

2～4は土師器の小皿。2は体部が外湾気味に外に開く形態で、復元口径が7.2cmと小型である。3は完形で2より大型である。外底部はヘラケズリ、内底にヘラ描きの記号のようなものが入る。4は底部1/2片で坏の可能性もある。外底部はケズリ後ナデ調整。5～10は坏である。5・6は丸底杯と呼ばれるもの。口径の割に深みを持つ。5の体部調整は丁寧なナデ調整、外底部に板圧痕が残る。6は底部の丸みが強い。7～10はやや丸みのある平底から外に開く、底が比較的浅いもの。8はほぼ完形。いずれも外底部は回転ヘラケズリ後ナデ調整。9の内面には工具痕が残る。9の内面はやや黒ずみ、形態は古代の皿に近い。10は他に比べ大型。11～13は高台椀。11は底部に稜を持ち、高台部が欠失する。12は1/3片であるが、全体が残る。小さく低い高台がつく。13は底部1/3片であるが12と同じような高台が付く。皿・坏とも底部の調整はヘラ切りで、回転糸切りは見られないことから11世紀～12世紀前半以前と思われる。

SD322(Fig.8・22、PL.8) 調査区西側中央部を西壁から東に20m程延びて南に直に曲がる23m程延びて西に曲がる溝。西壁側ではSK317と付けた長方形の土坑状の広がりがある。土層を見ると切り合いがあるようであるが、遺物でみると時期は変わらない。溝の規模は幅0.95m～1.9m、深さ0.3～0.35mを測り、コーナー部分は広がりを持つ。溝断面は逆台形を呈する。埋土は北側で上層が黒色腐植土、下層は灰黄褐色粗砂を主体とし、植物遺物を多く含む。東側では灰色シルト質で植物を含み、下層は暗灰色粘土を主体とし、水があった状況を示す。屋敷地の区画溝と思われるが、検出面を下げ過ぎているので、全容は分からない。

出土遺物(Fig.9・10・25・26、PL.67・71) 弥生土器から中世の土師器、黒色土器、須恵質土器、瓦器、砥石などが出土している。遺物の出土は上層が多く、そして北側東西部分が多い。底部回転糸切技法のものがなく、丸底の杯から見て遺構の時期としては11世紀代であろう。

14～34は土師器。14～22は土師器の小皿。口径は10cm前後、器高は1.3～1.9cmを測る。いずれも外底部はヘラ切りで、板圧痕が残すものが多い。23～33は坏で、23～31は丸底杯と呼ばれるものである。口径は14～16cm、器高は3～4cmである。外底部はヘラ切りで、工具痕を残すものが27、板圧痕を残すものが23・29である。32・33は坏。32は形態から高台の付く椀の可能性もある。34は椀の口縁部片。体部が直に開く形態で、焼成はやや不良。

35・36は内面を黒く燻す黒色土器A類の椀。35は高台部を欠失し、36は口縁部片。いずれも内面調整はヘラミガキで、35には工具痕や指押え痕が残る。36の体外面下半はケズリのちナデ調整であるが、35はナデ。

37～44は内外面を黒く燻す黒色土器B類椀である。37～41は全体が残る。口径は14～16cm内、器高は5.6～7.2cmを測る。37は口縁部片。体部内外面はヘラミガキ、高台はナデ調整である。38は1/2片で、体部はヘラミガキであるが、内面は3分割して反時計回りのミガキを加え、底には指押え痕が残る。高台部はナデ。39は体部のミガキが口縁部周辺で、その他はナデ調整で、体部外面下半はケズリ。40は体部内外面がミガキ。41はほぼ完形。体内外面はヘラミガキ、高台部はナデ。42は口縁部1/4片である。体外面丁寧なナデ、内面はミガキで少し燻しがかかる。43・44は高台部片。体部内外面はヘラミガキ、高台はナデ調整であるが、43は体外面下半～高台部迄がナデ調整で

W | V | U | T | S | R | Q | P | O | N | M



Fig.7 第I面遺構全体図 (1/400)

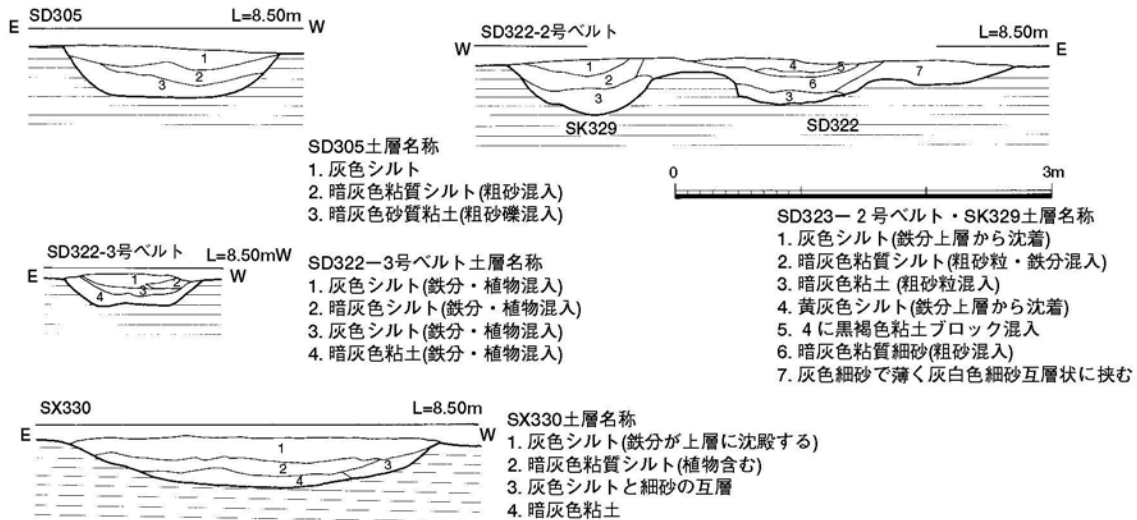


Fig. 8 SD305・322・SX330土層図 (1/60)

ある。

45～47は瓦器椀。45は1/3片、46・47は口縁部片で、復元口径は15cm前後。45には端部が丸い高台が付く。45・47の体内面はヘラミガキ、外面は回転ナデ調整で、45の下半には指押え痕が、47にはケズリ。46は体内外面ヘラミガキ調整。

48は白磁碗の、V-1類の底部片。外底部は露胎でケズリ、畳付きは擦られている。二次的加熱を受けたのか、釉の発色が悪く細かい貫入が入る。焼成はやや不良。11世紀後半～12世紀前半ころのもの。

S5は砥石で、目の細密な砂岩製。縦長14.4cm、横幅10.4cm、厚み2.2～3.3cmを測る。上端は雑な調整。上下両面、両側面、下端は使用面で、特に上面には鋭利な利器を研いだのか鋭い溝状の使用痕跡が幾つか残る。

W39・40は板材。W39は全体に磨耗し、左端が欠損している。全長35.2cm、最大幅14.6cm、厚さ1.4cmを測る。W40は長方形の板材である。全長50.8cm、最大幅14.5cm、厚さ1.7cmを測る。両上端は欠き込みがある。表面は刃物が多く付き、また焦げている部分もあり、まな板に使われた可能性がある。いずれもスギの柾目材。

SD326(PL.9) SD308の南側延長上にある溝。時間の都合上一部しか掘り下げていない。

出土遺物としては中世の上師器片が2点出土している。

SD335 調査区南側T-21区～S-21区にかけて検出した東西方向の小溝。S-21区で南側に分岐する。確認長は15m、幅0.5m、深さ7cm前後で浅い。埋土は灰白色粗砂である。

出土遺物(Fig.10) 古墳時代から古代にかけての須恵器や土師器が少量出土した。

49は須恵器の坏高台部片。体部が底部から屈折が弱く開く形態。外底部はケズリ。

SD344 調査区南西隅で検出した湾曲する小溝。確認規模は4m、幅は0.3～0.8m、深さは0.05～0.2m程で、北側に深くなる。

出土遺物(Fig.10) 土師器の細片が少量出土した。

50は土師器の椀底部片。器壁の摩滅はひどい。焼成はやや不良。

③ 井戸(SE)

検出した井戸16基である。時期はいずれも古代後期～中世前期である。底は浅く、容易に水が得

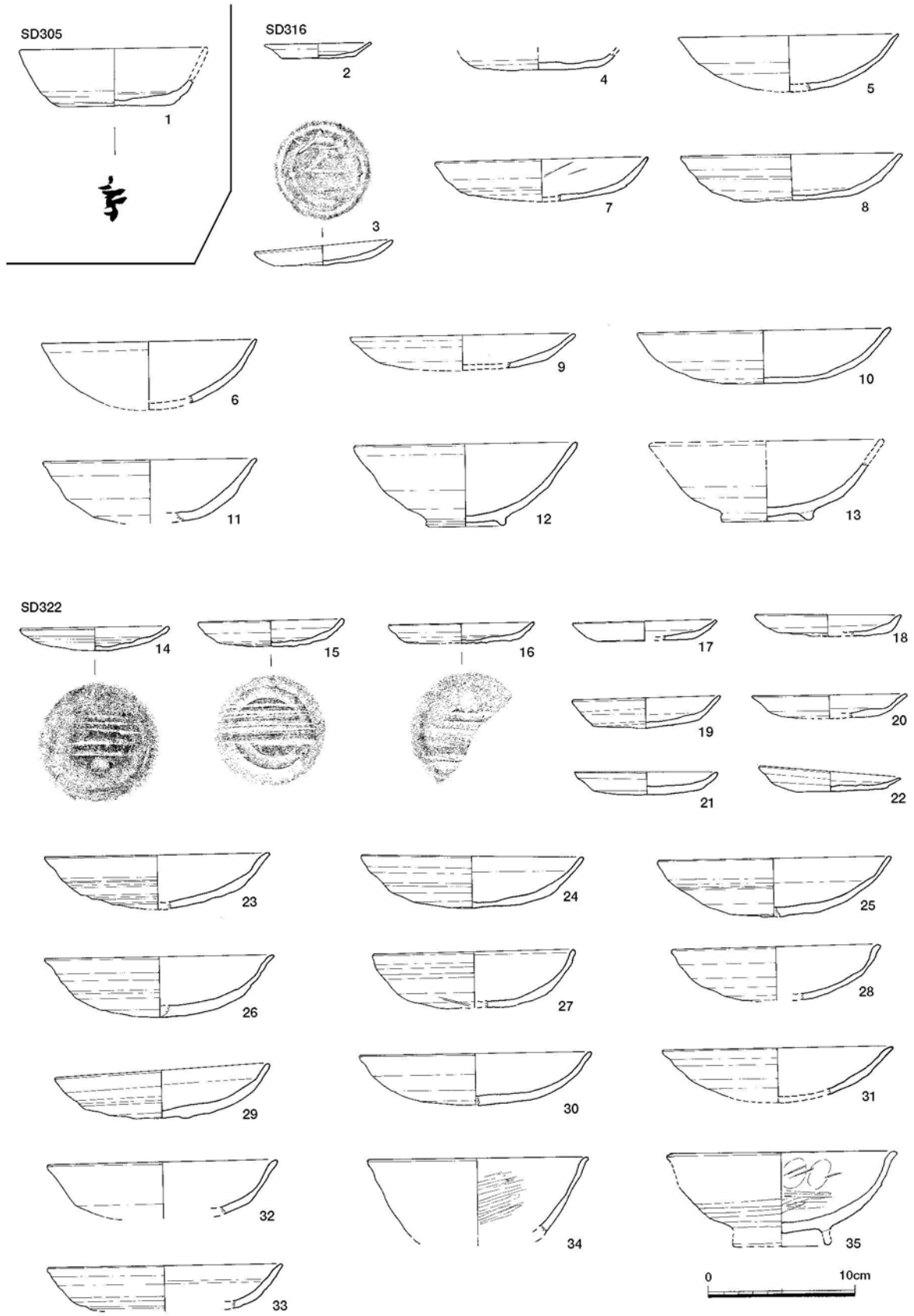


Fig. 9 SD305・316・322出土土器 (1/4)

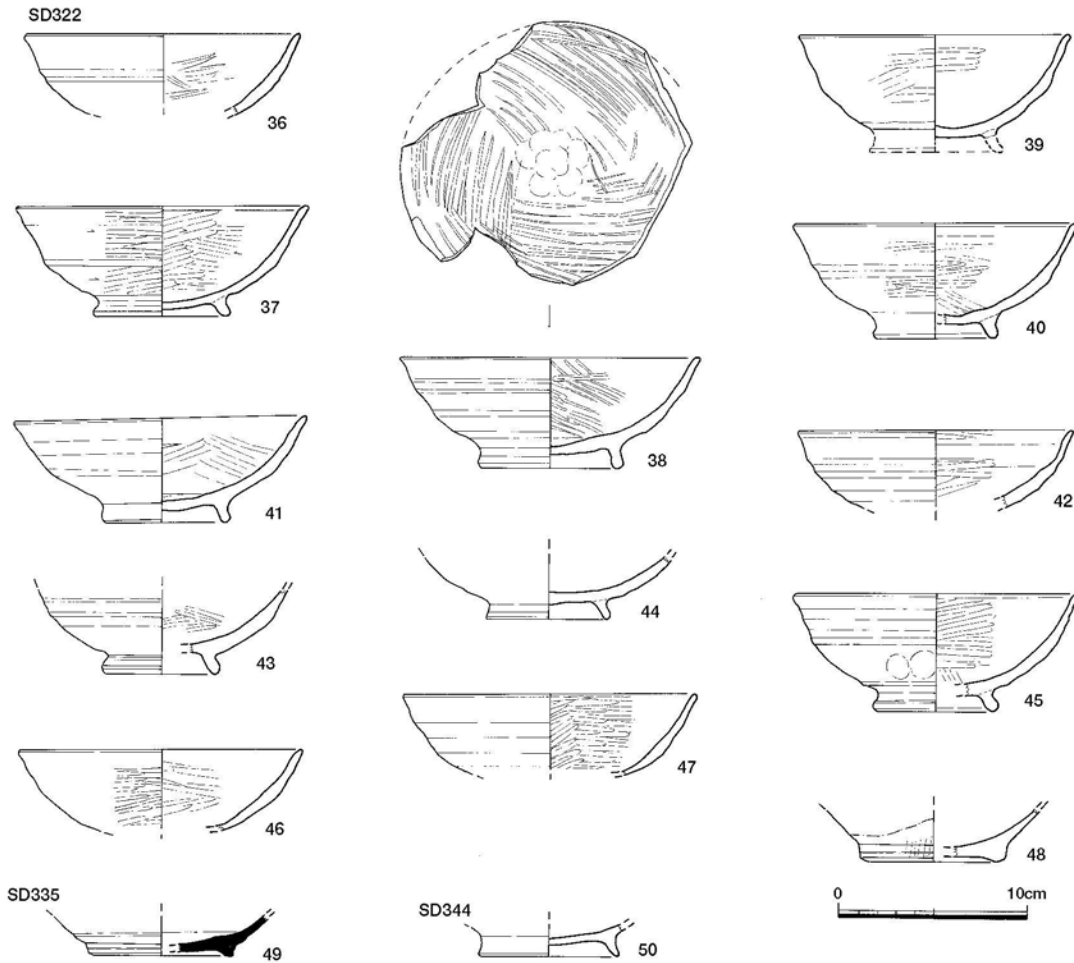


Fig.10 SD322・335・344出土土器 (1/4)

られたものと思われる。

SE303(Fig.11、PL.10) N-29区で検出した不整円形の掘り方を持つ井戸。規模は上面で1.15×1.08mを測る。底面は二段掘りで井筒部分となり、曲物の井筒が据えられていた。一段目の深さ0.15m、二段目までは0.3mである。曲物は2段残り、上段が径40cm、下段が30cmを測る。曲物は針葉樹のモミ属の薄板を桜皮で丸く閉じたもので、下端にはタガが回る。埋土は掘り方が灰色砂質粘土、井筒部分が暗灰色砂である。

出土遺物(Fig.25) 図示しうるものはないが、弥生土器から古墳時代から古代の土師器・須恵器、中世の土師器の細片が少量出土している。

M1は炉壁塊でスサやワラを含んだ粘土の壁体に鉋滓が付着する。

SE304(Fig.11、PL.10) N-2区9杭上で検出した円形の掘り方を持つ井戸。規模は上面で2.09mを測る。底面は二段掘りで井筒部分となる。井筒部径は1mを測る。深さは一段目迄約0.5m、二段目迄は0.8mを測る。井筒はなく方形の井戸枠のみで、四隅に杭を打ち込み、直径3~4cmの丸木を二段に組んで、その間を蓆のような編み物で覆って側板代りとしている。埋土は上層が灰黄褐色粗砂混じり土から灰色粘質砂、下層は青灰色粘質砂である。

出土遺物(Fig.14・15) 弥生土器から古墳時代土師器、中世の土師器・黒色土器などが出土している。51は土師器椀底部片。大宰府編年のE期のものか。52は黒色土器A類の椀底部片。

W4～7は井戸枠の四隅に打たれた杭材である。いずれも長さ80.2cm・56.3cm・65.5cm・54.2cm、直径3.2～4.5cm・4.6～5.6cm・4.0～4.3cm・3.4～3.8cmで、樹皮が残る芯持ち材の先端を削り杭として使用している。

SE306(Fig.11、PL.10) 東壁M-27区で検出した井戸。排水溝掘削作業で東側一部を破壊している。掘り方上面は隅丸方形に近く南北長2.1m、東西長1.53m以上を測る。底面は三段掘りで、二段面は方形で径1.2m、三段目は円形で径は0.7mとなる。井戸の深さは上面より一段目が0.2m、二段目が0.46m、三段目が0.75mを測る。井戸枠は方形で横木に幅10cm前後の板を並べて側板としているがつぶれて、内側に倒れこんでいる。その内部に曲物の井筒が二段残っていた。

出土遺物(Fig.15・16、PL.71) 弥生土器、古墳時代～古代の土師器、黒色土器A類、黒曜石剥片などが少量出土した。

W8～16は井戸枠材である。W8は建築材の転用か。横幅19.4cm、残縦長26.3cm、厚さ2cm程の板材で、右下隅に2.3×3.5cmを測る方形穴がある。表面は工具による削り痕が残る。W9は先端を両方向から削って尖らしている。残存長46cm、直径4.6×5.2cmを測る。W10も建築材の転用で下端に接合の為の欠き込みがある。残存長36.5cm、直径5.4×5.8cmである。W11～15は井戸枠の支柱か。W11は割り材を削って杭としたもの。残存長40cm、幅4.1cmを測る。W12は樹皮が残る小木を利用した杭。残存長39.3cm、直径3cm前後を測る。先端は削って尖らす。W13～15はスギの割り材の先端部を削って杭としたもの。いずれも残存長は37.9cm・31.4cm・38cm、幅4.9cm・3.1cm・4.5cmを測る。W16は大型の台形状の板材。傷みがあるが、底板の転用品か。最大横幅61.6cm、縦長15.4cm、厚み1.5cm程である。表面は平滑な仕上げ。W17・18は井戸枠の側板。これ以外に何点かあるが代表で図示する。いずれも針葉樹のうすい板材。下端部は削り仕上げ。横幅11.7cm・14.2cm、残存縦長31.4cm・33.5cm、厚み0.8cm・0.8cmを測る。

SE309(Fig.11、PL.11) N-27区で検出した円形の掘り方を持つ井戸。規模は上面で0.63×0.69m深さは0.26mを測る。内部には井筒として歪むが径30×40cmの楕円形の曲物があった。曲物は二段で外側の大きな曲物の中に一回り小さな曲物が入り込んでおり、その間に直径2cm程の杭が打ち込んであった。埋土は暗青灰褐色粘質砂である。遺物から見て時期は9～10世紀であろうか。

出土遺物(Fig.15・16、PL.67) 弥生土器から古代の土師器が少量出土している。

53～55は土師器。53・54は椀。いずれも井筒外側で出土。53は底部片で高く細い高台が付く。小片で断定出来ないが大宰府編年のD期(10世紀代)のものか。54は高台部を欠くが完形。体部は高台から直に開く形態で、土師器の9世紀代の特徴を残す。体部内外面にススが付き黒化し、部分的に焼けて赤く、表面が剥落する所もあり灯火具に用いられたものと思われる。55は甕の口縁部片。胴部内面は当て具痕、外面は木目直交の平行叩きである。口縁部は指ナデ、外面ススが厚く付着する。製塩土器か。

SE311(Fig.11、PL.11) V-27区で検出した円形の掘り方を持つ井戸。規模は上面で1.25×1.33mを測る。底面は二段掘りで一段目は0.16m、二段目の深さは0.33mを測る。内部には曲物の井筒があった。井筒は二段で外側の直径35cmの大きな曲物の中に一回り小さな曲物がある。曲物の西側には枠と思われるような幅4cmの棒状の木材があった。曲物の厚みは0.4cmで、上段は残存高17～19cm、下段の残存高は7cmを測る。埋土は淡黒色土である。

出土遺物(Fig.14) 中世土師器細片が少量出土している。

56は黒色土器B類の椀片で高台部は外れる。体部内外面は丁寧なヘラミガキ調整。57は黒色土器B類の椀底部を再利用した円板で、直径は6.6～6.7cmを測る。縁辺は丁寧に打ち欠いている。玩具

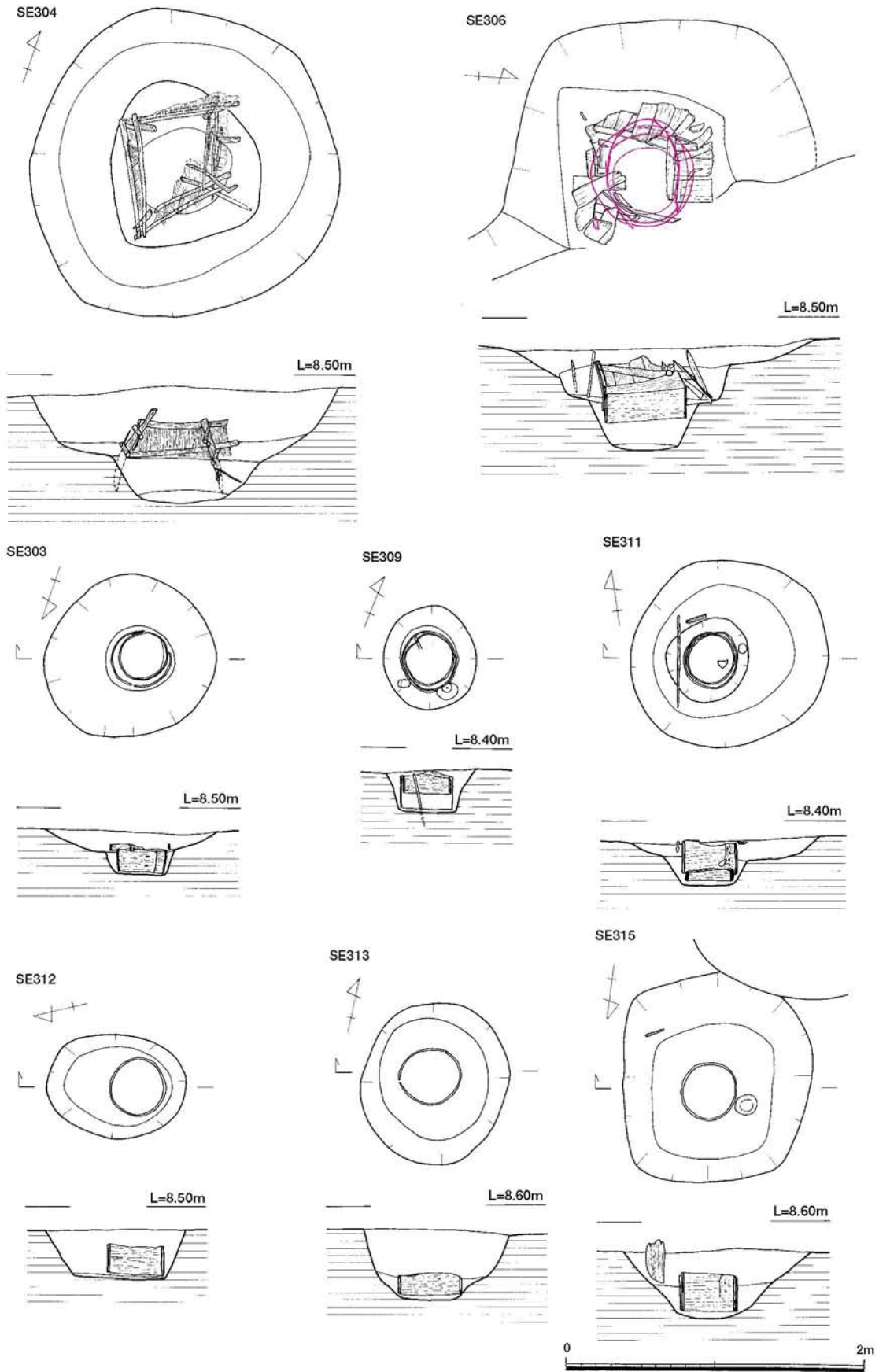


Fig.11 SE303・304・306・309・311~313・315 (1/40)

の瓦玉か。

SE312(Fig.11、PL.11) U-27区で検出した楕円形の掘り方を持つ井戸。規模は上面で0.94×0.7mを測る。底面はほぼ平坦で深さは0.34mを測る。内部南側に寄って曲物の井筒があった。曲物の直径は37cm、残存高は20cm、厚みは0.3cmを測る。埋土は淡黒色土である。遺物の出土はなかった。

SE313(Fig.11、PL.11) V-26区で検出した楕円形の掘り方を持つ井戸。規模は上面で1.0×1.08mを測る。底面は二段掘りを呈し、井筒として曲物が一段置かれているが、その部分は窪んでいる。底までの深さは0.48mを測る。曲物は直径40cm前後、残存高15cm、厚み0.4cmを測る。埋土は上層が暗褐色粗砂混じり土、下層は暗灰色粗砂混じり粘土である。遺物としては弥生土器や古墳時代須恵器、土師器皿片などが少量出土している。

SE315(Fig.11、PL.11) U-25区で検出したSK324に切られる方形状の掘り方を持つ井戸。規模は上面で1.26×1.40m、最大深さは0.47mを測る。底面中央部には曲物の井筒があり、中央部がやや窪む。曲物は直径35×38cm、残存高25cm、厚さ0.8cmを測る。井筒の外側には完形の土師器坏があり、南東隅には厚み0.5cmの板材が直立していた。井戸枠の残りであろうか。埋土は暗灰色粘土である。

出土遺物(Fig.13・14・16、PL.68・71・72) 中世の土師器、黒色土器。白磁などが少量出土している。

58～64は土師器。58～60は小皿。口径は9.1～9.6cmを測る。いずれも外底部はヘラ切り。61は井筒横で出土した完形の坏。外底部はヘラ切り後ナデ調整で板目痕が残る。体部は丁寧なナデ。外面黒っぽく汚れる。62～64は椀。62は口縁部片。体部は回転ヨコナデ調整。63・64は底部片。高台は63が細く長く、64が太く短い。200はSK317出土の中世須恵器と同一個体の可能性がある。

W1は井筒に使用された曲物。復元径38.8cm、高さ26.2cmを測り、側板は厚さ0.4cmで、端を重ね合わせて接合し、桜皮で綴じている。上部には幅5.7～5.9cmのタガが一段巡り、両端を重ね合わせ桜皮で綴じている。内面には刃物によるケビキ線が全体に入る。W19は井筒の外側に立てられていたもの。半分欠損するが曲物の底板材。縁辺は削りで、表面は平滑に仕上げるが上面には刃物傷がある。下面は腐食がかなり進む。

SE318(Fig.12、PL.11) S-27・28区ライン上で検出した不定形の掘り方を持つ井戸。規模は上面で2.46×2.57mを測る。底面は西側にテラスを持ち東側が円形状に一段深くなる。その中央やや西よりに井筒がある円形状の掘り込みがある。深さは一段目が0.3m、二段目は0.43m、三段目は0.7mを測る。井筒は直径45×47cm、高さ25cmの曲物である。井筒の上面には板材が散在していた。板材による井戸枠の名残であろうか。埋土は上層が暗灰色シルト、下層は黒灰色粘質シルトである。

出土遺物(Fig.14・16、PL.68) 弥生土器や古代から中世初めの土師器、黒色土器、須恵質土器などが出土している。

65は土師器椀底部片で外湾する高い高台が付く。調整はナデ。66は黒色土器A類椀底部片で、低く外湾する高台が付く。高台部はケズリ後ナデ調整。67・68は高麗産と思われる、無釉陶器の甕胴部と底部片。胴部の器壁は0.5cmと薄い。外面斜めの格子目叩きが残る、内面は強い回転ナデ調整で、同心円状の当て具痕が残る。底部は丸みを持ちケズリ後ナデ調整。同様のものがSK314上層にある。

W20は井筒内出土。底板の一部か。縁辺は削りで面取りし、上下両面は平滑に仕上げるが、刃物傷がつく。残存横幅は24.4cm、厚み0.4～0.7cmを測る。W21は板材。残存横幅4.0cm、残存縦長19.3cm、厚み0.9cmを測る。W22・23は曲物の底板の一部。W22の直径は不明。W23は円形で13.8cmを測る。

SE320(Fig.12、PL.12) V-26区で検出した円形の掘り方を持つ井戸。規模は上面で1.70×1.68mを測る。中央部に曲物の井筒があるが、その部分は円形状に一段深くなり、二段掘りとなる。深さは上段で0.2m、井筒部で0.27mとなる。曲物は直径45cmで残存高は23cm、厚みは0.4cmを測

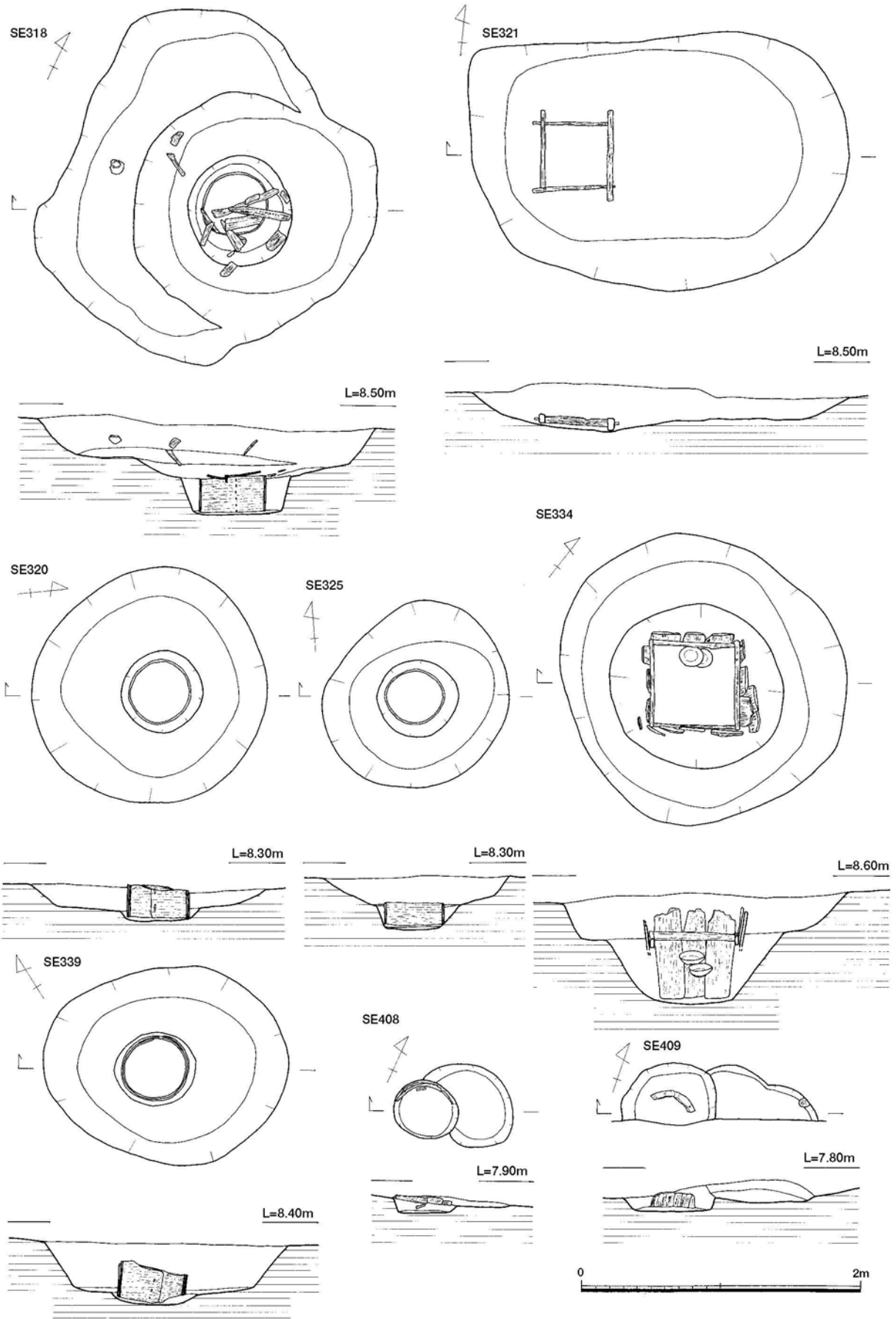


Fig.12 SE318・320・321・325・334・339・408・409 (1/40)

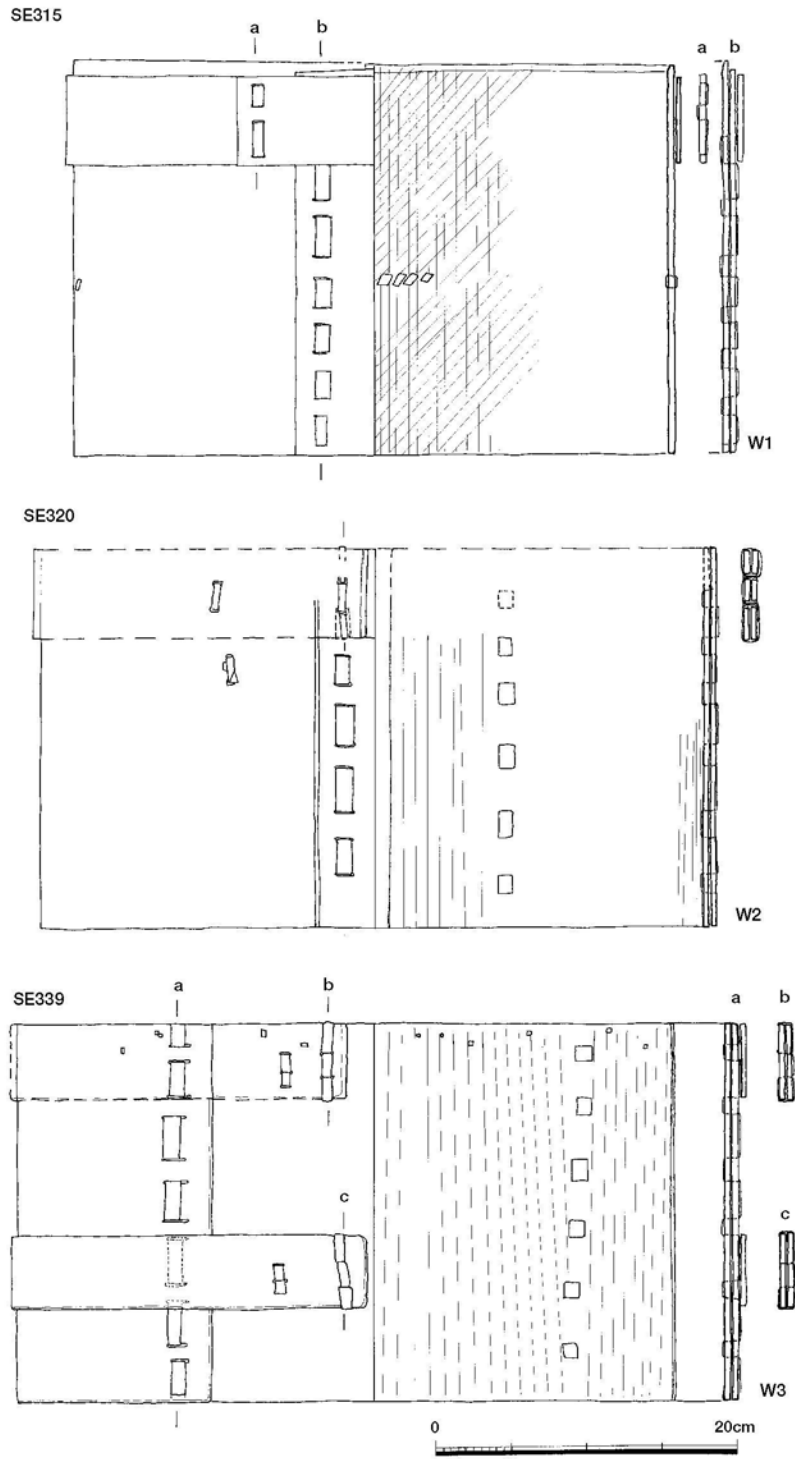


Fig.13 SE315・320・339 井筒 (1/5)

る。井筒の上には板材があった。埋土は黒灰色粗砂である。

出土遺物(Fig.13・14、PL.68・71) 古墳時代の土師器や古代又は中世の土師器、黒色土器、瓦器が、白磁が少量出土している。

69は土師器の小皿で完形、かなり歪が大きい。外底はヘラ切り後ナデ調整で板目痕が残り、体部は回転ナデ調整。70・71は黒色土器B類椀。70は口縁部片。体部は回転ナデ。71は底部片。端部の丸い低い高台が付く。72は瓦器小皿。外面丁寧なナデ調整、内面燻しがひどく、内底にはジグザグ状のヘラミガキ痕が残る。73～75は白磁。73は皿口縁部片。口縁部は体部から屈折して端反る。くすんだ緑がかかった乳白色釉がかかる。74・75は碗。74は体部片。白濁した薄めの灰白色釉がかかる。75は玉縁口縁で、IV-1類か。

W2は井筒として使用された曲物である。復元直径43.3cm、残存高21.5cmを測る。側板は厚さ0.4cmで、端を重ね合わせて接合し、桜皮で綴じている。上部には幅5.9cmのタガが一部残っていた。内面には刃物によるケビキ線が全体に入る。

SE321(Fig.12、PL.12) V-26区で検出した長楕円形状の掘り方を持つ井戸。規模は上面で2.7×1.83mを測る。西側壁寄りに板で井桁に組んだ枠がある。底面はやや深くなる。枠の内径は45cm前後である。埋土は灰褐色砂質粘土である。

出土遺物(Fig.16) 弥生土器片が少量出土している。井戸枠について述べる。

W24～27は井桁に組んだ井戸枠材で、いずれも断面長方形の板材で、W24・25は両端に一ヶ所ずつ貫孔を持つ。W26・27は両端にホゾを持つ。法量は残存長65.1cm・60.8cm・56.2cm・54.7cm、幅7.4cm・5.9cm・4.8cm・3.6cm、厚み3cm・3.2cm・2.0cm・2.7cmを測る。

SE325(Fig.12) U-26区で検出した不整形の掘り方を持つ井戸。規模は1.35×1.35mを測る。底面は二段掘りで中央部には曲物の井筒がある。深さは上段までが0.2m、下段底面が0.41mを測る。曲物は一段で直径40～43cm。高さ15cmを測る。埋土は掘り方が暗褐色粗砂、井筒は黒灰色粘質砂である。土器類の出土はない。

SE334(Fig.12、PL.12) W-21区で検出した不整形の掘り方を持つ井戸である。規模は上面で2.05×2.11mを測る。底面は二段掘りで、深さは上段が0.3m、下段底面までが0.8mを測る。中央部には板材と横木で方形に組んだ井戸枠があった。枠内には井筒はない。井戸枠は幅5cm、長さ65cm程の横木を組んで、その外側に板を3枚縦に立てて側板としている。西側と北側には補強のため、一部板を二重に立てている。枠の残存高は最大で70cm程である。内面には東側沿いに底より浮いて土師器の坏が二枚出土している。埋土は暗灰色粘質砂で、井筒内は黒灰色砂である。湧水がひどく、底面はやや不正確か。

出土遺物(Fig.17～19、PL.68・72) 弥生土器から古墳時代土師器・須恵器、古代から中世の土師器、黒色土器、瓦器、白磁、木製品などが出土している。

77～79は土師器。77は小皿。口縁部は歪みがひどい。外底部は回転ヘラ切り後ナデ調整。78・79は丸底杯。78がやや底が深い。79の外底部はヘラ切り。78の体部は丁寧なナデ調整。80は黒色土器B類椀底部片。底部に丸く短い高台が付く。内面は摩滅するがミガキか。81はほぼ完形の黒色土器A類。底部はかなり歪むが短い断面三角の高台が付く。内面は丁寧なナデ調整、体部下半に指押え痕が残る。82も黒色土器A類の椀底部片。細く高い高台が付く。83～86は瓦器椀。83・84は完形。体部内外面は回転ナデとミガキ調整。内底部にはジグザグの暗文風ヘラミガキが文様状に入る。全体にかなり歪む。85は口縁部片。焼成はやや不良。86は口縁部を一部欠損するがほぼ完形。口縁端部はやや外反する。高台断面は四角である。体部内外面ミガキ。下半はヘラケズリ調整。87・88

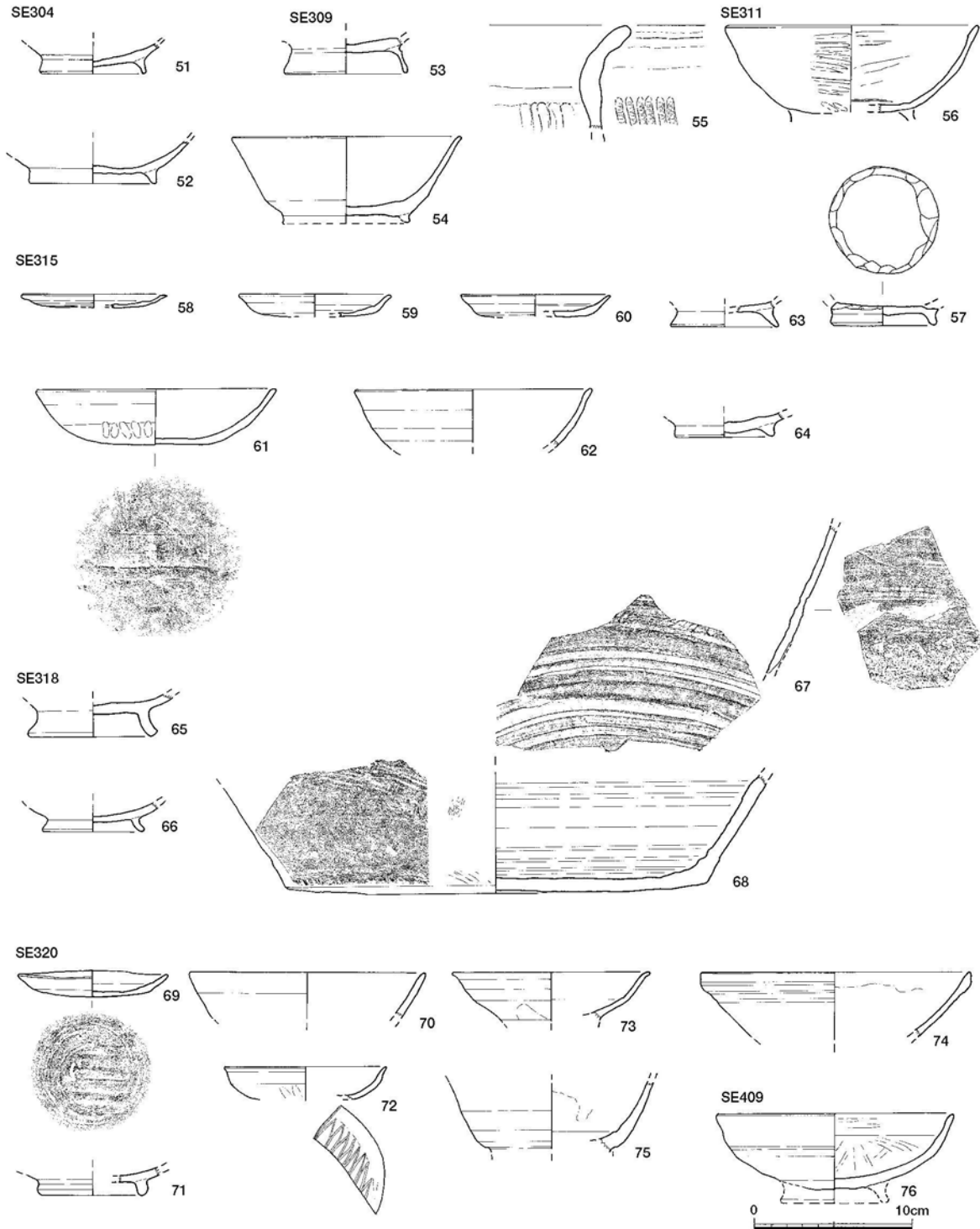


Fig.14 SE304・309・311・315・318・320・409出土土器 (1/4)

は白磁。87は皿。平底皿II-2類で口縁部は僅かに外反する。外底は露胎。緑がかった灰白色釉が薄くかかる。88は底部の形態から碗IV-1類である。高台はケズリ出しで擦られている。内底砂粒が付着する。

W28・29は井戸枠に使用された板材。上部は欠損する。横幅27.6cm、残存縦長33cm、厚み2.5cm前後を測る。表面は磨耗が進む。W29は折敷底板の一部。残存横幅14.8cm、残存縦長31.5cm、厚み0.7cmを測る。下端に4ヶ所、直径0.3~0.5cmほどの目釘孔があり、木釘が残っている。W30は扇

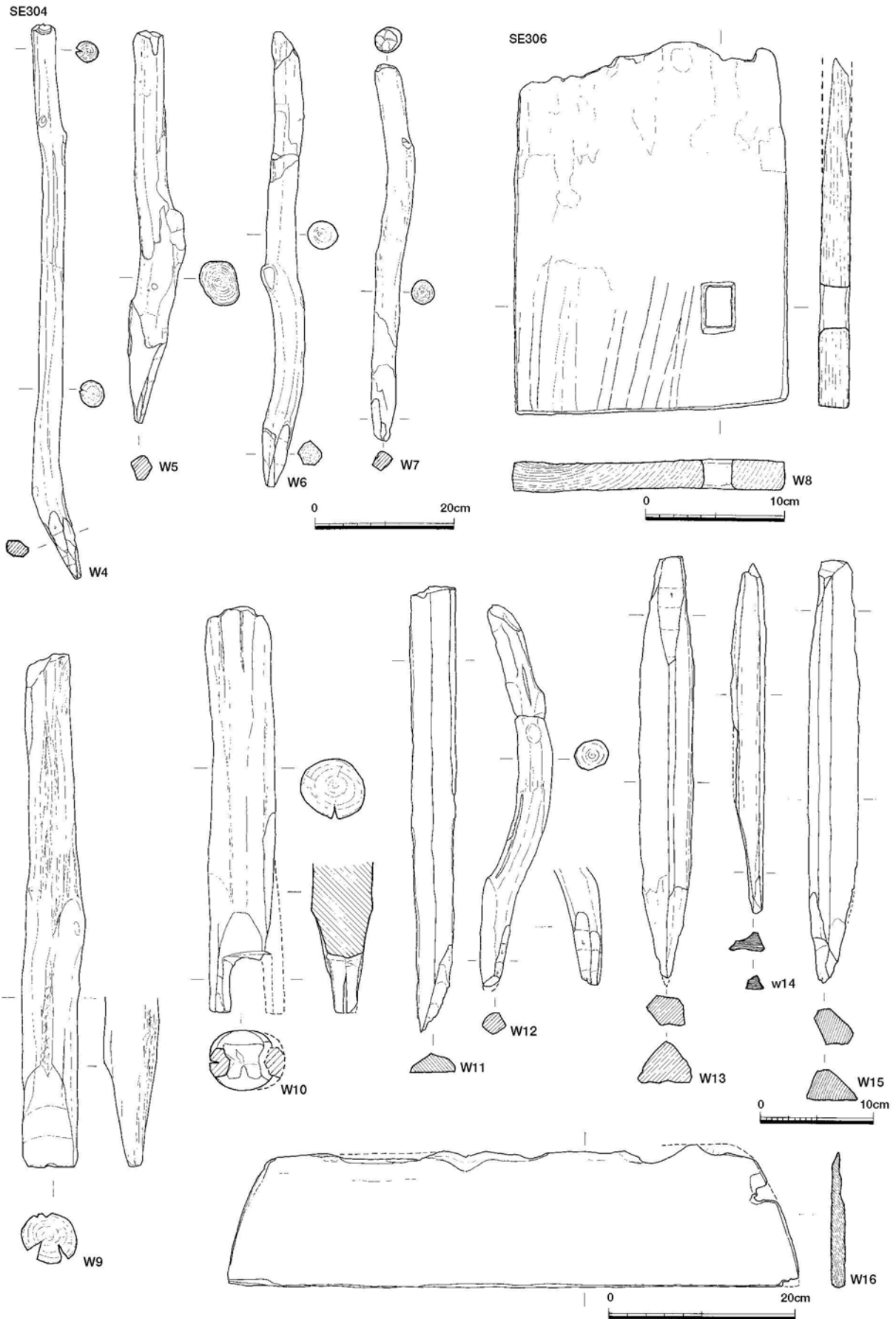


Fig.15 SE304・306出土木製品 (1/8・1/4・1/5・1/6)

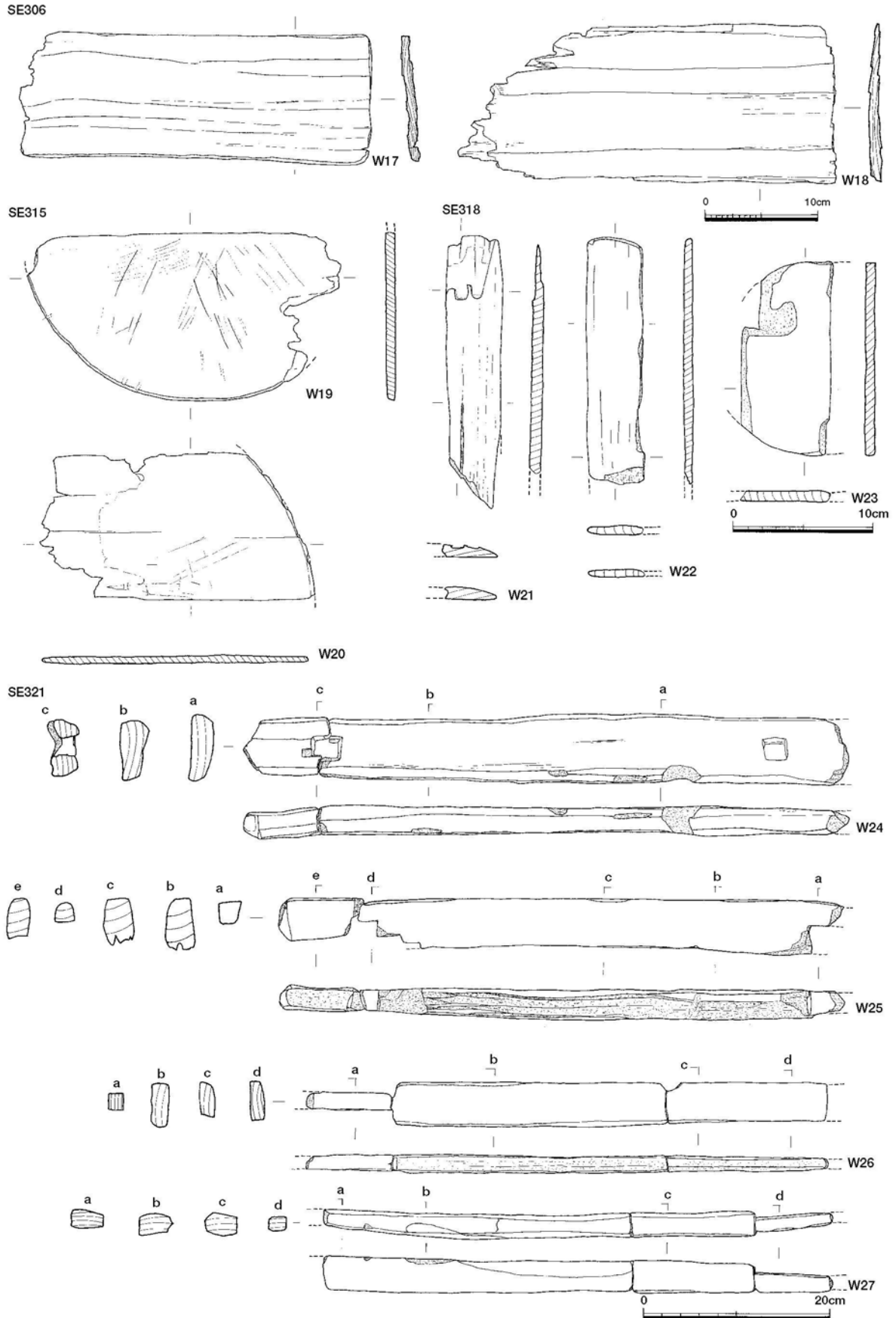


Fig.16 SE306・315・318・321出土木製品 (1/5・1/4・1/6)

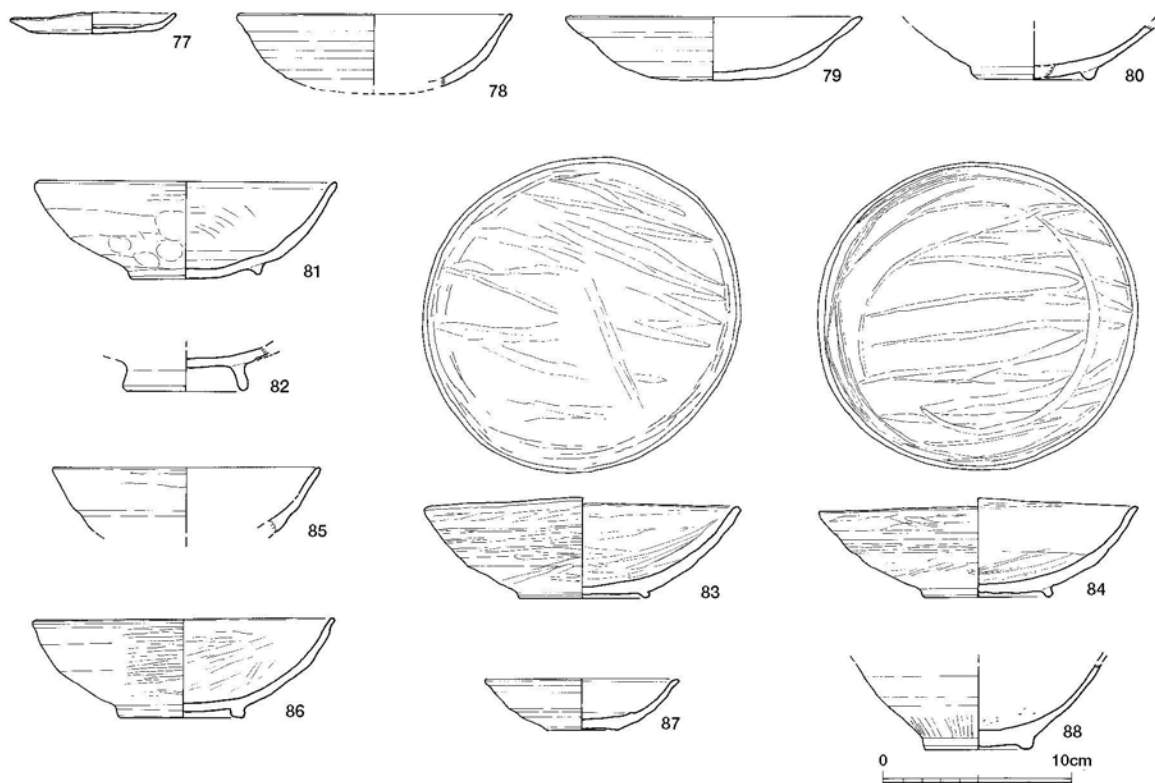


Fig.17 SE334出土土器 (1/4)

骨か。残存長25.9cm、幅2.3cm、厚さ0.5cmを測る。下端に一ヶ所径0.4cmの孔がある。表面は丁寧な削り平滑に仕上げる。W31～34は井戸枠の横木材で、方柱状の板材。W31・32は両端にホゾをかませる為に欠き込んでいる。いずれも完形で全長64.9cm・66.1cm、幅5cm・5.5cm、厚さ3cm・約3.5cmを測る。W33・34は両端をホゾに削り出している。W33は右側ホゾが欠損する。いずれも全長61cm以上・64.5cm、幅6.7cm・6.2cm、厚さ3cm前後を測る。ホゾは幅1cm、長さ3cm前後を削り出している。W35～37は側板の一部である。主なものを図示した。いずれもスギの辺材を利用したもの。下端は削って平坦面を作り出している。上部は露出した時期があったのか腐蝕磨滅が著しい。残存長は51.8cm・53.9cm・75.3cm、最大幅23.7cm・21cm・22.7cm、最大厚み4cm・3.8cm・3.8cmを測る。

SE339(Fig.12、PL.12) U-26区で検出した楕円形の掘り方を持つ井戸である。規模は上面で1.76×1.43mを測る。底面は中央部が一段深くなり曲物の井筒が置かれている。深さは上段で0.33m、井筒底までは0.45mを測る。井筒は直径46cm、残存高は25cmを測る。埋土は灰褐色粗砂、井筒部は暗灰色粘土である。

出土遺物(Fig.13、PL.71) 中世の土師器や黒色土器A類、須恵質土器片などが少量出土している。図示したのは井筒に使用された曲物である。

W3は井筒に使用された曲物である。直径はやや歪むが46cm、高さは25cm、厚みは0.4cmを測る。側板は重ね合わせ、2箇所を桜皮で上から下まで止めている。上部と中部に幅5cmのタガが回る。桜皮で側板と接合している。側板内面にはタテ又はナナメの不均一の刃物によるケビキ線が入る。上端には接合の為の目釘孔がある。樹種はモミ属である。

SE408(Fig.12) 第I面で検出出来ず、第II面で検出したので遺構の残りは悪い。大小二つの円形土坑が重なった形態で西側の小円形土坑が深く、内に曲物の井筒の残りがあ。規模は0.85×0.6mを測る。西側井筒部は0.45×0.42mを測り、深さは井筒部で上面から0.13mと浅い。曲物の井筒は一部残るのみである。埋土は灰白色粗砂礫である。古代から中世の土器片が少量出土。

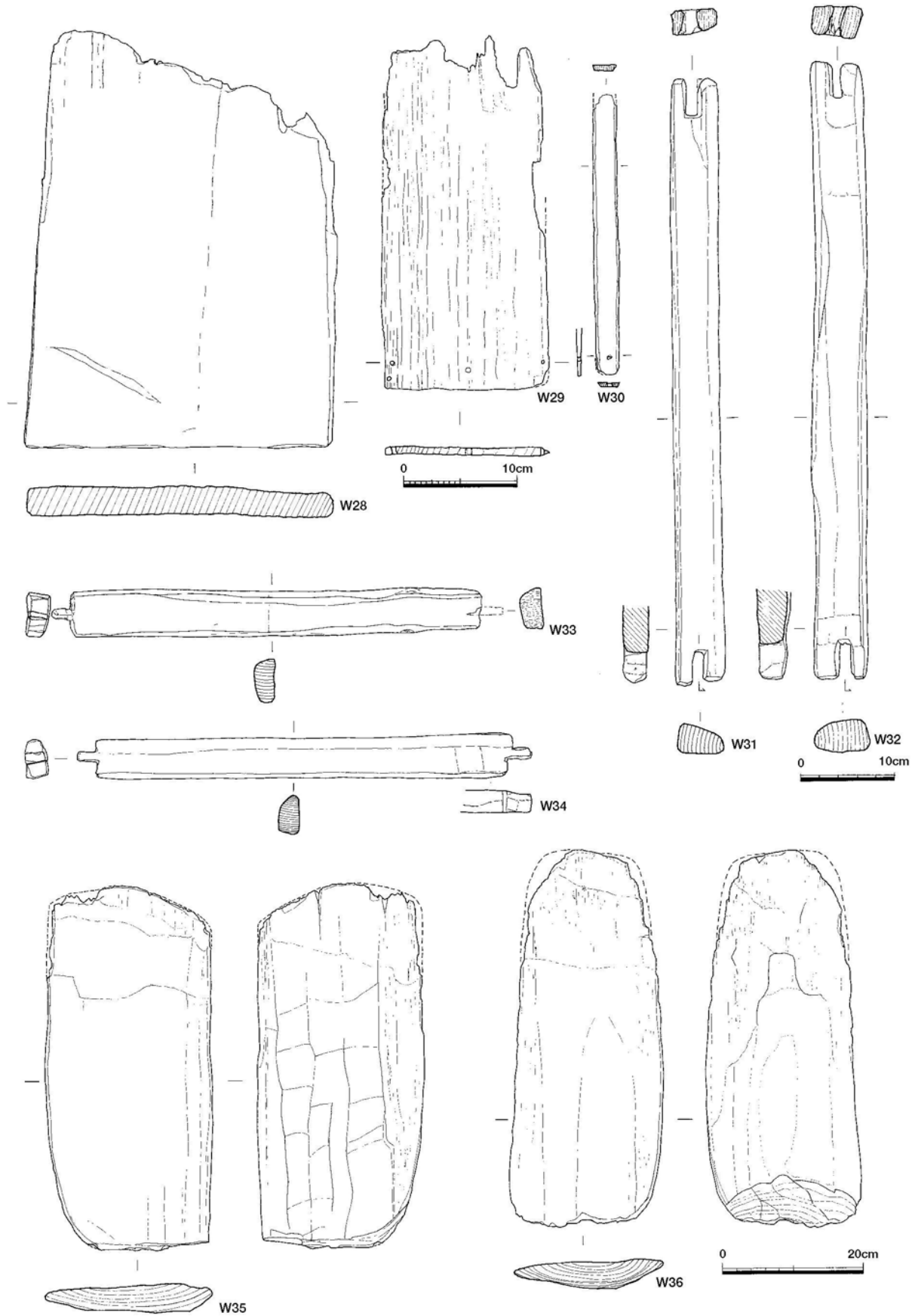


Fig.18 SE334出土木製品・井戸杵 (1/5・1/6・1/8)

SE409(Fig.12、PL.12) 第I面で検出出来ず、第II面で検出したので遺構の残りは悪い。半分を試掘トレンチで切られる。形態は不定形で、西側には円形の井筒を持つ土坑がある。規模は長軸で1.4mを測る。深さは最深で0.18m程である。井筒の直径は40cm程で、残りは悪いが丸木を削り抜いたような形態である。埋土は黄白色～灰白色粗砂である。

出土遺物(Fig.14、PL.68) 76は黒色土器A類椀で高台部を欠失する。体部内面は摩滅がひどいがヘラミガキか、体部外面上半は回転ナデ、下半はケズリで二次的に火を受けたのか赤変する。

④ 土坑(SK)

SK302(Fig.20) 調査区北東隅N-28区で検出した円形土坑。径1.15m×1.18mを測り、深さは0.22mで浅い。底面はほぼ平坦である。埋土は灰褐色粗砂に粘土を混入する。

出土遺物(Fig.21) 弥生土器細片と中世土師器や黒色土器A類細片が少数出土している。89は黒色土器A類椀底部片。高台はハの字に開く。体内面ヘラミガキで、外面と高台部はナデ調整。

SK314(Fig.20、PL.14) U-24区で検出した隅丸方形形状の土坑。長軸長1.4m、短軸長1.28m、深さは0.1mを測る。底面はほぼ平坦である。埋土は上層が黒色灰混じり土、下層が灰色シルト粘土と粗砂の混じりである。廃棄土坑であろうか。

出土遺物(Fig.21・25、PL.69) 床よりやや浮いた状態で古墳時代須恵器や中世の土師器、黒色土器B、瓦器片などが出土している。完形品に近いものもある。

90～99は土師器。90は小皿。底部には回転ヘラ切りで板目圧痕が残る。91は皿で、口縁は底部より短く開く。古代の8世紀頃のものか。92～97は坏である。92・93の底部はやや丸みを持つが、その他は丸底の杯といわれるものである。時期的に92・93は古いのかも知れない。口径は14.9～17.8cm、深さは3.1～3.8cmと法量にばらつきがある。調整は底部は残るもので回転ヘラ切り後ナデ、体部は回転ナデ、内底は丁寧なナデ。95の底部には板圧痕が残る。94の体部内面には部分的にススが付着し、外面も黒化する部分があるので、灯明皿の可能性もある。98・99は椀。98は器厚が薄く細く高い高台を持つ椀である。大宰府の横田編年のE期、11世紀頃のものか。99は底部1/2片。調整は外面ナデ、内面は丁寧なナデ。

SK317(Fig.22、PL.13) 調査区V・W-24区で検出したSD322と切り合う不定形状の土坑。SD322との前後関係は明確でないが、西壁土層断面を見ると中間でSD322の部分が確認出来、SD322が新しい時期に掘削されたような状況を示す。確認規模は西壁部分で南北幅4m、東西幅4.5m、底面はほぼ平坦で、深さは西壁断面で最大0.55mを測る。埋土は黒色粘土を主体とし、流木や植物などの自然遺物が中間部分で多く出土している。土師器小皿や坏など土器などが完形で多く

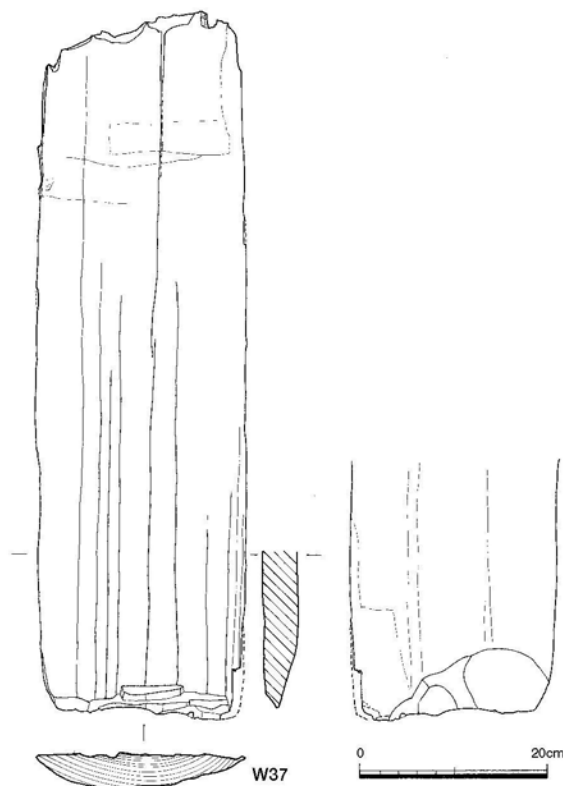


Fig.19 SE334井戸 枠 (1/8)

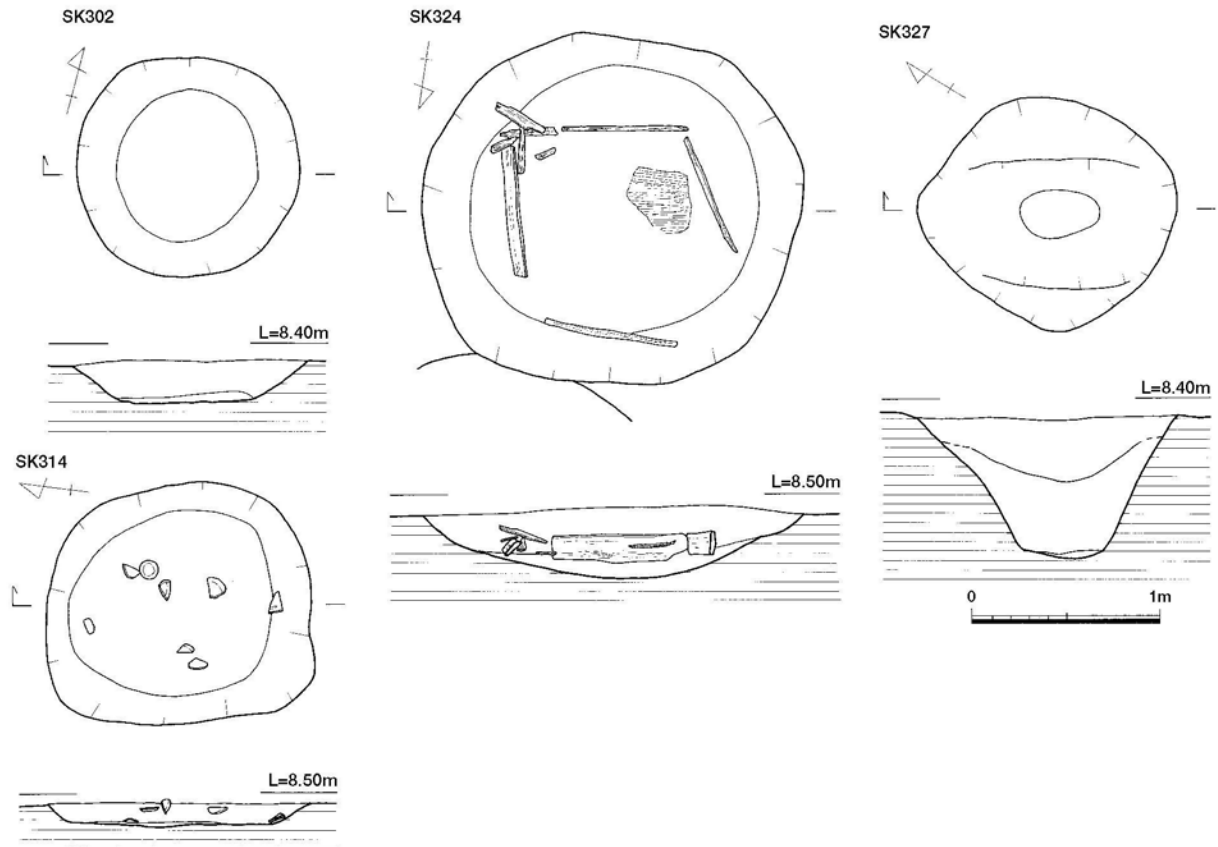


Fig.20 SK302・314・324・327 (1/40)

出土し、陽物と思われるような木製品も出土している。

出土遺物(Fig.23～27、PL.69～71) 弥生土器や古墳時代土師器・須恵器、中世の土師器、黒色土器・瓦器などが多数出土し、中国産白磁・国産陶器、木製品、滑石製品、黒曜石剥片などが少量出土している。

109～170は中世土師器。109～132は小皿。口径は8.8～10cm、器高は0.7～1.8cmの範囲に収まる。底部はやや丸みを持つものと平坦なものがあるが、回転ヘラ切りで板厚痕が残るものもある。体部は回転ナデ調整。116は器形の歪みが大きく、口縁端部はやや内折する。120は体外面に一部ススが付着し、黒化する。133～162はいずれも杯である。口径は14～16.7cm、器高は2.4～4.3cmの範囲であり、割合底が浅い133～141、底が深いもの142～162に分かれる。いずれも調整は底部はヘラ切り、体部は回転ヨコナデである。底部に板厚痕が残るものもある。163～171は椀。高台の形態は短く丸いもの163～165と、細く高いもの168～170の2種類ある。おおよその調整は外底部がケズリ、体部はヘラミガキ又はナデである。外面に指押え痕が残るものもある。172～188は黒色土器である。171～179・188は黒色土器A類の椀である。口径は14.7～16.5cm程を測る。全体に底が深く椀形であるが、坏の浅い174もある。高台部は細く「ハ」字状に開く。調整は底部はヘラケズリのちナデ、体部はヘラミガキまたはナデである。180～187はB類の椀である。短く「ハ」字状に開く高台が付く。口径は14.3～17.8cmを測る。調整は体部はヘラミガキ、底部はナデである。

189～191は椀の高台部縁辺が打ち割られたもの。189は土師器で、直径は7.2cmを測る。189・190は黒色土器B類。190は5.8×7.0cm、191は5.8×6.8cmを測る。192～199は白磁。192は皿。

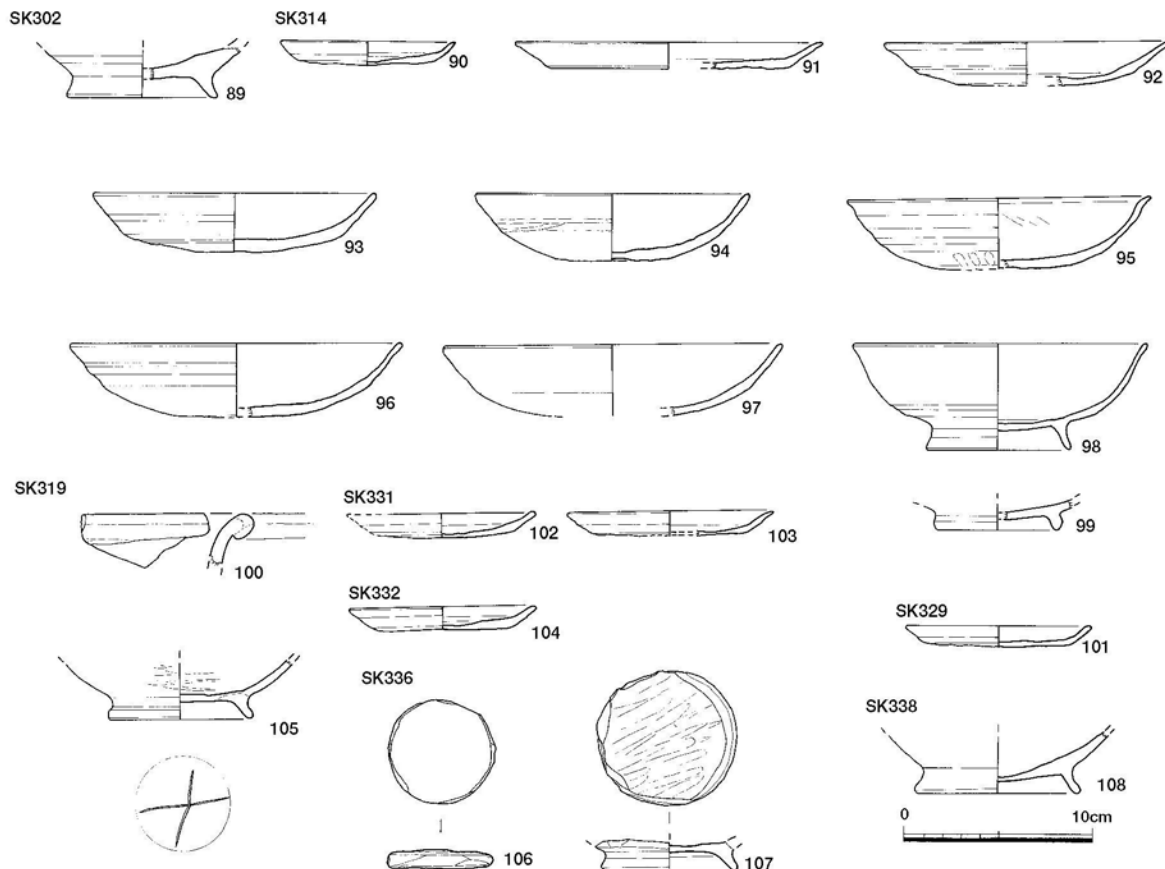


Fig.21 SK302・314・319・329・331・332・336・338出土土器 (1/4)

口縁部片で、口端部が端反る平底皿Ⅱ-2類と思われる。193も口縁部細片であるが同類であろう。194～199は椀片。194～197は玉縁の口縁部片で白磁碗Ⅳ類のものか。198・199は底部片。198は高台部をケズリ出したもので厚手の碗、類の底部。199の平底皿のⅡ類底部か。

201は中世須恵器の甕で、香川県綾南町の十瓶山窯のものと思われる。SE315出土の200と同一窯産と思われる頸部と胴底部片である。底径は17.2～17.7cmでやや楕円形である。底部の器壁は1.3～1.9cmと厚く、底には焼台の破片が付着しており、雑なケズリ仕上げ。胴部外面は粗い斜めの平行タタキで粘土塊が部分的に付着し、自然釉がかかる。内面はナデで粘土帯の痕跡が残る。当て具痕も残っている。十瓶山窯は7世紀に開業以来、11世紀中頃から中世的器種組成を顕在化させ、九州にも大宰府、武蔵寺経筒など11～12世紀に製品の流入が見られるが、本品もほぼその時期に導入されたものと思われる。³¹¹

S1～S3は滑石製品。S1は棒状の錘か。長軸長8.6cm、短軸幅3.8cm、最大厚2.4cmを測る。頂部に径0.6cmの孔がある。各面は工具によるケズリとケンマ仕上で、工具痕が残り、頂部は部分的に欠損部がある。S2は石鍋破片転用の小型石鍋である。直径6.7～7.0cm、器高2.6cmを測る。工具によるケズリ成形で、内底は敲打調整。底部と口縁部にススが付着している。S3・4は滑石の石鍋破片。S3は口縁部片の加工品。長さ8cm、厚さ2cmを測る。表面は欠損があるが、工具による線刻状の加工痕が残る。S4は体部片。残存規模は横16cm、縦6cm、厚さ1.9～2.4cmである。外面は工具によるケズリ、内面はケズリ後ケンマ仕上で、外面にはススが付着する。

W41は男根状木製品と思われる。全長17.5cmを測る。一部欠損するがほぼ完形である。ミツバ注1. 香川県教育委員会の片桐孝浩氏に鑑定とご教示を賜った。

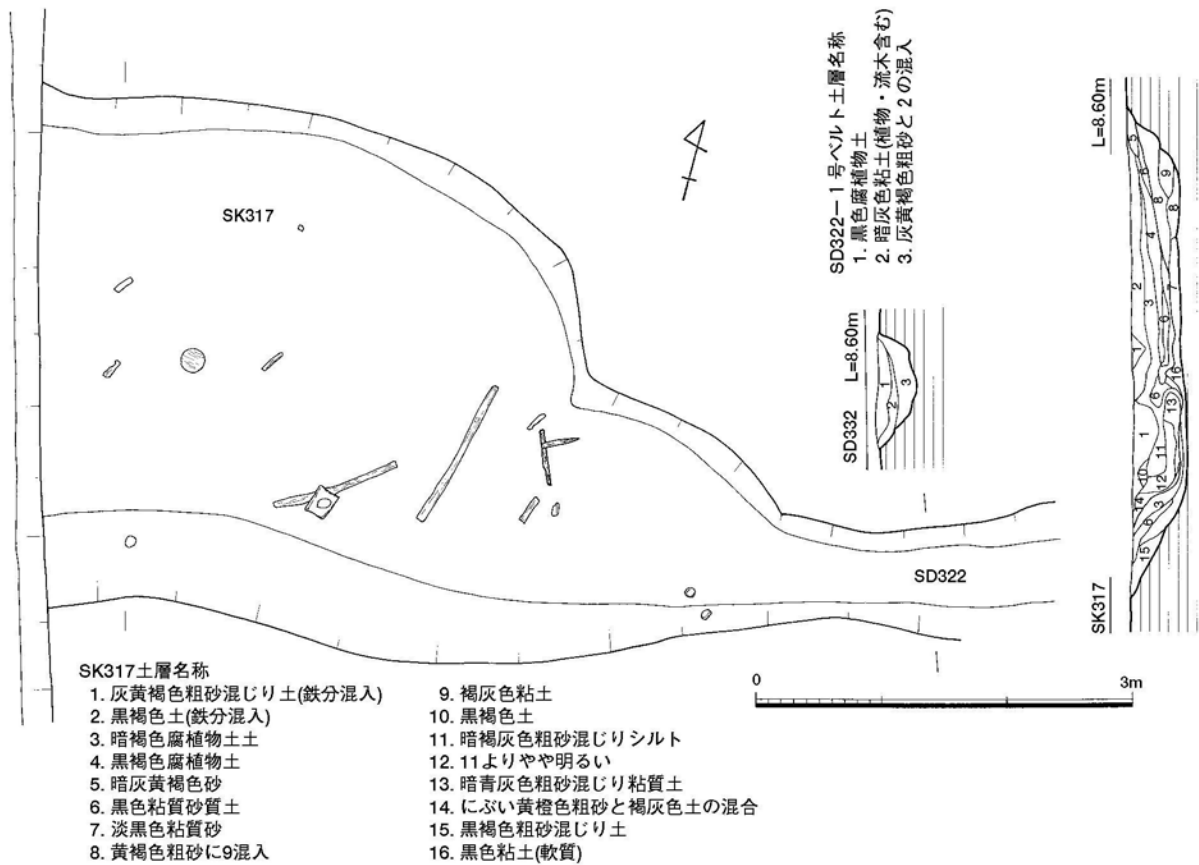


Fig.22 SD322・SK317 (1/60)

ウツギの芯持ち材を丁寧にケズリ加工して作り上げている。W42は連歯下駄の一部。歯の一部残る。残存長10cmを測る。W43・44は断面長方形の薄い長い板材で、箸と思われる。長さ24cmと18.5cmを測る。W45は容器の蓋か底板か。欠損し半円形を呈す。中央部に直径1cmを測る孔があり、周縁には桜皮を通した孔が2ヶ所ある。表面は丁寧に平滑に仕上げる。W46は曲物の底板か。直径16.2cm、厚み0.7cmを測るが反っている。表面はケズリで平滑に仕上げる。W47・48・49は曲物の側板か。残存長は17.3cm・25.8cm・103.5cm、幅4.0cm・4.2cm・10.5cm、厚み0.3cm・0.3cm・0.5cmを測る。いずれも表面には曲がりやすくするための刃物による切り込みケビキ線が多数入る。W48は黒漆が塗られ、上面には紐孔が3ヶ所ある。W49の右端には接合の為の桜皮が残る。W54は全長124.3cm、最大幅4.3cm、厚み1～3mmの細長く薄い板材。丁寧な削りで表面は平滑に仕上げ、両端は加工を加えナナメに作り出している。曲物の側板などに用いる為の板材か。

SK319 図示していないがS-29区で検出した長形状の土坑。長軸長1.1m、短軸長0.5m、深さ0.1mを測る。

出土遺物(Fig.21) 弥生土器片、古墳時代～古代の土師器・須恵器片、中世の土師器、黒色土器B類の細片が少量出土。

100は遺構の時期から外れるが、朝鮮系無文土器と思われる口縁部片。口縁部に粘土紐を巻き込んで丸く作り出している。

SK324(Fig.20、PL.14) U-25区SE315を切る円形の土坑。長軸長2.01m、短軸長1.85m、深さ0.38mを測る。底は浅く窪む。長さ0.7m、幅15cm程の板材が四角い枠をなすように据えられて

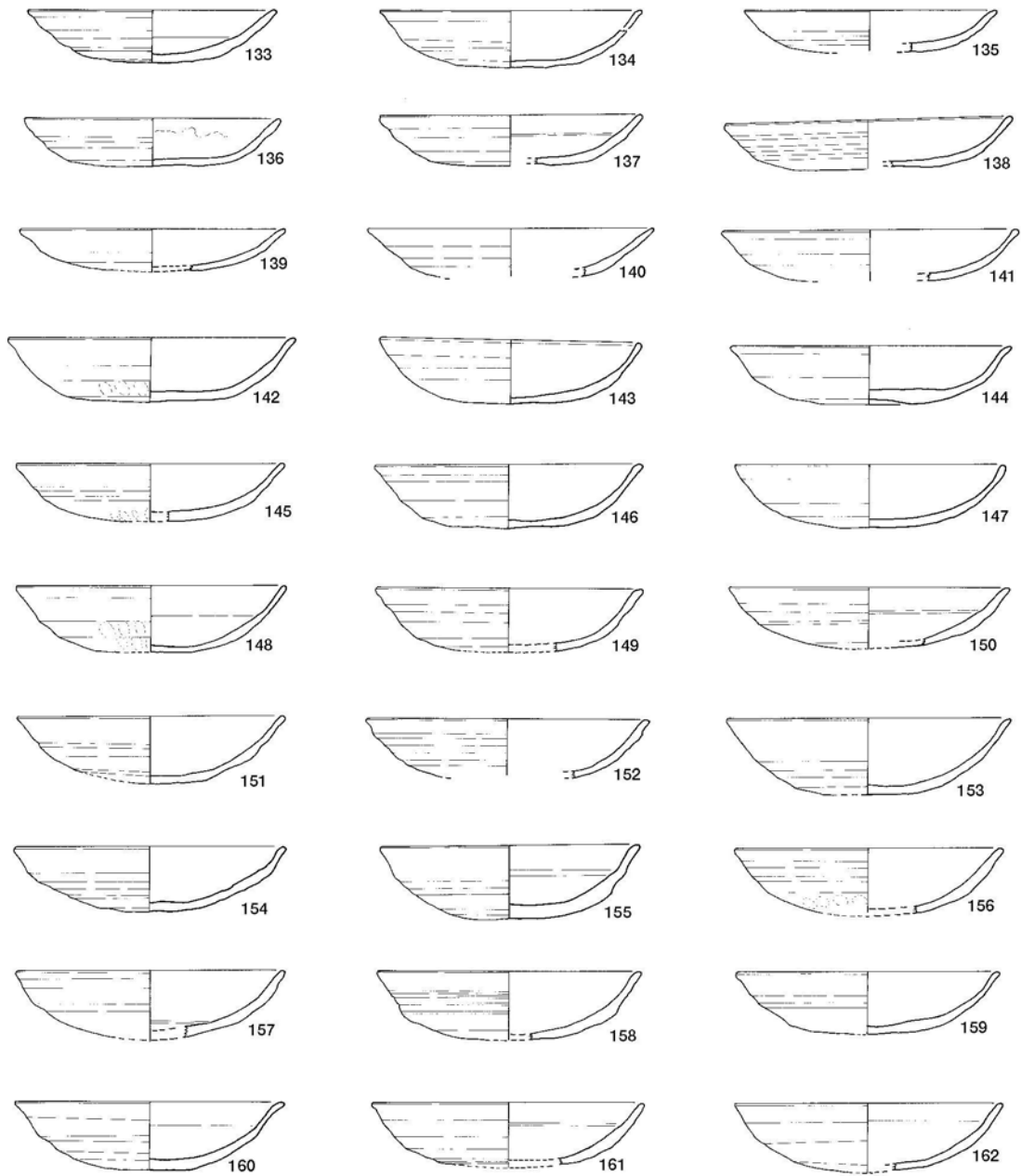
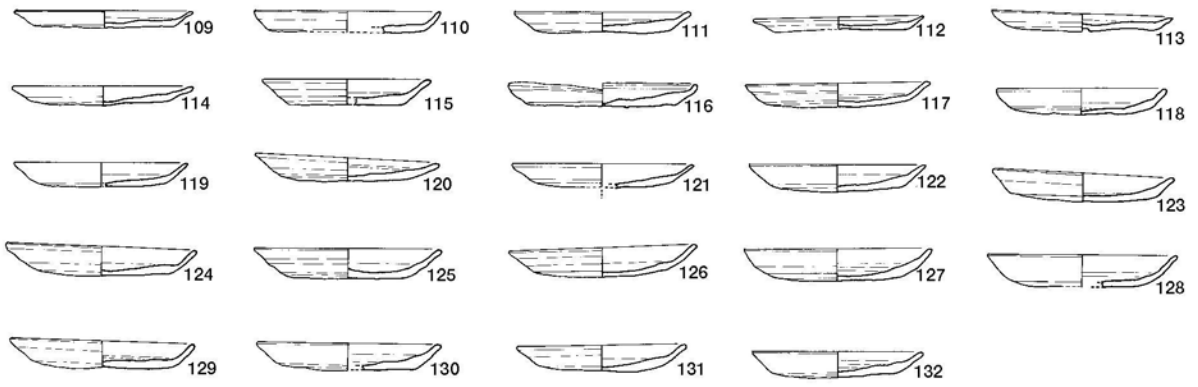


Fig.23 SK317出土土器 ① (1/4)

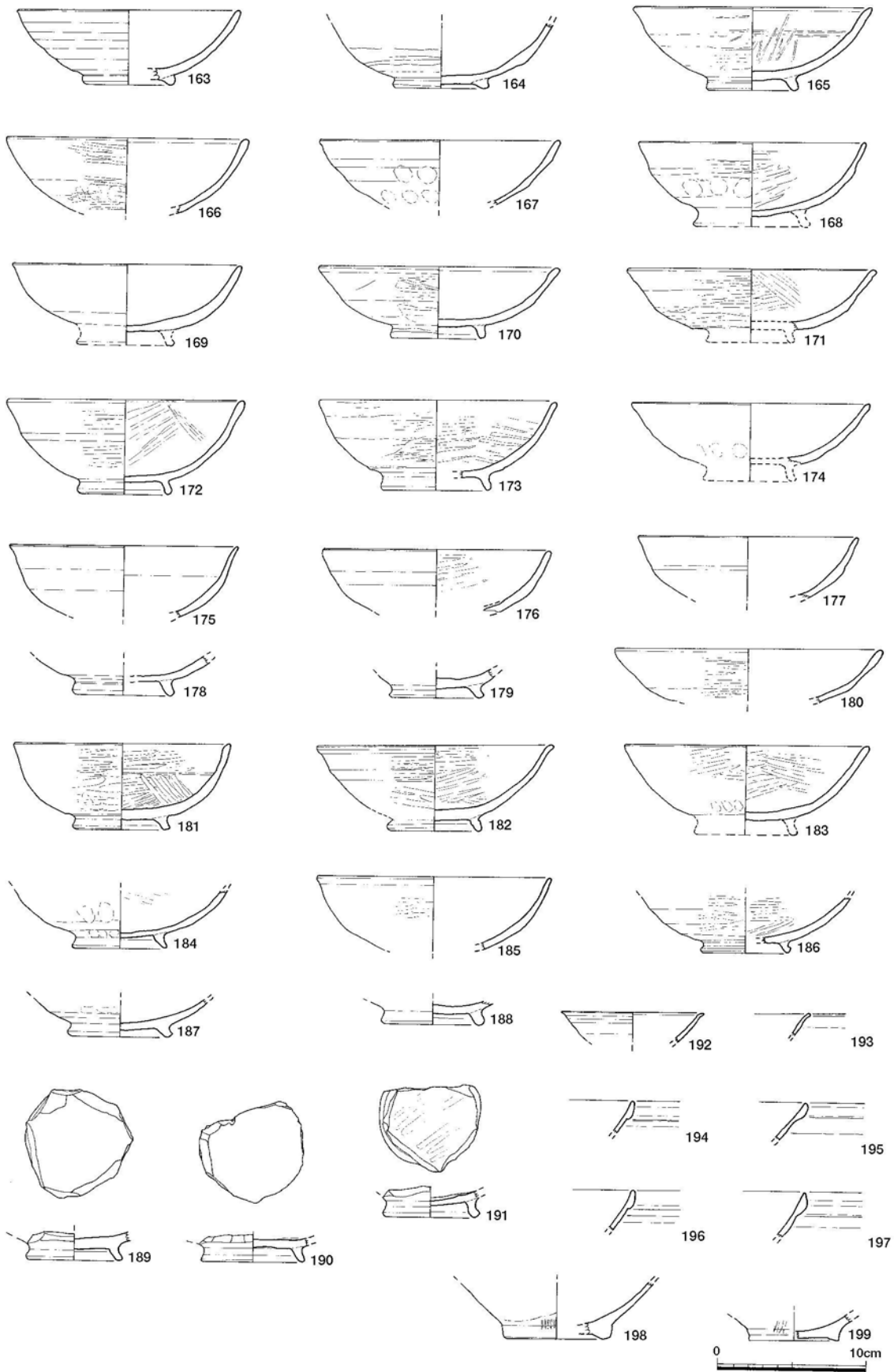


Fig.24 SK317出土土器 ② (1/4)

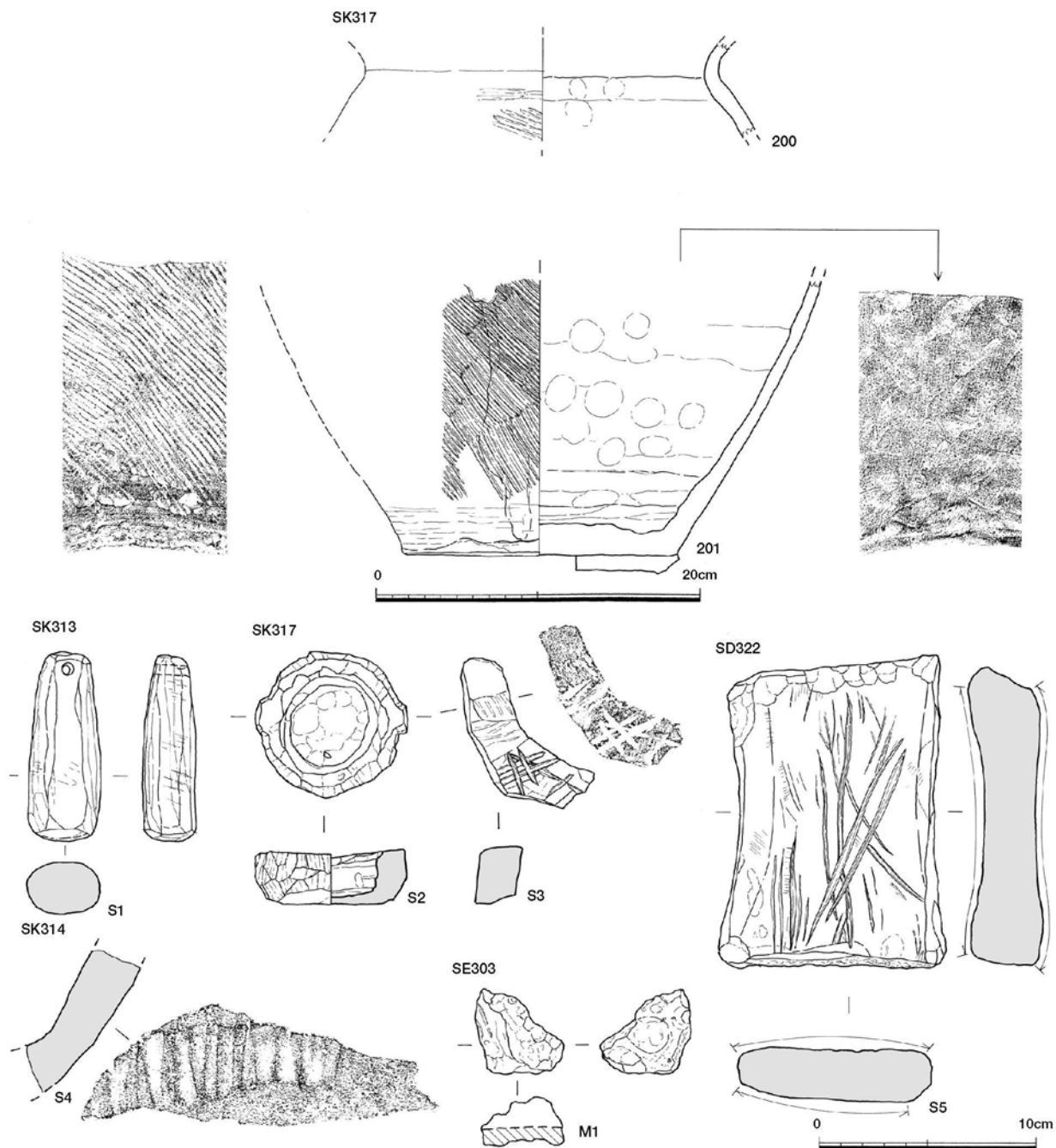


Fig.25 SK317出土土器 ③ (1/4)、SD322、SE303、SK313・314・317出土石製品 (1/3)

おり、井戸枠の可能性はあるが、井筒はない。内部には蕨のようなものがあった。埋土は青灰色粘土である。溜井のようなものかも知れない。

出土遺物(Fig.27) 加工板材と古墳時代土師器の細片が1点出土している。

W50～53はスギの板材。W50は両端が一部欠損するが、残存長72.4cm、最大幅11.5cm、厚み3.3cmを測る。右端は削り。W51は右上端を欠損する。残長61.3cm、幅12.6cm、厚み2.4cmを測る。W52は右側端部を欠損する。残存長68.2cm、最大幅16cm、厚み3cmを測る。W53は残存長79.6cm、最大幅13cm、厚み3.7cmを測る。表面は粗い削りを加える。

SK327 (Fig.20、PL.14) S-23区で検出した不整円形状の土坑。長軸長1.38m、短軸長1.23m、

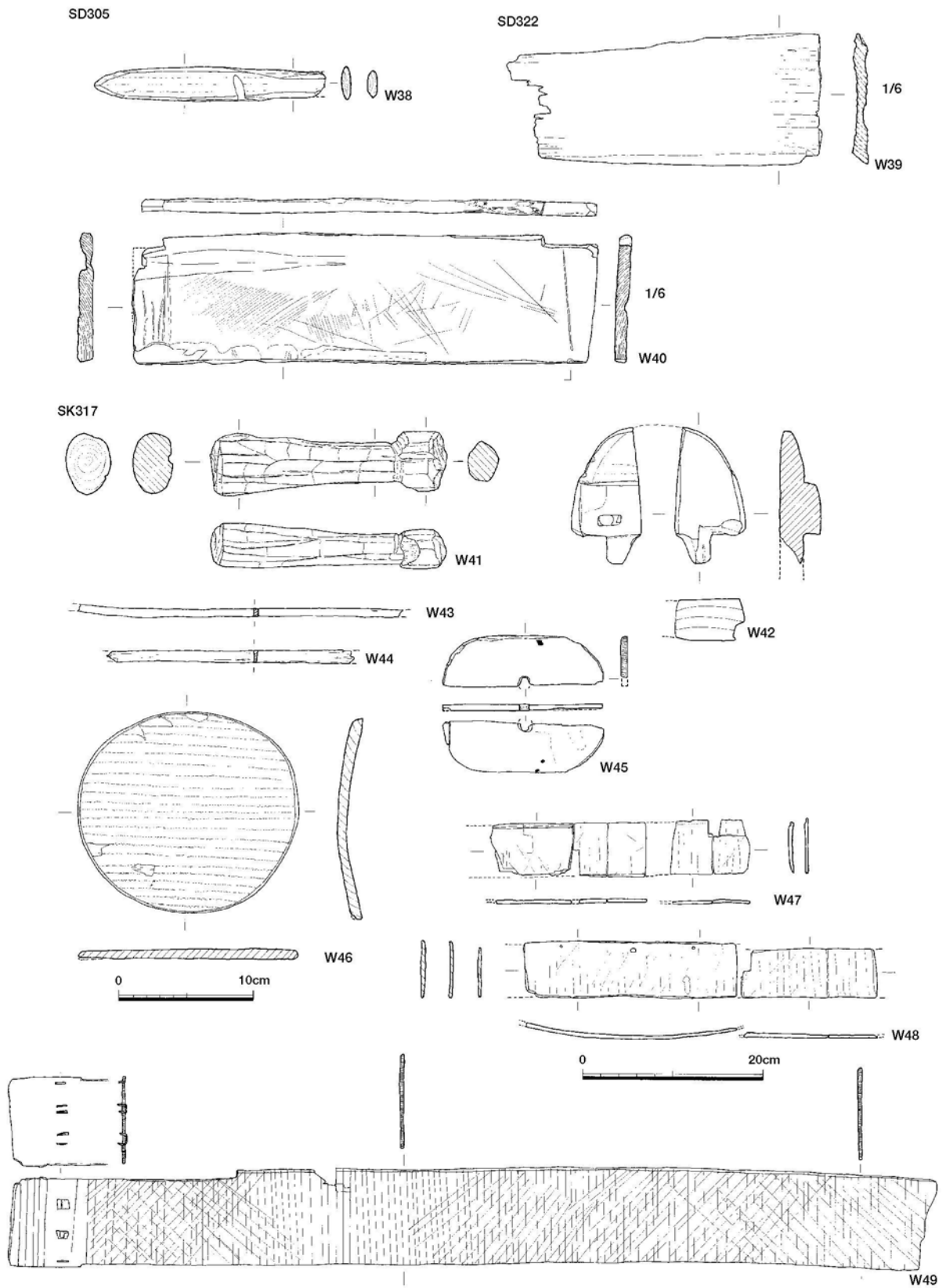


Fig.26 SD305・322、SK317出土木製品 (1/4・1/6)

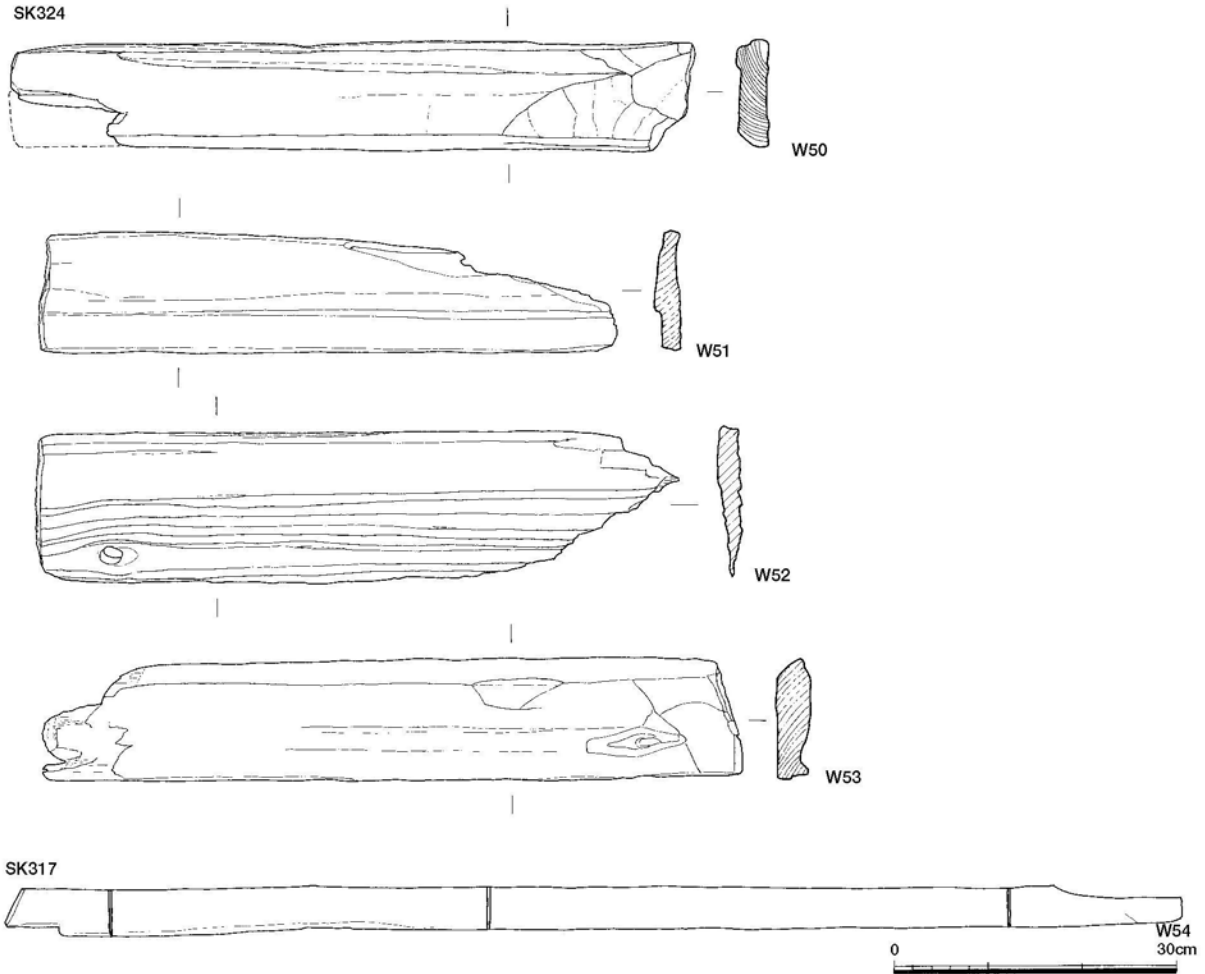


Fig.27 SK317・324出土木製品 (1/8)

深さ0.75mを測る。底面は狭まり、壁断面は逆台形を呈す。

出土遺物 図示出来るものはないが、中世土師器の鍋や黒色土器片、白磁皿、滑石製品の破片などが少量出土している。

SK329 SD322のコーナー内側で検出した楕円形の土坑。規模は長軸長1.6m、短軸長1.2m、最大深さ0.45mを測る。土層ではSD322より新しいか。埋土は上層が灰色シルト、下層は暗灰色粘土である。

出土遺物(Fig.21) 中世土師器の細片が少量出土した。

101は土師器の小皿。器表面は摩滅がひどく調整は不明であるが、外底部板圧痕がかすかに残る。

SK331 図示していないがSX330北側で検出した楕円形状の土坑。規模は1.7×1.3m、最大深さ0.4mを測る。SX330の下層で検出したので、埋土は灰色シルトを主体とする。

出土遺物(Fig.21、PL.68) 中世の土師器、黒色土器B類などが少量出土した。

102～104は土師器の小皿。口径は9.8～10.9cm、器高は1.3～1.4cmを測る。底部は回転ヘラ切りで、102・104には板目痕が残る。105は黒色土器B類の底部片。ハ字状に開く比較的高い高台が付く。底部は回転ヘラ切りで、内面はヘラミガキで、表面がやや剥離する。高台部に「十」のヘラ記号がある。

SK336・338出土遺物(Fig.21) 106・107は玩具の土製円板(瓦玉)でSK336出土。106は径

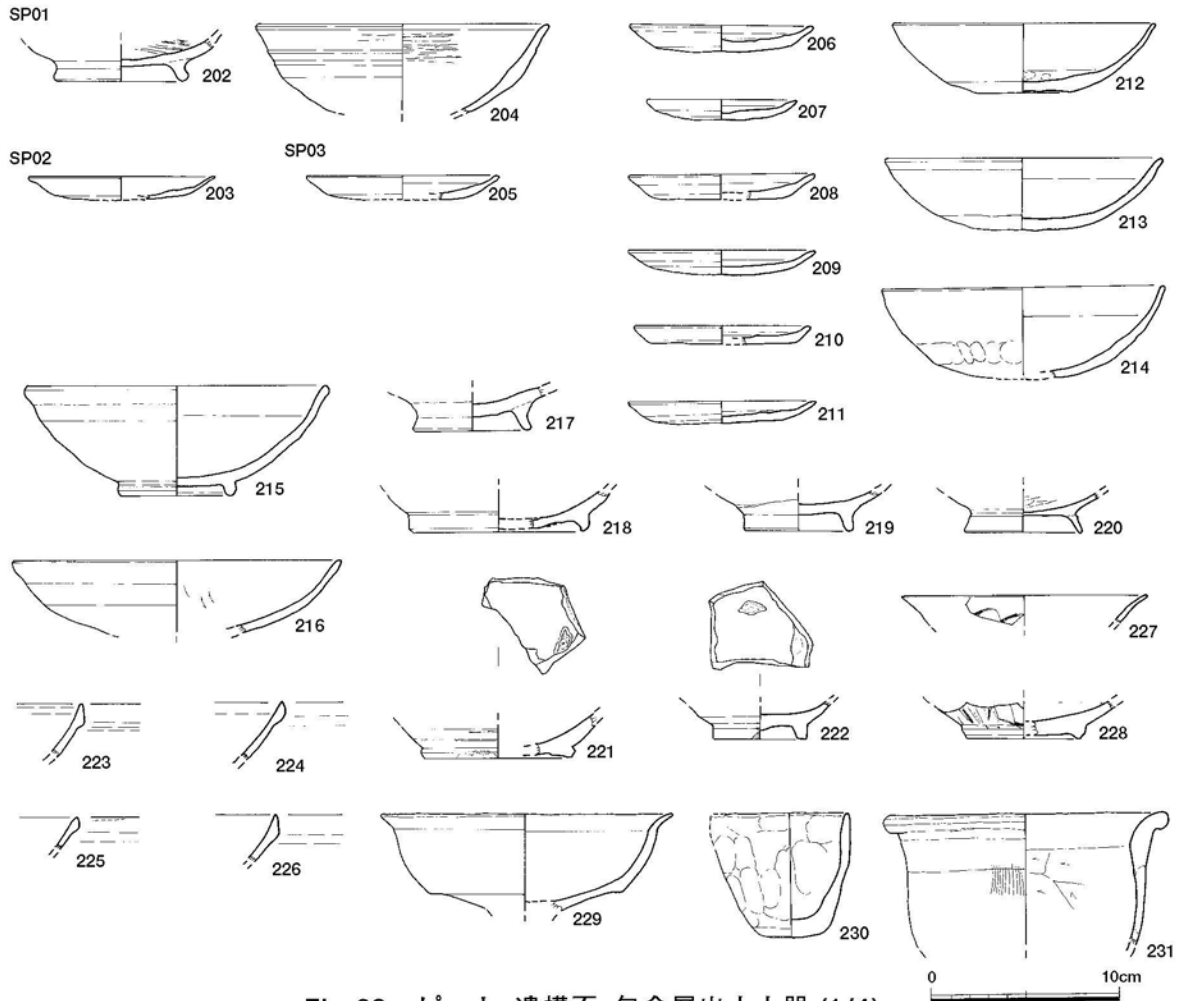


Fig.28 ピット・遺構面・包含層出土土器 (1/4)

5.7×5.5cmの黒色土器A類の底部片再利用したもの。107は黒色土器B類の高台が残る底部片を再利用したもの。径7.2×7.0cmを測る。いずれも底部周縁は打ち欠いて丁寧な作っている。108はSK338出土。黒色土器A類の底部片で細い高台が付く。器壁の摩滅がひどく調整は不明。

⑤ ピット・遺構面・包含層出土遺物 (Fig.28、PL.70)

202～205はピット出土。202はSP01出土の土師器碗底部片。体部内面はヘラミガキ調整。203・204はSP02出土。203は土師器小皿。復元口径は9.8cmを測る。外底はヘラ切り後ナデ調整。204は黒色土器B類。調整は体内外面はヘラミガキで、内面は丁寧に磨く。205はSP03出土の土師器小皿。底部は摩滅し、調整は不明。

206～231は遺構面・包含層出土。206～211は土師器小皿。206はT-29区出土。完形で、外底部はヘラ切り後ナデ調整。207はU-20区包含層出土。復元口径8cmと小さい。208～210はV-21区包含層出土。いずれも外底部はヘラ切り。208は底部が小さく口縁が開く形態。209は208より底部丸みが強く、外底部の調整はヘラ切りのちナデで、粘土巻き上げ痕が残る。210は底部が大きく、器高は1cmと低い。208・209とも体部は回転ナデ調整。210は摩滅で調整不明。211はV-22区包含層出土。外底部ヘラ切りで、粘土巻き上げ痕が残る。内底部に工具痕が残る。212～214は土師器の丸底杯。212はD-28区遺構面出土。底部はやや上底である。体部はナデ調整で内底面指押え痕が残

る。212はV-20区包含層出土。口端部は僅かに外反する。内面赤色顔料がハケ状に残る。212・213とも外底部はヘラ切り後ナデ調整。214は底が深くいかにも底を押し出したような状況を示す。全体に摩滅するが、調整は口縁内外面ヨコナデ、内面はヘラミガキか。体外面下半には指押え痕が残る。215・216は土師器碗。215はR-22区出土。直立し端部が丸く短い高台が付く。体部内面の調整はヘラミガキか。216はV-22包含層区出土。口縁部片で内面に工具痕が残る。217～220は黒色土器の底部片。217～219はA類。217はV-22区包含層出土。高台部が比較的高い。218はU-22区包含層出土。高台は比較的大きい。219はU-20区包含層出土。217とほぼ同形態。220はB類でハ字状に開く高台が付く。内底部はヘラミガキ、器壁は薄い。221・222は越州窯青磁碗底部片。221はV-20区包含層出土。蛇の目高台の底部。内底に白色粘土の目痕がある。222は高台が付き、内底には白色粘土の目痕がある。223～226は玉縁を持つ白磁碗口縁部片。いずれもV-21区包含層出土。225が広東省産のII類以外はIV類か。227はU-20区包含層出土の青磁碗口縁部か。体部にはヘラ切りの連弁か。228はV-21区出土。白磁か青白磁碗底部片。外面ヘラ切りの連弁か。229はV-29区遺構面出土。土師器高坏坏部片。口縁部が外折して開く。230はN-28区遺構面出土。小型の手捏ねの鉢か。全面指押え仕上げ。231はN-29区遺構面出土。8世紀代の土師器の小型甕であ

Tab 2 第1面井戸一覧表

井戸番号	平面形状	規模 (m)			井戸枠	井筒形状	時期	備考
		長軸長	短軸長	深さ				
SE303	不整円形	1.15	1.08	0.3		曲物		二段掘り
SE304	円形	2.09	2.09	0.8	方形		11世紀	二段掘り
SE306	隅丸方形	2.1	1.53以上	0.75	方形	曲物		三段掘り
SE309	円形	0.69	0.63	0.26		曲物	10世紀	
SE311	円形	1.33	1.25	0.33				二段掘り
SE312	楕円形	0.94	0.7	0.34		曲物		
SE313	楕円形	1.08	1.0	0.48		曲物		二段掘り
SE315	方形	1.40	1.26	0.47		曲物		
SE318	不定形	2.57	2.46	0.7		曲物	11～12世紀	三段掘り
SE320	円形	1.70	1.68	0.27		曲物	12世紀	二段掘り
SE321	長楕円形	2.7	1.83		井桁			
SE325	不整円形	1.35	1.35	0.41		曲物		
SE334	不整円形	2.11	2.05	0.8	方形			二段掘り
SE339	楕円形	1.76	1.43	0.45		曲物	11～12世紀	
SE408	不整円形	0.85	0.6	0.13		曲物		
SE409	不定形	1.4		0.18		丸木		

3 第II面の調査

1) 調査の概要

第II面では古代(8~9世紀頃)の水田面と、それを切っている河川流路跡を検出した。水田面は調査区東側から南側にかけて、調査区の約2/3の範囲で検出した。各水田は縦横の直線的な畦畔で四角形に区画されており、条里地割をよくとどめている。調査区中央には坪境になる大畦畔が十字に交差し、大畦畔の幅は場所によっては1.0m以上になる。

調査区の西北側で検出した河川流路跡では、水田面との境に、木杭を列状に打ち込み横木を組み合わせた構築物が、調査区を斜めに縦断しながら100m以上の長さにわたって検出された。河川流路の流れの向きから考えて、これらは護岸杭列と堰である。護岸杭列に引っかかった状態で人形・斎串などの木製祭祀具が10点程度出土しており、この場所で律令的祭祀が行われたと考えられる。

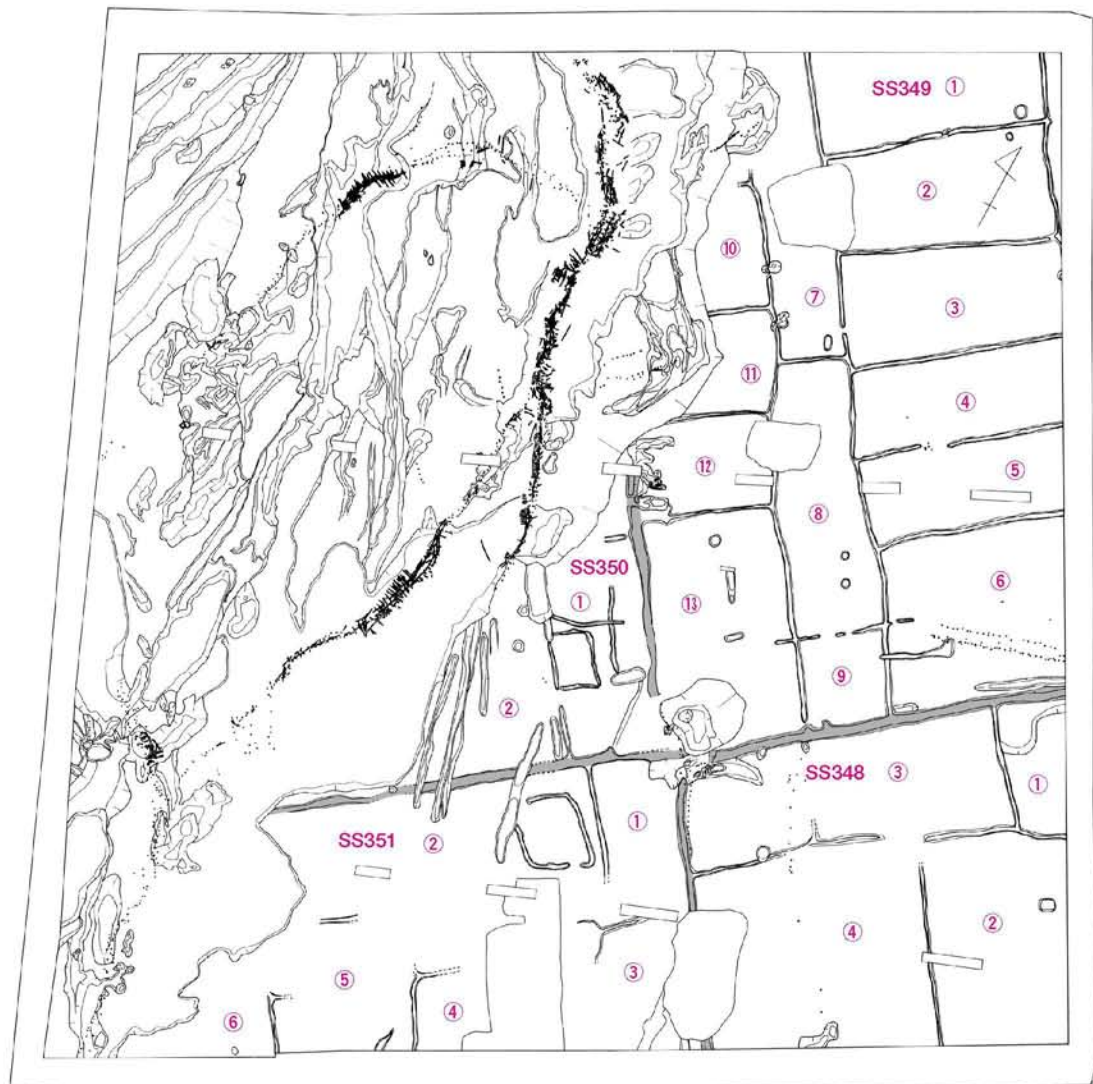


Fig.29 第II面水田配置図(1/750)

2) 遺構と遺物

①水田 (SS)

水田面については南接する前年度の第5次調査区で条里地割にのった水田面が検出されていたので、その続きを探した。重機で第I面以下の土(砂層が主体)を剥いでいくと、白～灰色砂のなかに暗灰色～暗褐色シルト質土の畦畔が浮かび上がってきた。畦畔の位置・方向が予想できたため、畦畔の検出は比較的容易であった。その後、畦畔の検出に注意しつつ人力で掘り下げを行った。畦畔は全体的に残りがよかったが、西南部のSS351付近では土が分かりにくく一部しか検出できなかった。このSS351部分の水田面は、他所より標高がやや高いので、他の部分よりも新しい時期のものである可能性がある。

水田は条里地割の様相をよく留めており、個々の水田は直交する縦横の直線的な畔によって大小の長方形に区画されている。縦横方向に大畦畔が各1本検出でき、これらは条里の坪境にあたりと考えられる。この大畦畔によって、水田を大きく4つに分けて遺構番号をつけ、その中での小区画ごとにさらに細分する番号をつけた(Fig.29、Tab.3、PL.15～21)。

出土遺物 (Fig.30) 1～7は水田SS349から出土した須恵器である。1～5は坏身である。高台は断面四角形で底部と体部の境に稜をもつものが多い。1は口径12.6cm・器高3.4cm・底径8.2cm、2は口径13.8cm・器高3.8cm・底径9.6cm、4は口径15.6cm・器高5.0cm、底径9.2cmを測る。6は皿で口径18.2cm。7は高坏の坏部である。坏部は浅く端部は短く折れる。口径23.0cm。8はSS351出土の須恵器の皿である。口径14.4cm、器高2.0cm、底径12.0cmを測り、底部は回転ヘラ切り。

水田の廃絶時期 水田面から出土した遺物は、当然ではあるが非常に少なく細片がほとんどである。これらの遺物は、御笠川の氾濫により水田面上に堆積した砂層内から出土したもので、水田の廃絶時期を示す。ただ、河川の氾濫時期とは必ずしも一致せず、それより古い時期の遺物も入っている。水田面出土遺物が示す年代は8世紀中頃～後半である。一方で、水田面の北西側には畦畔と斜交する方向に護岸杭列SX395が築かれている。このことは、河川流路を検出した調査区北西部にも、元来水田が続いていたことを暗示している。その水田がある時期に河川により削られてしまい、それを防ぐために護岸施設を築造したと考えられる。水田の廃絶はたった一度起こった大規模な河川の氾濫によってもたらされたのではない。河川流路の変化により徐々に水田が侵食されていく過程で、住民は護岸施設を築くなどして水田の維持に努めたようだ。いま見る長大な護岸施設は複数回の治水工事が累積した姿のようである。河川の氾濫に悩まされながらも必死で水田の維持に努めた住民の姿を想起させる。しかし、そのような長期にわたる自然への抵抗もむなしく、やがて、

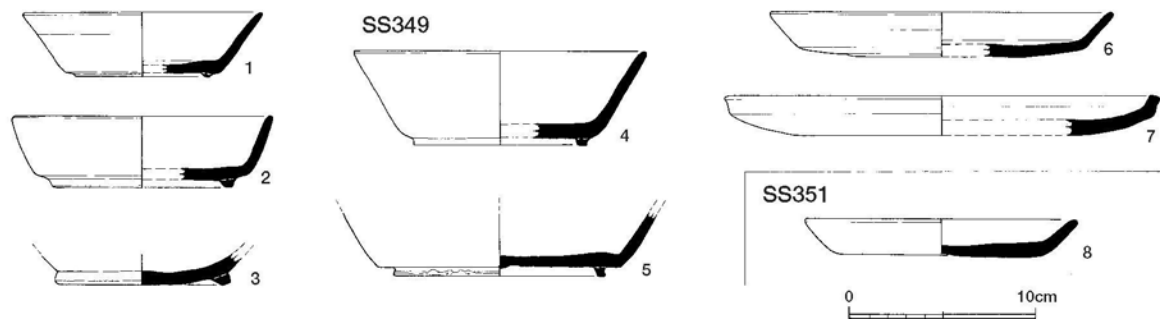


Fig.30 水田出土土器 (1/4)

水田面は厚い砂層で覆われ、住民は水田を放棄せざるを得なかった。水田を守るために築かれた護岸施設からは8～9世紀の遺物が多く出土している (Fig.37・38)。よって、水田面出土の遺物は8世紀代のものを主体とするが、水田の廃絶時期は護岸施設SX395出土遺物が示す9世紀ごろと考える。水田廃絶後は第I面に見るように、早くも9世紀のうちに井戸が掘られ、その後は集落が形成されている。

条里地割について：古代律令国家における土地管理のあり方を「条里制」と呼んでいる。「条里制」は①一町 (約109m) 方格の径溝網とその内部の半折型・長地型といった規則的な地割形態 (条里地割)、②条・里・坪といった区画を単位とする土地表示のための呼称 (条里呼称法)、③班田収授法との密接な関連、の3属性からなる。しかし、実際には、③の班田収授システムの成立よりも①・②の地割・呼称法が後出し、3つの属性を兼ね備えた「条里制」という実体は存在しないことが判明し、①条里地割、②土地呼称法の2属性をもった土地表示システムを「条里プラン」とも呼んでいる (金田章裕1995「条里制」『日本古代史研究事典』東京堂出版)。

本調査区が所在する福岡平野については、日野尚志氏によって、福岡条里区と呼ばれる地割が復元されている (日野尚志1976「筑前国那珂・席田・粕屋・御笠四郡における条里について」『佐賀大学教育学部研究論文集』第24集I)。

Fig.31は第5・6次調査で検出した古代水田の合成図である。大畦畔が縦 (南北方向) に1本、横 (東西方向) に2本確認できる。東西方向の2本の大畦間の距離はほぼ一町 (約109m) を測る。地割の方位は磁北から35°西偏 (N-35°-W) し、日野氏が復元された条里の方位 (37°西偏) とほぼ一致する。よって、今回検出した大畦は条里地割の坪境と考えられる。同じ条里地割は、これまで周辺ささいの雀居遺跡、下月隈鳥越遺跡等における発掘調査でも確認されている。坪内の地割 (半折型・長地型) については、不明確である。

Tab.3 第II面水田一覧表

遺構番号	形状	南北(m)	東西(m)	面積(m ²)	遺構番号	形状	南北(m)	東西(m)	面積(m ²)
SS348 ①	横長方形?	13.0	(6.5)		SS349 ⑩	?	12.0	(6.5)	
SS348 ②	?	(20.5)	(14.0)		SS349 ⑪	横長方形?	9.5	(7.5)	
SS348 ③	横長方形	10.0	31.5	315	SS349 ⑫	横長方形	9.0	13.0	117
SS348 ④	?	(21.0)	(22.0)		SS349 ⑬	縦長方形	22.5	13.5	304
SS349 ①	横長方形	(10.0)	20.0		SS350 ①	縦長方形	21.0	9.0	189
SS349 ②	横長方形	10.5	21.5	226	SS350 ②	縦長方形?	(20.5)	(16.5)	
SS349 ③	横長方形	10.0	21.5	215	SS351 ①	縦長方形	15.5	7.5	116
SS349 ④	横長方形	8.5	(21.0)		SS351 ②	?	(11.0)	(32.5)	
SS349 ⑤	横長方形	8.5	(20.5)		SS351 ③	?	(12.0)	(9.0)	
SS349 ⑥	横長方形	16.5	(18.0)		SS351 ④	?	(7.0)	(18.0)	
SS349 ⑦	横長方形	(30.0)	6.5		SS351 ⑤	?	(13.0)	(13.5)	
SS349 ⑧	横長方形	26.5	8.0	212	SS351 ⑥	?	(10.0)	(15.0)	
SS349 ⑨	正方形	8.5	8.0	68					

※東西に長い長方形を横長方形、南北に長い長方形を縦長方形とする。

※() 付きの計測値は残存長である。

第6次調査区



第5次調査区

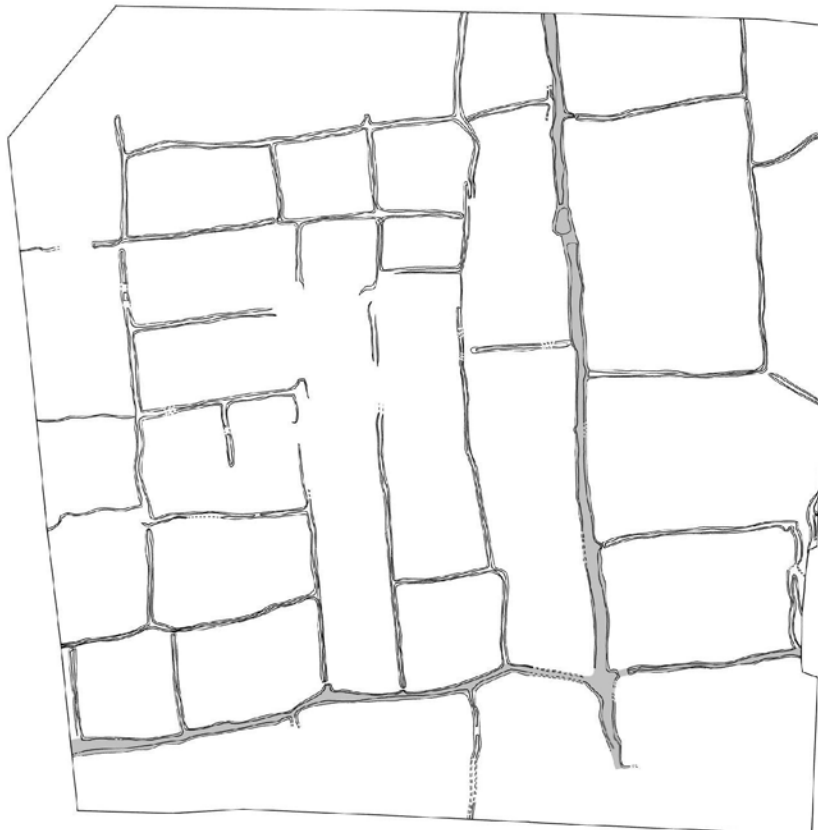


Fig.31 第5・6次調査古代水田面合成図 (1/800)

②護岸杭列・堰（SX）

河川流路部分には砂が厚く堆積しており、航空写真（図版編巻頭図版4）を見れば幾筋かの流路が重複しているのがわかる。しかし、現場においてそれを掘り分けるのは至難で時間的にも余裕がなく、全体を一緒に掘り下げた。水田面と流路跡の境に構築された杭列は、非常に長く100m以上にわたり残存しており構造も複雑であった。したがって、砂を少しずつ除いて全体が出た杭を平板測量で図化し、記録が終わった杭をはずしてその下の杭をまた掘り出していくという作業を、何度も繰り返しながら記録を行った。そのため、この部分の調査は水田部で第Ⅲ面の調査に入ってから継続して作業を進め、第Ⅳ面調査に入る前によく終了した。

検出した杭列は河川の流路の向きから判断して、護岸杭列および堰になると考えられる（Fig.33）。以下に、護岸杭列・堰について報告する。

護岸杭列SX395（Fig.33～36、PL.22～29）

調査区の北辺中央から西南隅にかけて弧状に100m以上の長さで続く。途中で二又に分かれている。護岸杭列は斜め方向に打ち込んだ縦杭多数とその上部に水平方向に寝かせた横木とから構成され、部分的には粗朶を検出した。縦杭は先端を尖らせて地盤の粘土に打ち込んでいる。河川流路の砂の中から検出したわけだが、地盤の粘土層が抉られずに残っている部分では、例えば調査区南西隅のように、縦杭が1、2列並ぶだけの簡単な構造である。一方、基盤粘土層が深く抉られた部分では、おそらく強い水流に対抗するためであろう、縦杭と横木を何重にも組み合わせる強固な構築物をつくりあげている。

杭列の構築法はどうか。Fig.34・35に調査区北端の部分A、部分Bの構築過程復元図を示す。複雑に杭が乱立する部分も、よく観察すると、ある基本的構造（単位）があって、それを重複させていった結果、現在見る複雑な姿になったようである。護岸杭列の基本的構造（単位）は、横木を間に挟みこむように、前後から縦杭群をX字型に交差するように打ち込み、痕跡はないが、おそらく横木と縦杭を蔓で結びつけるなりして固定したのであろう。そして、この単位を、横に並べていき結果的には100m以上の長さの護岸杭列を形成する。また、複雑な部分は、この単位を前後に数組重ねて頑丈な護岸を構築している。Fig.34に構築材として修羅が転用されているが、ほかにも建築部材の転用も見られる。樹種分析の結果、樹種も多種多様で使えるものは何でも使っている。

土層図（Fig.36）に示したとおり、縦杭は先端を尖らせて、硬い粘質土層へ深く打ち込んでいる。縦杭ははじめから斜めに寝かせていたようだ。また、複数単位が重複した部分は、各単位で層序を異にしており、築造に時間的幅を持つが、どれ程の時間差があるのかは明らかにしえない。SX395全体を大きく見ると、途中で杭列が二又に分かれているので、これに関しては流路の変動に伴い護岸杭列を造り替えたと考えている。

岡山県岡山市の津寺遺跡で同様の護岸杭列が検出されている。そこでは「盛土を施した後にそこに杭を打ち込み、さらに盛土を行うという工程が繰り返されている」（『津寺遺跡2』1995、79頁）ことが判明している。今回の調査では盛土の観察をし損ねたが、津寺遺跡と同じような盛土も行われていたであろう。

護岸杭列内および付近から出土した遺物は9世紀代が主体で、8世紀の遺物もかなり含む。護岸杭列の築造は9世紀頃と考えている。人形、斎串等の祭祀に関する木製品が出土した点が注目される。木製祭祀具に関しては、3)にて後述する。

W V U T S R Q P O N M

29
28
27
26
25
24
23
22
21
20

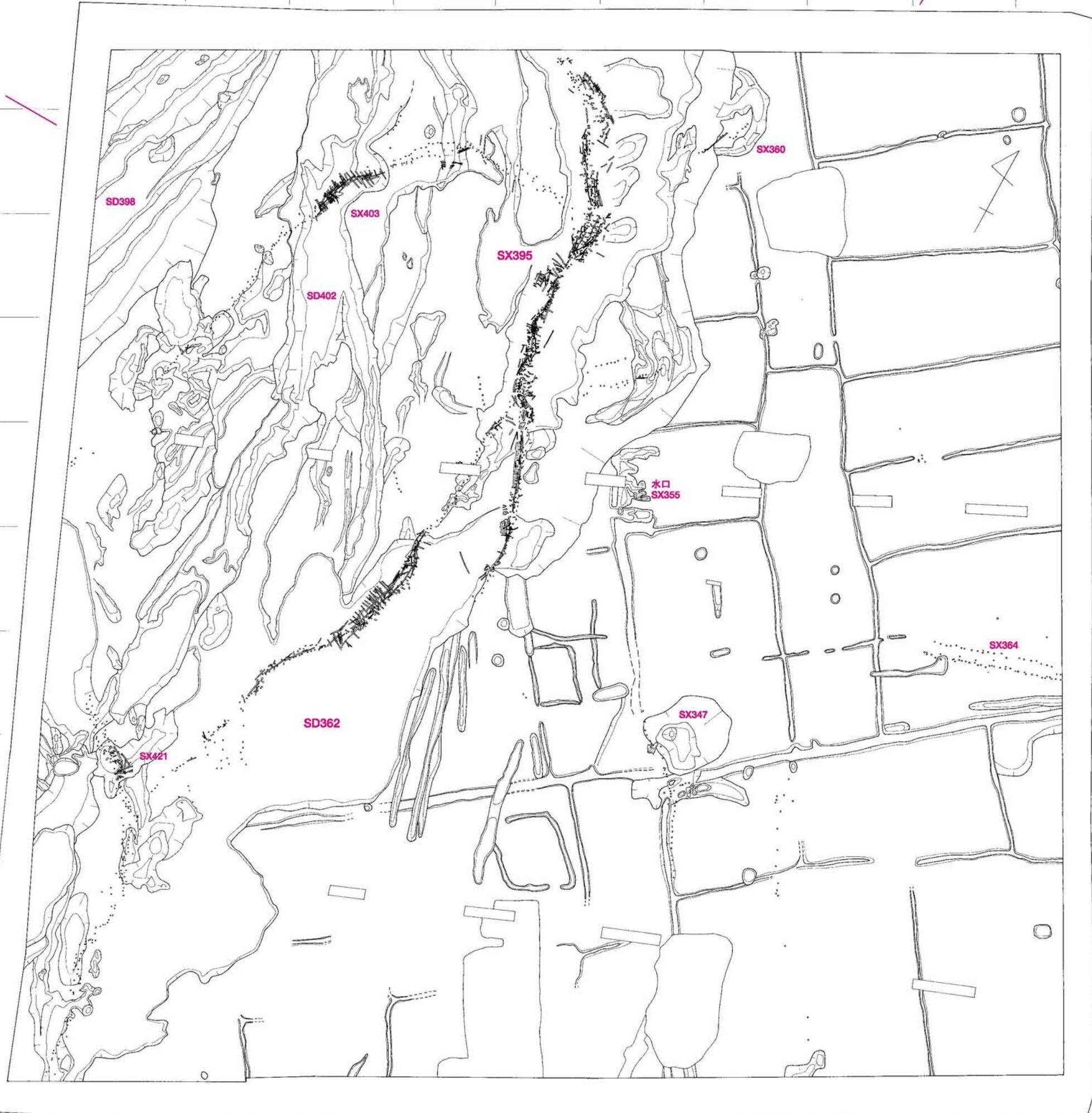


Fig.32 第Ⅱ面遺構全体図 (1/400)

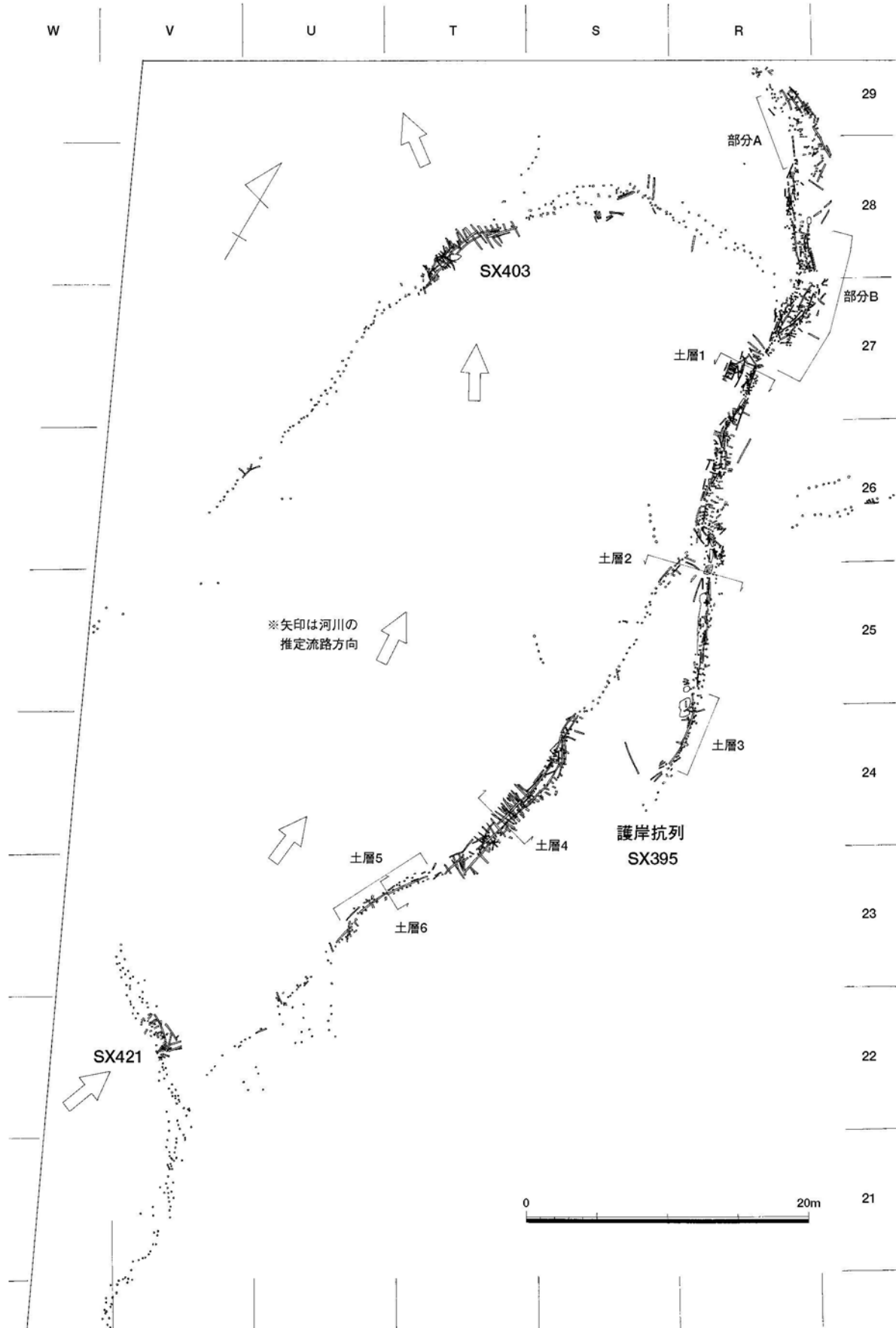


Fig.33 堰・護岸杭列平面図 (1/400)

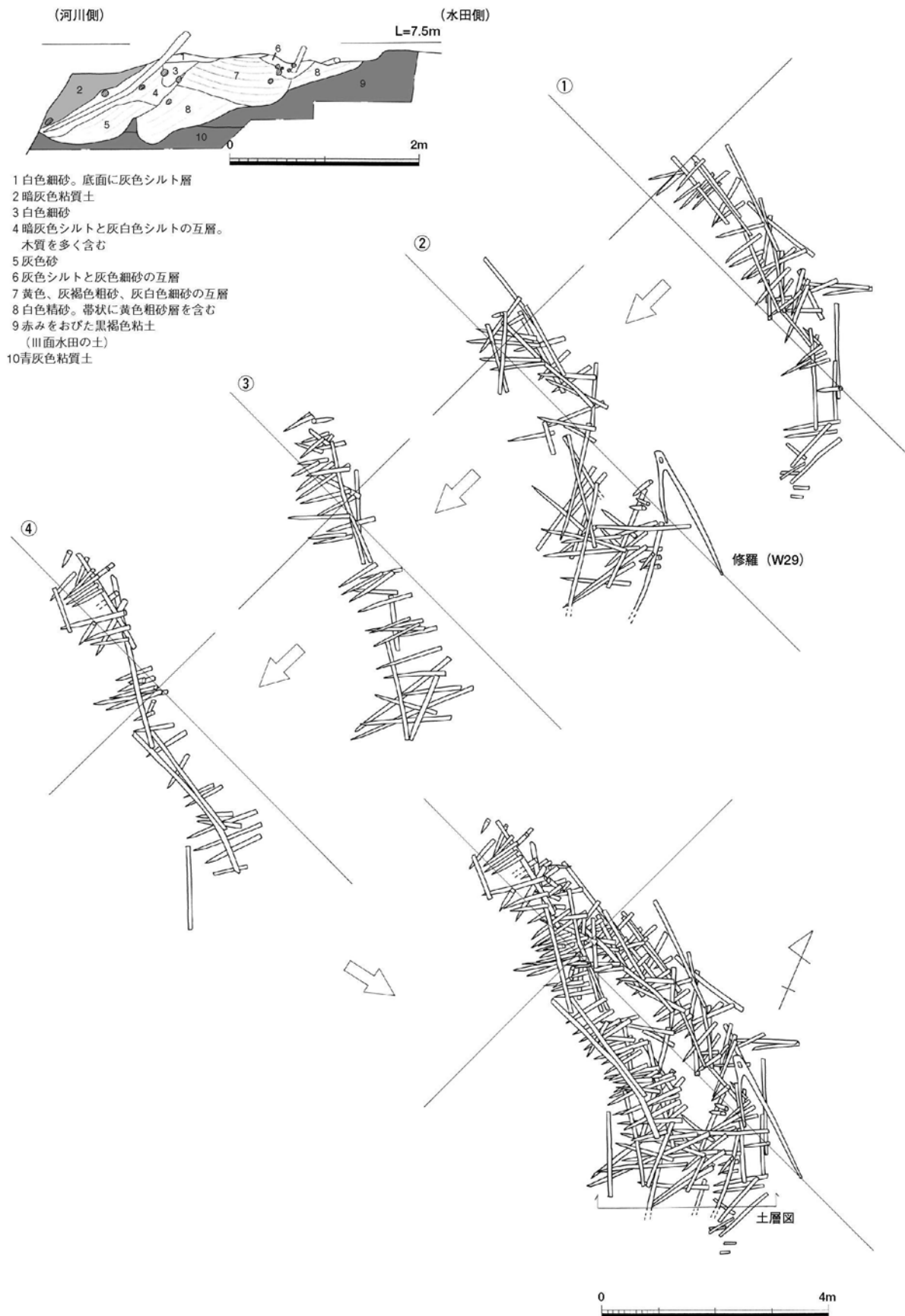


Fig.34 SX395部分A築造過程復元図 (1/100・1/60)

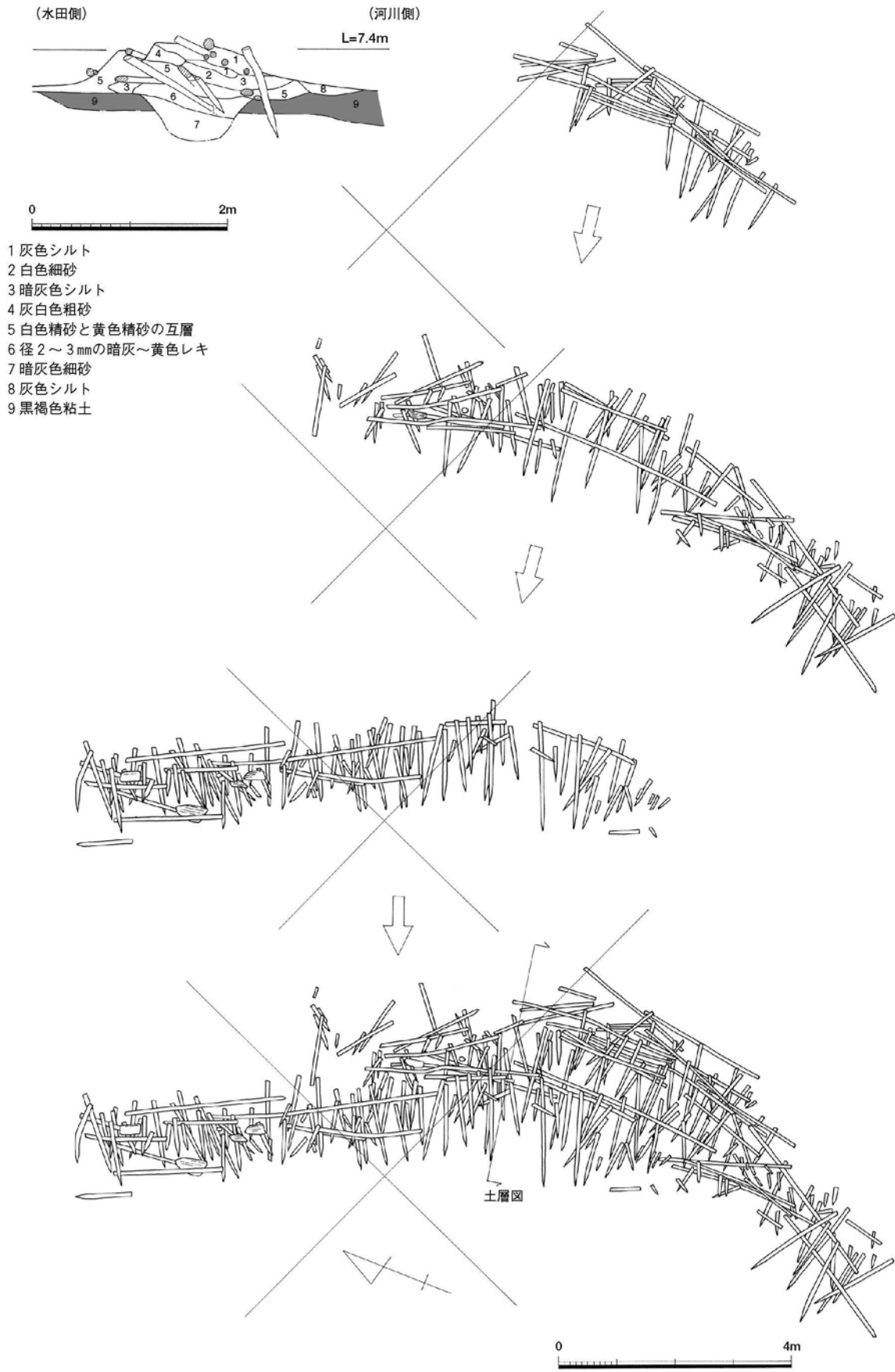


Fig.35 SX395部分B築造過程復元図 (1/100・1/60)

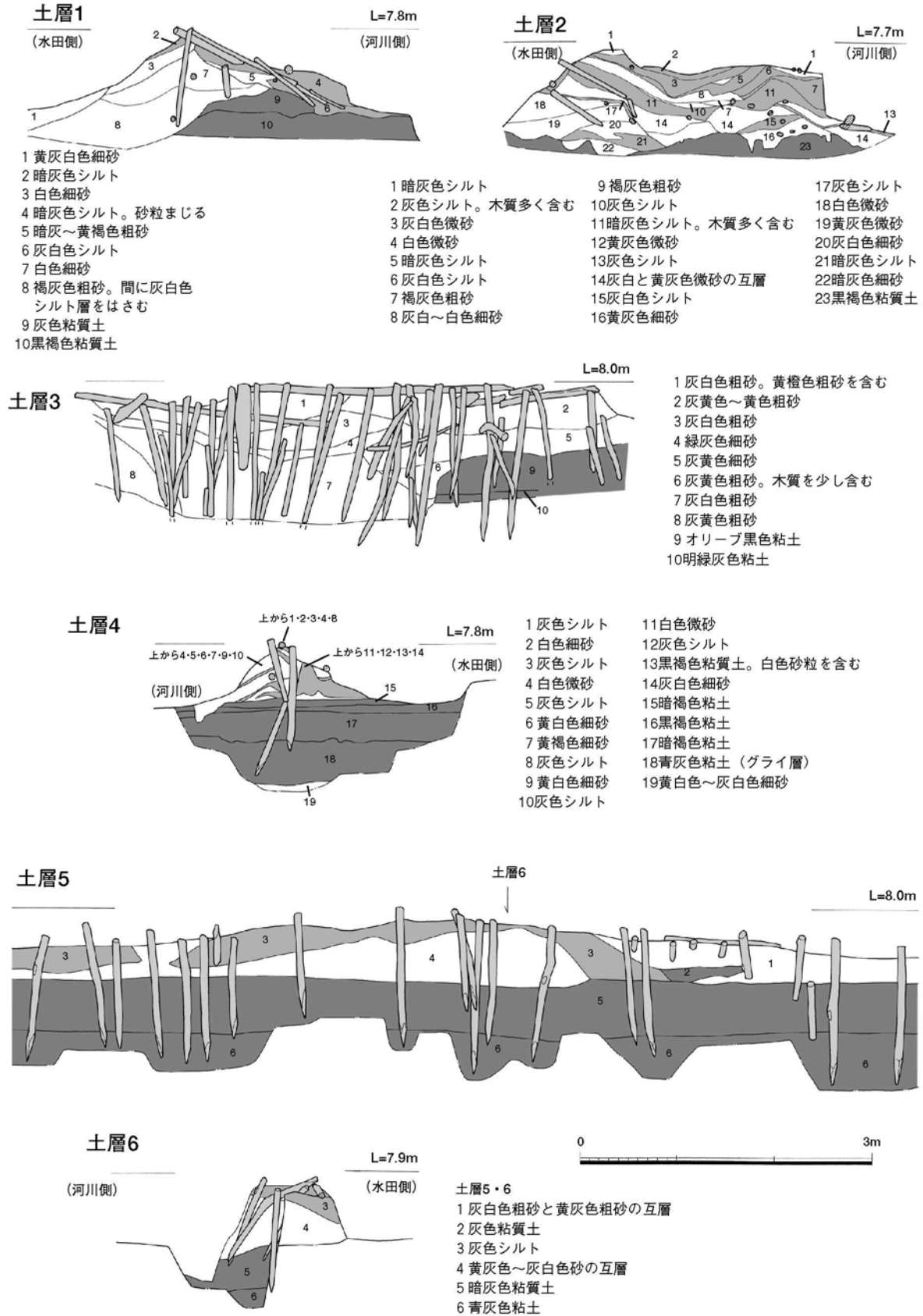


Fig.36 SX395土層図 (1/60) ※各土層の位置はFig.33に示す

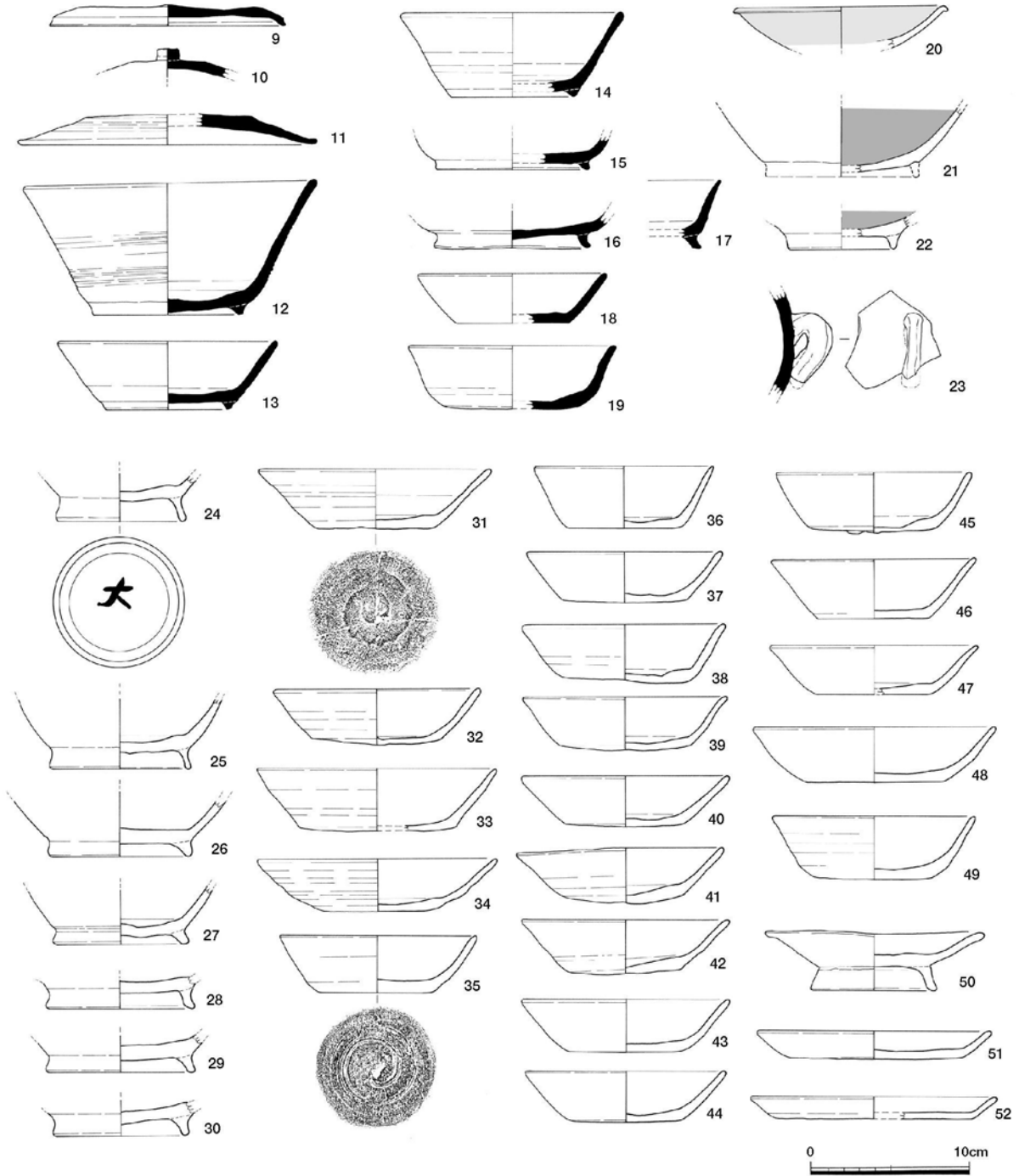


Fig.37 SX395出土土器 ① (1/4)

出土土器 (Fig.37・38、PL.74) Fig.37の9～19は須恵器。9～11は坏蓋である。つまみは径が小さく円筒状を呈する。12は大型の坏あるいは鉢である。ほぼ完存し、口径18.3cm、器高8.4cm、底径9.4cmを測る。13～17は高台付の坏、18・19は無高台の坏である。高台は底部端縁に付き、丸みを帯びるものもある。20は緑釉陶器。復元口径13.4cmを測り、口縁端部は外反する。胎土は灰白色を呈し焼成は軟質、釉調はオリーブ灰色。長門産であろう。21・22は内黒の黒色土器である。23は須恵器で耳状の取手がつく。24～52は土師器である。24～30は高台付坏または椀である。高台は低いものが多い、体部下半は内湾気味。24は墨書土器で底面に「大」と墨書する。31～49は

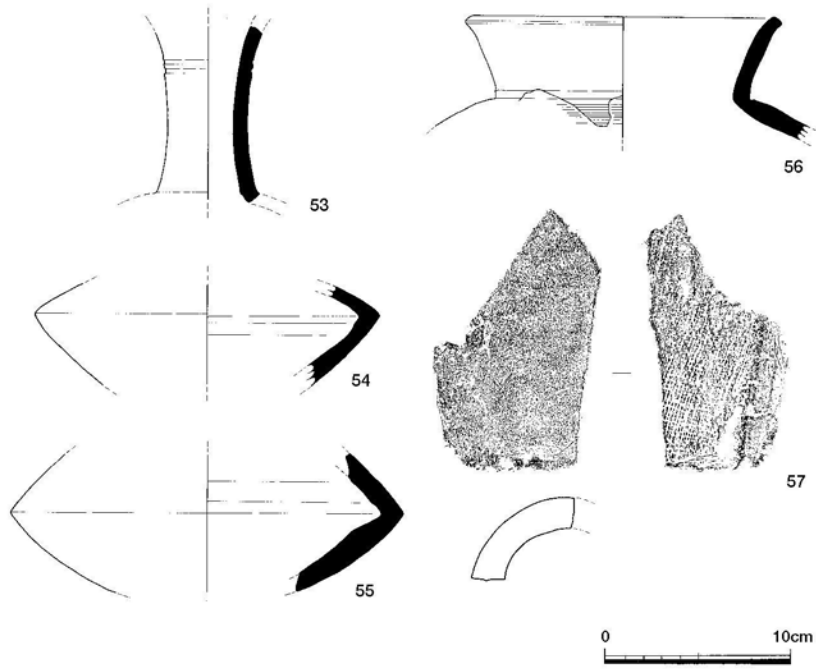


Fig.38 SX395出土土器②(1/4)

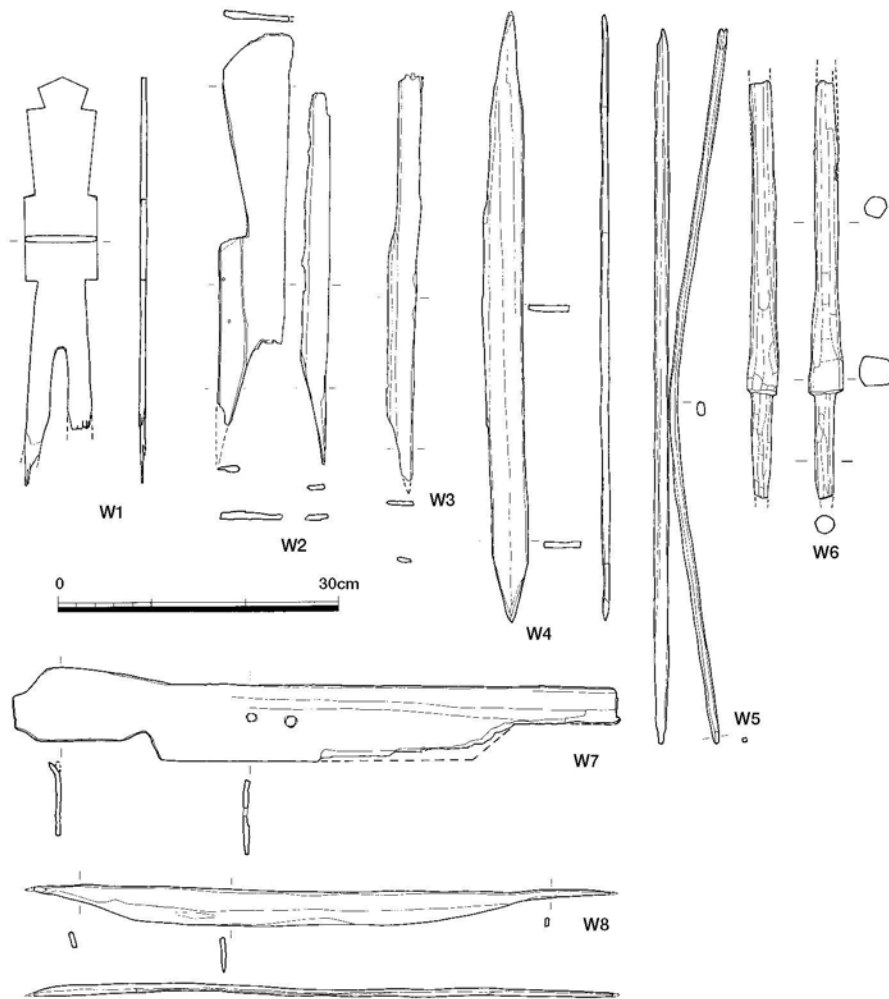


Fig.39 SX395出土木製品①(1/8)

無高台の坏である。底部はいずれも回転ヘラ切りで、口径11.2～15.2cm、器高3.1～4.0cmを測る。器壁が薄くロクロナデ痕跡が明瞭な一群(31～34)と、そうでない一群とがある。50は高台付皿で口径13.7cm、器高3.8cmを測る。51・52は皿である。

Fig.38の53～55は須恵器で葉壺形の壺である。56は須恵器の甕である。57は丸瓦である。

凸面は無文、側面が遺存するが、内側半分が分割断面、残りが破面である。SX395出土遺物は、杭列築造時の盛土に含まれた土器、築造後に杭列に引っかかった土器を含んでおり、杭列自体の築造も継続的に行われているので、時期的なばらつきをもっている。供膳形態の土器を見ると土師器のほうが須恵器よりも

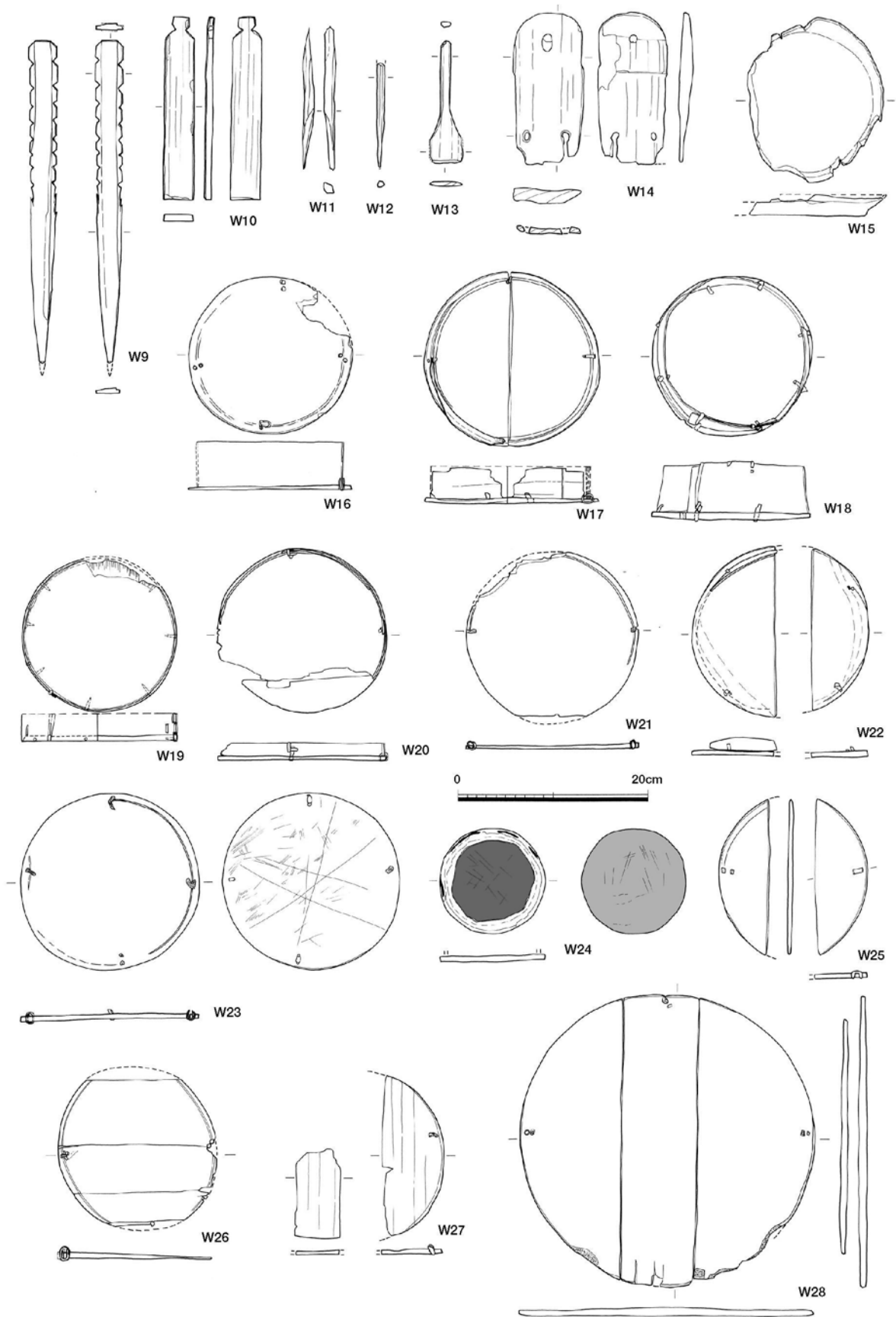


Fig.40 SX395出土木製品 ② (1/6)

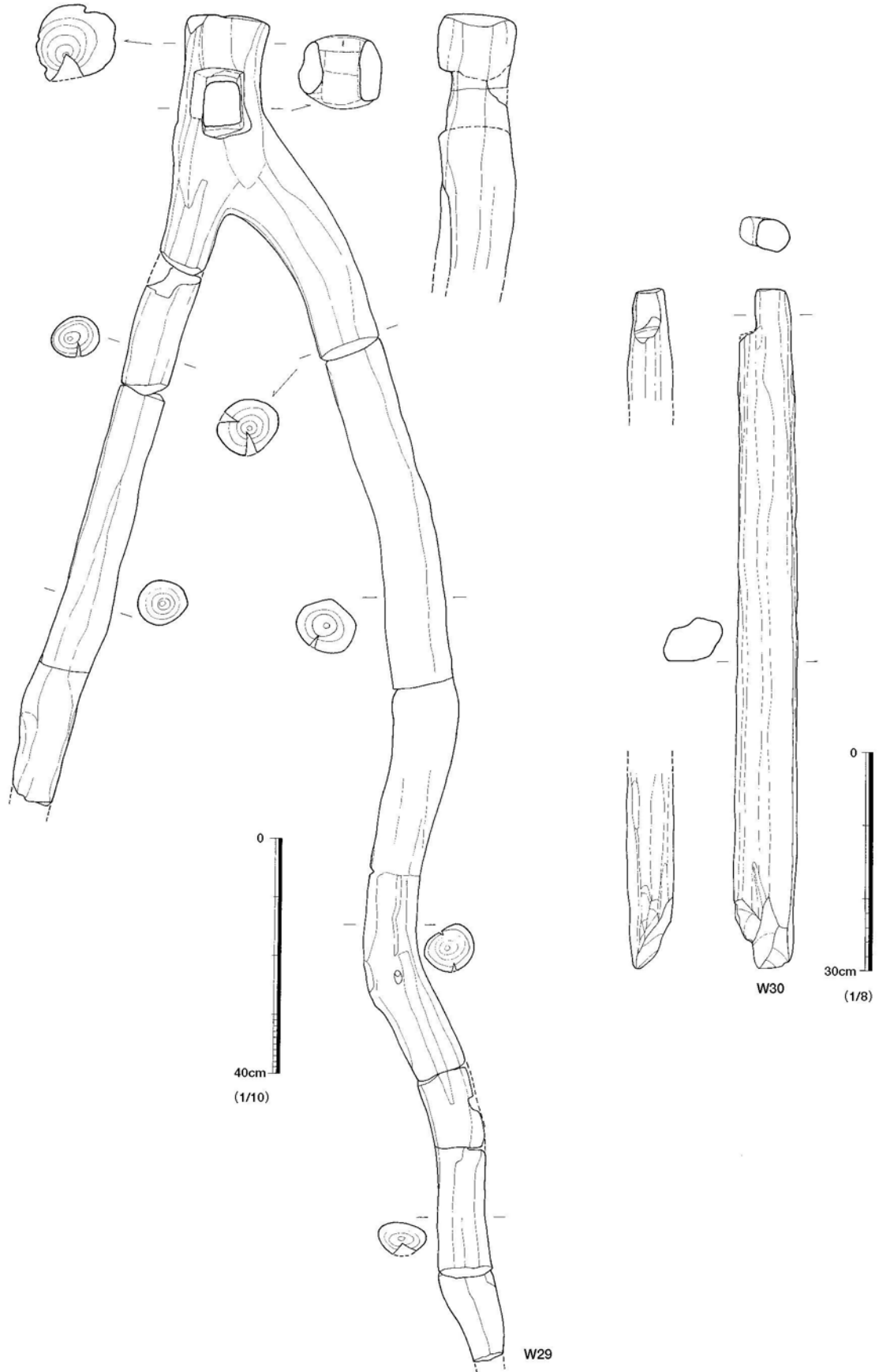


Fig.41 SX395出土木製品 ③ (1/10・1/8)

相当に多いこと、内外両面を燻した黒色土器B類や瓦器を含まないことから、護岸杭列の築造時期は9世紀代と考えている。

出土木製品 (Fig.39~41, PL.77・78) 注目すべき遺物として、人形、齋串をはじめとする祓えの儀式に関する祭祀遺物が出土している。W1は人形である。肩・腰を切り欠き頭部にも切り欠きを入れ烏帽子を表現する。残存長43.5cm、幅7.7cmを測る。材はヒノキでR-26区出土。W2は大型の人形か。残存長41.8cmを測る。切り欠いて肩を表現し、そこに縦に2箇所の穿孔がある。ただ、股がすぐ下にあるので、人形とすると胴が極端に短い。材質はスギでR-27区出土。W3もW2と同じ位置で出土したもので、本来同一の遺物だと思うが、うまく接合できない。W4は齋串である。両端を尖頭に削っている。材質はスギで、長さ64.8cm、幅4.4cmを測る。W1の人形と同じくR-26区から出土。W5は弓形木製品である。長さ75.6cm。弓形に湾曲し、両端を細く加工している。材質はスギ、R-26区出土。W6は銚形の木製品である。断面は円形で残存長33.3cmを測る。S-25区から出土。W7は馬形・鳥形の類か。胴部に横並びに2つの穴を穿孔する。この図を左が上になるよう縦に向けると、烏帽子をかぶった人の頭にも見え、あるいは、人物の横向きの姿を写した横人形であろうか。長さ64.6cm、幅8.1cmを測り、材質はスギ。S-25区出土。W8は齋串か。両端部を鋭く削り出す。長さ61.3cm、幅3.9cmを測り、材はヒノキ、R-27区出土。W9は齋串である。薄板の上端から中央にかけて両側に8つずつ三角形の切込みを入れ、下端は尖らせる。両側のギザギザがしっかり作られているので、これと竹の先を細かく割って束ねたものを擦り合わせて音を出す「ささら子」として使われた可能性もある(金子裕之1996「まじないの世界I」『日本の美術5』)。残長32.7cm、幅4.0cmを測り、材はスギである。W10は荷札木筒。墨書痕跡は認められない。長さ19.1cm、幅3.1cmを測り、板材はヒノキである。S-26区出土。W11・12は出状木製品である。いずれも端部を尖らせており、齋串の可能性もある。材質はスギ。W13は篋状木製品である。残長12.8cmで材はスギ。W14は下駄である。残長15.8cm、幅7.3cmと小さく小児用か。板材はスギでR-26区出土。W15は挽き物の皿である。材はサクラ属でR-27区出土。W16~28は曲物である。直径は11.0~30.9cmで、20cm弱のものが多い。底板・天板と側板との接合は樹皮で綴じるものを主とするが、木釘を用いたもの(W19)もある。W24は内面に黒漆、外面に赤漆を塗る。ほとんどが、祭祀具と同じくR-26・27区で出土した。

Fig.41のW29は修羅である。自然木を利用し、その又部に方形孔を穿っている。材質はユズリハ属である。W30は建築部材である。端部を加工している。材はアワブキ属。護岸杭列にはW29・30のような転用材も用いられている。

堰SX403 (Fig.42, PL.30・31) 護岸杭列SX395から直交方向に2列の杭列が弧状をなして延びており、その途中、河道底が深く抉られた部分(T-28区)に頑強な構築物がつくられている。推定流路方向に直交しているので堰であろう。水田への導水施設などの関連遺構は見つからなかった。堰は横木2本と縦杭を組み合わせた構造である。杭列は川下側へ大きく倒れていた。ここでも人形など木製祭祀具が出土した。

出土遺物 (Fig.43・44, PL.79) 58は土師器の坏である。口径14.0cm、器高3.2cmを測り、底部は回転ヘラ切り。W31は人形である。残長62.9cm、幅11.0cmで、材はモミ属。肩をわずかに切り欠くが腰の切り込みはない。W32は齋串か。W33も木製の形代である。馬形のようにも見えるが、図右端部の細い断面に切れ目を入れて、その間に板を挟めるようになっているので、鎌形の柄部とも考えられる。W34は漆塗りの盤で、材はヒノキである。W35~37は曲物。W37は長方形で大き

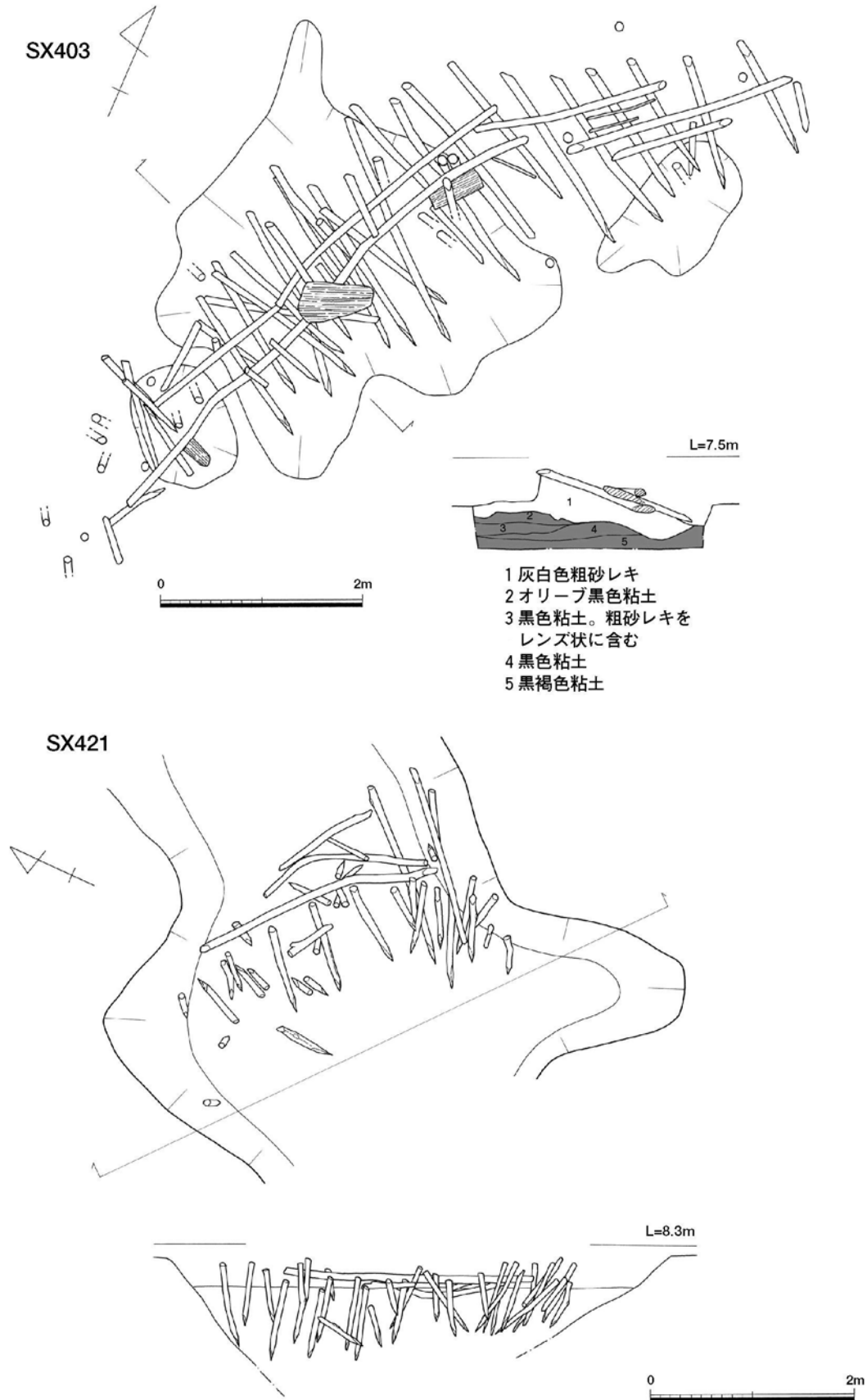


Fig.42 堰SX403・421(1/60)

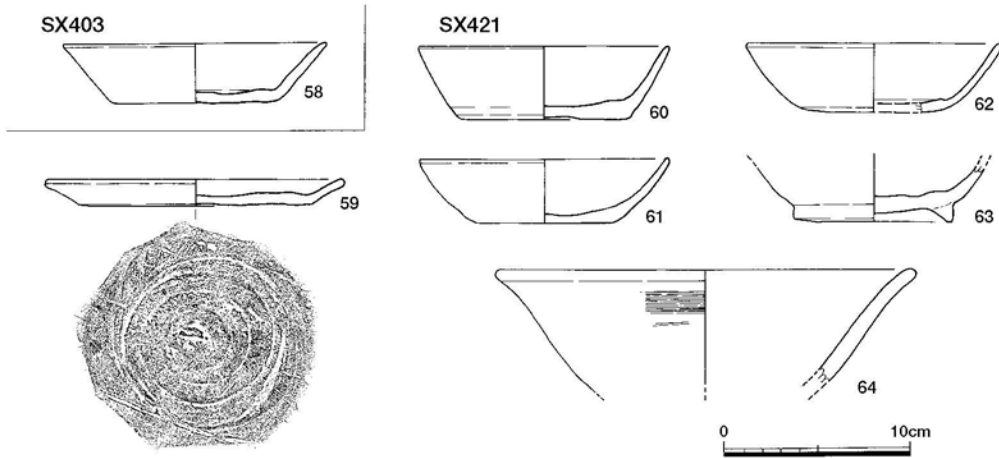


Fig.43 SX403・421出土土器 (1/4)

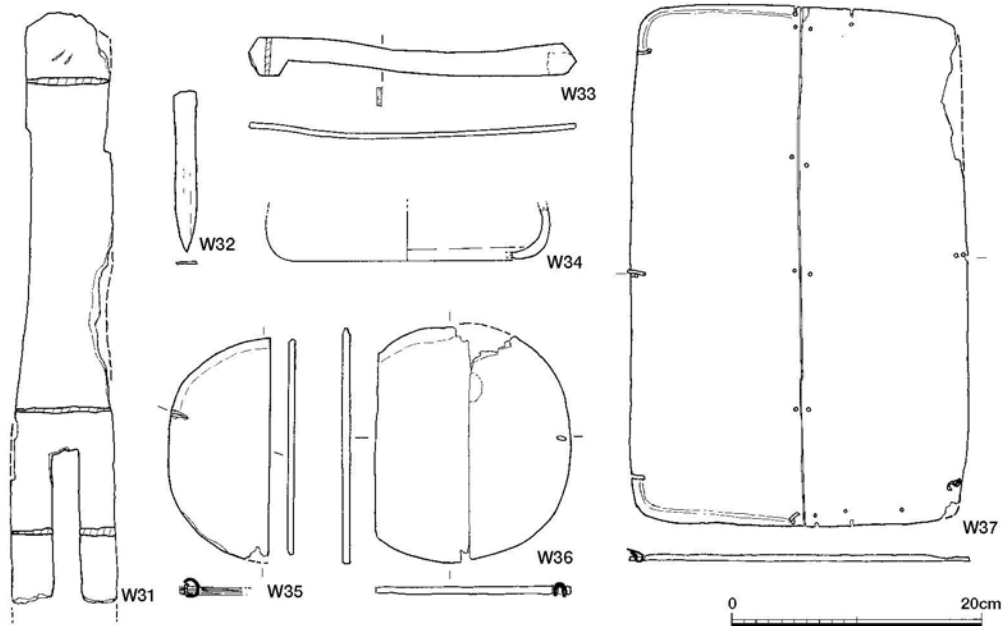


Fig.44 SX403出土木製品 (1/6)

い。長さ55.4cm、幅36.0cmを測る。

堰SX421 (Fig.42、PL.32) 調査区西南隅のV-28区で検出した。推定流路方向および護岸杭列に直交するので堰であろう。幅4m程度の、河道底が深く抉られた部分に、横木と縦杭を組み合わせた堰がつくられている。その両側は河道底に粘質土が残っており、縦杭が2列並んでほぼ垂直に打ち込まれている。堰の縦杭は川下側に倒れている。

出土遺物 (Fig.43) 59~64は土師器である。59は皿で復元口径16.0cm、器高1.9cmを測り、底部は回転ヘラ切り。60~62は坏、63は高台付坏である。いずれも底部は回転ヘラ切りである。64は鉢である。

③河川流路 (SD)

調査区北西部では御笠川の旧流路を検出した。河川流路部には砂が厚く堆積しており、航空写真(図版編巻頭図版4)を見れば幾筋かの流路が重複しているのがわかる。しかし、それを掘り分けるのは至難であり時間的余裕もないので、全体を一緒に掘り下げた。その結果、流路の底面には水流によって深く抉られた溝状・土壙状の部分が多く認められた。河川流路は絶えず変化しているだろうが、これら深く抉られた部分は流れの勢いが強かった時期の流路跡と考えられないだろうか。そのような推測のもとに遺構図を見ると、以下のように5筋の流路跡が想定できる。まず流路全体をSD362として報告し、その中でさらに細分できる個々の流路から出土した遺物をその後報告する。個々の流路の推定にあたり、調査時には別遺構として記録したものをひとつに統合したものもある。

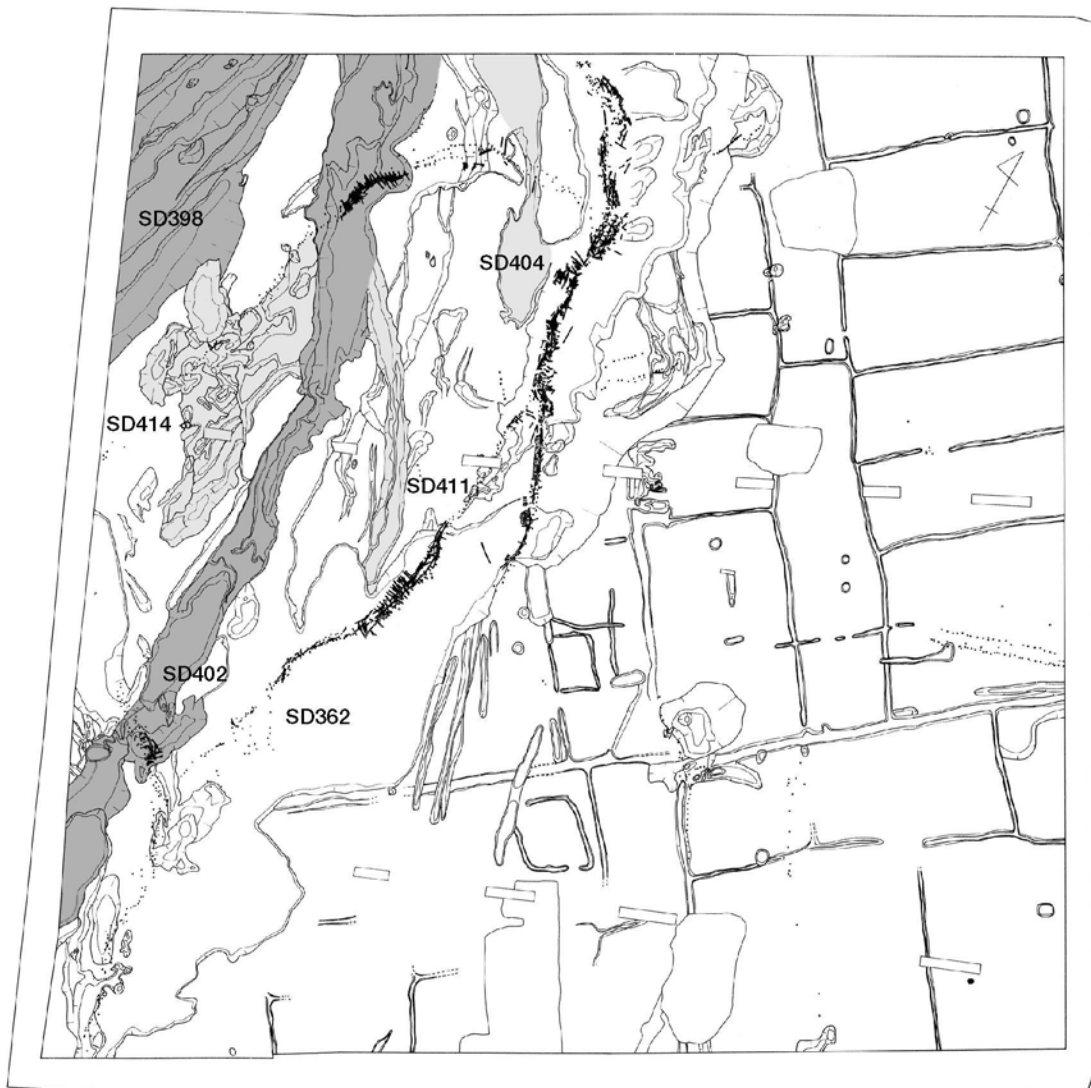


Fig.45 河川流路配置図 (1/750)

SD362 (Fig.45) 調査区の北西部の河川流路部を大きく一括りにしてSD362とした。実際には、河川の流路が刻々と変わっており、遺構検出作業後に確認した砂の流れの方向、河底に複数ある溝状に深く抉られた部分の存在が、このことを裏付けている。後述する個々の小さな流路以外で出土した遺物をここに報告する。

出土遺物 (Fig.46、PL.74・79) 65～81は土師器である。65～79は坏である。口径12.4～15.2cm、器高3.1～4.0cmを測る。底部は回転ヘラ切りである。72、78のように底部ヘラ切り時に1条の沈線がしっかりと螺旋状にめぐるのがある。80は高台付坏、81は皿である。82は内黒の黒色土器碗である。83・84は須恵器の高台付坏である。83は口径15.6cm、器高5.5cm、高台径8.0cmを測る。85は土師器の甕である。86・87は瓦である。86は細かい斜格子叩き、87は縄目叩きである。

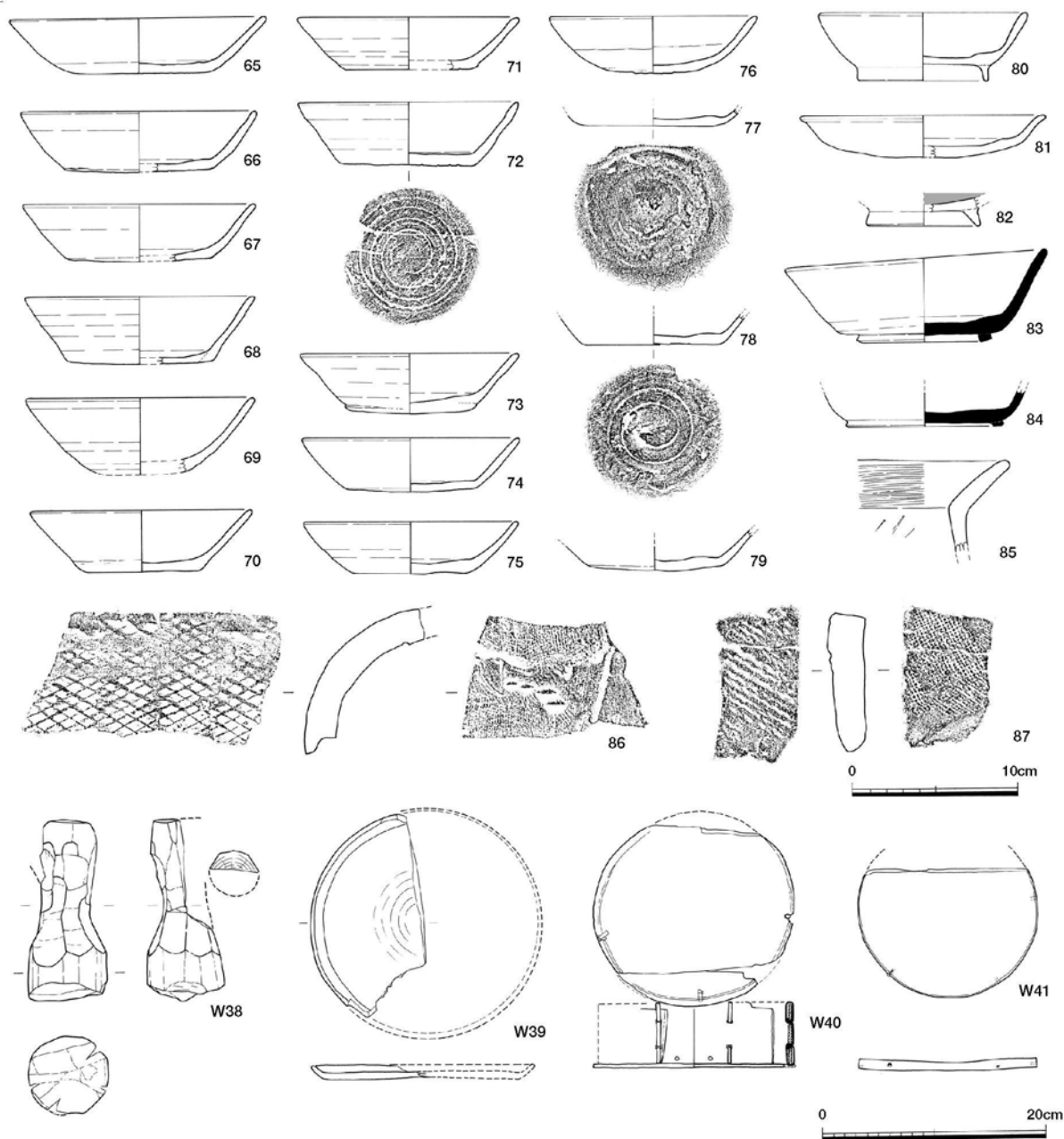


Fig.46 SD362出土遺物 (1/4・1/6) ※土器・瓦は1/4、木製品は1/6

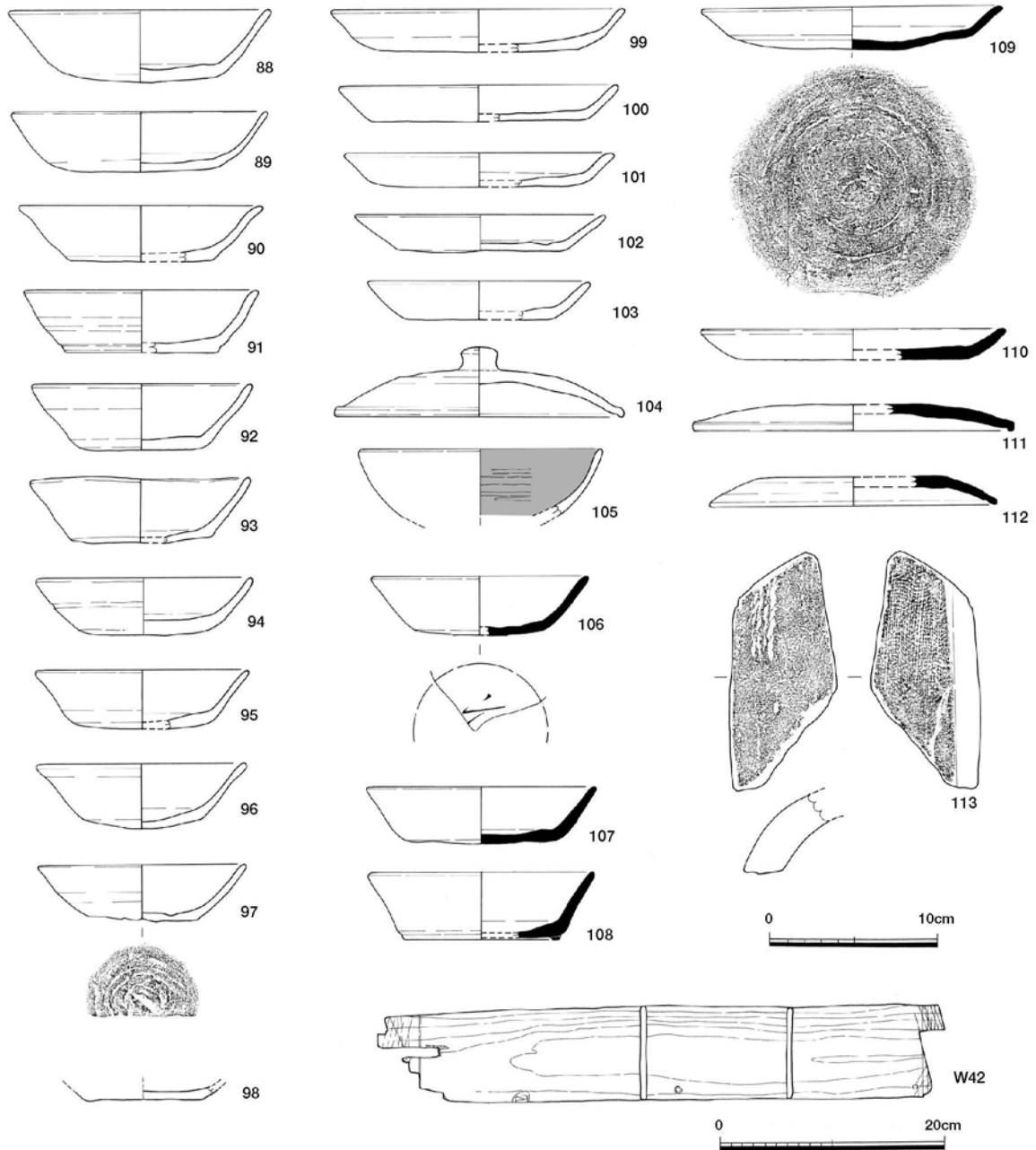


Fig.47 SD402出土遺物 (1/4・1/6)

る。W38は編錘である。W39は挽き物の皿で、内面に黒漆を塗る。材はヒノキ。W40・41は曲物である。

SD398 (Fig.45) 調査区北西隅を斜行する流路である。

出土遺物 (Fig.48、PL.79) W43は加工板材である。長さ116.8cmで3箇所に長円形の孔を穿っている。材はヒノキ。

SD402 (Fig.45) 流路中央部のとくに深く抉られた部分である。堰SX403、421はこのSD402を堰き止める位置に構築されている。

出土遺物 (Fig.47、PL.75) 88～104は土師器。88～98は坏である。口径12.2～15.4cm、器高3.3～4.3cmを測り、いずれも底部は回転ヘラ切り。99～103は皿である。口径13.2～17.4cm、器高1.9～2.5cmを測り、底部は回転ヘラ切り。104は蓋。105は内黒の黒色土器碗である。内面に横

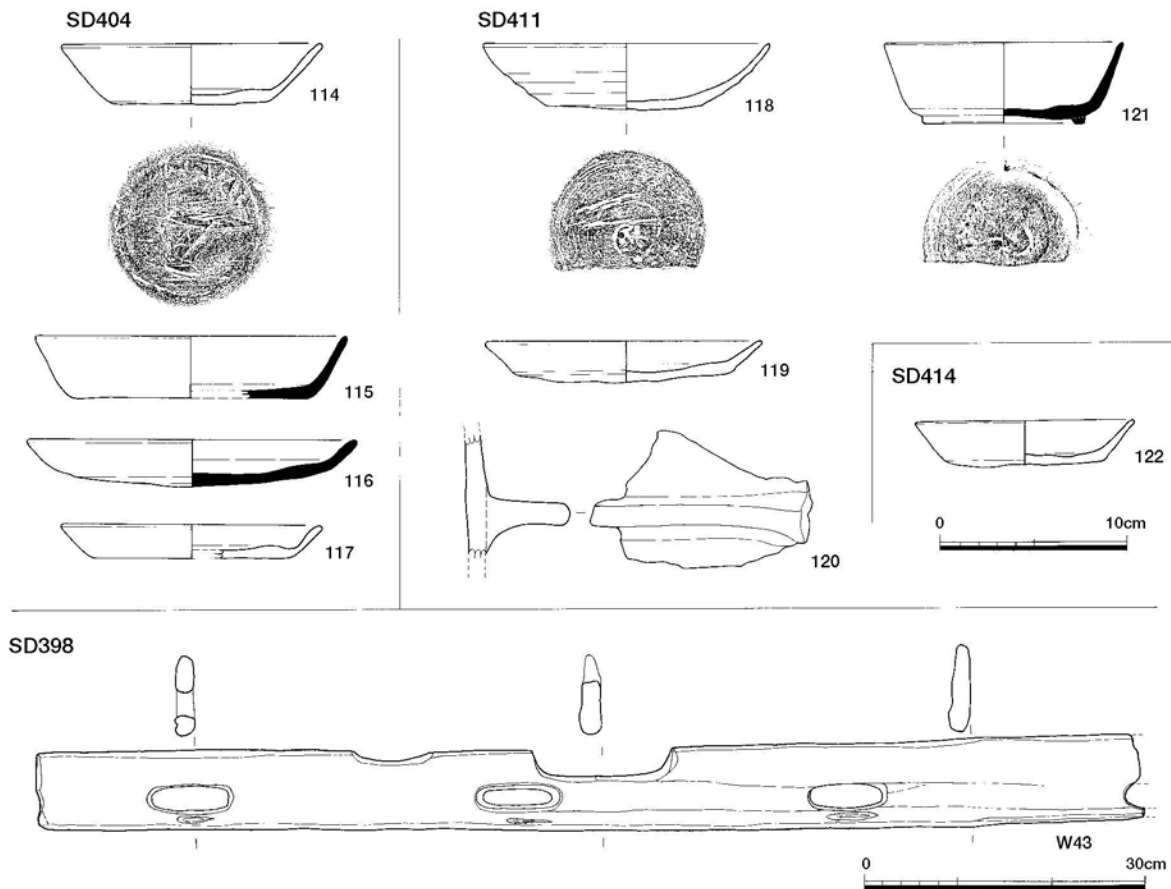


Fig.48 SD398・404・411・414出土遺物 (1/4・1/8)

方向の太いミガキを施す。106～112は須恵器。106～108は坏である。106は墨書土器である。109・110は皿、111・112は蓋である。113は瓦である。凸面は縄目を擦り消す。W42は加工板材である。材質はヒノキで両端に鋸挽き痕がある。

SD404 (Fig.45、PL.75) 護岸杭列SX395に近い部分でやや浅く幅広に河底が抉られている。整理段階でSD404とSK420を統合した。

出土遺物 (Fig.48) 114は土師器の坏である。口径13.8cm、器高3.2cmで回転ヘラ切り。115・116は須恵器皿で底部は回転糸切り。117は土師器皿である。口径13.8cm。

SD411 (Fig.45) SD404と同じ向きでそれより南側に位置する流路である。整理段階でSD411とSX417を統合した。

出土遺物 (Fig.48、PL.75) 118は土師器坏、119は土師器皿である。120は土師器で移動式竈。121は須恵器の高台付坏である。

SD414 (Fig.45) SD402に西側に位置する流路で河底の凹凸が複雑である。

出土遺物 (Fig.48) 122は土師器坏。口径11.6cm、器高2.5cmを測り底部回転ヘラ切り。

④古墳・弥生時代の遺物

第II面で出土した更に古い時期の遺物のうち、遺存良好なもの、重要なもののみ以下に報告する (Fig.49、PL.76)。123～126は古墳時代の遺物である。123～125は土師器。123は小型丸底壺で口径7.6cm、器高8.8cmを測る。124も小型丸底壺である。ほぼ完存し口径11.5cm、器高5.9cmを測る。125は大型壺の口縁部である。口径18.4cm。126は須恵器甕の口縁部である。頸部に波状文

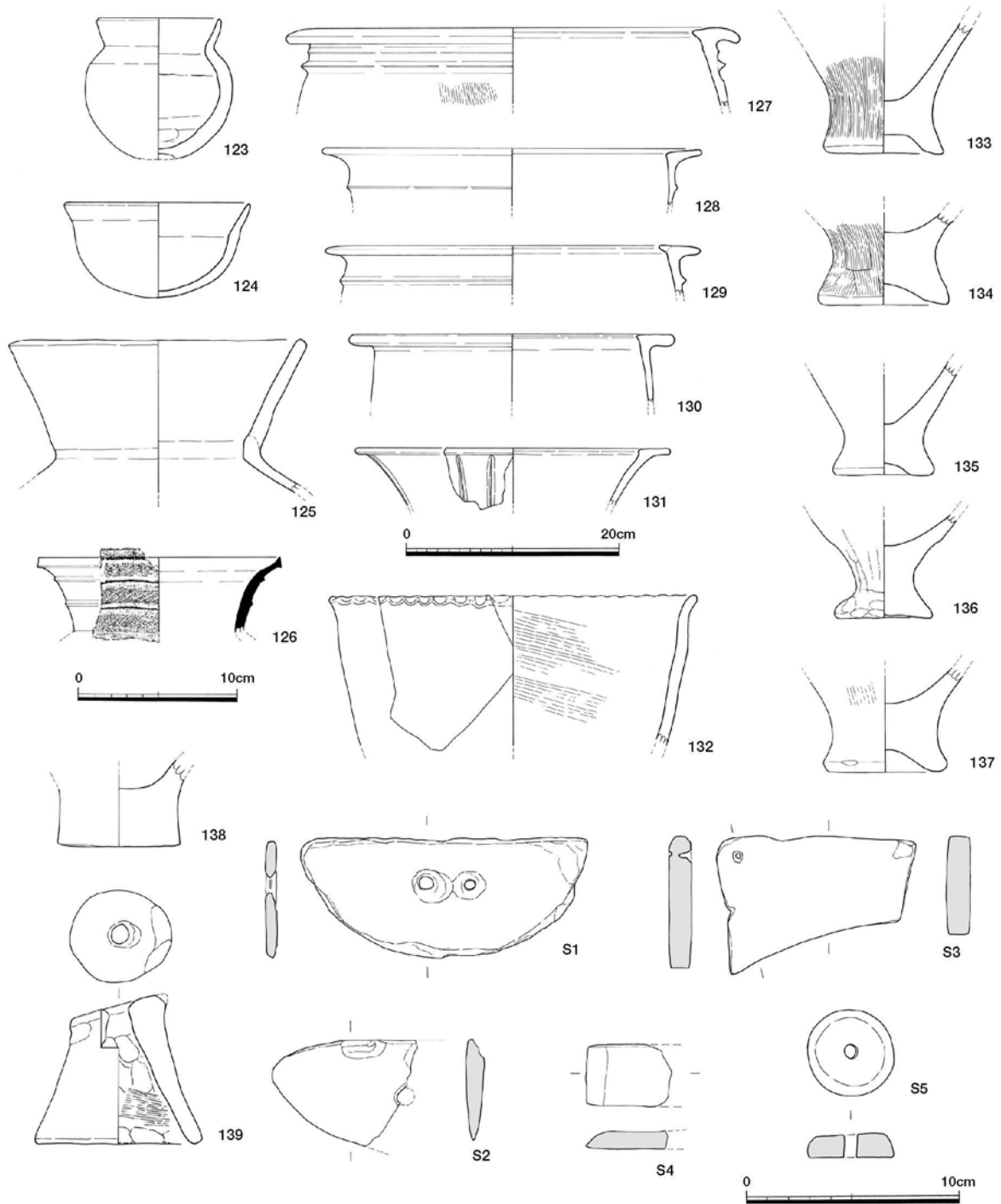


Fig.49 古墳・弥生時代の遺物 (1/4・1/6・1/3) ※イ器は1/3、99~131は1/6、ほかは1/4

を施し、2条の突帯を巡らす。127~139は弥生土器である。127~130は弥生時代中期の甕口縁部である。逆L字形ないし鋤先形を呈する。131は丹塗広口壺の口縁部で縦方向の突帯がつく。132は弥生前期初頭の刻目突帯文土器の甕である。口唇部に直接刻目を入れ、内面は横刷毛。133~138は弥生時代前期の甕・壺の底部である。139は沓形支脚である。S1・S2は石包丁である。S3・S4は砥石である。S3は隅に両面から穿孔を試みた痕跡がある。S5は石製紡錘車である。

3) 木製祭祀具について

律令期の木製祭祀具については、金子裕之氏の研究が著名である（金子裕之1985「平城京と祭場」1985『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集、金子裕之編1988『律令期祭祀遺物集成』など）。金子氏によれば、人形・馬形などの形代や齋出、あるいは人面墨書土器・土馬といった遺物は律令的祭祀の「大祓」で使用されたものと考えられている。律令的祭祀の具体的内容は10世紀の「延喜式」に文献史料として現れるが、考古資料では7世紀後半頃には上述の祭祀遺物が出現するので、延喜式に現れる「大祓」・「七瀬祓」の原型がこの頃には成立していたと推定される。最近では、地方官衙において実施された祭祀は「大祓」ではなく「陰陽祓」であるとする意見もある（篠原祐一2004「地方官衙と祭祀」『季刊考古学』87号）。整理作業中の2004年11月19日に、金子裕之氏に本遺跡出土の木製祭祀具を見ていただき、多岐にわたり御教授をいただいた。

護岸施設SX395および堰SX403から10点程度の木製祭祀具が出土した。Fig.39W6は鉾形木製品としたが、類例の出土事例を探し出しえなかった。ただ、文献史料では祓の儀式に使用する品々と数量を記した史料のなかに、鉾形が出てくる。『平安遺文』所収の「豊後国柞原八幡宮祓祭物注文」（『平安遺文』古文書編第5巻一九一二）に記載された「清祓祭物 合三十五種 …（中略）…御鉾十五本…」と、「宇佐八幡宮行事例定文」（『平安遺文』古文書編第9巻四五四九）の「一所用物…（中略）…大刀三柄 杵三枝 弓三張 矢三具…」である。後者は木偏の文字であるが、前後に武器が並んでいるので鉾ではなかろうか。

祓の際には、多くの祭祀具が一度に使われるという。人形も1枚だけでなく複数枚を一緒に使用する。木製祭祀具全体をセットとして観察する視点が必要である。今回の場合、護岸杭列SX395のある部分に集中して、これらの遺物が出土した。よって、祭祀具が上流から流れてきてここに引っかかったのではなく、この場所で律令的祭祀が行われたと考えている。同じ場所で曲物も相当数出土したが、付近は当時水田であったこともあり、曲物も儀式に使う道具を入れた容器ではなかったか。

福岡市内での出土例を見ると、人形は雀居遺跡12次調査（『雀居8』2003市報747集）と高畑遺跡17次調査（『高畑遺跡17次』2001市報676集）で出土している。いずれも本遺跡の近く、御笠川沿いに所在する。人形は大きさが異なるが、肩・腰の切り抜きさきの形態が共通している。また、高畑遺跡17次調査では人面墨書土器や絵馬も出土している。

また、福岡市西区の元岡・桑原遺跡群第15次調査では祓（解除）はらえに関連する内容が記された解除木簡が出土している。祓具の品目・数量を記したものであるが、水船・五色物・赤玉・立志玉など都城の祓具には見られないものも含まれており、重要な資料である（『九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査概報1』2001市報693集）。

御笠川流域の高畑遺跡、下月隈C遺跡、雀居遺跡で律令祭祀関連遺物が出土しているが、この祓を齋行した官衙はどこにあるか。上の3遺跡はいずれも、大宰府から博多へ向かう水城東門ルートと呼ばれる官道沿いに位置する。現在、周辺で確実に官衙と判定された遺跡はない。が、多量の古代瓦が出土した高畑遺跡、多量の越州窯系青磁や緑釉陶器が出土する立花寺B遺跡、古代の大型建物群が検出された立花寺遺跡などはその候補である。本遺跡の約1Km南に立地する高畑・立花寺遺跡周辺に群衙・駅家のような官衙施設があった可能性は高い（山崎龍雄「福岡市博多区下月隈C遺跡第6次調査出土の木製祭祀具」2002『祭祀考古』22）。

4 第三面の調査

1) 調査の概要

第三面は古墳時代後期から奈良時代の時期である。第2面より-30~70cm程掘下げた面で検出した。この面の上にはもう一面水田面があった可能性があるが、時間の都合上掘下げている。第三面の遺構は主に東から南側にかけての範囲で、西側は古代平安時代以降の河川で時期的にはずれず。主な遺構としては溝5条、土坑2基、水田などである。水田は南東側全域に認められるが、南東側谷部には部分的に水田が2面残る。また調査区0-22~24区高所部で検出した溝群は規模的にもほぼ同規模でしかも平行し重複しており、一帯が軟弱な粘上の地盤であったので、重機による遺構面検出の際のキャタピラ痕が溝状に残ったものと思われる。

2) 遺構と遺物

① 溝状遺構 (SD)

SD190(Fig.5.0、PL.33・34) 調査区南東隅で検出された第5次調査から続く溝である。確認規模は26mで北側はSD390と合流する。溝幅は2.5~6.5mで、深さは最大で0.7mを測る。底面は流れによる浸食か凹凸が激しい。東壁沿いには部分的に横木と縦杭を何重にも打ち込んで構築した護岸杭列SX389がある。この杭列の東側に溝状の落込みがあり、ある時点での流路の変更が考えられる。溝埋土は洪水砂と思われる明黄褐色粗砂礫であるが、間に鉄分を濃く含んだ薄い層が何枚か入るので、洪水が何度かあったものと思われる。また流木なども入っていた。

出土遺物(Fig.5.2・5.3・5.9・75、PL.79・85) 弥生前期土器から古墳時代土師器・須恵器、木製品、流木が出土している。出土遺物の層的な時期差はない。溝の時期は須恵器や土師器などから6世紀末~7世紀である。

1~6は須恵器。1~4は坏身。小田富士雄編年のⅢb期~Ⅳa期のもの。1は器形の歪みがあるがほぼ完形。調整は外底部はいずれも回転ヘラケズリ、その他は回転ヨコナデ、4の外底にはヘラ記号がある。5は甕の体部細片で復元径はやや不正確。櫛描波状文の上部に二重の沈線が巡る。6は肩が張る壺の頸部片。頸部には櫛描き波状文と肩部にタテの平行タタキを施し、内面にはナデで当て具痕が残る。2は上層、3~6は下層出土。

7~22は土師器。7は壺の口縁部片。口縁部はナデ調整で外面に指押え痕が残る。8は頸部が締まらない小型甕口縁部。胴外面はタテハケ目、内面はケズリ仕上。9~12は高坏。9は坏か高坏の口縁部片か。調整はやや磨滅するがナデ。10は筒部から裾部が屈折して外に開く脚部で、焼成前穿孔で、直径1cmの円形透かし孔が4ヶ所ある。筒部はケズリ後ナデで、裾内面はハケ目調整。11は円筒状の脚部片。内面にシボリ痕が残る。頂部には粘土紐接合帯が残る。12は口縁部を欠損し、裾部が屈折して水平に延びる脚部が付く。調整は脚部外面はタテヘラナデ、内面はヨコヘラケズリ。13・14は椀形の台付鉢脚部。13は手捏ねで脚部には指押え痕が、鉢内面には工具痕が残る。14は口縁部で、鉢部下半に指押え痕、内面に工具痕が残る。15は皿か盤か。細片で口径は余り正確でない。16・17は台付鉢の脚部。16は手捏ねで指押え痕が全面に残る。17はナデ調整で、内面黒味を帯び砂が付着する。18は土師器の甕の底部片。外面にタタキ痕が残る。19~22は手捏ねのミニチュア土器。口径3~5cm程の大きさである。10・13・15・21は上層出土。

23~29は弥生土器。23は後期前半の袋状口縁壺片。器壁はやや磨滅するがナデ調整。24~26は後期の甕。24・25は「く」字状に外折する口縁部細片。24は胴部内外面ハケ目調整、25は外面細か

いハケ目調整で、表面には植物の組織痕がある。又、胎土内にはゴマ粒状の気泡が多く入る。26は頸胴部片。外面はナデ調整で爪形の工具痕が残る。内面には粗いハケ目。外面黒斑がある。27・28は底部片。27はやや凸レンズ状を呈す。胴部内外面粗いタテハケ目。底部はナデ後不整方向のハケ目調整。28は底部が台状に直立する。調整は外面細かいタテハケ目で指押え痕が残る、内面はナデで工具痕が残る。底部はナデ。29は終末頃の鉢高坏か。口縁部内外面はハケ目、体部は磨滅し調整不明。

S1は拳大の角礫を利用した凹石。幅12.5cm程で、各側面は粗割で上下両面に使用による打撃痕や窪みがある。表面気泡が入り石材は安山岩と思われる。

W1は起耕具の平鋏の一部。残存長37.5cm、最大幅14.2cmを測る。頭部は丸く作り、長方形の柄つぼがある。表面は丁寧削り仕上げであるが、所々傷む。W3・W4は杭材。残存長148.6cm,141.1cm、杭径は6.7~7.3cm、4.7cmを測る。いずれも自然木の芯持材でW4は樹皮が残る。先端は4方向と3方向から削って尖らす。W5は樹皮が残る板材。全長144.3cm、幅13.2cm、厚み1.3cm以上を測る。W6は谷部で検出した杭材。全長146.9cm、直径6.3~6.5cmを測る。杭先は鋭く削り出し、頂部は丸く削って加工する。

SD198(Fig.50、PL.33) 第5次調査から続く北西に延びる小溝。確認長は28mで、東に曲がってSD390に合流する。溝幅は1~2mで不均一、恐らく流水で壁が浸食された結果であろう。溝の深さは0.2~0.5m程で、底面は凹凸がある。北に向かって水が流れたようで、北側が全体として深い。埋土は上層が細砂、中間に粘土、下層が粗砂である。

出土遺物(Fig.54・75、PL.83) 弥生土器から古墳時代土師器・須恵器が出土している。

30は須恵器で口縁端部が屈折する蓋片で8世紀のもの。31は弥生前期の鉢底部片。32は古墳時代前期の二重口縁壺片。全体に磨滅がひどいが、内面に指押え痕が残る。

S2は石庖丁。丁寧なケンマ仕上げであるが、使用により表面は磨滅し欠損する。立岩産の輝緑凝灰岩か。

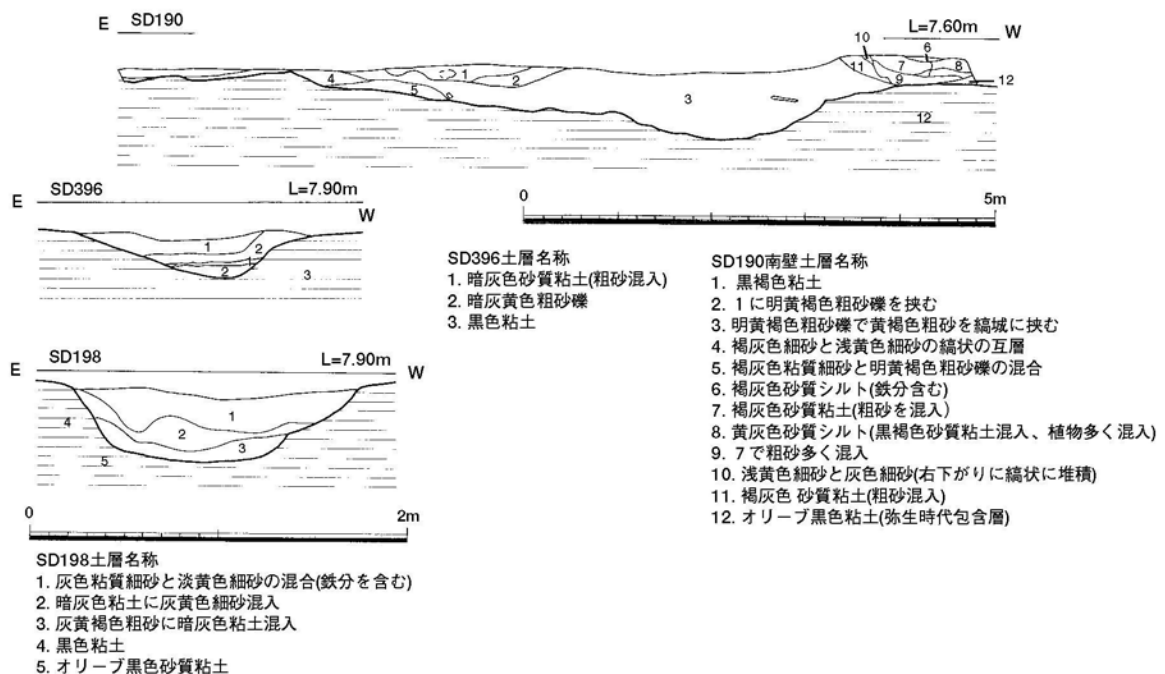


Fig.50 SD190・198・396溝土層図 (1/80・1/40)

SD373・375・376・378・383・387出土遺物(Fig.54、PL.79) これらの溝は冒頭でも述べたが、重機のキャタピラの痕跡と思われる溝から出たものである。上面の遺物なども含まれている。

33はSD373出土。須恵器の口縁部片か。外面少し灰カブリする。34はSD375出土。土師器の坏で、外底部は回転ケズリ後ナデ調整。口縁外面ススが付着する。35はSD376出土。土師器の棒状の把手。全面指押え仕上げ。36はSD378出土。須恵器の坏底部片。焼成は不良。37はSD383出土。土師器の布留式甕の頸部から胴底部片。全体に器壁は薄くやや摩滅する。胴部内面はケズリ、外面は下半がハケ目。黒斑が2ヶ所ある。38はSD387出土。弥生後期後半の甕。胴部内外面はハケ目調整。胴部下半に黒斑がある。39は弥生時代後期後半の小型甕。口縁端部が平坦で浅い凹線が巡る。調整は胴部内外面ハケ目後ナデで、内面に指押さえ痕が残る。

SD390(PL.33) 調査区南東隅で検出した北流しSD190に合流する溝。確認長は24mで、深さは0.2～0.7mを測る。南側は浅くなる。底面は流れて凹凸が激しい。

出土遺物(Fig.53～55・75、PL.83) 弥生土器から古墳時代前期迄の土師器と、黒曜石剥片・石庖丁など石器類が少量と矢板が出土。

40・41は壺。40は弥生後期終末期の複合口縁壺口縁部細片。41は肩部細片。外面に櫛状工具で6条の沈線と二段の波状文を描く。内面ナデと粗いヨコハケ目調整。42～48は甕で、43～48は弥生後期後半代のもの。42～44は小型甕。42は土師器の甕で調整は胴部外面ハケ目、頸部は後ナデ。胴部内面はケズリか。43は小型甕で底部は凸レンズ状を呈す。調整は胴部外面上半は細かいハケ目、下半は工具によるナデ、内面はナデ。44の調整は胴部外面上半にはススが付着し下半は丁寧なナデ、内面はハケ目後ナデ。45～47は中型の甕の口縁部片。復元口径は24cm～28.6cmを測る。45・46は調整は胴部外面粗いハケ目、内面はナデで工具痕が残る。47は頸部に1条の三角突帯が巡る。口縁部の内面は粗いヨコハケ目が残るがナデ調整。胴部外面は細かいナナメハケ目、内面はナデ調整でハケ目がかすかに残る。48は大型の甕口縁部片。口縁部が大きく開き、端部は上面に跳ね上がる。頸部には1条の三角凸帯が巡る。口縁部から胴部にかけてはハケ目とナデ調整。頸部には指押え痕が残る。49・50は高坏で後期中頃。49は坏部片で内外面ヘラミガキ。50は坏部から脚部片。口縁部はやや摩滅するが細かいナナメハケ目、内面は横方向の粗いハケ目後暗文風のタテハケ目調整。脚部外面はタテヘラミガキで、内面にシボリ痕が残る。裾部に焼成前穿孔の径0.7cmの透かし孔がある。51は突起を持つ杵形支脚頂部片。頂部は粗いハケ目、側面に棒状の刻目が付く。外面はナデ内面ケズリで、頂部に1.5cmの円孔がある。52は台付鉢の脚部で調整はナデ。51・52は古墳時代初め頃である。53はミニチュア土器の鉢で手捏ね仕上げである。

S3は大型の砥石で下半部欠損する。長軸最大長30cm、短軸最大幅12.7cmを測る。上面と上下側面は使用面か、左右小口部は擦って面を整える。石材は目の比較的細かい砂岩。S4は砥石か石皿の一部。左側面は丁寧な擦りで、上下両面は砥石としての使用面。石材は砂岩。S5は石庖丁片の転用品か。両側に径0.5cmの紐孔がある。

W2は矢板。痛みがあり先端と基部は欠損。残存長40.8cm、14.6cmを測る。最大厚3.2cmで先端は薄くなる。

SD396 (PL.33) Q-21区～R-25区で検出したN-32°30'-W方向に延びる小溝。確認規模は途中途切れるが長さ44m、溝幅0.8～2mを測る。深さは0.05～0.12mと浅いが水口と思われるSX397の部分では深くなり0.4m程となる。埋土は上層が暗灰色砂質粘土、下層は黒色粘土である。須恵器54からは時期8世紀前半頃迄か。

出土遺物(Fig.55、PL.79) 弥生土器から古墳時代後期迄の土師器・須恵器が出土している。



Fig.51 第Ⅲ面遺構全体図 (1/400)

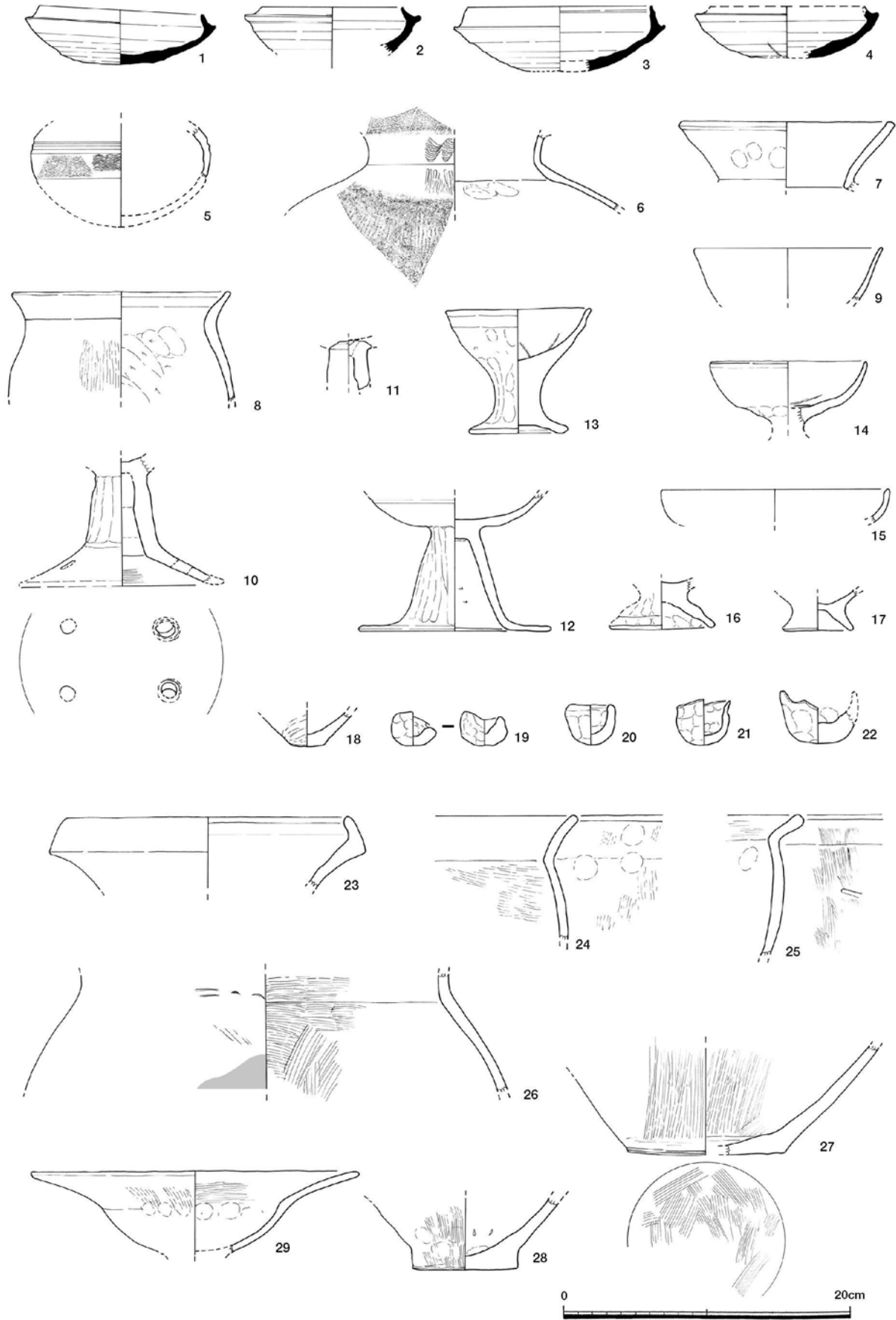


Fig.52 SD190出土土器 (1/4)

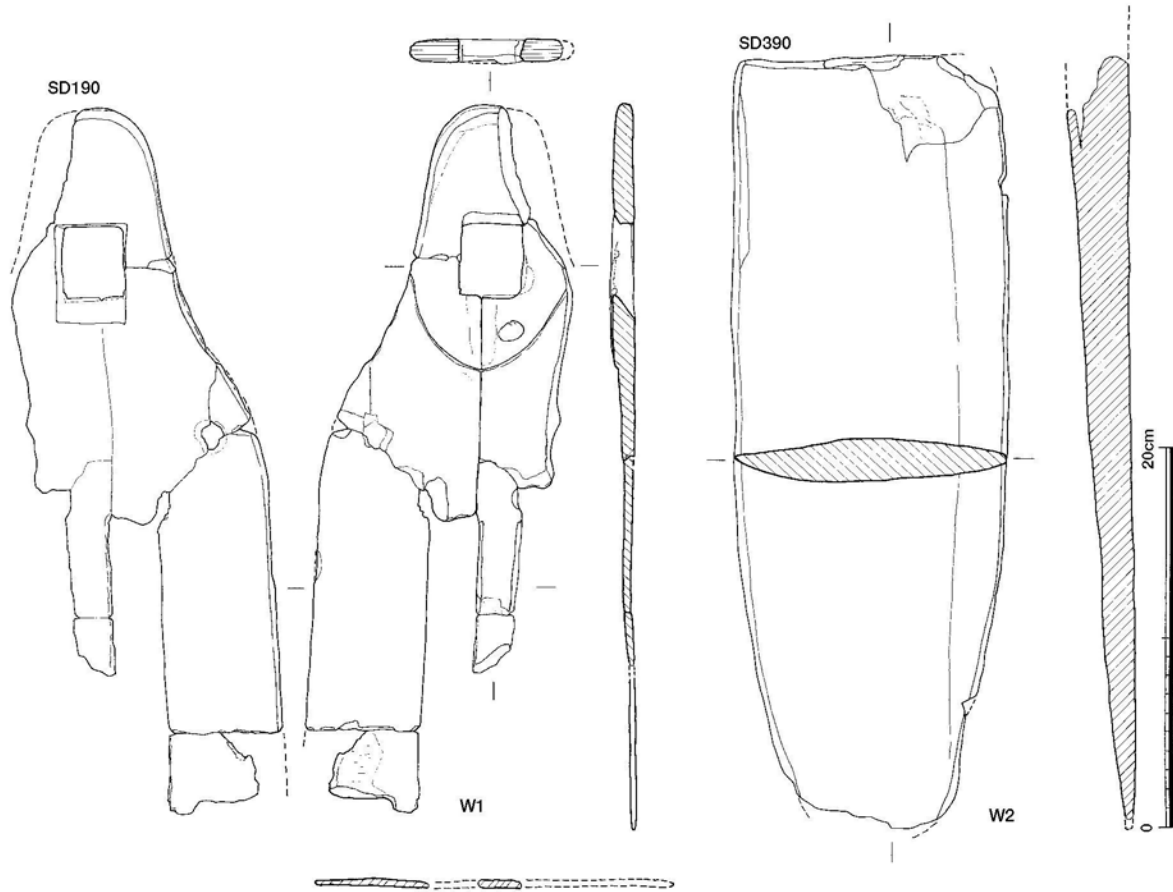


Fig.53 SD190・390出土木製品 (1/4)

54は須恵器の坏でほぼ完形。口径は14.2cmを測る。外底部は回転ヘラケズリ後ナデ、体部は回転ヨコナデ調整。ロクロ回転は時計回り。表面は黒灰色から灰白色と焼むらがある。55・56は土師器の鉢で、55は皿形で器壁は摩滅がひどいがヘラミガキ。56は口縁に頸部を有す細片。調整は口縁部内面はハケ目後ナデ消し。57は古墳時代前期前半の土師器の二重口縁壺片で。外面黒斑あり。

② 土坑(SK)

土坑としたものは4基あるが、図示したものは2基で、出土遺物はこの面にしては新しく、上面での未検出遺構である。SK384は第4面で報告する。

SK381出土遺物(Fig.56) 図示していないが、N-24区で検出した土坑の遺物。59は須恵器の短頸壺口縁部で復元口径は14cmを測る。形態から見て8世紀代か。

SK418(Fig.56、PL.40) T-22区の古代河川底で検出した円形土坑。第1面で検出したSK345の下層部分である。直径0.6m、深さは0.32mを測る。埋土は暗灰色シルト粘土で、植物を多く含む。下層は青灰色粘質砂である。井筒はないが、井戸の残りであろうか。

出土遺物(Fig.56) 60は土師器の丸底杯で、中世初めの時期。外底部は回転ヘラ切り、体部内外面は丁寧なミガキ。指押え痕が部分的に残る。

SK419(Fig.56、PL.40) T-20区で検出した楕円形の土坑。規模は上面で径1.60×1.34m、深さは最大で0.24mを測る。底面は西側が一段テラスを持つ。埋土は青灰色砂質粘土。出土遺物はない。

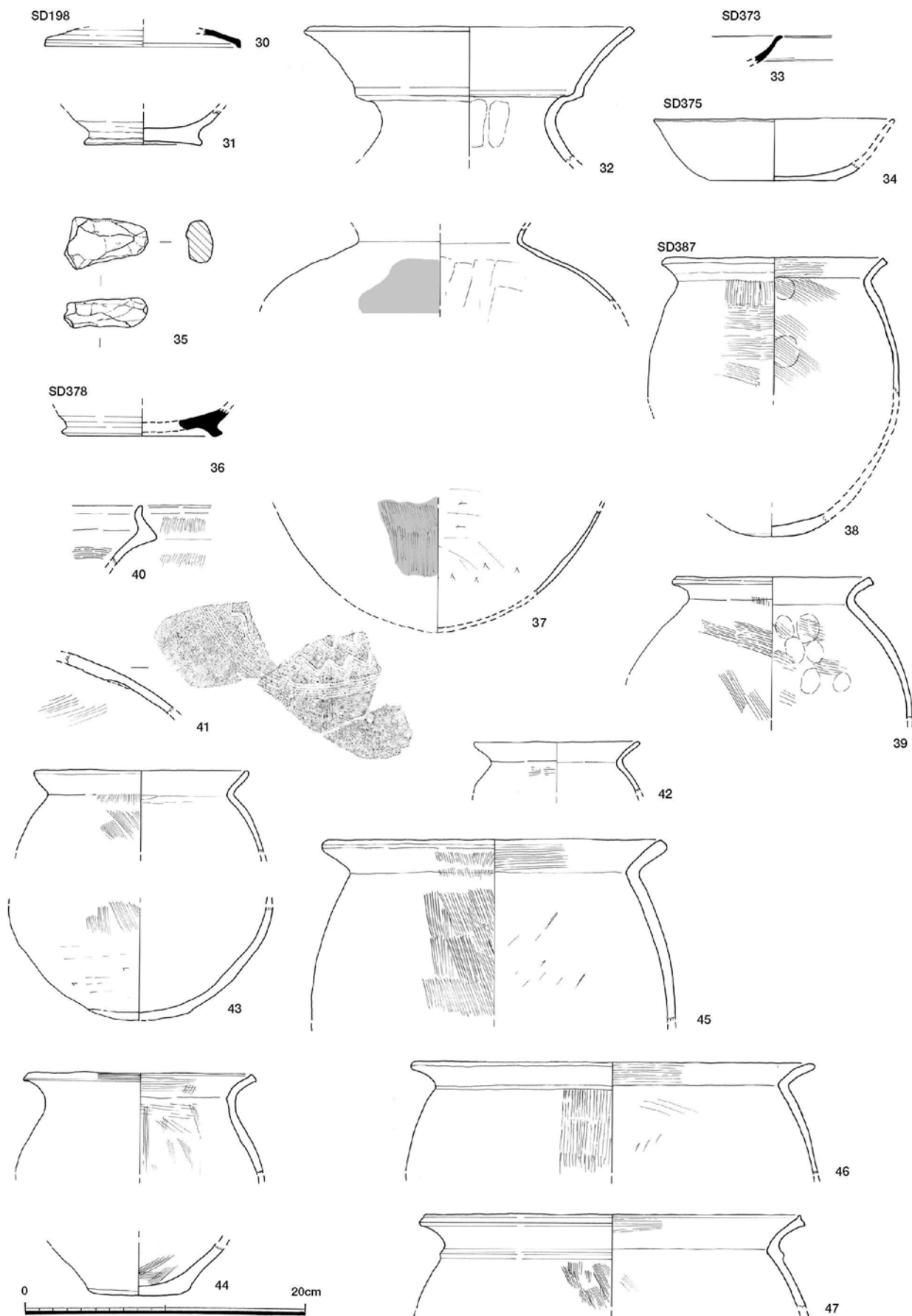


Fig.54 SD198・373・375・376・378・383・387・390出土土器 (1/4)

③ 堤防状遺構(SX)

SX389(Fig.57、PL.34・35) SD190の東側で流路に沿って検出された杭と横木で構築された堤防状遺構である。この遺構の西側は流路となる。遺構の確認規模は12m程でアーチ形を呈し、高所部は杭列、川の部分には杭を打ち込んで横木を当て、間にワラや小枝など植物を詰めて補強している。杭は東側に大きく倒れているので西側の流れで倒れたものと思われる。杭間には粗砂が詰まっていた。堤防であるならば本来は粘土などで杭を覆っていたのであるが、その覆土は流されたのであろうか。

杭材については任意にサンプルしたものについて樹種同定を行った。種類としては様々な樹種があり、近辺に生育していた樹木を無操作的に用いた結果と考えられる(第4章 自然科学分析4)

出土遺物(Fig.57・59・60、PL.79・85) 弥生土器。古墳時代土師器・須恵器・ミニチュア土器、石器、木器などが出土している。須恵器から8世紀頃までの遺物を少量含む。

61～63は須恵器。61・62は坏身細片。形態からⅢb期頃のものか。63は蓋で8世紀前半頃のものか。64～66は土師器の甕。64は頸部片で内面ヘラケズリ。65は口縁部片。66は小型の甕細片で6世紀のものか。器壁の摩滅がひどい。67は高坏脚部。脚部外面はタテナデ、内面はヘラケズリ調整。

W7～10は護岸の縦杭として用いられたもの。W7は先端が杭状にとがり、頂部が半月状に広がる矢板である。残存長129cm、幅13.1cm、厚さ4～6.3cmを測る。辺材に削り加工を加えたもの。

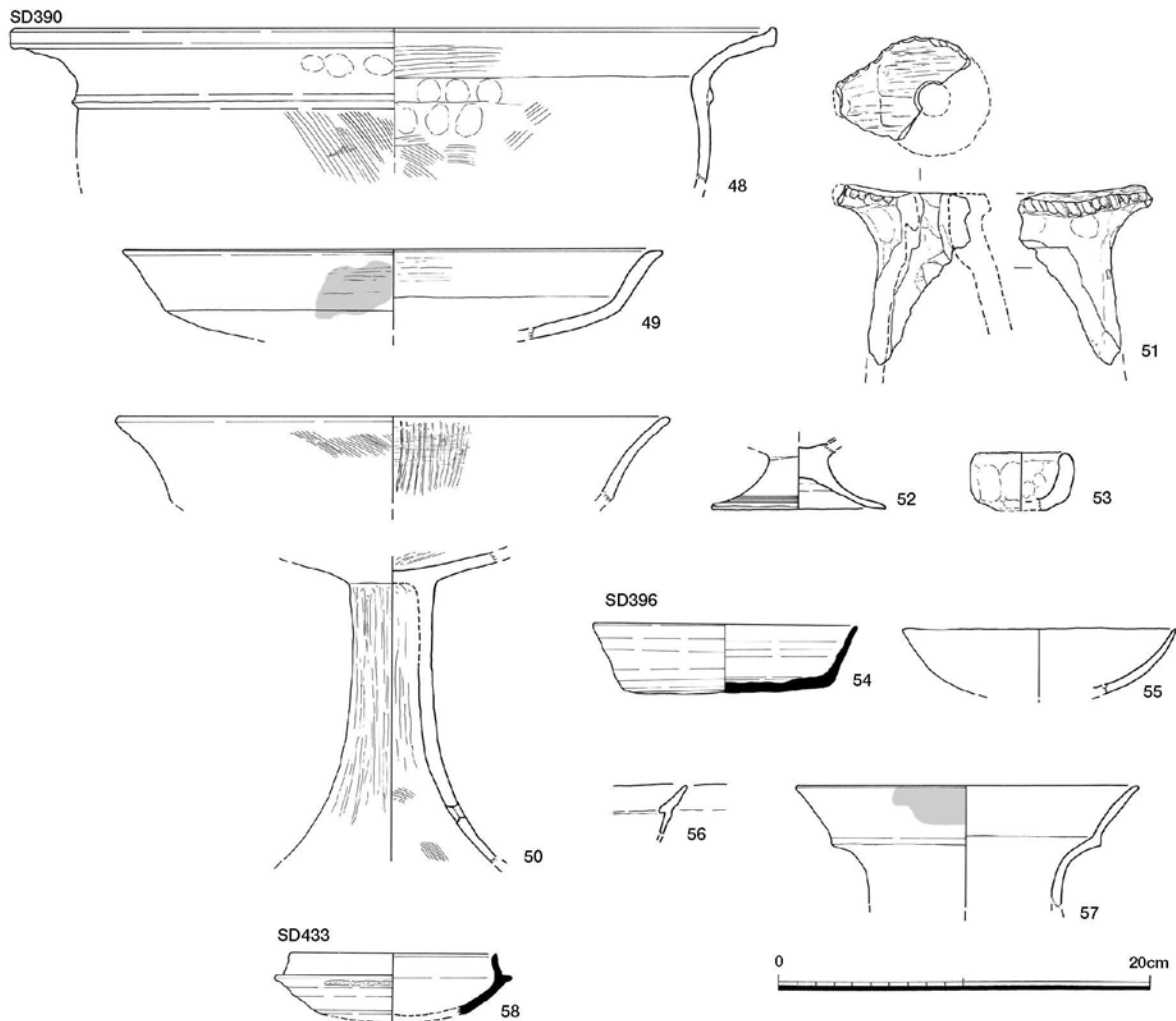


Fig.55 SD390・396・433出土土器 (1/4)

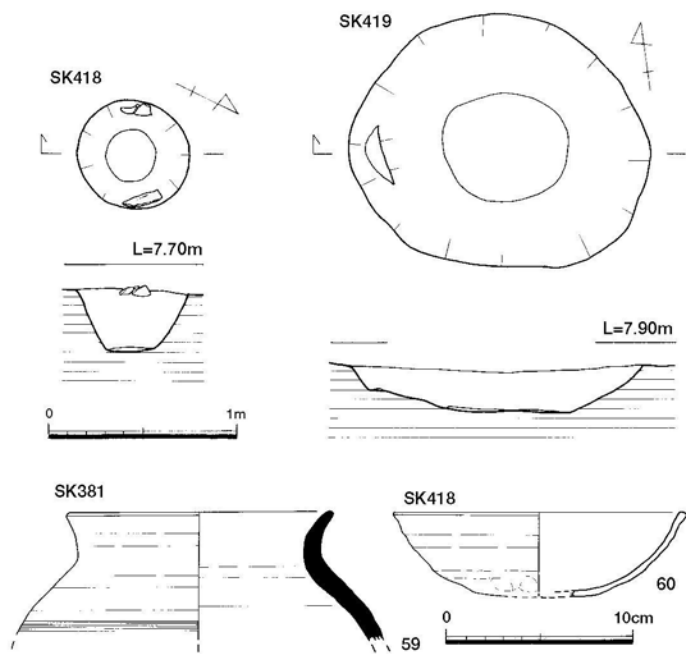


Fig.56 SK381・418・419及び出土土器 (1/40・1/4)

W8は頂部を欠損する。残存長111.3cm、直径は7～8cmを測る。自然木の芯持材である。先端は4方向から削りを加える。W9は残存長106.3cm、幅7～8cmを測る、断面三角ミカン状に割られた材である。先端は4方向から削りを加える。W10は矢板で頂部を欠損する。残存長96.8cm、最大幅14.4cm、厚み2.9～3.2cmを測る。先端は両側面から削り出す³、節で曲がる。

④ 溜まり状遺構(SX)

SX368(PL.19) 第2面で検出した古代の河川SD362の東岸沿いで検出した三日月状の溜まり状遺構

(SX360)の残存遺構である。上面での確認規模は直径で9m、幅は0.7～2m程である。第2面ではこの遺構の南側に川から斜交する杭列と横木確認されており、この遺構は川から水を引く導水路のような遺構であろうか。埋上は粗砂である。

出土遺物(Fig.58、PL.79) 弥生土器、古代平安時代の土師器・須恵器などが少量出土。

68・69は須恵器の坏口縁部細片。70～72は土師器の坏。外底部は回転ヘラ切り、体部は回転ヨコナデ調整。73は内黒の黒色土器A類の高台坏。復元口径は14.4cmを測る。底部は回転ヘラ切りで、体部は回転ナデ調整。体部内面にススを付着させている。いずれも大宰府C-1期9世紀前半頃のものの。

SX399 Q・R-22区で検出した逆L状を呈す不定形の浅い土坑。規模は東西5m、南北5.5m、深さは0.05～0.1mを測る。検出時では東側のSD396とを結ぶ僅かに窪んだ溝状の落込みがあり、SD396から導水した痕跡の可能性はある。

出土遺物(Fig.58・75) 弥生時代から古墳時代前期土器片や黒曜石剥片・台石・敲石などが出土している。

74～76は土師器。74・75は布留式土器の甕。74は2/3片で下胴部を欠損する。75は1/4片である。74は細かいハケ目で部分的にナデ、75は胴部外面の摩滅がひどいがハケ目が残る。内面はヘラケズリを行う。いずれも器壁は薄い。76は小型丸底壺口縁部。体部と口縁部の境に粘土接合部が残る。外面ススが付着する。いずれも4世紀後半までに収まる。

S6は敲石。長形状を呈し、上下両面、左右・上下各側面は使用による敲打痕が残る。石材は砂岩。

⑤ 水田遺構(SS) (Fig.61～63、PL.36～39)

調査区南側から東側高所部を中心に検出した。第II面水田程ではなかったが、水田面上は洪水砂で覆われていた。また砂が詰まった足跡なども粗密はあったが、各水田で確認された。西側は谷部で、古代の川などで流されたのか不明。水田は中央を北西から南東に延びる幅1m前後の大畦1と調査区南側を南西から北東方向に蛇行して延びる幅1～2mの大畦2・3で4大区画に区分出来る。それ

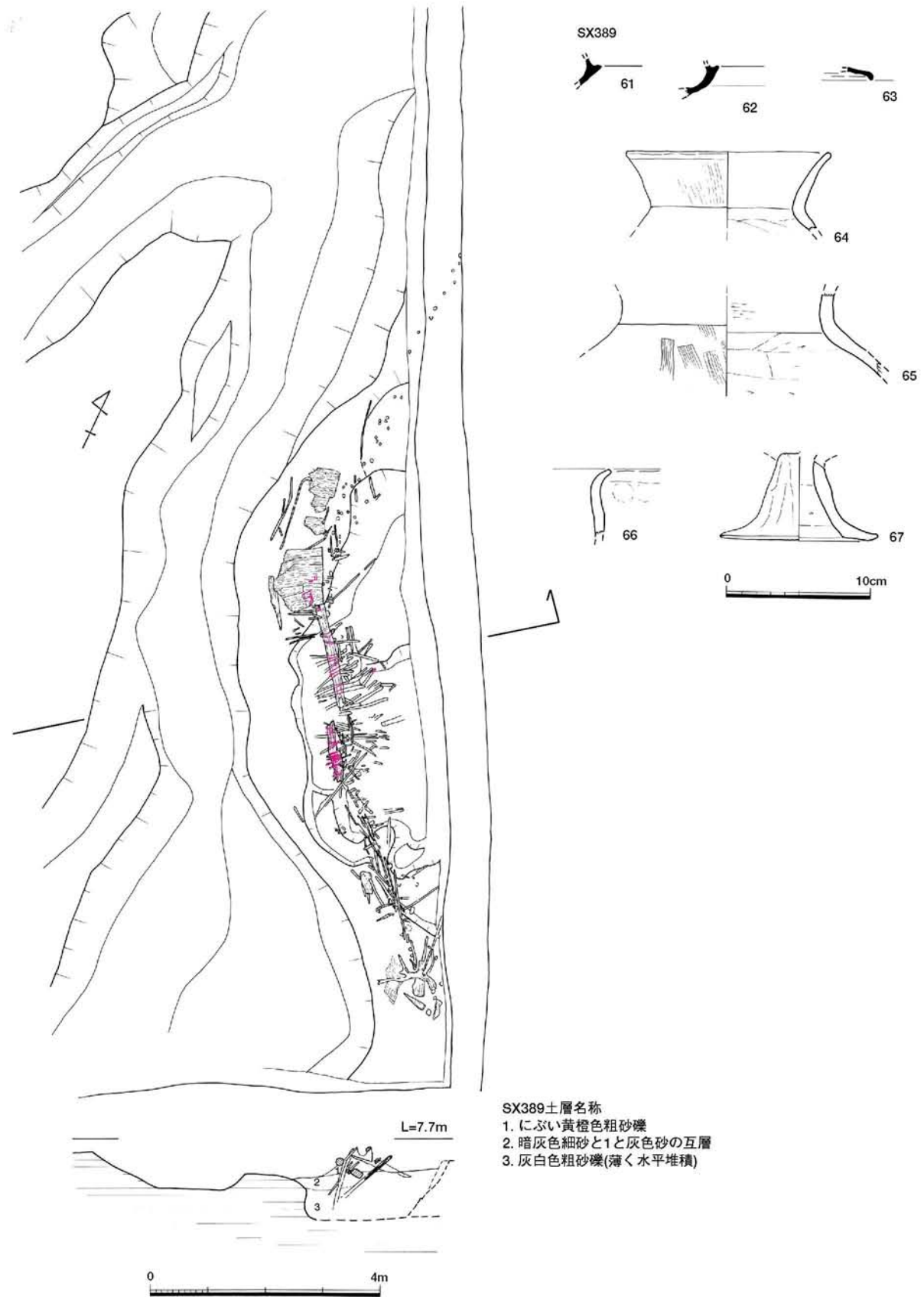


Fig.57 SX389及び出土土器 (1/100・1/4)

それぞれの大区画はまた小畦で細分される。

SS192 第5次から続く水田区画である。第5次と合わせて見ると、大畦に囲まれた細長い区画の中央に南北に通る畦を通し、それを基準に二ないし三列の四角形状の小区画水田(面積50~130㎡)を小畦で形成している。全体で確認した水田区画は19画である。第6次部分では小畦は基盤の黒褐色粘土で、その幅は基底で50cm程、高さは最大で10cm程である。確認した小区画水田は5区画で、北西から南東側にかけて低くなる。小畦部分に水口は確認されていない。大畦2部分付近で畦は確認されていないので、SX423・428を通してSS424に流れ込む水で畦が流されたことが考えられる。

出土遺物(Fig.65・75、PL.79・84) 埋土中から弥生土器、古墳時代土師器などが出土している。

77・78は土師器。77は古墳時代後期の短頸壺。胴外面はナナメの平行叩きで、須恵器を模倣した土師器か。78は古墳時代前期の台付鉢脚台部。鉢体部内外面丁寧なヘラミガキ。脚部はハケ目後ナデ。

S8は滑石製の子持勾玉。表土除去中重機に引っ掛けて検出したので、損傷が激しい。コマ型の親勾玉の腹背に長方形の板状に略式化された子勾玉が付く。表面は細かいケズリ仕上げである。全長は10.2cmを測る。水田に伴う祭祀品であろう。

SS200 この大水田区画も第5次調査区から続く。水田は二列で西側が高く東側が一段低くなる。南東隅はSD190で畦が流されたのか水田面がよく分からない。西側では水田面が二面確認された。西側の水田は大畦3に直行する畦が幅9m~16mの間隔で4条あり、5枚の小区画水田が確認されている。この部分の水田は一段下がった東側水田と形が異なる。畦は造りつけて流されて不明の部分もあるが、水口がそれぞれ北に向かって付いており、基本的には南から北へ水が流れたのであろう。下面の水田は30cm前後下がって検出した。畦の位置は異なるが大畦3と直交する。この面では水田は4枚検出した。この部分では南東側から水が入ったようで水口状の落込みが2ヶ所検出された。下層の畦は基盤の黒色粘土を削り出している。

出土遺物(Fig.65・74・75、PL.79・83・84) 埋土中から弥生土器から古墳時代土師器・須恵器な

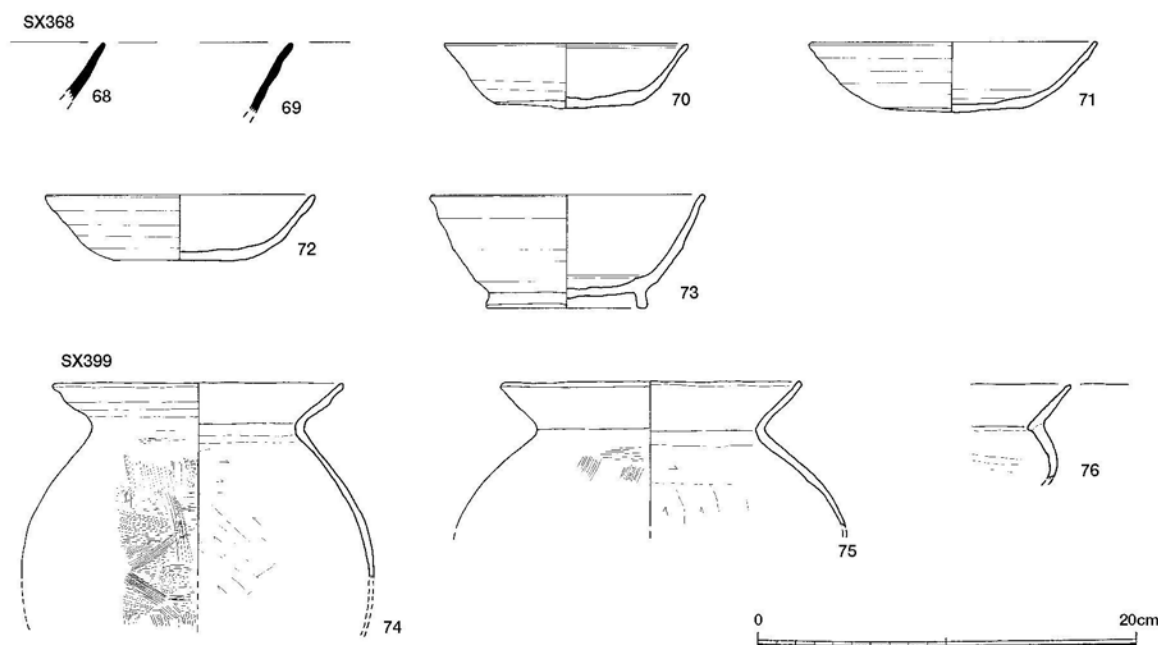


Fig.58 SX368・399出土土器 (1/4)

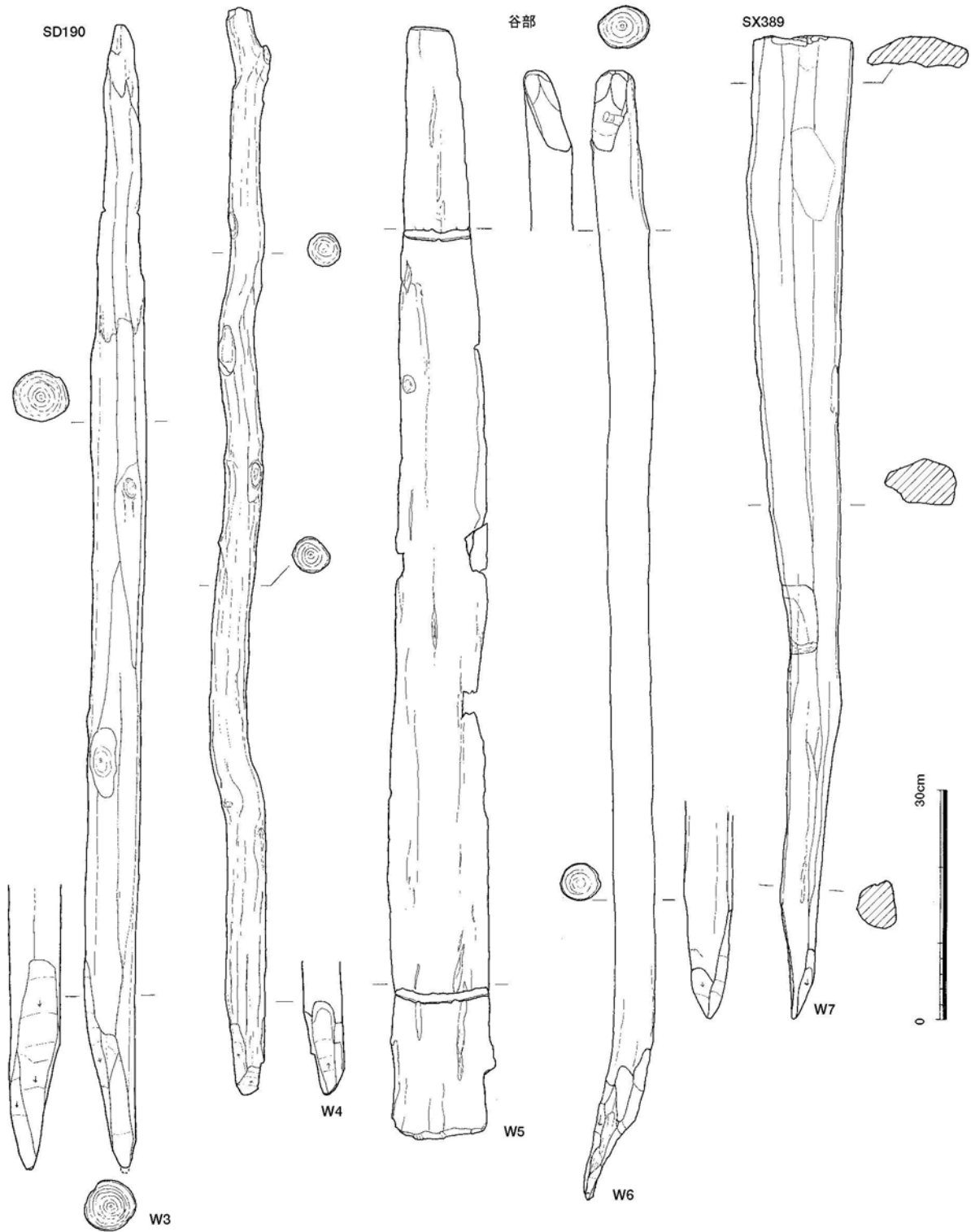


Fig.59 SD190・谷部・SX389出土木製品 (1/8)

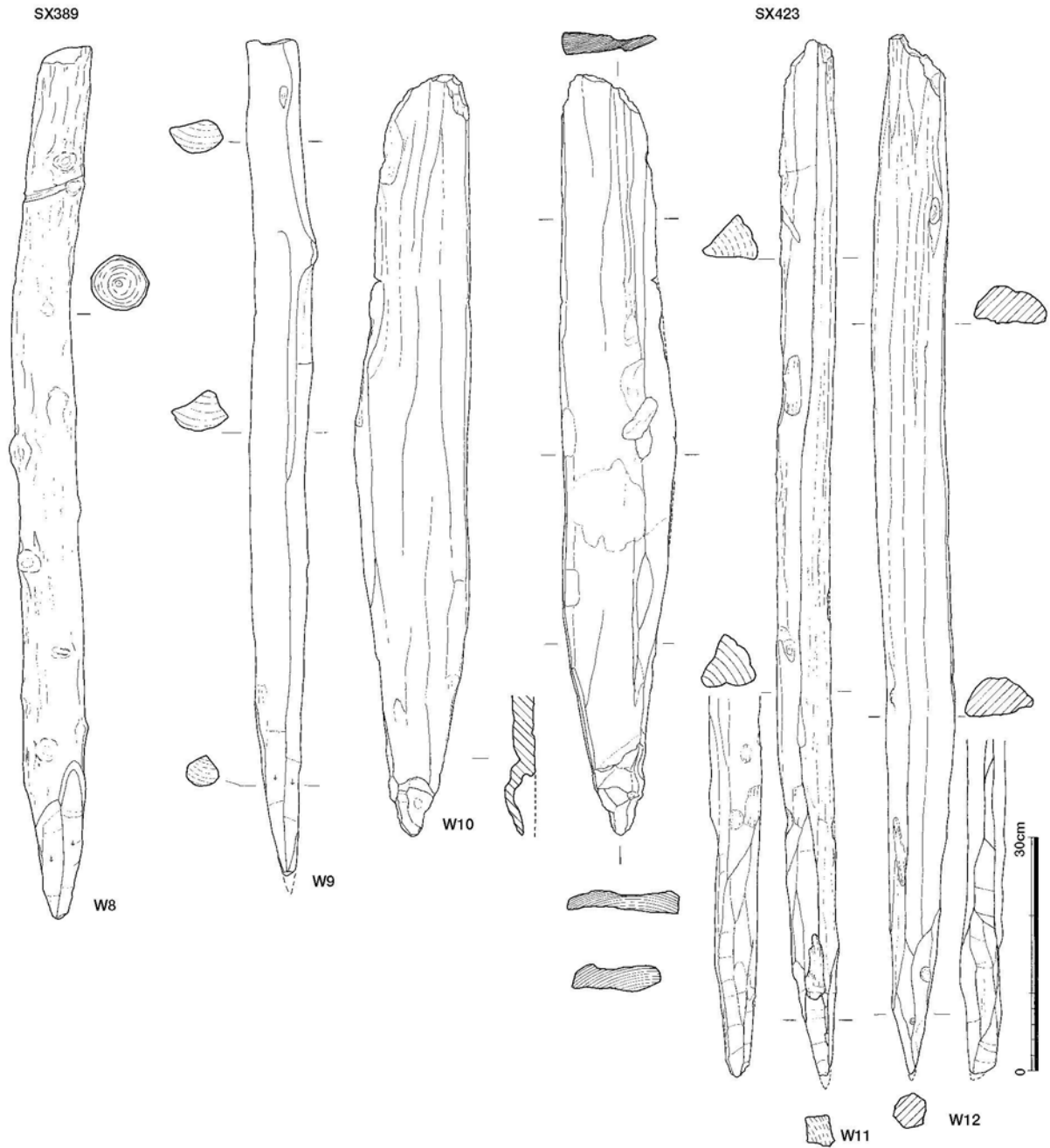


Fig.60 SX389・423出土木製品 (1/8)

どが出土しているが、大半は水田以前の古い時期のものである。

79～82は須恵器。79はIV a 期の坏身。体部は回転ヨコナデ調整。80は蓋細片。8世紀前半のものか。81は小型の壺の胴片。外面は灰カブリし斑を呈す。頸部内面にしぼり痕が残る。82は臑片。肩部に円形の透孔がある。ナデ調整で内面に指押え痕が残る。83～93は土師器。83～85は壺。83は長頸壺口縁片で調整はヨコナデ。84は二重口縁壺片。古墳時代初め頃か。85は口の窄まる壺。口

縁はやや内湾し直立する。頸部内面には指押え、胴部外面はナデ調整で内面はハケ目。86～88は甕。86・87は小型甕の口縁部で、86は口端部が丸く、87は平坦になる。86の胴部外面は摩滅するが、内面はヘラケズリ、87の外面はタテ又はナナメのハケ目を行う。内面はいずれもヘラケズリ。88は頸～胴部片。胴部外面は摩滅がするが平行のタタキ痕、内面には粘土接合痕が明瞭に残る。89は壺か鉢。口縁部片。復元口径7.6cmで口端部の表面の剥落は著しい。90は口縁が開く鉢で調整はナデ。91～95は土師器の高坏。91は坏部片で、底部と口縁部の境には粘土塊が残るが明瞭な段を持つ。内底には焼成後刻まれた線刻があった。92・93は同形態の脚部片。94は脚部筒部片。外面ヘラケズリ後ナデ、内面はナデ調整。95は脚部片で筒部が中実で裾部が短く大きく開く。外面は丁寧なナデ又はミガキ調整。裾部は細かいハケ目が残る。直径1cmの円孔がある。古墳時代前期～中期のもの。

96～106は弥生土器。96～98は複合口縁壺口縁片。96・97は直立する複合口縁で、調整はナデ。97は細かいハケ目調整。98は後期の山陰系の複合口縁壺。口縁部内外面に櫛描波状文を施す。99・100は壺の胴部細片で、櫛で数条の沈線と間に波状文を描く。101は偏球の胴部片。調整は外面はやや摩滅する上半はヨコミガキ、下半はナデ。内面は粗いハケ目。102は頸部に三角突帯が巡る壺胴頸部。内外面細かいハケ目調整で、外面肩部に3条の並行する刻線がある。103は弥生時代終末から古墳時代初めの甕胴部片。下半部に刻目の付く突帯が1条巡る。104は高坏坏部で、後期中頃の山陰系の九重式土器か。調整はナデで、体部と底部の境には突帯状の張り出しがある。105は後期前半頃の器台。調整は胴外面から脚端部・内面下半迄ハケ目。内面上半は強い指ナデ。外面には黒斑がある。106は大型器台の透かし部細片。外面赤色顔料が塗られている。厚みは0.8cmを測る。107は板状の把手片か、調整はナデ。108・109はミニチュア土器の鉢と高坏。手捏ね仕上げで指調整痕が明瞭に残る。

252は投弾である。完形で全長3.4cm、最大径1.9cmを測る。丁寧なナデ仕上げである。253は土錘である。分銅形を呈すが、半分程欠損する。摩滅がひどいが、ナデ仕上げか。残存長6cm、最大幅3.7cmを測る。254は焼けた粘土塊。表面は焼けた感じで、孔が空いている。

S9は太形蛤刃の石斧。全長12.4cm、最大幅6.9cmを測る。全面に敲打調整痕が残るが、刃部は研磨で作出す。使用で刃先が潰れ、全体として欠損がひどい。石材は玄武岩か。S10は叩石。長軸長9.7cm、短軸最大幅6.5cmを測る。表面は磨りまたは自然面で、上下両面と左右側面、下小口面は叩き使用痕で窪む。

SS410 大畦1の東側の大区画である。この区画は大畦1に並行する畦と大畦3に並行する小畦で3区画に細分されている。ただ遺構の残りは悪いのでこれが本来のものとは思われない。畦は断面図②では基盤の黒色粘土で高さは5cm程である。大畦1は第2面の条里の大畦とほぼ同方向のN-31°30'-Wに取り、Q-24区で北側に曲がり消滅する。この区画に伴う水口はQ-22区で検出したSD396から導水するSX397である。

出土遺物(Fig.66・76、PL.80・85) 弥生土器や古墳時代～古代の土師器・須恵器、黒曜石・磨石などが出土。

110は須恵器坏。7世紀後半～8世紀前半頃のものか。111～114は土師器。111は杯口縁部片。11世紀の杯の可能性があり、水田面の時期としては異なるので上層からの混入か。112・113は古墳時代後期6世紀頃もの。112は壺の口縁部で、口縁内外面はハケ目、胴部内面はヘラケズリを行う。113は砲弾形の甕。把手がつくと思われるが不明。底部の蒸気孔は欠失し不明。114は天井部が欠失する鳶口の沓形支脚。頂部には径2.8cm強の円孔がある。115はミニチュア土器の脚部。指押え痕が明瞭に残る。二次的被熱を受けている。

S22は黒曜石の石鏃。鏃長1.9cmを測る。基部は平基で、剥片を利用して側縁に二次調整を加える。

SS424 大畦1の西側で、南側を大畦2で限られる区画。この区画は西側に畦が残る。現状では大畦1と西側谷部に並走する最大幅1m前後の畦との間を仕切る2条の東西小畦で3～4小区画に細分される。この大区画に伴う取排水口はSX423・428でSS192からの流れであろうか。小畦部分には水口がなく畦越で水が流れたのであろうか。

出土遺物(Fig.66・75、PL.84) 弥生土器や古墳時代後期の土師器・須恵器、黒曜石片・砥石などが出土。

116～118は須恵器。116は坏身。IVa期のもの。外底部は回転ヘラケズリで、体部上半から口縁部

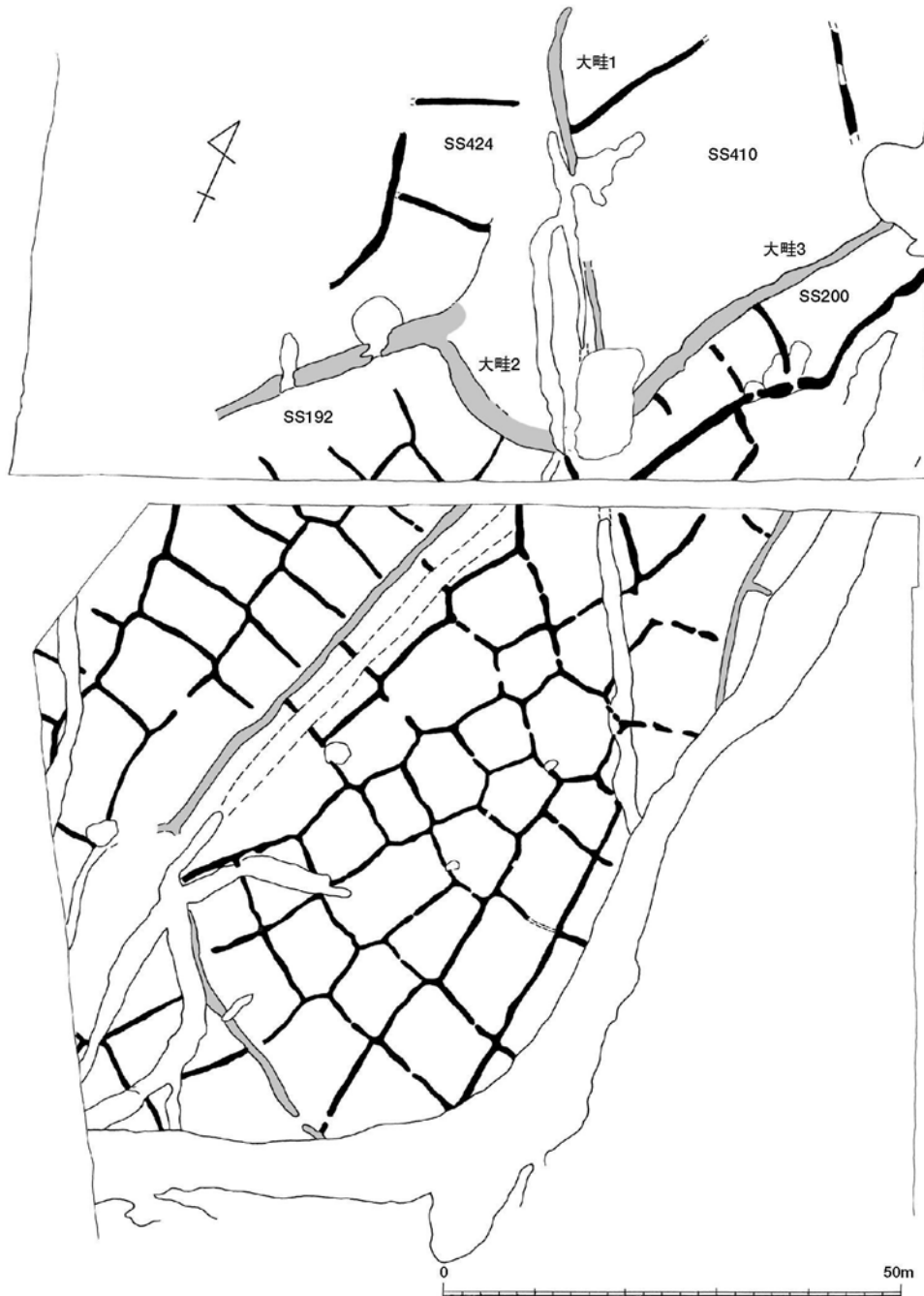


Fig.61 第5次・6次水田配置図 (1/800)

は回転ヨコナデ調整。117はV期の坏。体部から口縁部内外面は回転ヨコナデ。118は坏か高坏の口縁部片。調整は回転ヨコナデ。119は口縁部がやや屈曲し開く小型の鉢または壺。器壁は摩滅し調整不明。

S11は方形状を呈す敲石。上下両面と左側面は磨り研磨で敲打使用痕や窪み残る。石材は石英斑岩である。

⑥ 取排水(水口)遺構(SX)

SX397(Fig.64、PL.38) 水田SS410に付く、大畦1を切ってSD396から取水する水口である。畦に直交して細長く窪む。規模は長径10m、最大幅6mを測る。底面は畦東で一番深くなる。埋土は暗灰色粘質砂混じり上で、下層は粘土を含む。水口に直交して畦上に自然 灌木を利用した杭を打ち込んでいた。

出土遺物は弥生前期土器から古墳時代土師器などであるが、細片が多く図示出来るものはない。

SX423(Fig.60、PL.38・85) SS424に伴う大畦2を切って北に流れる水口。規模は南北径5.5m、東西径6mを測り、円形で播鉢状に窪む。畦の部分には二重の杭が打たれる。この部分では畦の部分も溝状に抉れており、流れで畦が壊れた可能性がある。弥生土器片などが少量出土している。

W11・12は水口部分に使われた杭。いずれも頂部を欠損とするW11は残存長137.2cmを測る。断面三角の割材で先端は四方向から削って尖らず。W12は残存長137.6cmを測る。半裁した材を使用しており先端は多方向から削りを加えて尖らしている。

SX428(Fig.64) SS424に伴う大畦2を切って北に流れる水口。規模は長径6m、最大幅2mで細長く浅く窪む。杭などの施設はなかった。遺物の出土はない。

⑦ 遺構面出土遺物

遺構検出時に出土した遺物で、大半が包含層の時期と重なる。弥生時代から古代までの遺物が出土している。東側高所部分、西側低地部分に分けて報告する。

東側高所部出土遺物(Fig.67・68・74・76、PL.80・83～85) 120～126は須恵器。120は天井部が扁平の蓋。天井部に扁平な摘みが付く。8世紀前半頃のもの。121は皿底部片。外底部はヘラケズリ。8世紀後半。122は坏片で8世紀前半のもの。123・124は坏蓋。123は天井部2/3は回転ヘラケズリ。125・126は坏身口縁部片。123～126は6世紀後半代のⅢb期のもの。

127～140は土師器で。127～129は坏。127は底部片。焼成は不良で全体に摩滅する。10世紀代のもの。128の体部はヨコナデで、外底部はヘラケズリ後ナデ調整。129は表面と胎土の色が違う。9世紀のもの。130・131は甕口縁部片で、131は8世紀前半のもの。以上はR-25区出土で古代の川に伴うものと思われる。132・133は小型壺。古墳時代後期の時期か。132は短頸壺。胴部外面は指押えで雑な仕上げ、内面ヘラケズリ。133はミニチュア土器で壺か。口縁部は窄まり復元で約4.8cmを測る。134～137は高坏。134は坏部と脚部を図上復元。全体に摩滅がひどく、坏部の調整は不明。5世紀前半代のもの。135～137は脚部片。135の内面はヘラケズリ、外面は摩滅するがナデ調整か。136は短脚で、裾部に4ヶ所の径1cmの円孔がある。137は大きく開く裾部で上半に3ヶ所の径6mmの円孔がある。138は大きく開く脚台部。内面細かいヨコハケ目調整。139・140は鉢。139は底部から屈折して口縁部が開く。摩滅し調整は不明。140の内面には酸化鉄分が沈着し、器壁は荒れる。弥生終末から古墳時代初め。141は壺口縁から胴部。胴部内面は粗いヨコハケ目調整。142～145は二重口縁壺片で、いずれも古墳時代前期初めのもの。142の外面には沈線状の文様が入る。143の調整は頸部ナデとミガキ。144の調整はナデ。145は大型壺で、口縁端部は平坦で僅かに窪む。146は弥

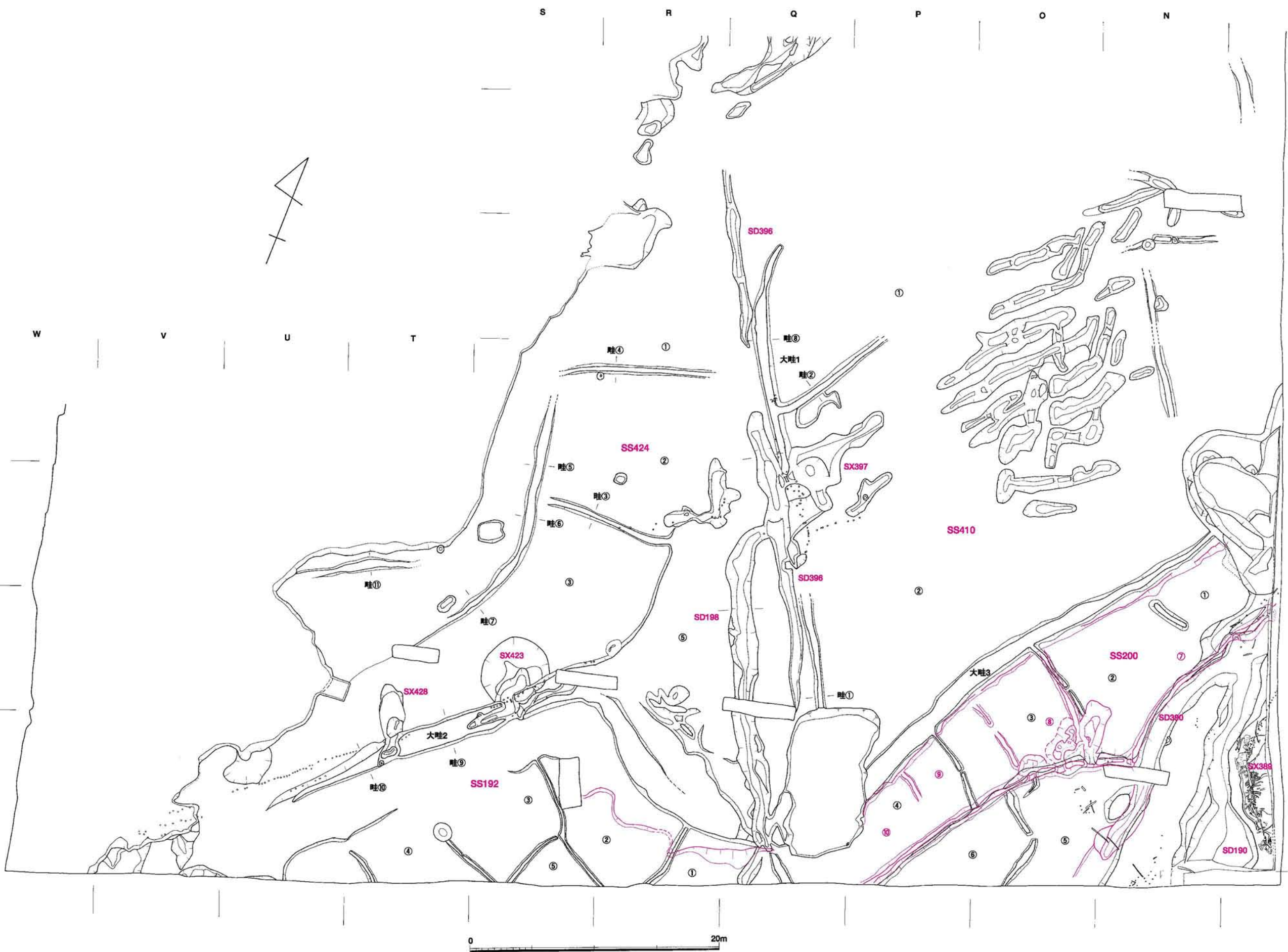


Fig.62 水田配置図 (1/300)

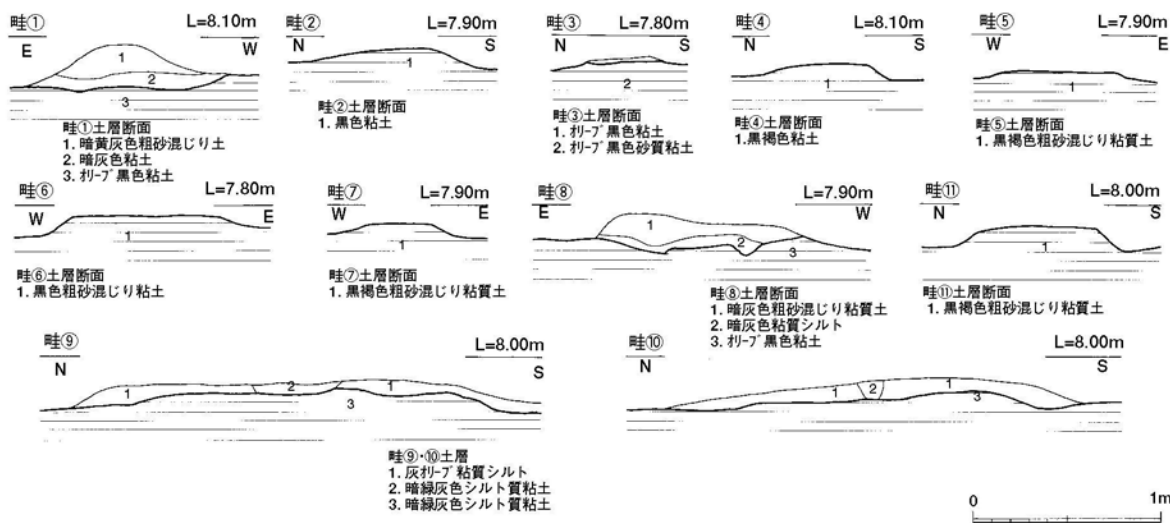


Fig.63 各哇断面図 (1/40)

生後期土器の壺肩部片か。外面櫛目波状文とハケ目を施し、内面は粗いヨコハケ目調整。

256は杓子片。全面指押え仕上げで、残存長6.3cmを測る。257は扁平な台形状の土製品。長軸長3.9cm、最大幅3.5cm、厚み1.4cmを測る。胎土は精良。粘土を二つ折りして成形し、表面は丁寧なナデである。

S12・13は磨製の石砲丁片。S12は刃部が半月形を呈す。使用で刃部や表面の欠損が著しい。S13は刃部と背部が楕円形の形態。中期以降のもの。いずれも石材は輝緑凝灰岩か。S14は有溝石錘である。残存長3.55cmを測る。表面に十字の溝が巡る。石材は砂岩。S23・24は石鏃。S23は黒曜石製でS23は残存鏃長1.95cmを測る。先端と基部が欠損。剥片に両面に剥離調整を加える。S24はサスカイトの石鏃。鏃長2.0cmを測る。基部は凸基で両面に丁寧な剥離調整を行う。

西側低地部分出土遺物(Fig.68、PL.80) 147は須恵器坏底部片。外底部はヘラケズリ後ナデで墨書らしき痕跡が残る。内面に酸化鉄分が付着する。148は土師器皿。外底部は回転ヘラケズリ後ナデ、体部は回転ヨコナデ。いずれも9世紀前半代か。149は須恵器の甕口頸部。胴部外面はタテ並行タタキ後ナデ、内面はナデで同心円状の当て具痕が残る。150は土師器甕口縁部。胴外面から口縁部内面は粗いハケ目、胴部内面はヘラケズリ、8世紀後半頃のもの。151は口縁部が外反して開く台付鉢片。調整は磨滅がひどく不明。古墳時代前期初めか。152は器台口縁部片。頸部は上半にある。外面はナデ、内面も指ナデである。弥生時代後期か。

⑧ 包含層土器群 (SX)

遺構面下包含層で土器が集中する部分があったので、土器群として遺構番号を付し取上げた。

SX429出土遺物(Fig.69、PL.40・80) N・M-25区で検出した。弥生時代前期から土器や凹石や磨石などが出土。

153～156は弥生土器。153はほぼ完形のミニチュア土器鉢。指押え仕上げで、底部は僅かに平底気味である。153は鉢で器表の磨滅がひどく調整は不明。154は複合口縁壺で、内面には指押え痕とハケが残る。後期前半か。156は甕底部片。やや凸レンズ状の平底である。調整は胴部外面は粗いタテハケ目、底部と内面はナデ。後期中頃か。

SX430出土遺物(Fig.69、PL.40・80・81) O-21区で検出。弥生土器から古墳時代土師器、黒曜石剥片が出土。

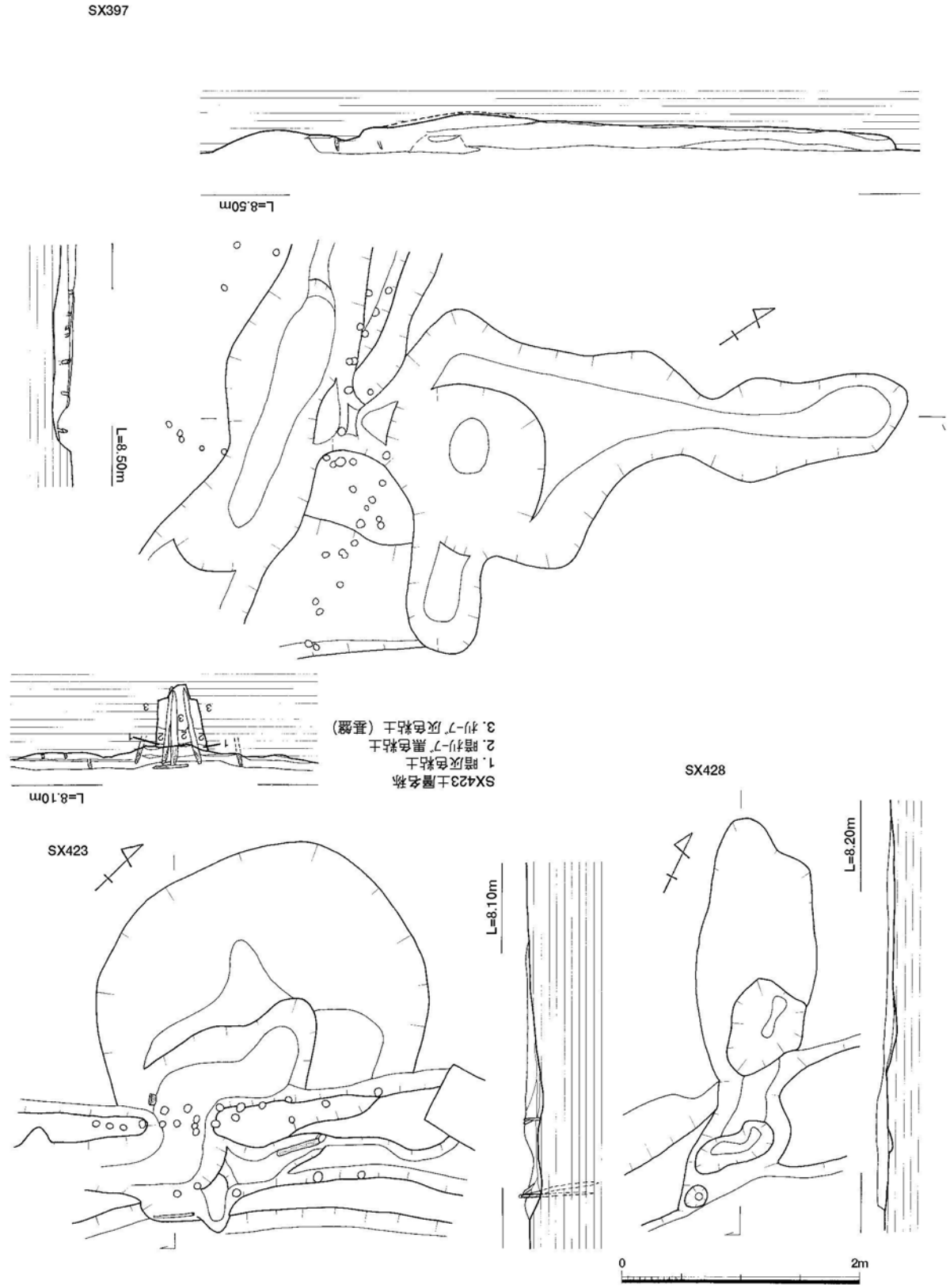


Fig.64 水口SX397・423・428 (1/50)

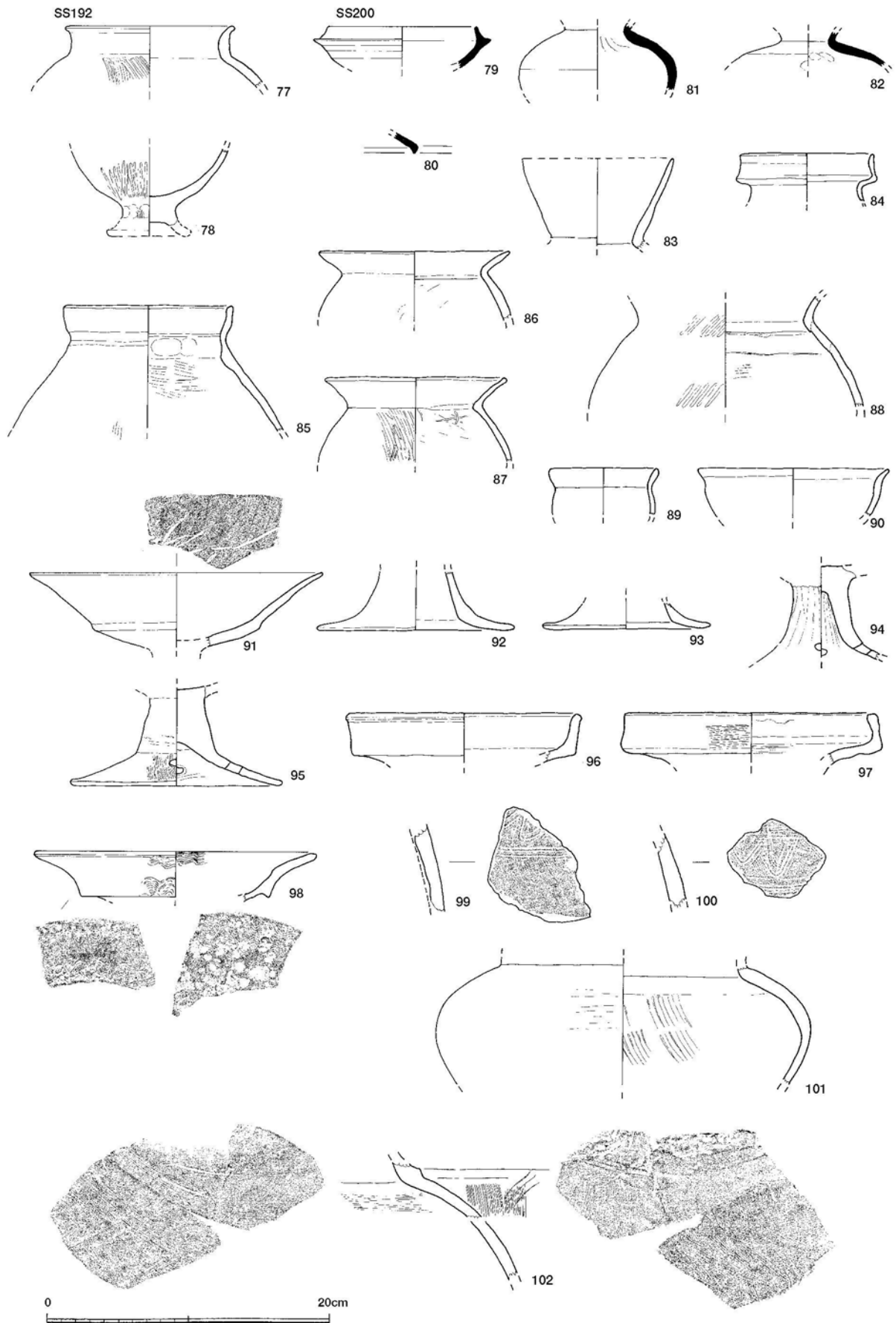


Fig.65 SS192・200出土土器 (1/4)

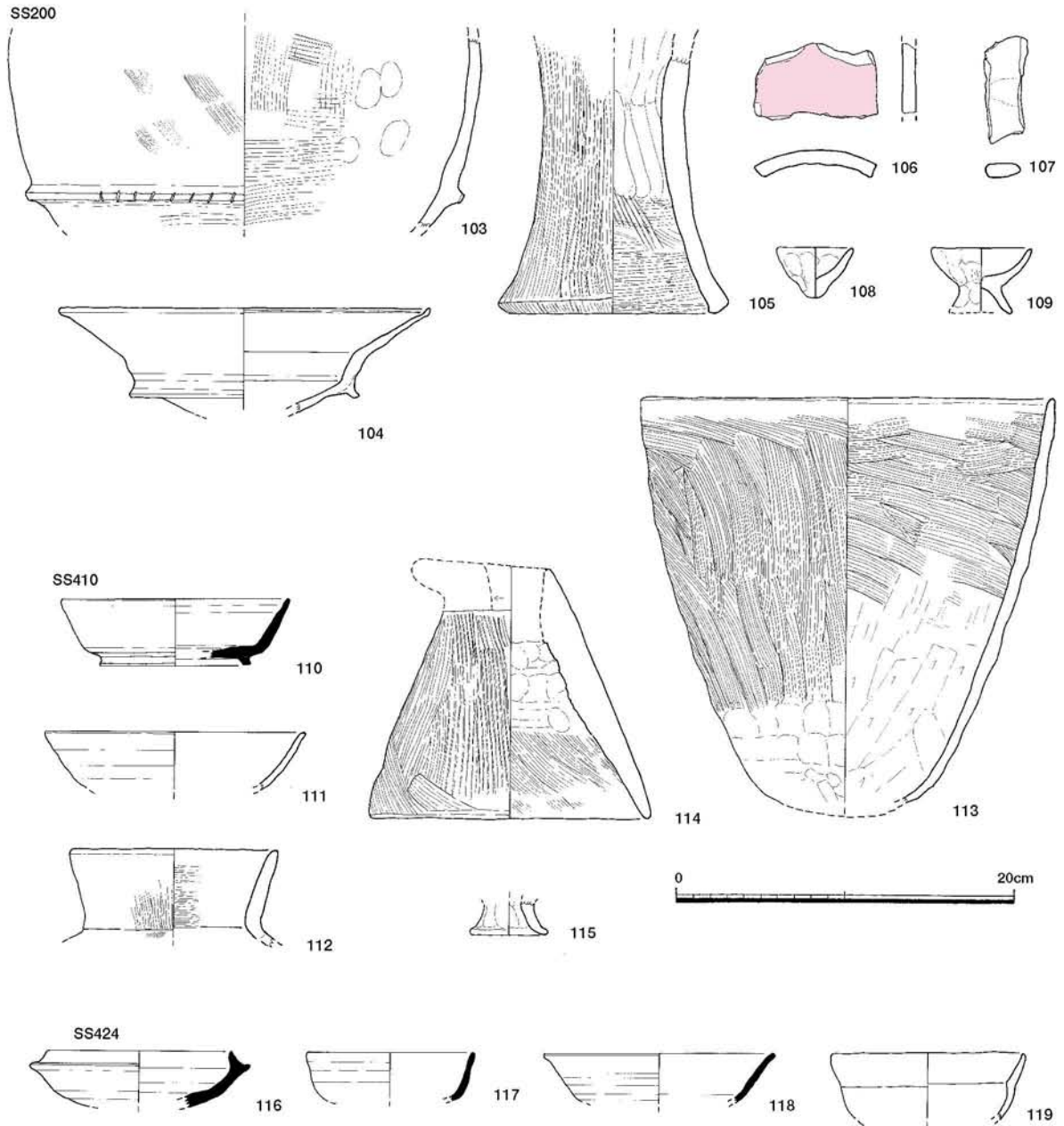


Fig.66 SS200・410・424出土土器 (1/4)

157~160は土師器の壺。157は頸が窄まる胴頸部。外面は丁寧なミガキ、内面はナデかミガキ調整。胴部外面には黒斑がある。158は胴部片。調整は外面がかなり摩滅するが、頸部にハケ目が残る。内面はナデで粗いヨコハケ目。159・160は短頸の口縁から胴部片。外面は工具によるナデで擦痕が残る。口縁内面はハケ目後ナデ、胴部内面はナデ調整。160は器壁はかなり摩滅するが調整はナデか。161~164は甕。161はかなり歪む口縁部片。器壁の摩滅はひどい。162・163は在地系の長胴甕。調整は胴部外面は粗いハケ目、内面は粗いヨコハケで工具痕が残る。外面には黒斑がある。163は中型甕で、胴部外面上半はハケ目、下半は板ナデ。頸部内面はハケ目、その他はナデ調整。全体に歪みが大きい。164は口縁部片。調整は口縁部外面は強い工具ナデ、口縁から頸部外面は粗いハケ目、内面は摩滅するがナデか。弥生後期末から古墳時代前期迄のもの。165は器台で口縁と底部片。全面に指押え痕が残る。弥生後期前半頃か。166は土師器の鉢で軽く外反する口縁を持つ。全体に摩滅がひどいが、胴部内面は工具によるヨコナデ調整か。胴部外面には黒斑を持つ。

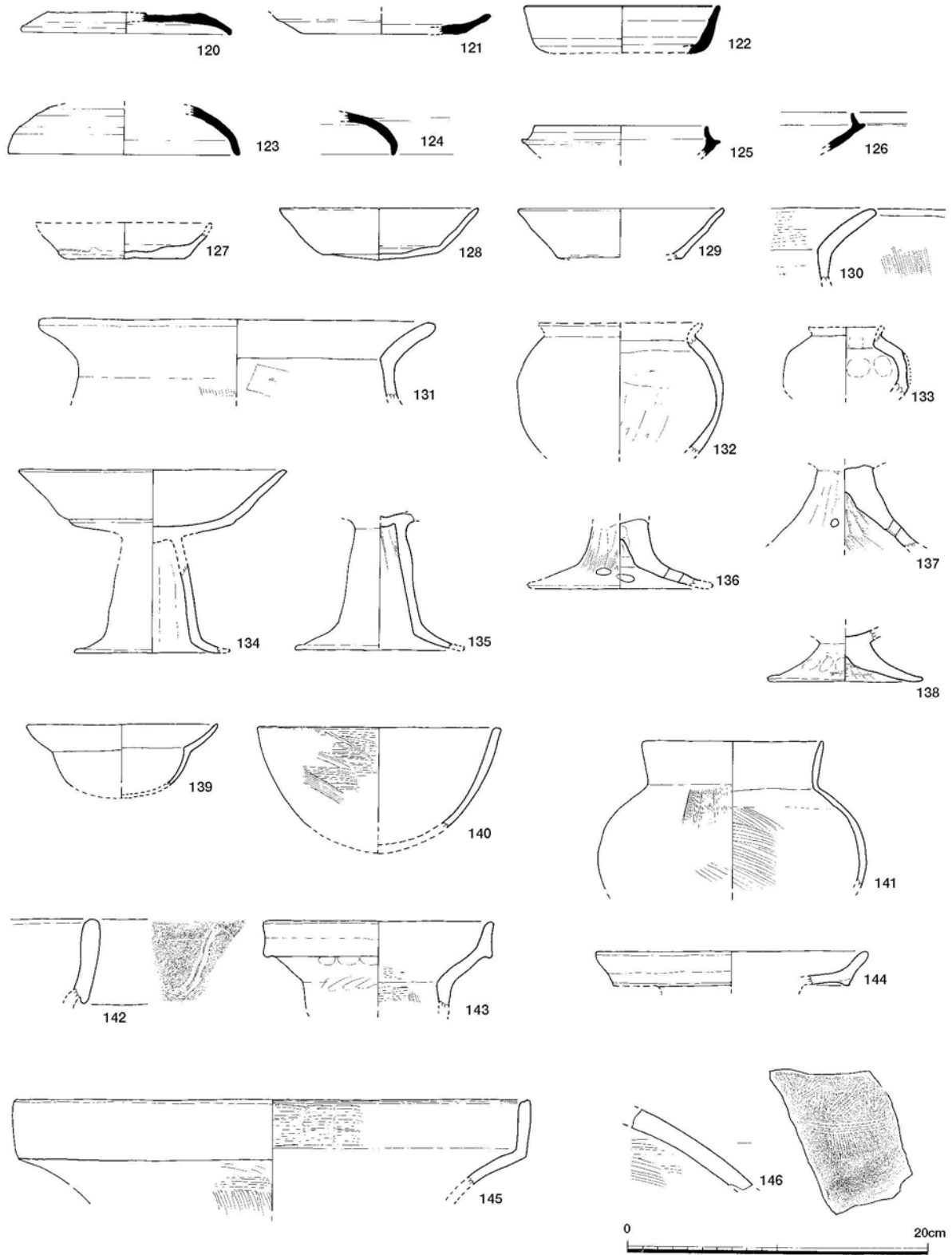


Fig.67 遺構面出土土器 ① (1/4)

167・168は土師器の台付鉢。167は2/3片、168は脚部を欠失する。調整は167の胴部内外面はヘラミガキ、168の胴部はケズリかナデ、167の脚部外面はタテ・ナナメのハケ目、内面はヘラケズリ後ナデ。古墳時代前期前半か。

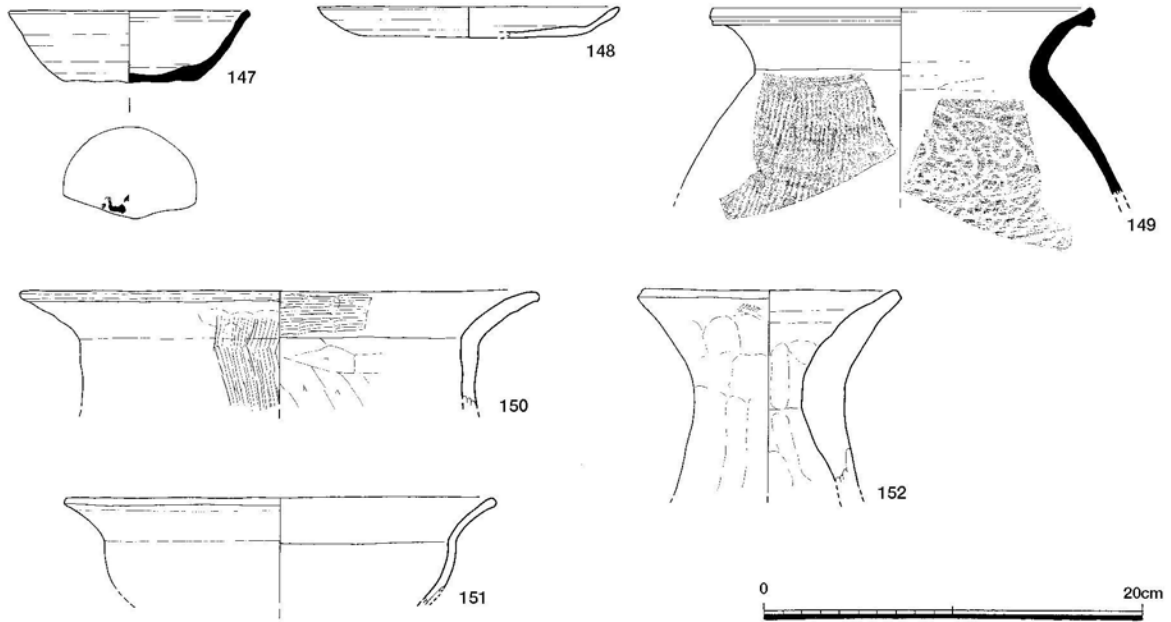


Fig.68 遺構面出土土器 ② (1/4)

SX431・432出土遺物 (Fig.70、PL.40・81) SX430西側の大畦下で検出した土器群。弥生時代後期から古墳時代前期の土器が出土。

169～174は上師器の甕。169～172は小型の甕。169・170は口縁から胴部である。調整はいずれも胴部外面がハケ目、内面がケズリとハケ目。口縁部はナデで、170の外面にはススが付着する。171・172は口縁部。171はやや歪みがある。調整は171の胴内面はケズリ、172の口縁内面はハケ目。173・174は中型の甕。173の胴部外面はやや摩滅するが、調整はナメの並行タタキ、内面上半はナデで細かいヨコハケ目。174は布留式土器甕の胴部片。胴部最大径は20.6cmを測る。外面はハケ目、内面はヘラケズリ調整。175は大型の頸部は窄まる壺の胴部片か。胴部の器壁は薄く、外面並行タタキ、内面は丁寧なケズリで当て具痕が残る。176・177は鉢。176は体部外面ミガキとハケ目、内面は丁寧なナデ調整。177は器壁の摩滅がひどいがナデか。178～183は高坏。178・179は坏部。178の調整は口縁外面はハケ目後ナデ、底部はミガキか。内面はナデで細かいハケ目が残る。179の調整は178とほぼ同じ。180～182は脚部。180は外面ヘラナデ後細かいハケ目、内面はナデで奥にはシボリ痕が残る、裾内面にはヨコハケ目。焼成前穿孔の径1cmの円孔が4ヶ所ある。181は大きく湾曲して開く形態。全体に摩滅がひどいがハケ目がかすかに残る。182は筒部で、調整は外面はナデ、内面はヘラケズリ。183は弥生後期中頃の大型の高坏でSX432出土。復元口径は34.2cmを測る。坏部は摩滅がひどいがミガキか。口縁部外面には黒斑がある。脚部は外面タテハケ目後ナデ、内面はナデ調整でシボリ痕が残る。径1～1.1cmの円孔が4ヶ所ある。184は古墳前期の小型器台で、摩滅し調整は不明。185は山陰系の鼓形器台片。外面はナデとハケ目、内面ヨコハケ目後ナデ調整で工具痕が残る。186は台付鉢脚部。外面ヘラミガキとナデ、内面脚裾はハケ目調整。

187・188は弥生後期後半頃の器台。187の外面はナデ後タテハケ目、188はナデで裾部に並行叩き痕が残る。内面はいずれも指ナデ調整。189は壺のミニチュア土器片。ナデ調整で内面指押え痕が残る。190は棒状の杓子把手片。指押え仕上げである。

⑨ 包含層出土遺物 (Fig.71・74・76、PL.81～85)

191～233は水田面下包含層から出土の遺物である。以下はO・P-20・21区の大畦下あたりで出土。191は須恵器の甕胴部。肩部に直径1cmの円孔がある。

192～213は土師器。192～201は土師器の甕。192・193は小型甕口縁部片。192の胴部内面には粘土接合痕が残る。193の外表面にはススが付着。193～201は中型の甕。198・200以外は布留式系の甕。196と197の胴部中央には1条の波状の沈線が巡る。198の胴部の調整はナナメの並行タタキ後ハケ目。内面はヘラケズリ後ナデ。黒斑がある。200は頸胴部片。胴部外面はナナメの並行タタキ後ナデで、内面はケズリ後ナデ調整、頸部内面には粘土接合帯が残る。201は全体を復元した。胴部外面はナナメハケ目、内面はケズリとナデ調整で指押え痕が残る。口縁部はヨコナデ調整で口端部は内面にわずかに段を持つ。外面には黒斑がある。202～204は土師器の壺。202は小型の広口壺か。器壁は摩滅が著しく調整は不明だが内面はケズリか。203は口縁部が内側に屈折する短頸壺。器壁は薄く、全体に摩滅し調整は不明。焼成は不良だが胎土は精良。204は長頸壺。外面は口縁から胴部まで丁寧なナデ又はミガキ調整、胴部内面はハケ目である。205・206は小型丸底壺で、浅い丸底の体部から口縁部が外折して開く形態。205の調整は丁寧なナデ。207は口縁が広く鉢か。調整はナデと思われるが、全体に摩滅がひどい。208～212は高坏。208は坏部片。口縁は歪みがある。外面と内底面は暗文風のヘラミガキ、口縁内面は摩滅があるがヨコヘラミガキ調整。209～212は脚部片。いずれも円形の透かし孔を持つ。裾が大きく開く209・210と、開きが弱い211・212の二種類に分かれる。前者が時期的には新しい。213は外来系の小型器台。脚部に焼成前穿孔の円孔が2ヶ所ある。外面は丁寧な細かいミガキ。214・215は古墳前期の丸底の鉢。214はやや歪むが、内面にハケ目が残るが丁寧なナデ調整。215は大型の鉢で、外面ナナメハケ目後ナデ。内面はミガキに近いナデ調整でハケ目や擦痕が残る。216は古墳時代前期の台付鉢の坏部から脚片。坏部内外面は丁寧なミガキ仕上。217～219は弥生土器の器台。いずれも上部にくびれを持つ筒型の形態。後期後半代のものか。217の外面はタテナデ、内面は指ナデ調整。218の外面はタテハケ目、内面はナデ調整。219は厚手で外面ナデ、内面はシボリ痕が残る。220～222はミニチュア上器。いずれも手捏ねで、指押え痕が残る。220は古墳時代のものか。221は平底の鉢。222は鉢であるが、平面形態が角鉢気味である。223は弥生後期後半の複合口縁壺口縁片。外面に竹管文が付く。224は古墳時代前期の大型甕の口縁部小片。頸部に断面三角の刻目突帯を一条巡らし、内外面ハケ目調整。225・226は甕の同一の胴部片。225には扁平の刻目突帯が付く。226は線刻の文様が入る。227・228は壺頸胴部片。227は頸部に断面三角の櫛歯による刻目突帯が付く。肩部外面には櫛目工具による並行沈線とそれを挟む二条の櫛描波状文が入る。外来系のものか。228は後期の壺か。頸部に断面三角の突帯が付く。器壁は摩滅し調整不明。229は高坏で複合口縁状の坏部で、弥生終末頃の山陽系のものか。器壁は摩滅するがナデ調整か。ハケ目がわずかに残る。

230～233はR-20区で出土。230・231は土師器。230は小型甕口縁部で復元口径は9.6cmを測る。231は椀形の鉢で復元口径は12.4cmを測る。230は古墳時代後期のもの。232・233は弥生土器の甕口縁部。232は頸部に三角突帯が巡る。後期前半頃のものか。233は同一個体と思われる破片に線刻の絵画文様が入った破片がある。後期後半代のもの。234は後期前半の袋状口縁壺。口縁の屈折部に刻み目が付く。胴部中央と頸部との境に二条の三角突帯が付く。調整は頸部内外面はハケ目、胴部外面はハケ目とナデ、内面はハケ目。235は大型甕の胴部片。断面台形の刻み目突帯が1条巡る。内外面でハケ目である。後期頃のものか。

236はU-26区出土。完形の須恵器の坏で口縁部はやや歪む。外底部はケズリ。内面は酸化鉄分が

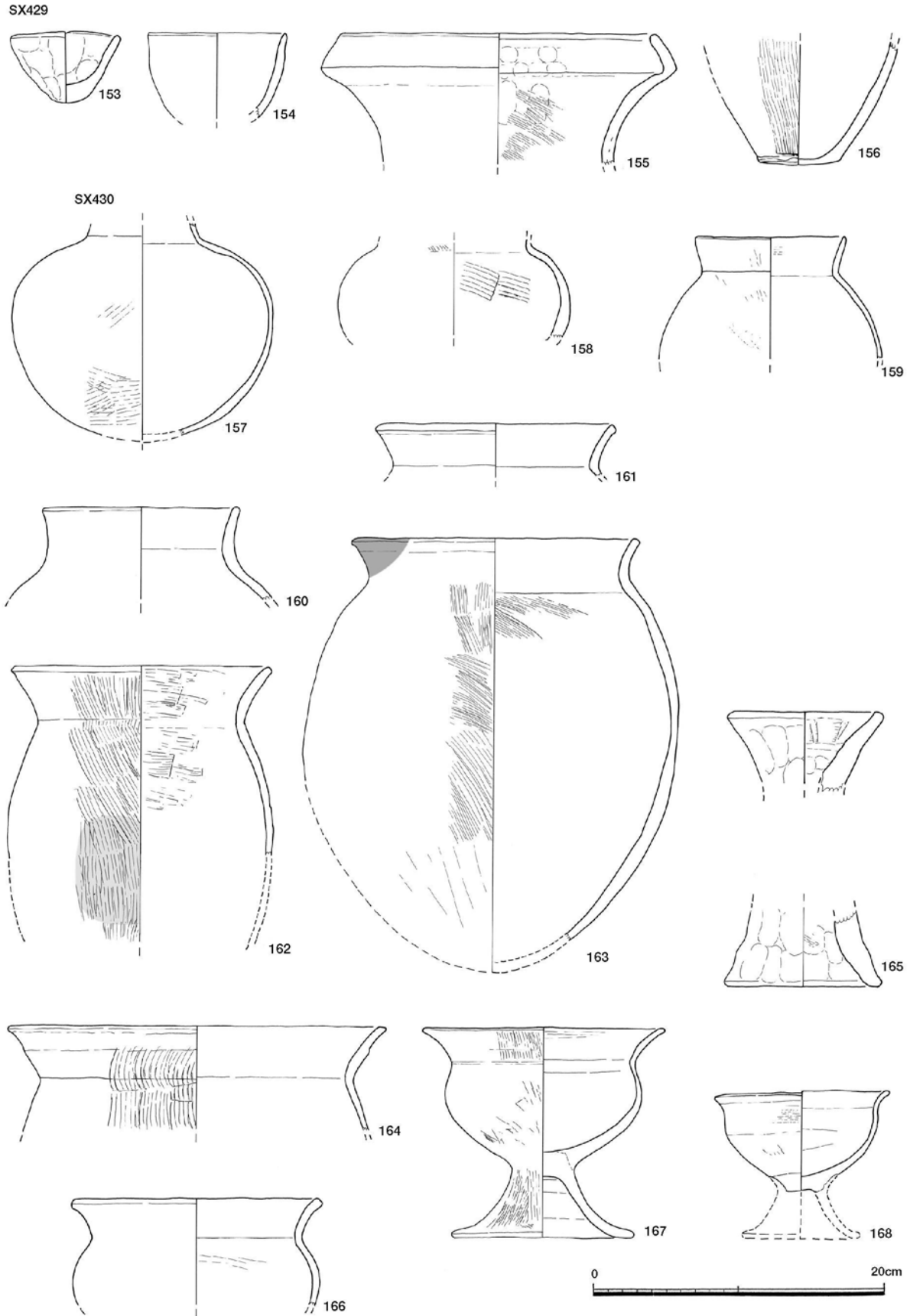


Fig.69 SX429・430,遺構面下包含層出土土器群 ① (1/4)

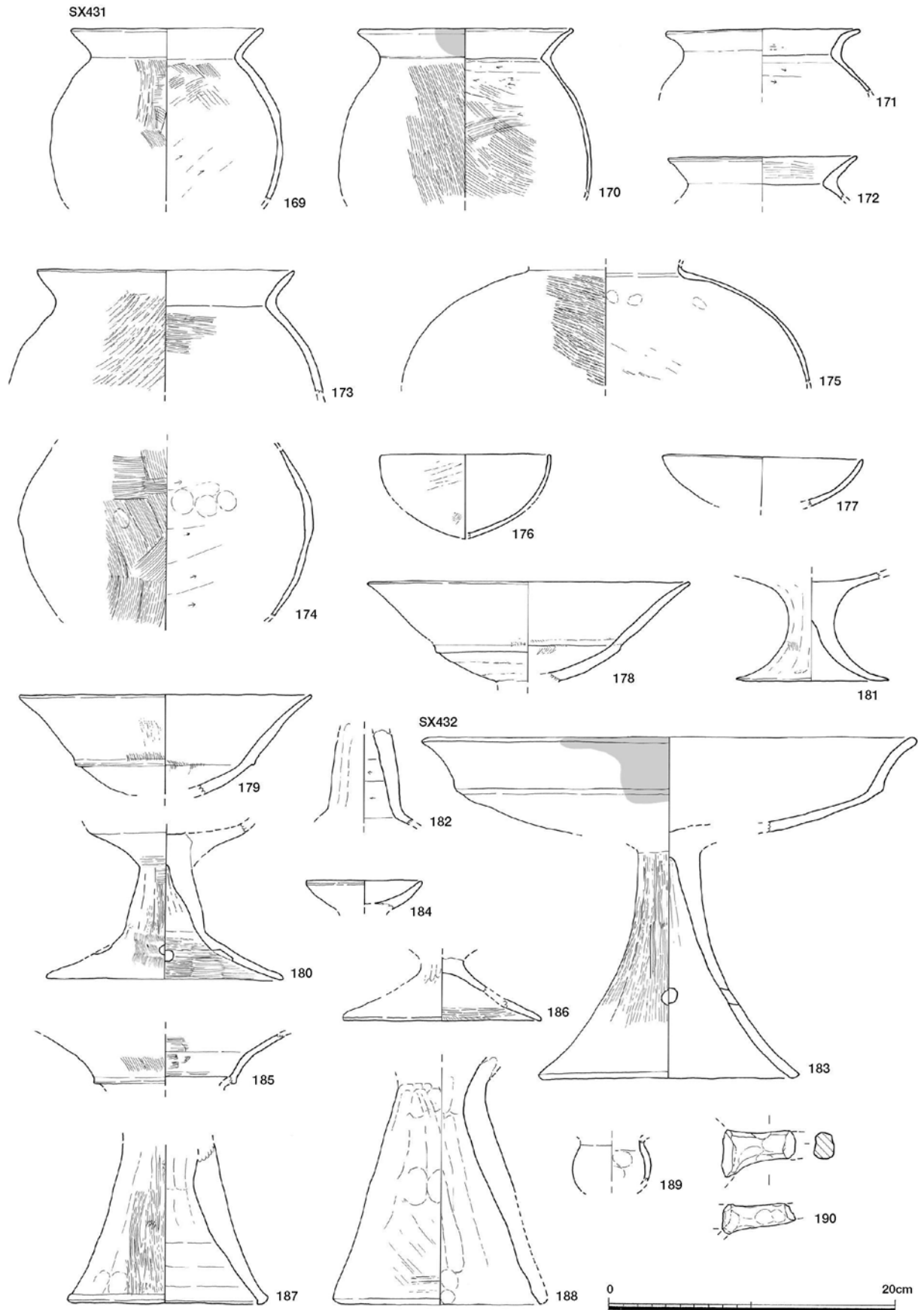


Fig.70 SX431・432,遺構面下包含層出土土器群 ② (1/4)

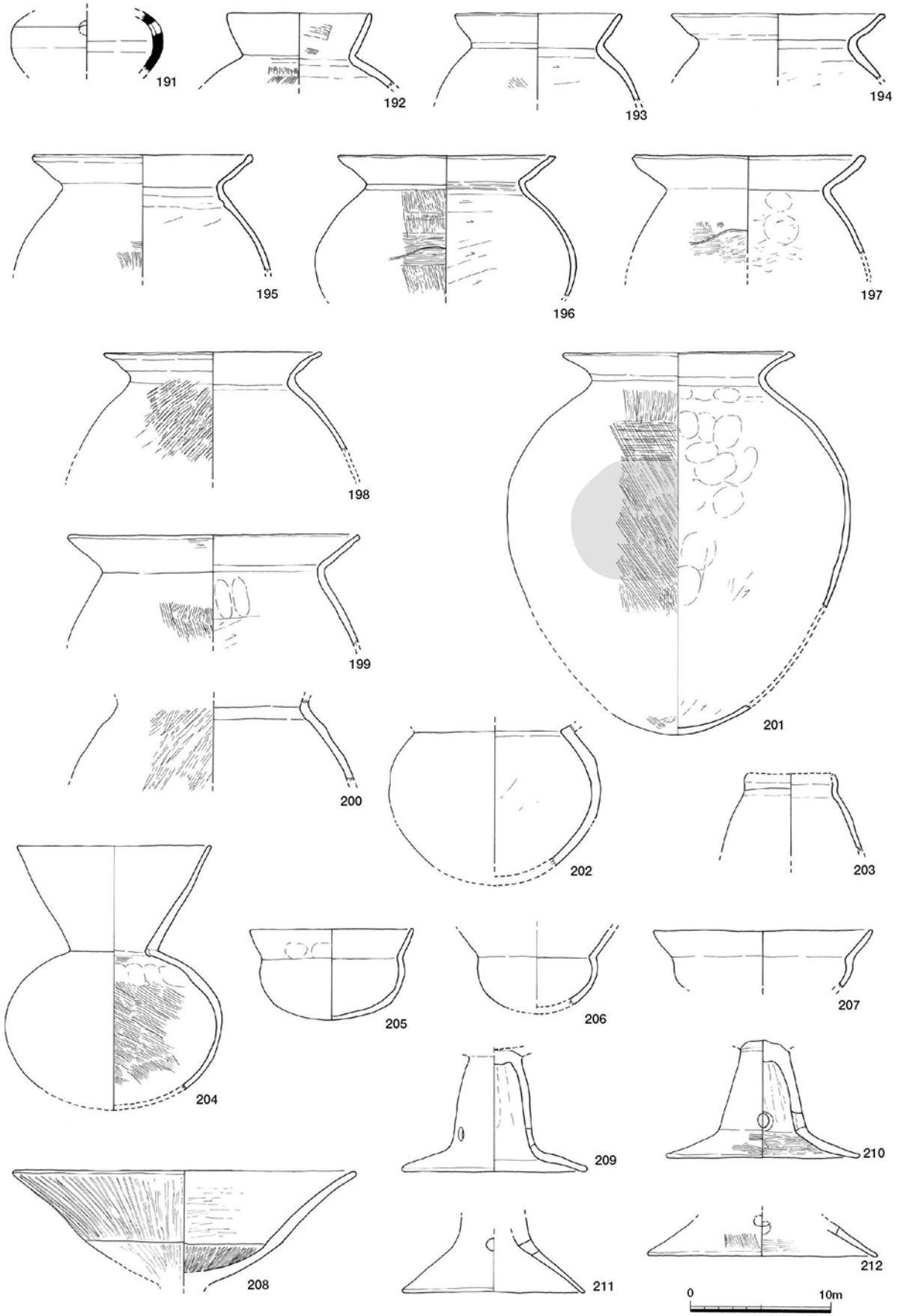


Fig.71 遺構面下包含層出土土器 ① (1/4)

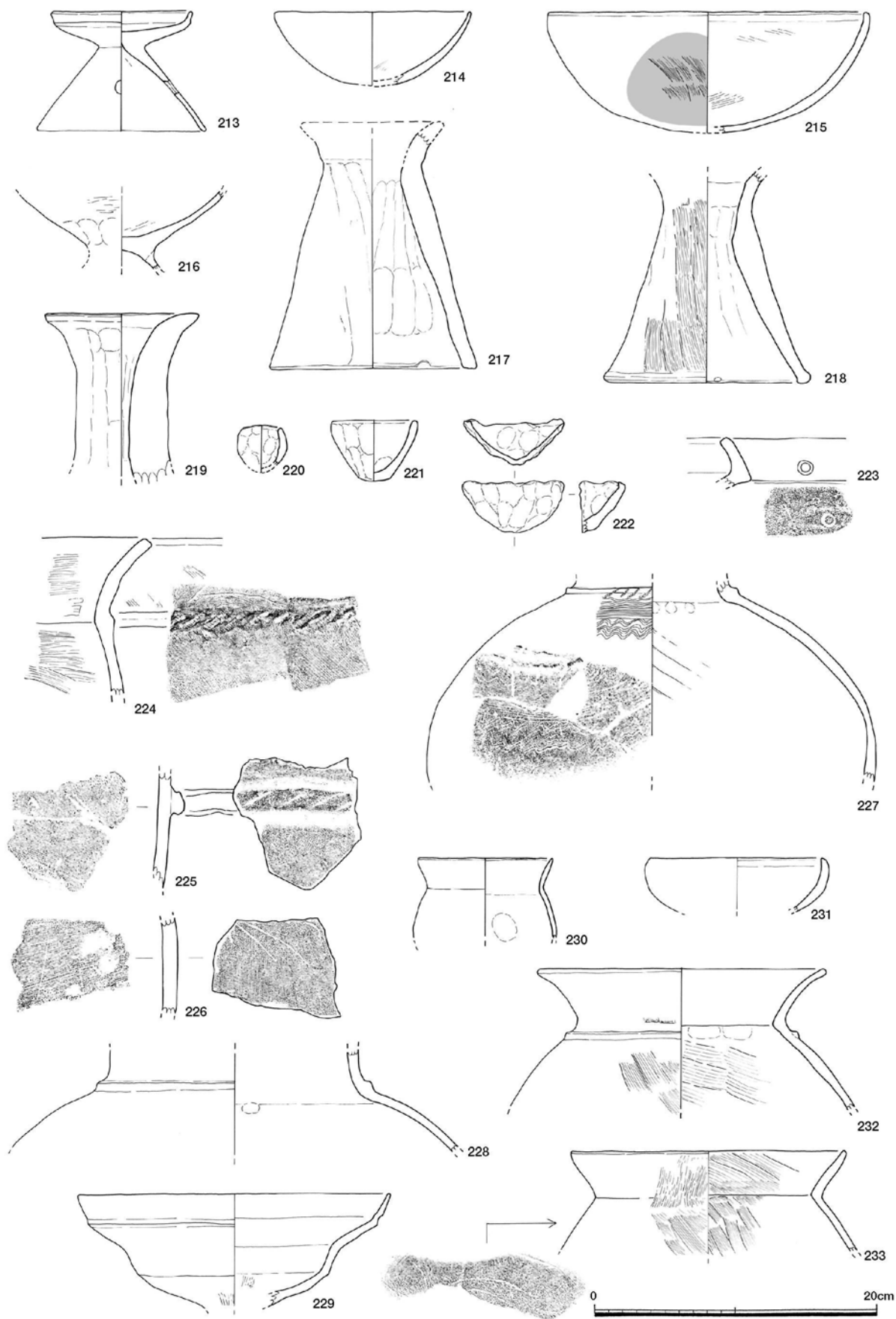


Fig.72 遺構面下包含層出土土器 ② (1/4)

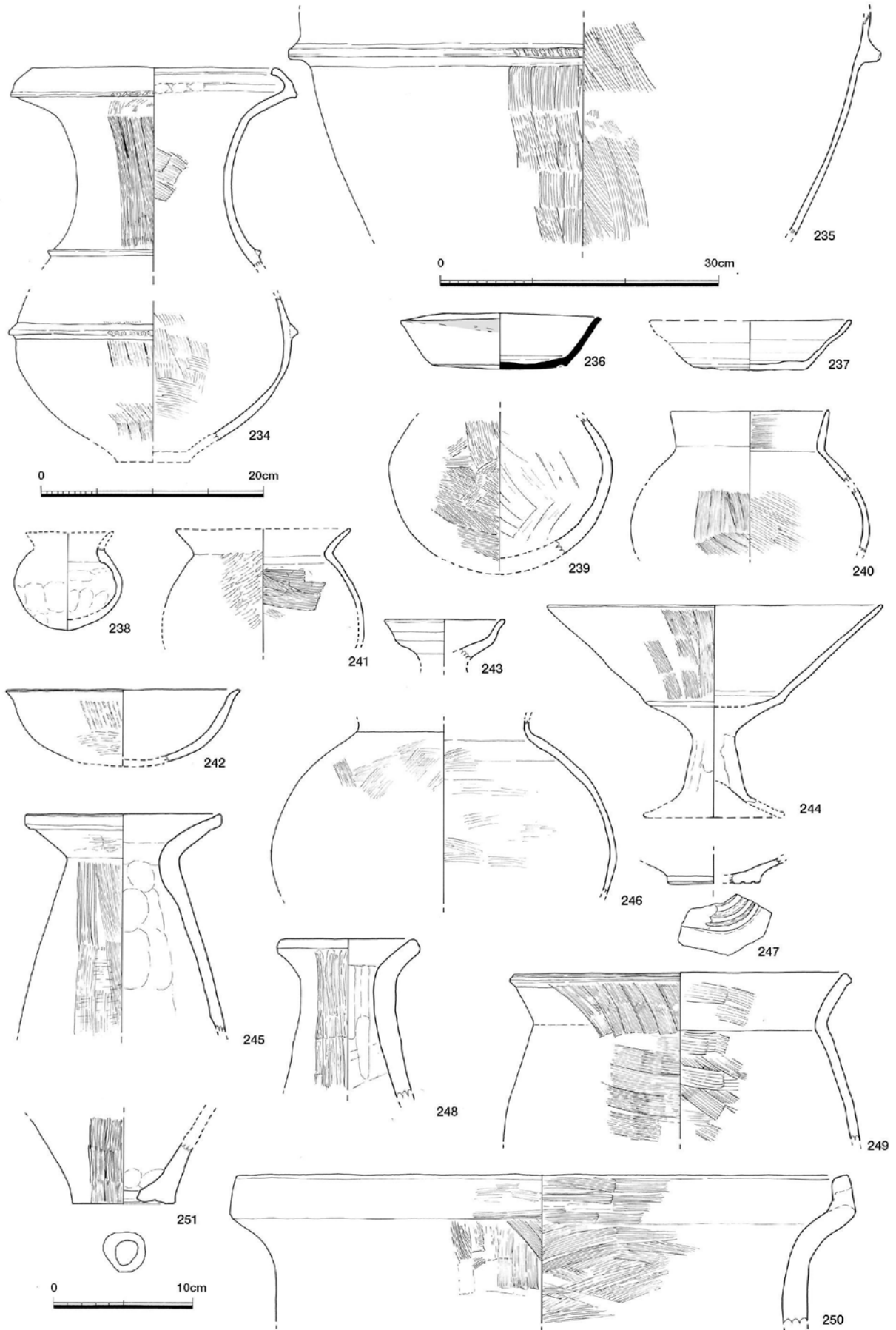


Fig.73 遺構面下包含層出土土器 ③ (1/5・1/6・1/4)

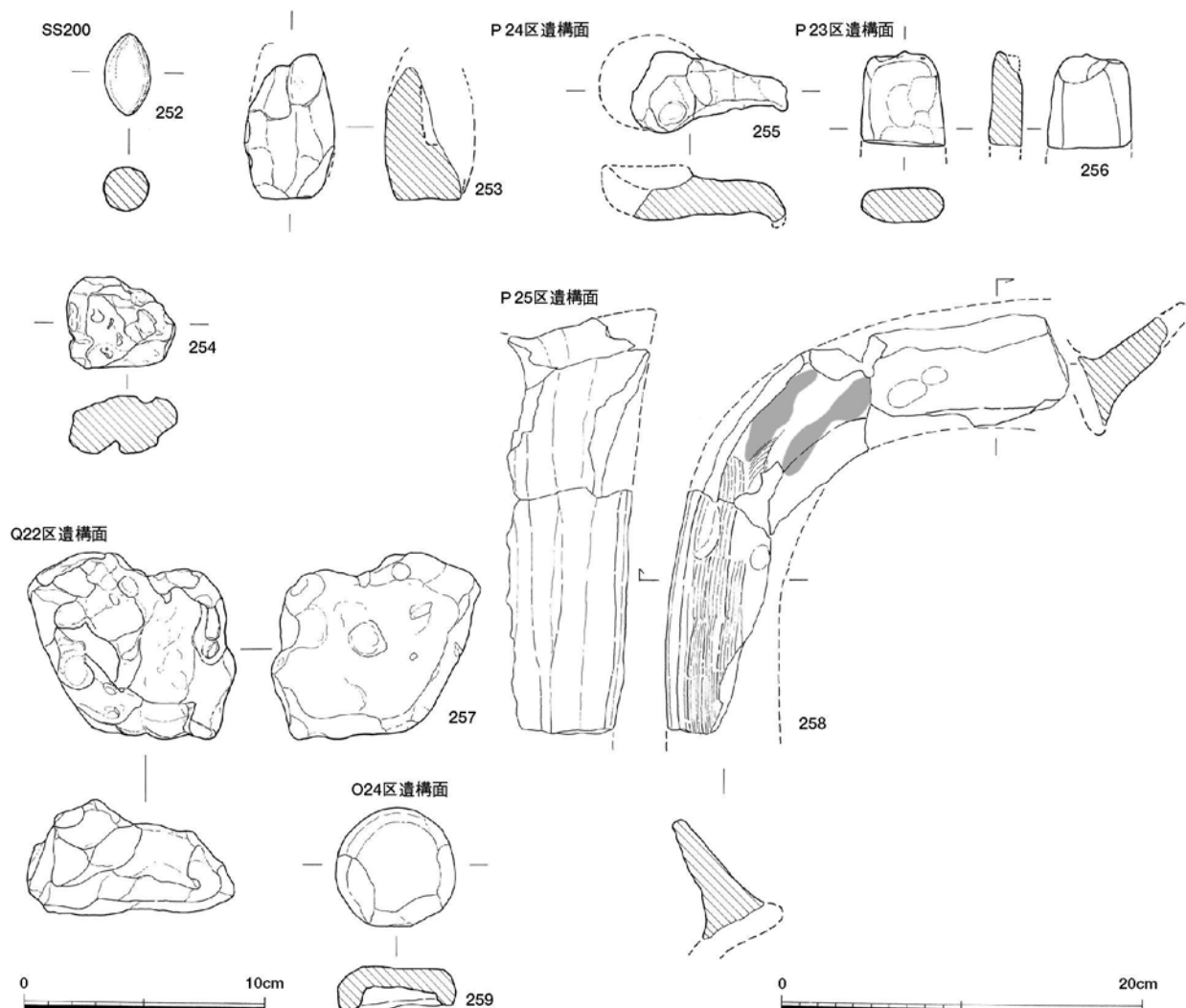


Fig.74 各遺構出土土製品 (1/3・1/4)

付着する。8世紀後半～9世紀前半。237～245は土師器。237・238は廃土出土。237は土師器の坏。外底部は回転ケズリ後ナデ、体部は回転ヨコナデ調整。238は土師器の小型壺。手捏ねで指押え痕が残る。239・240は土師器の壺。239はQ-22・23区出土。丸底で外面は細かいハケ目、内面は強いナデ調整。240はP-24区出土。直立気味の口縁で、調整は胴部内外面ハケ目、口縁部外面はナデ、内面はヨコハケ目。241はO-21区出土。土師器の甕。調整はやや摩滅するが胴部はナナメの並行タタキ、内面はナデと細かいヨコハケ目である。242はS-24区出土。土師器の椀形の鉢で、口端部は外反する。外面タテ又はヨコハケ目、内面は丁寧なナデ調整。243はP-22区出土。小型器台の口縁部片。古墳時代初めのもの。244はO-21区出土。高坏で脚部に比して口縁が大きく開く坏部を持つ。調整は坏部外面はタテハケ目、内面と脚部は丁寧なナデかミガキ。古墳時代前期前半のもの。245はP-23区出土。器台で頸部のくびれが強い。胴部外面はタテハケ目、その他はナデ調整。古墳時代前期初めのもの。246～251は弥生土器。246はV-25区出土。丸みの強い胴部を持つ壺。調整は胴部外面は摩滅するが、上半はナナメの並行タタキとハケ目、内面は板ナデ後ハケ目で工具痕が残る。弥生後期終末頃のものか。247は壺か鉢の底部でU-26区出土。底部に二重の同心円状の溝が

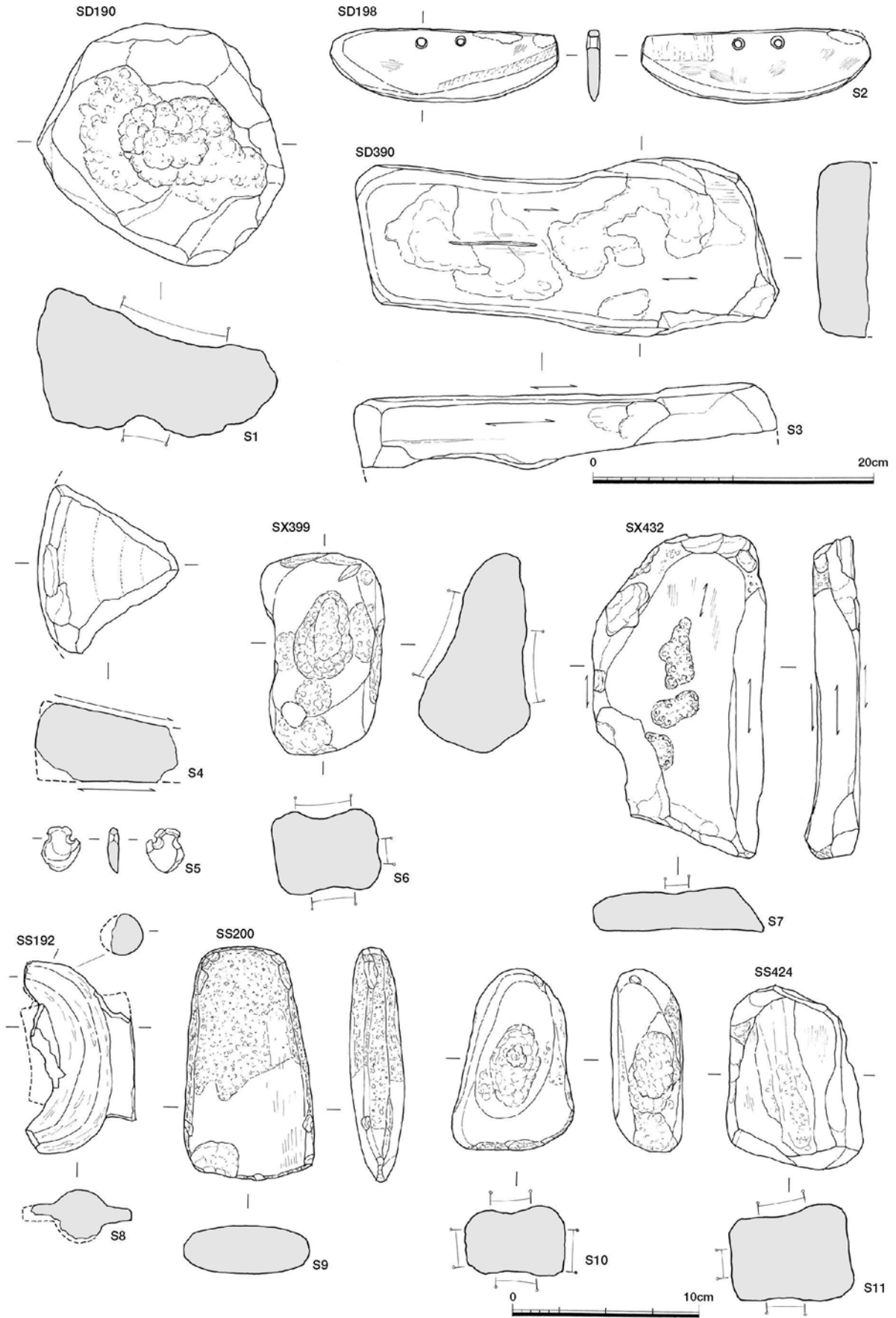


Fig.75 各遺構出土石器・石製品 ① (1/4・1/3)

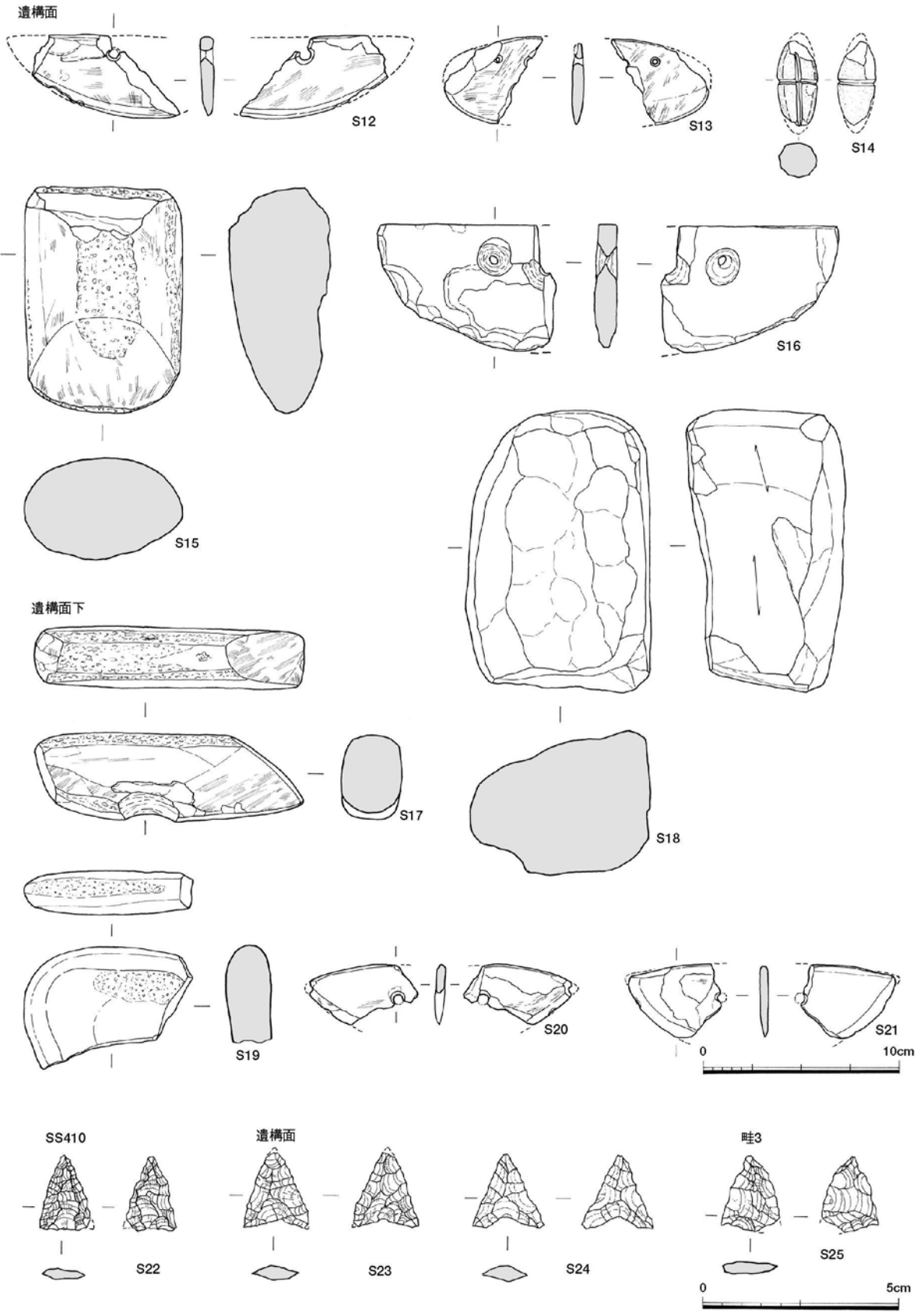


Fig.76 各遺構出土石器・石製品 ② (1/3・2/3)

切られる。248は器台でN-23区出土。頸部のくびれは上部にあるがやや弱い。外面タテハケ目、内面は指ナデ調整。249～251は甕。249・250は口縁部片で後期後半代のもの。249はV-27区出土。外面はナナメ、ヨコハケ目、胴部内面もヨコハケ目調整である。250はQ-21区出土。大型の複合口縁壺の口縁部片で、器壁は厚手で口縁部内外面細かいハケ目である。251は甕底部片で、底部に焼成後穿孔の孔がある。外面タテハケ目、内面はナデ、底部は雑なナデ調整。O-23区出土。

257は焼けた手捏ねの不定形状の不明粘土塊。長軸長10cm、短軸長7.7cm、最大厚4.8cmを測る。Q-22区出土。258は竈の底部の一部。ナデ調整で粗いハケ目が残る。使用によるススが内側に付いている。R-25区出土。259は円板状土製品で、高坏の脚部を再利用したものか。直径は4.8cmを測る。全体に摩滅は著しいが、内底面は指押え仕上げ。

S15は太形磨製石斧刃部を再利用した敲石。刃先が潰れており、また欠損部には敲打使用痕が見られる。石材は玄武岩。S16は石庖丁の粗成形段階の未製品。石材は粘板岩か。S17は抉入片刃石斧。表面一部欠損があるが、丁寧な研磨仕上げ。抉り部は敲打仕上げ。石材は頁岩。S18は大型の砥石片。下は欠損する。右側面は砥石の使用面、その他は粗い敲き調整である。石材は砂岩。S19は楕円形の扁平な磨石片。右側面と上面は敲打使用痕が残る。石材は砂岩。S20・21は石庖丁片。研磨仕上げであるが、全面的に欠損が著しい。S25は石鏃。残存鏃長1.95cmを測る。先端と基部が一部欠損。表面は雑な剥離調整である。石材は姫島産の黒曜石か。

5 第IV面の調査

1) 調査の概要

第IV面は第III面から更に30～40cm程下げた面で検出した。全体調査区北西側1/4程は遺構存在の可能性が低く、期限の関係で除外した。西側については第II面の川底であったので、第III面については不明で、その下は第IV面となる。調査区南東高所部では包含層があり、本来その上面が遺構面と思われたが遺構の検出は難しく、基盤面迄下げて遺構を確認したので、住居跡などの壁面を飛ばしている可能性がある。

第IV面の遺構は主に東側微高地部を中心に検出した。微高地部では主に竪穴住居跡や土坑、溝、掘立柱建物などから構成される集落遺跡を検出した。西側低地部は不定形土坑や溝、水田跡の痕跡かと思われる畦状の高まりなどを検出した。遺構の時期は弥生時代前期初めから古墳時代前期迄である。主な検出遺構は掘立柱建物20棟、竪穴住居跡4棟、溝状遺構20条、土坑50基以上、方形周溝



Fig.77 建物・竪穴住居遺構配置図 (1/400)

状遺構1基、柱穴多数などである。

2) 遺構と遺物

①掘立柱建物 (SB)

第IV面の東南部で集落跡を検出した。この部分は周辺よりやや高い微高地である。柱穴が密に分布しており、柱穴内に柱根・礎板が残るもののがかなり存在する。柱根・礎板が残る柱穴にとくに注意しながら柱穴の配置を検討した結果、現場にて20棟の掘立柱建物を復元した。実際はこれ以外にも多くの建物があったであろう。しかし、建物の立地する微高地平面形が紡錘形であり、建物群の主軸方向に一貫性がありそうもない。また、柱穴が多いため、復元したとしてもそれが恣意的である感が否めない。よって、整理時にも建物の復元を試みたが、建物としての認定は現場で確認した20棟のみに留めている。

各建物の規模、計測値などはTab.4に示し、個々の説明は省略する。特記事項や出土遺物については、以下のとおりである。各建物の柱穴から出土する遺物は少なく、時期を判定する材料は極めて少ないが、弥生中期～終末の建物が多いようだ。

SB579出土遺物 (Fig.85、PL.86) 1は高坏の脚部である。底径19.6cm、脚部高16.7cmを測る。脚はラッパ状に開き、中程に4つの穿孔を施す。外面は縦刷毛。S1は石庖丁である。2箇所の穿孔部で欠損している。

SB580出土遺物 (Fig.85) 2は土製投弾である。長さ4.2cm、径2.0cmを測る。

Tab.4 第IV面掘立柱建物一覧表

遺構番号	規模	梁間長(m)	桁行長(m)	主軸方位	礎板形状	挿図番号	図版番号
SB579	1×2間	3.16	4.34	N-28° -W	板状	Fig79	PL45(2)
SB580	1×2間	2.78	4.54	N-52° -E	半裁	Fig79	PL45(1)
SB581	1×2間	3.08	5.02	N-58° -E	半裁	Fig79	PL45(3)
SB582	1×2間?	2.52	2.12+α	N-58° -E	組合せ式	Fig79	PL45(3)
SB584	1×2間	3.35	5.90	N-58° -W	板状	Fig80	PL45(4)
SB585	1×2間	2.50	4.52	N-43° -E	板状	Fig80	PL45(4)
SB586	1×2間	2.78	4.62	N-62° -W	板状	Fig80	PL46(1)
SB588	1×2間	2.82	4.59	N-54° -W	板状	Fig81	PL46(3)
SB589	1×2間	2.74	4.30	N-70° -E	組合せ式	Fig81	PL46(4)
SB590	1×2間	2.94	4.38	N-87° -E	なし	Fig81	PL46(6)
SB591	変則的	3.57	4.26	N-36° -E	なし	Fig81	PL47(1)
SB592	1×2間	2.32	2.06+α	N-25° -E	半裁?	Fig82	PL47(2)
SB593	1×2間?	2.92	4.66	N-22° -W	なし	Fig82	PL47(3)
SB598	1×2間	3.50	4.22	N-47° -E	なし	Fig82	PL47(4)
SB599	1×2間	3.34	4.52	N-58° -W	なし	Fig82	PL47(5)
SB600	1×2間	3.36	5.16	N-60° -W	半裁?	Fig83	
SB601	1×2間	3.32	4.86	N-26° -E	なし	Fig83	PL47(6)
SB605	1×2間	3.36	4.90	N-35° -W	なし	Fig83	PL47(7)
SB606	1×1間	2.44	3.52	N-41° -W	なし	Fig84	
SB607	1×1間	2.60	3.20	N-2° -W	なし	Fig84	

※梁間長・桁行長は2辺の平均値である。

V U T R Q P O N



Fig.78 第IV面遺構全体図 (1/400)

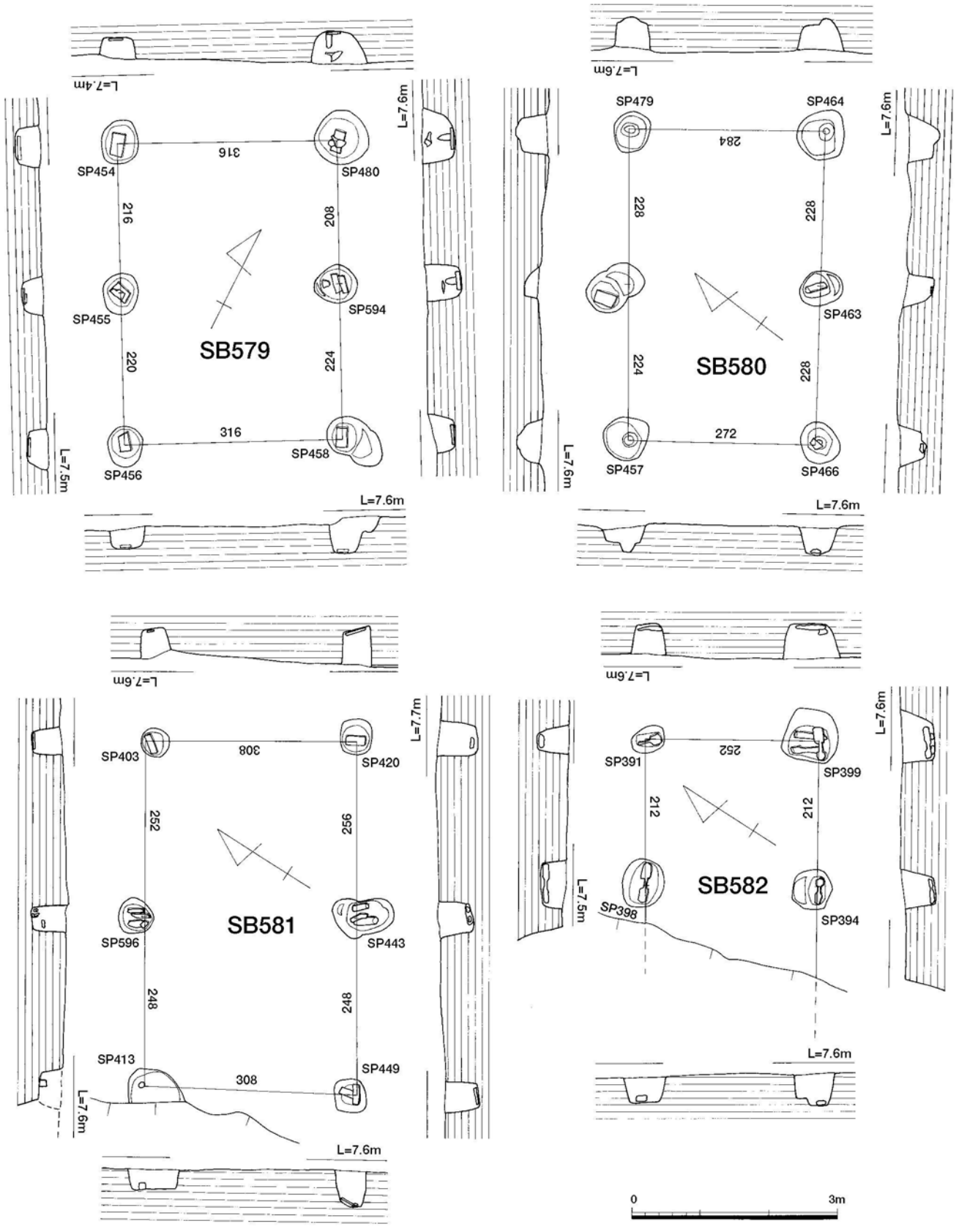


Fig.79 SB579・580・581・582 (1/80)

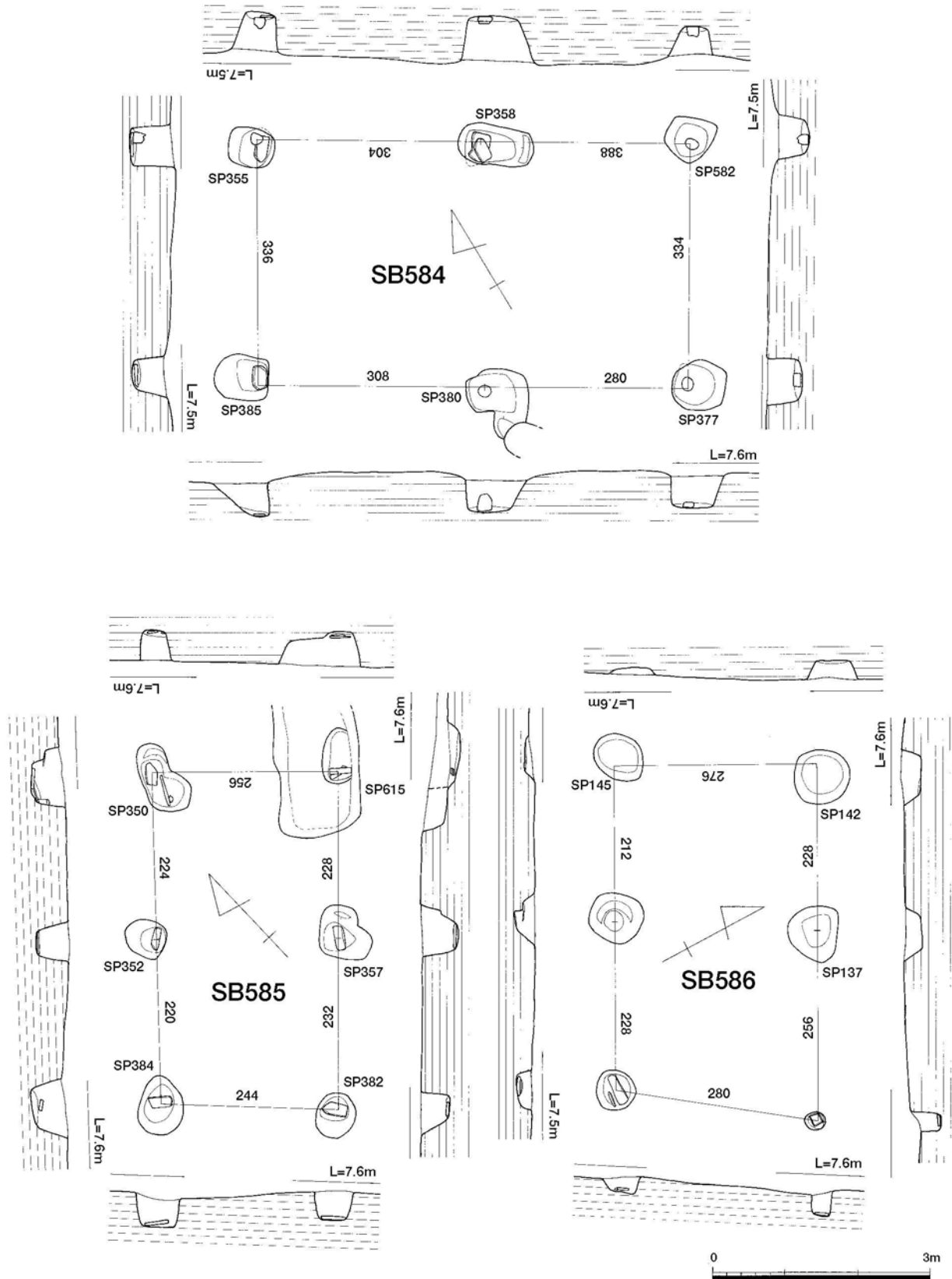


Fig.80 SB584 · 585 · 586 (1/80)

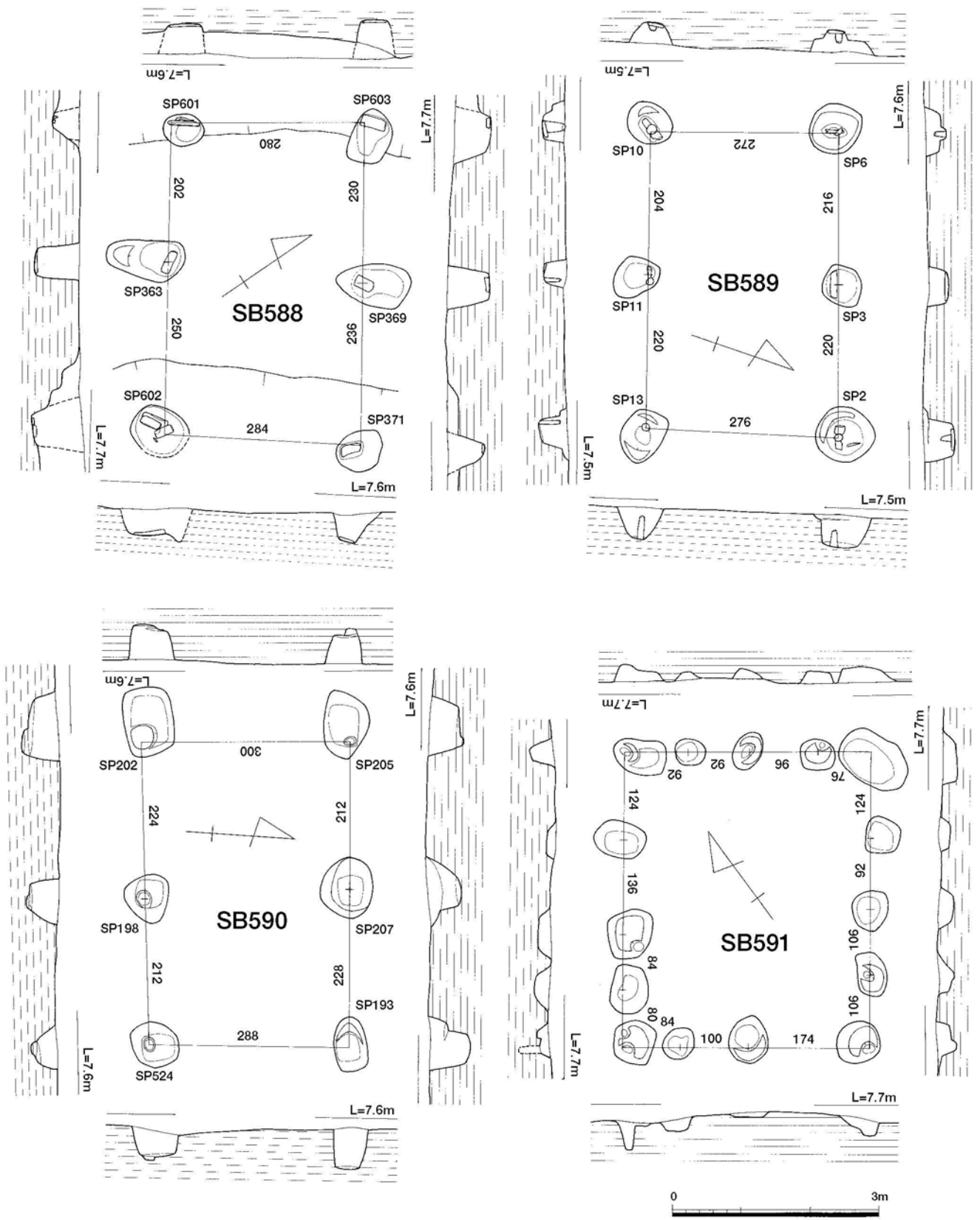


Fig.81 SB588・589・590・591 (1/80)

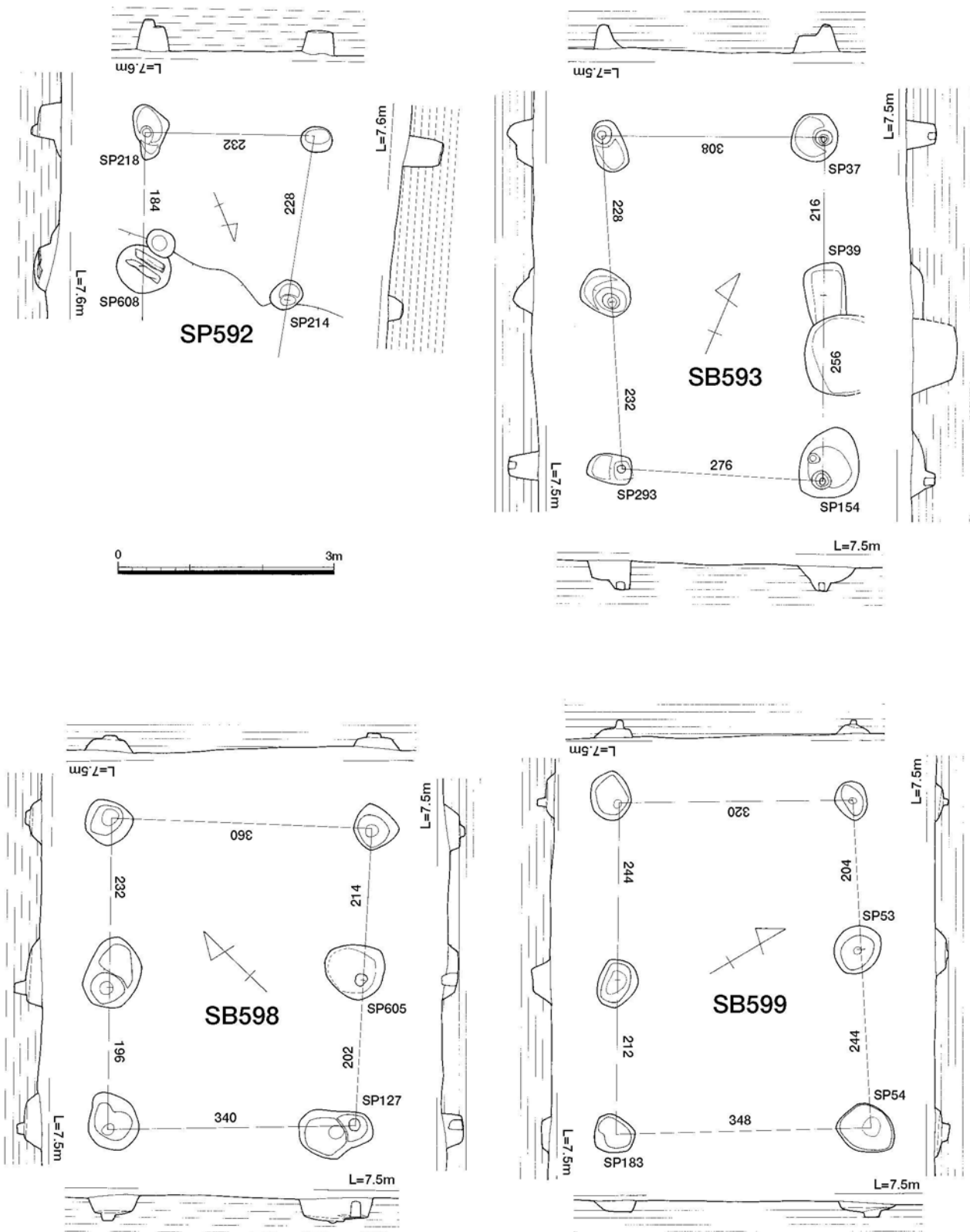


Fig.82 SB592・593・598・599 (1/80)

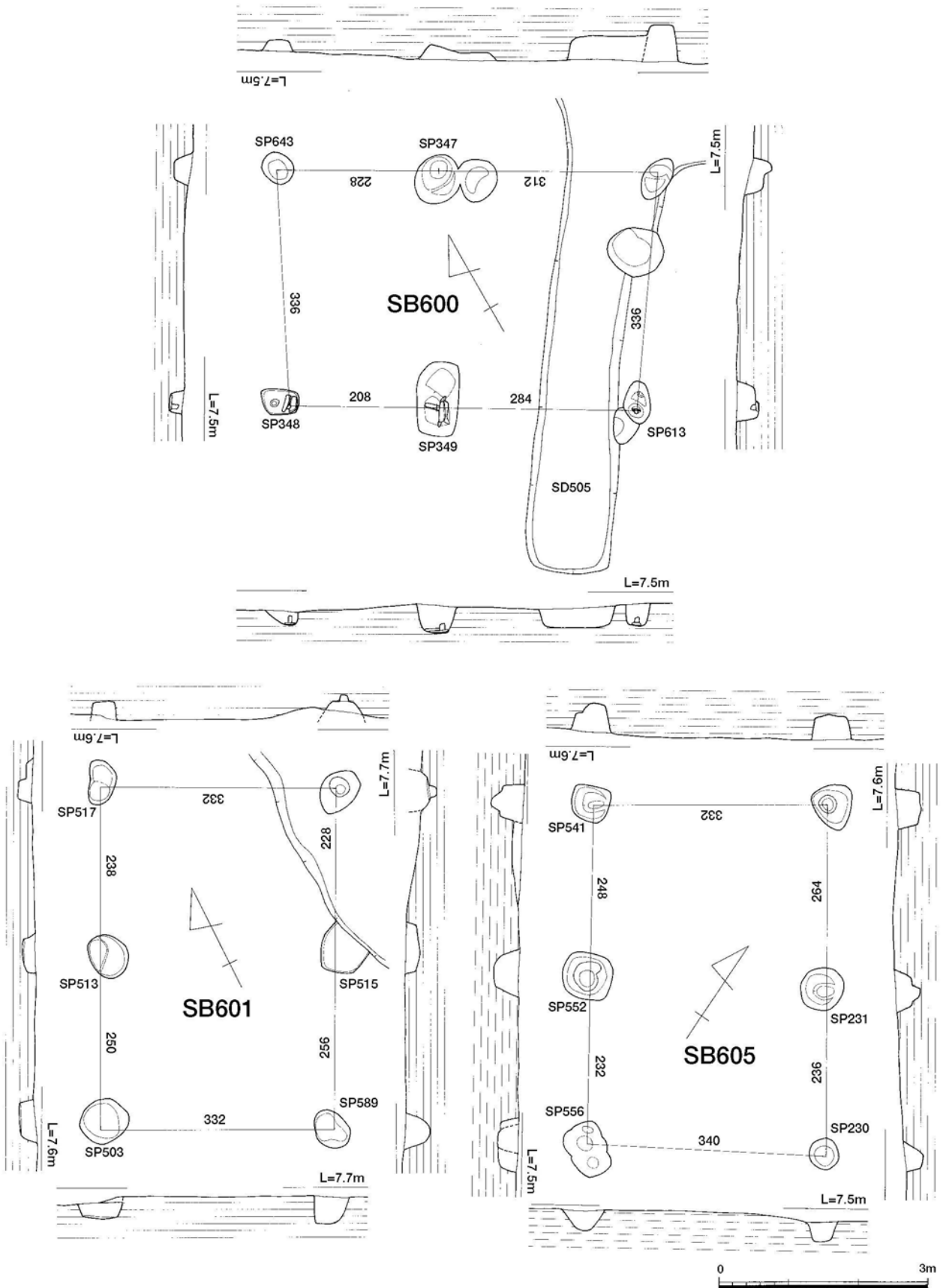


Fig.83 SB600・601・605 (1/80)

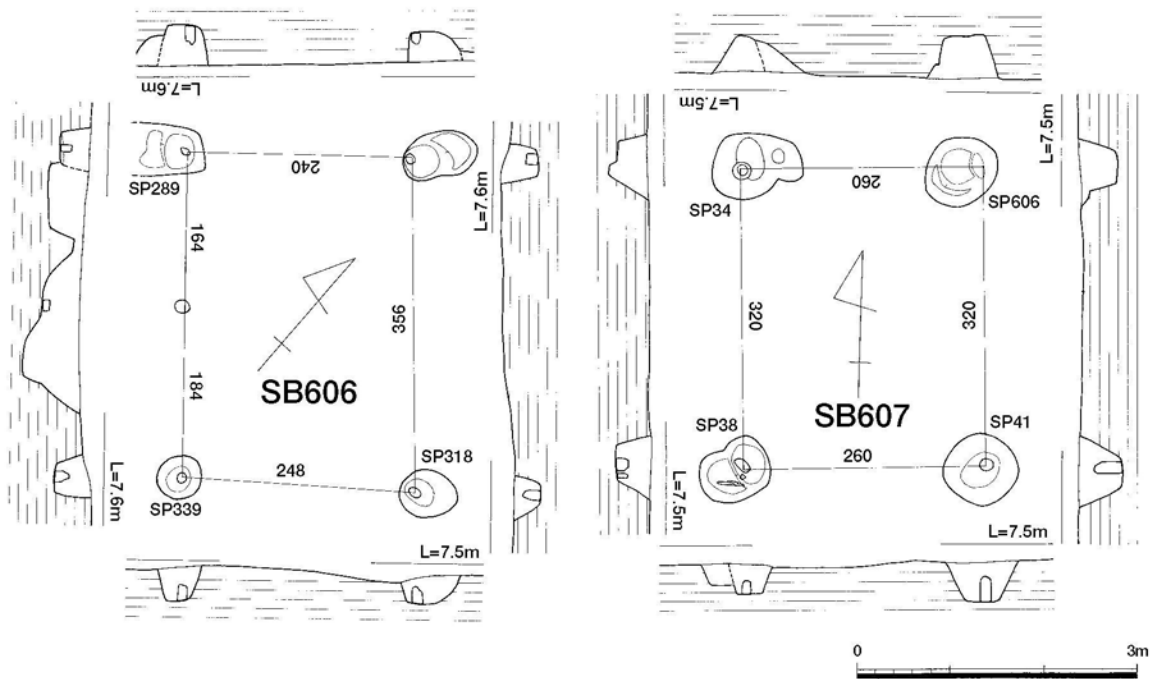


Fig.84 SB606・607 (1/80)

SB588出土遺物 (Fig.85) 6は夜臼式土器の甕口縁部である。口唇部は外にやや突出し、そこに直接刻目を入れる。

SB590出土遺物 (Fig.85) 3は壺の口縁部である。復元口径11.6cmで、口縁部は短く外傾する。外面肩に右下がりの刷毛目を施す。4は甕の逆L字形口縁部。5は器台か。底径7.6cmを測り、体部に向かうにつれ、非常に肉厚になる。

SB591 (Fig.81) 4辺に柱穴が狭い間隔で並んでいる。柱穴は合計15あるが間隔は不統一である。短辺を仮に梁間と考えると、中央に1本柱筋が通るが、柱穴が他より浅い点が気にかかる。南隅

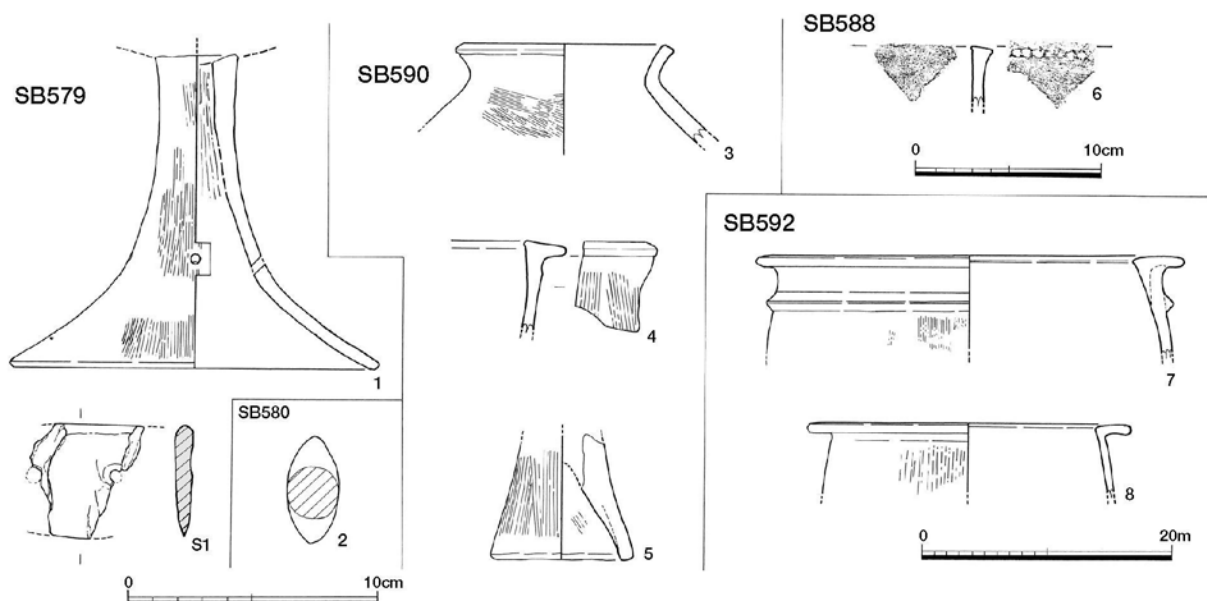


Fig.85 掘立柱建物出土遺物 (1/4・1/3・1/6)

※S1・2は1/3、7・8は1/6、ほかは1/4

の短辺部だけ柱間が1.74mとかなり広い。ここを入口として、柵を四角形に巡らした檻のような形状の建物だろうか。

SB592出土土器 (Fig.85) 7・8は甕の口縁部である。7は逆L字型口縁で内面に粘土を足し肥厚させ、直下に1条の突帯を巡らす。復元口径33.6cm。8も逆L字口縁で復元口径25.4cmを測る。

SB600 (Fig.83) 方形周溝状遺構SD505を切っている。

SB606 (Fig.84) 西側桁行のちょうど中央で柱根を検出している。別遺構に切られているが底のレベルも一致し、西側は2間である。一方、東側桁行は1間である。

掘立柱建物の礎板について

本遺跡では掘立柱建物の礎板・柱根が遺存するものがある。それらの観察および樹種分析の結果、以下の2点が分かった。1. 礎板はその形状から3種類に分類できる。2. 同じ建物の材は同一の樹種である場合が多い。

礎板の形状は3種に大別できる (Fig.86~88)。第1は、長方形の扁平な板状のものである。太い丸太を縦に面取りしている。長さ30~35cm、幅15~20cmのものがほとんどで、SB579、584、585、586、588がこのタイプである。第2は、細めの丸太を半裁して、その切断した平面を上にして据えるものである。長さ35cm、幅12cm程度で、SB581のほか、SB 580、592、600でも検出した。第3は、柱と礎板を噛み合わせるタイプである。SB582、589で検出した。SB589に見られるように、長方形の礎板の中央1/3を両側から挟り、上から見ると鉄アレイ形を呈する。細めの丸太を半裁したものが多い。柱のほうも付け根を凹型に削り取り、柱と礎板ががっちり組み合うようになっている。

建物部材について樹種鑑定をおこなっている。詳しくは第IV章を参照していただきたい。ちなみに、分析をしたものの図化できなかつたものもあるため、Fig.86~88に掲載した各建物の礎板・柱穴の数と分析した礎板・柱穴数が一致しないものがある。

分析の結果、同じ建物の材には同一の樹種を用いる傾向が強いことが分かった。ほとんどの材の樹種が共通する事例として、SB579 (クリ8点)、SB582 (クリ4点)、SB584 (タブノキ属8点、クリ・クスノキ科各1点)、SB588 (クリ6点、ツブラジイ・クスノキ科各1点)、SB589 (クリ11点、コナラ1点) が挙げられる。一方、SB581 (クリ2点、スダジイ・モモ・ウメ・ムクロジ・ヤマビワ各1点)、のように、樹種がばらける事例も見られる。

② 竪穴住居 (SC)

調査区東南部の集落域で3ないし4軒の竪穴住居を検出した。いずれも方形住居である。R-21区で検出したSC578は、4.0×7.1mの長方形と推定される。東南隅が張り出しているが中央付近に焼土を含む炉と思しき箇所があったので、住居の可能性を考えている。

SC504 (Fig.90) P-23区で検出した住居で、方形周溝状遺構SD505を切っている。長軸5.6m、短軸4.5mの隅丸方形プランをなし、底面付近の深さで確認した。住居中央で焼土・炭化物が集中する炉が検出され、主柱穴は図に示した4本柱と考えられる。出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。

出土遺物 (Fig.91、PL.86) 9は小型甕である。口径13.8cm、器高12.7cm。胴の最大径部は高い位置にある。内面は上半を横刷毛、下半をケズリで調整する。10は小型の壺である。ほぼ完形で口径7.1cm、器高10.0cm、胴部最大径9.5cmを測る。底部はレンズ状にわずかに窪む。11は高坏で坏

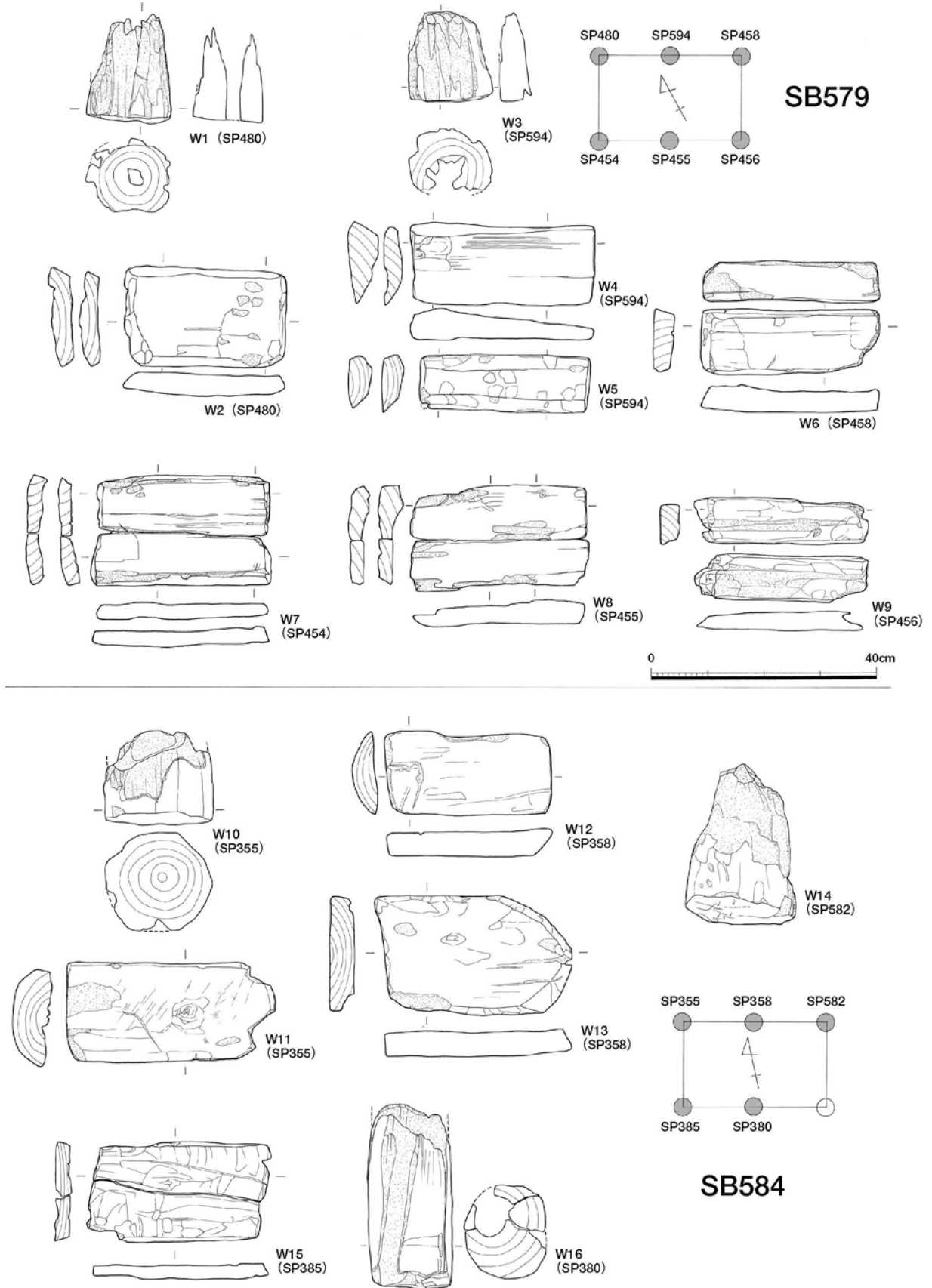
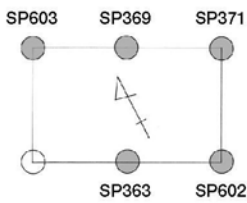
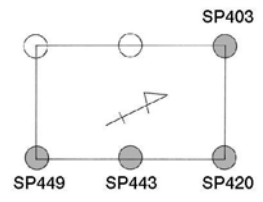
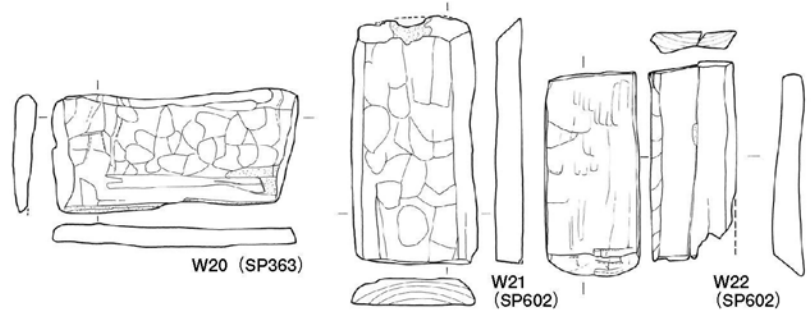


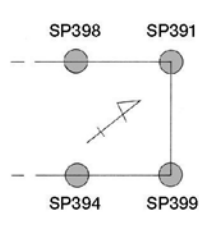
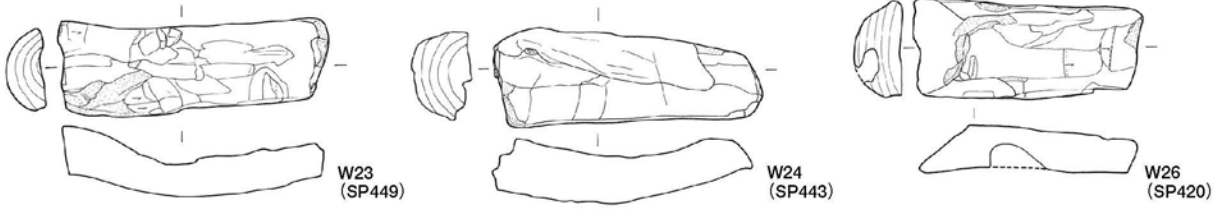
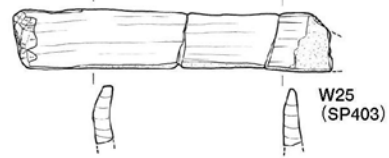
Fig.86 SB579・584出土礎板・柱根 (1/10)



SB588



SB581



SB582

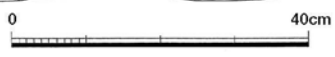
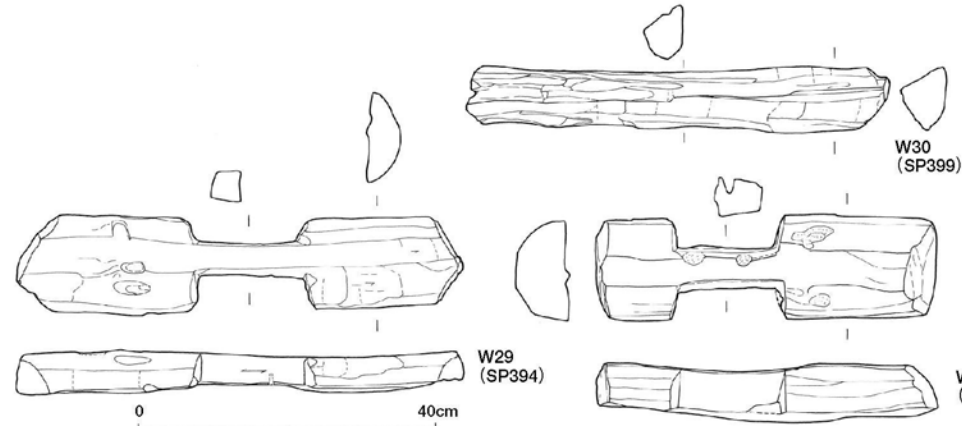
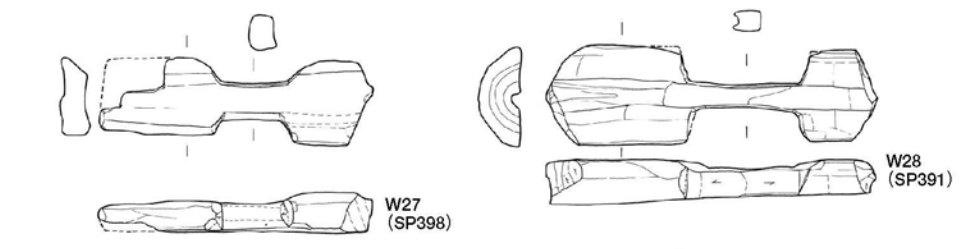


Fig.87 SB588・581・582出土礎板・柱根 (1/10)

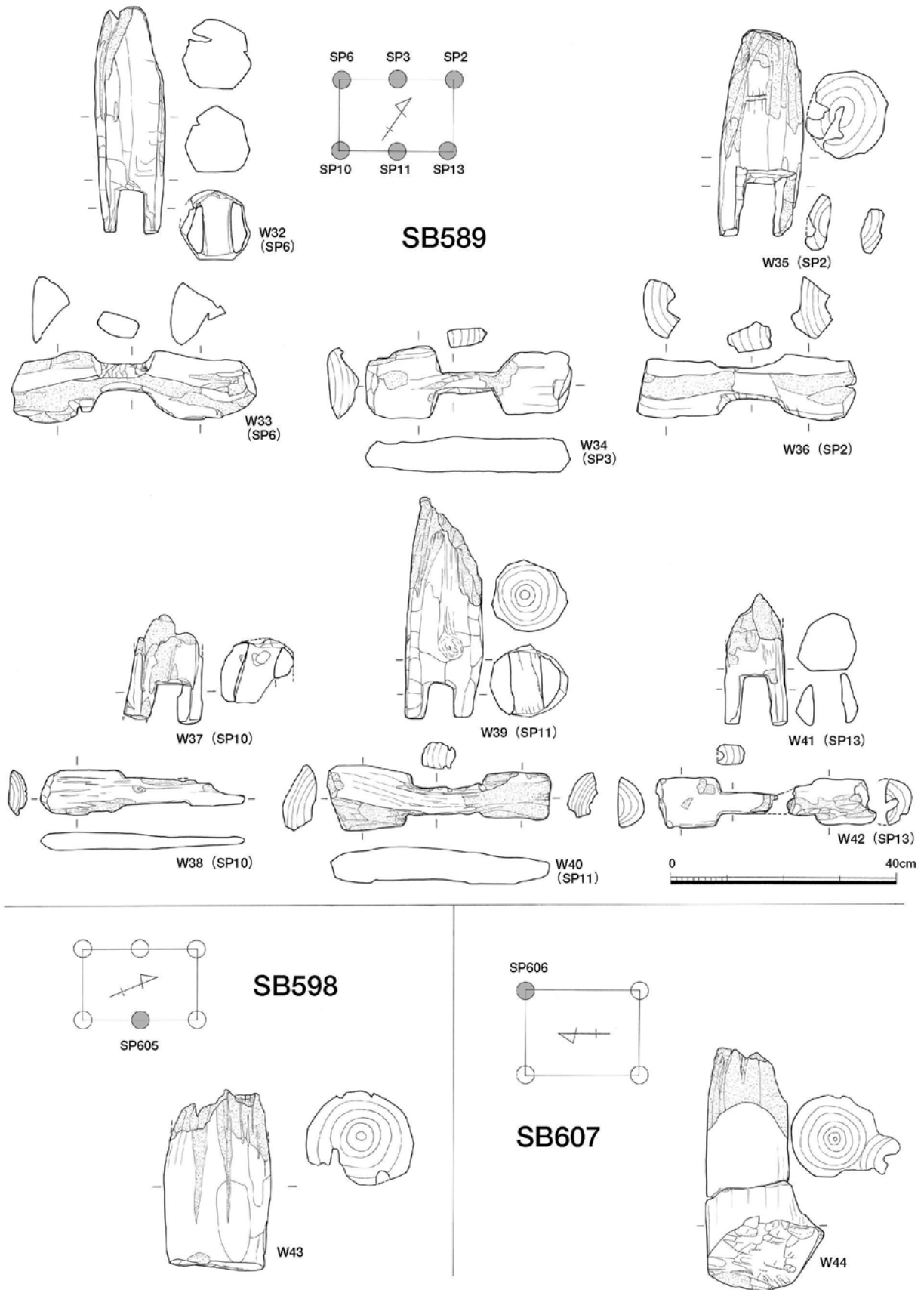


Fig.88 SB589・598・607出土礎板・柱根 (1/10)

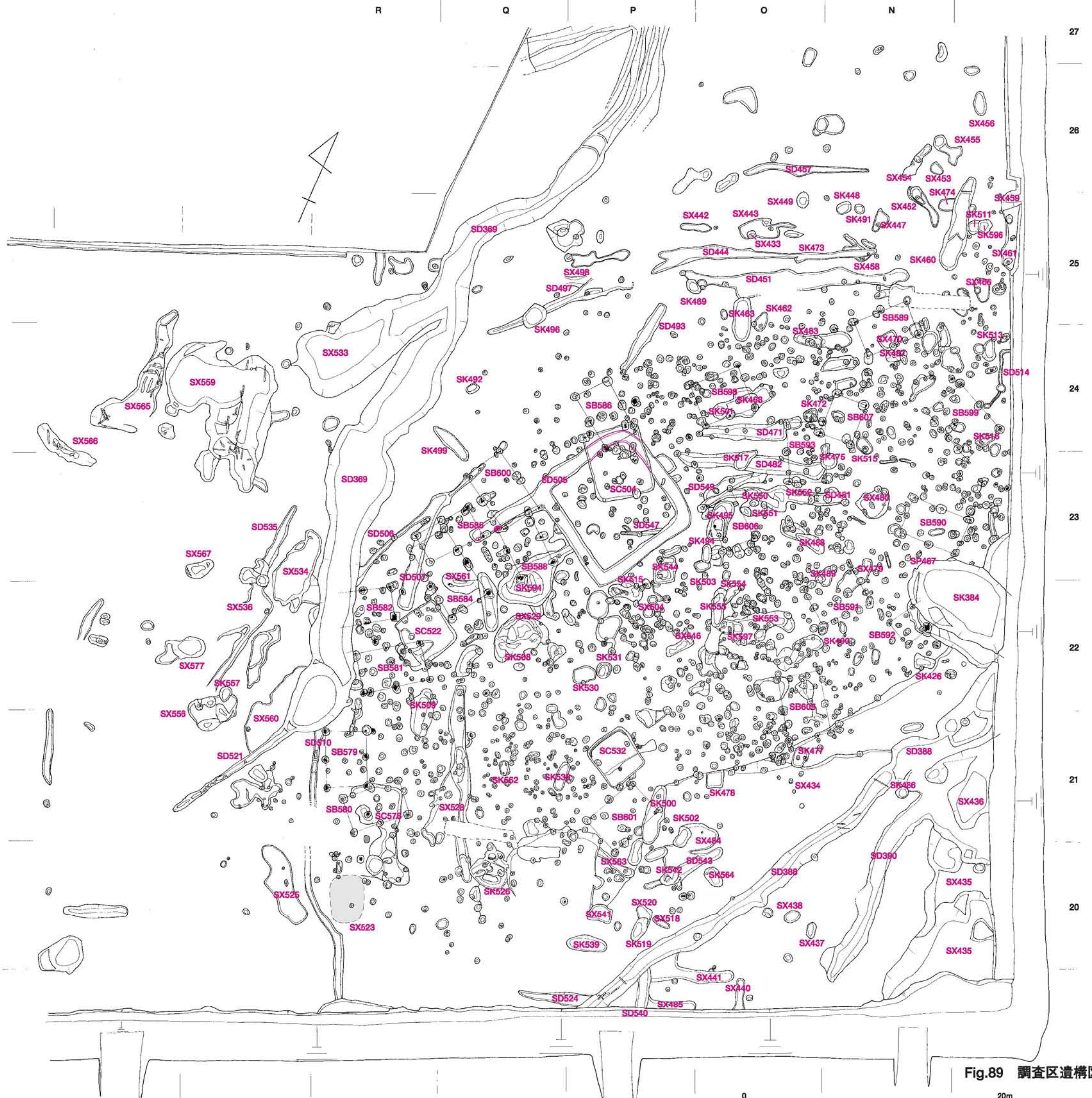


Fig.89 調査区遺構図 (1/250)



部の途中にしっかりと
した稜をもち、そこ
から口縁にかけて外
反して立ち上がる。
12は蓋である。13は
袋状口縁壺の底部付
近である。B1・B2は
ガラス小玉である。
B1は径6mm、厚さ
6mmでいびつに歪
み、淡いブルー。B2
は径3.5mm、厚さ
2mmでコバルトブル
ーを呈する。

SC522 (Fig.92、
PL.49) R-22区で
検出した方形住居で
ある。長軸長3.7m、
短軸長3.5mを測り、
やはり床面ぎりぎり
で検出した。住居内
南東側に焼土・炭化
物を含む土が分布し

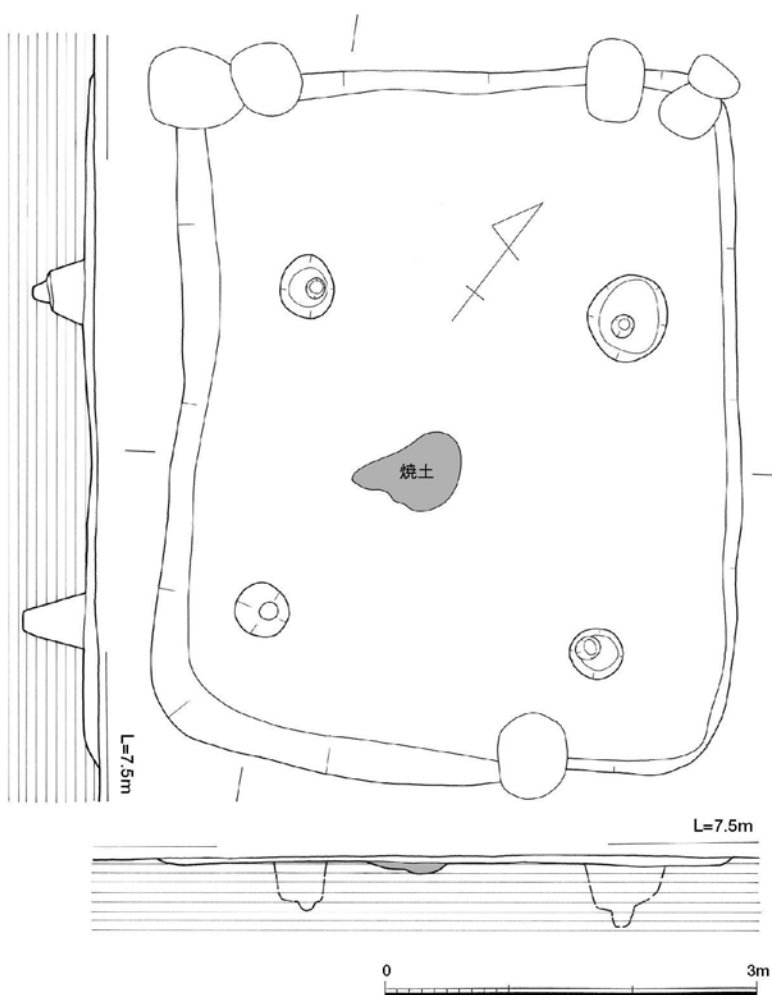
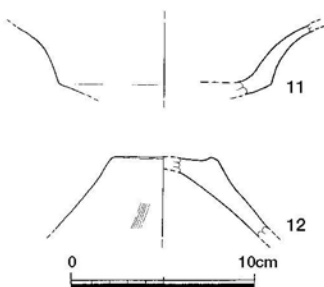
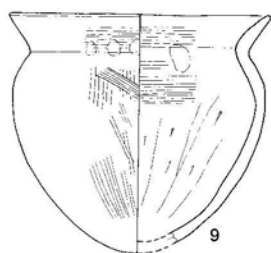


Fig.90 SC504 (1/60)

SC504



SC522

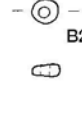
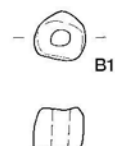
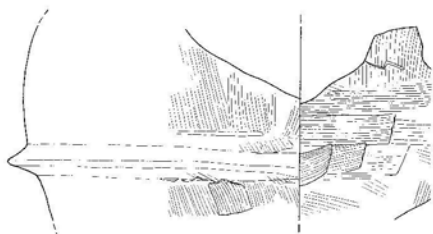
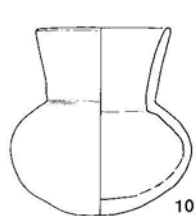
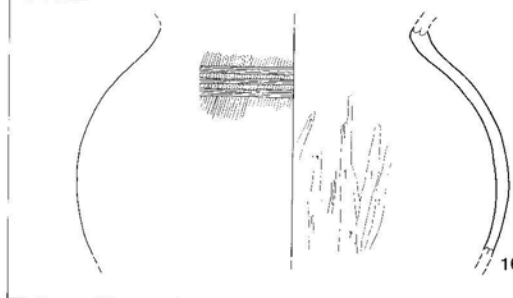
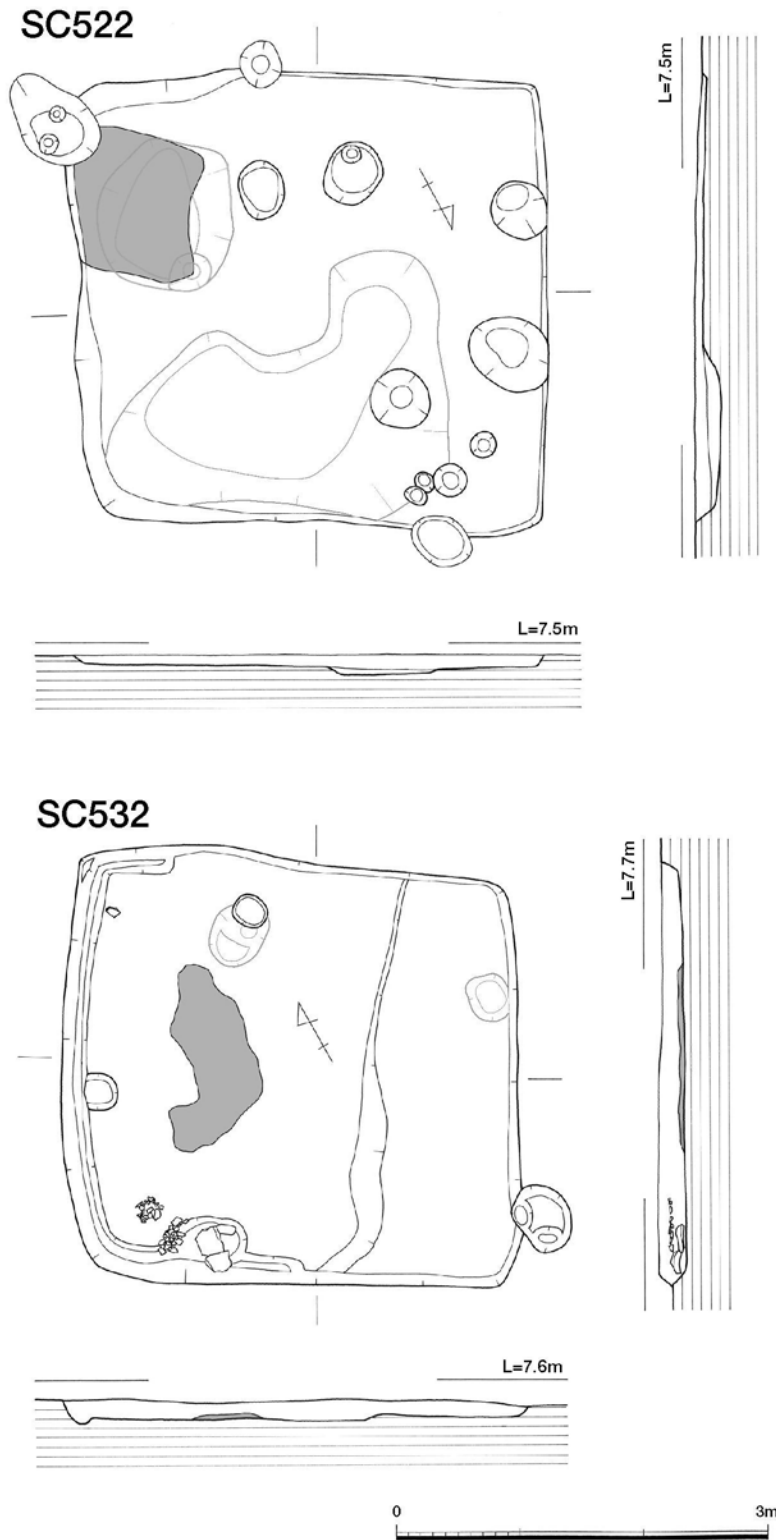


Fig.91 SC504・522出土遺物 (1/4・1/1)

※B1・B2は1/1、ほかは1/4



ており、焼成を受けた窪みは確認できないが、この辺りに炉があったのだろう。主柱穴は不明である。一部に浅い貼床が見られる。遺物より弥生時代終末頃の住居であろう。

出土土器 (Fig.91) 16は壺の体部である。外面肩部に細かい縦刷毛の上から3条の横刷毛を施し、内面は幅の狭い工具でケズり上げている。

SC532 (Fig.92、PL.50) P-21区で検出した方形住居である。長軸3.6m、短軸3.4mを測りSC522とほぼ同規模で、主軸方向も一致する。床面は東側約1/3が若干高く、西壁側には壁溝がめぐる。また、中央やや西寄りに焼土・炭化物が分布しており、この辺りに炉があったようだ。主柱穴は不明。図化できる遺物がないが、規模・主軸方位が似ているSC522と同様に弥生時代後期の住居であろう。

Fig.92 SC522・532 (1/60)

③ 溝状遺構(SD)

SD369(Fig.93・94、PL.52～54) 調査区中央部から北壁に蛇行して延びる溝である。溝の始まりの部分は円形の大型土坑状で湧水が激しい。途中R-25区あたりで不定形の大型土坑SX533と合流して流れる。北側部分は第Ⅲ面で調査し、第Ⅳ面の調査ではQ-26区北側は基盤面迄掘下げているので、第Ⅳ面の調査の際には削ってしまっている。故に調査は南半分のみで第Ⅲ面とⅣ面で二分割して調査したこととなる。溝自体の確認面は第Ⅲ面下となる。現状での溝の規模は幅2.4～5.5m、深さは0.8～1.1m程を測る。溝の断面形は逆台形である。溝埋土は上層部分が黒褐色粘質土から暗灰色粘土、下層部分が粗砂又は粘土が主体である。埋土全体に植物・流木などを含む。溝自体湧水点から水を流す為の水路の可能性はある。

出土土器(Fig.95～102・132、PL.87・88・96・106) 弥生時代前期から古墳時代土師器、須恵器や木製品、石製品などが出土している。区割りして遺物を取上げたので、それに沿って報告する。

17～26は1区出土遺物で、5世紀初め頃を主体に報告する。17は陶質土器の把手付小鉢。調整はナデで、器表面は灰カブリする。18～20は小型壺。18は完形。口縁はやや歪むが、胴部外面はハケ目一部ナデ、内面指押えナデ調整。19は口縁が開く形態でほぼ完形。胴部外面ハケ目とナデで叩き痕が残る。内面は指ナデ。20は胴部1/2片である。胴部内外面指押えナデ調整。21・22は口縁部がやや内湾する壺で5世紀のもの。口縁部には黒斑がある。23は甕で口縁部1/3を欠くがほぼ完形。外面調整は胴部がハケ目又はナデ、内面はヘラケズリ後ナデ。外面には酸化鉄分が付着する。24は甕の底部片。外面調整は板ナデ、内面はヘラケズリである。25・26手捏ねのミニチュア土器の鉢。

27～29は2区出土。いずれも土師器。27は直口の壺口縁部。全体に摩滅するがナデ調整か。28

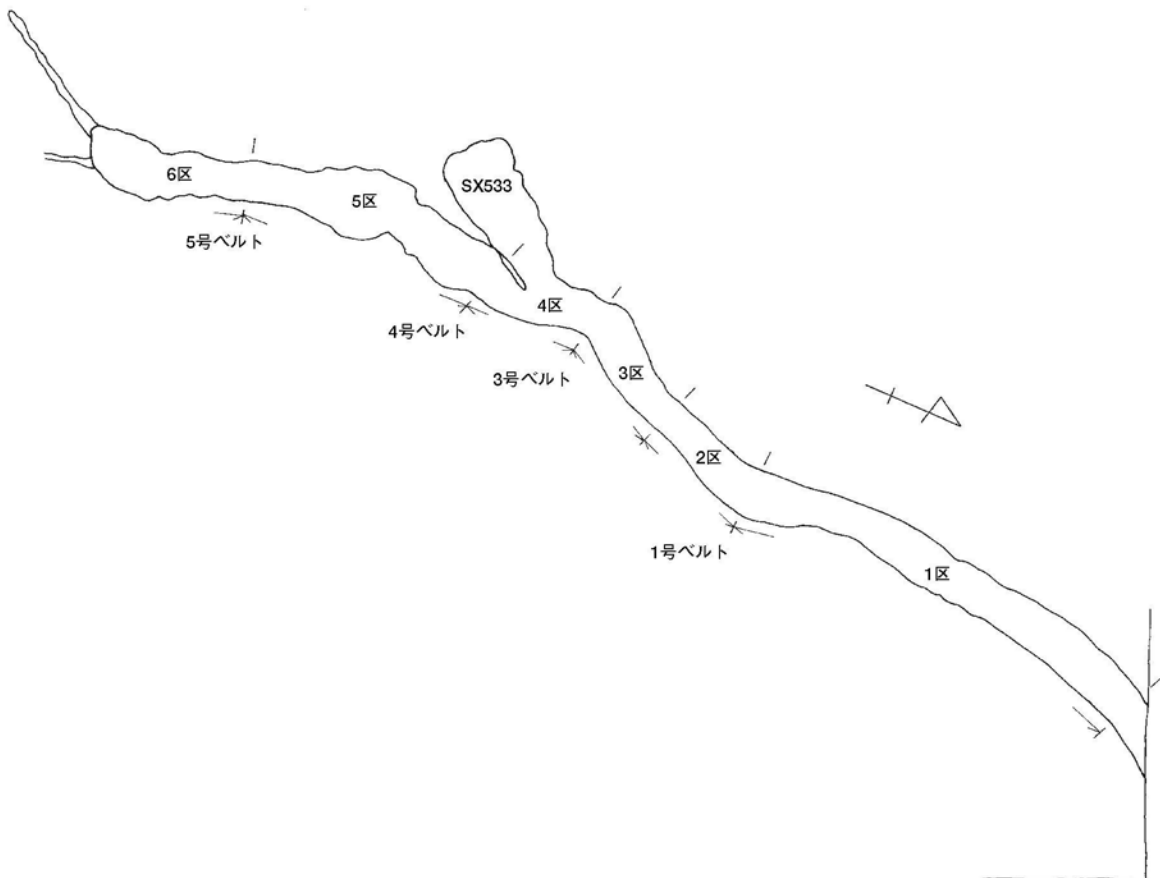


Fig.93 SD369 遺物取り上げ図 (1/600)

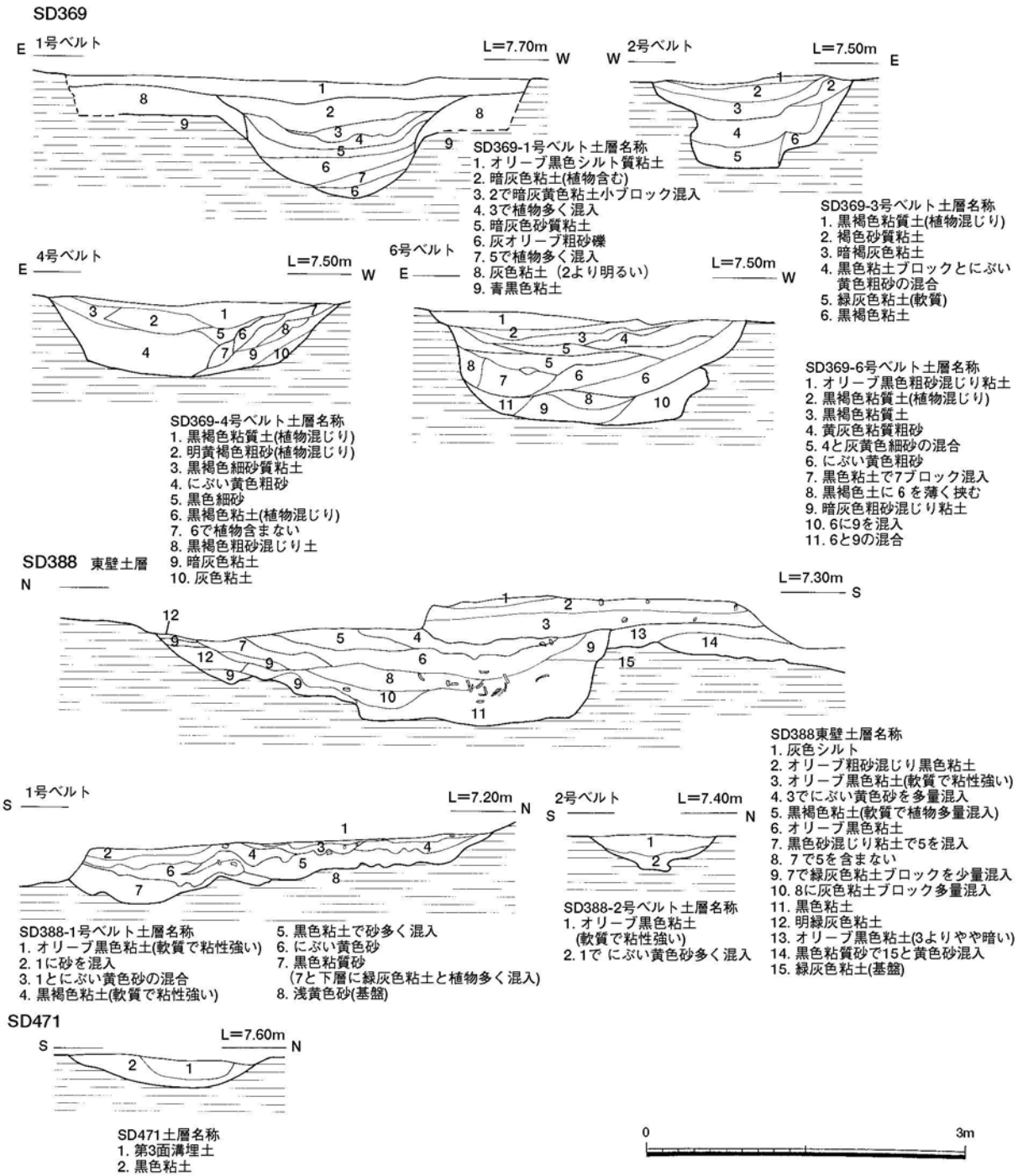


Fig.94 SD369・388・471土層 (1/60)

は小型器台の脚部。調整はナデで、内面指押え痕が残る。29は鉢の口縁部細片。全体に摩滅が進むが、ナデ仕上げで内面ハケ目が残る。

30~37は4区出土。30~34は土師器。30~32は前期の布留式甕。30・31は口縁部から胴部。口端部は内面を僅かに摘み上げる。31の胴部上半には胴肩部には波状の沈線が巡り、胴部外面はハ

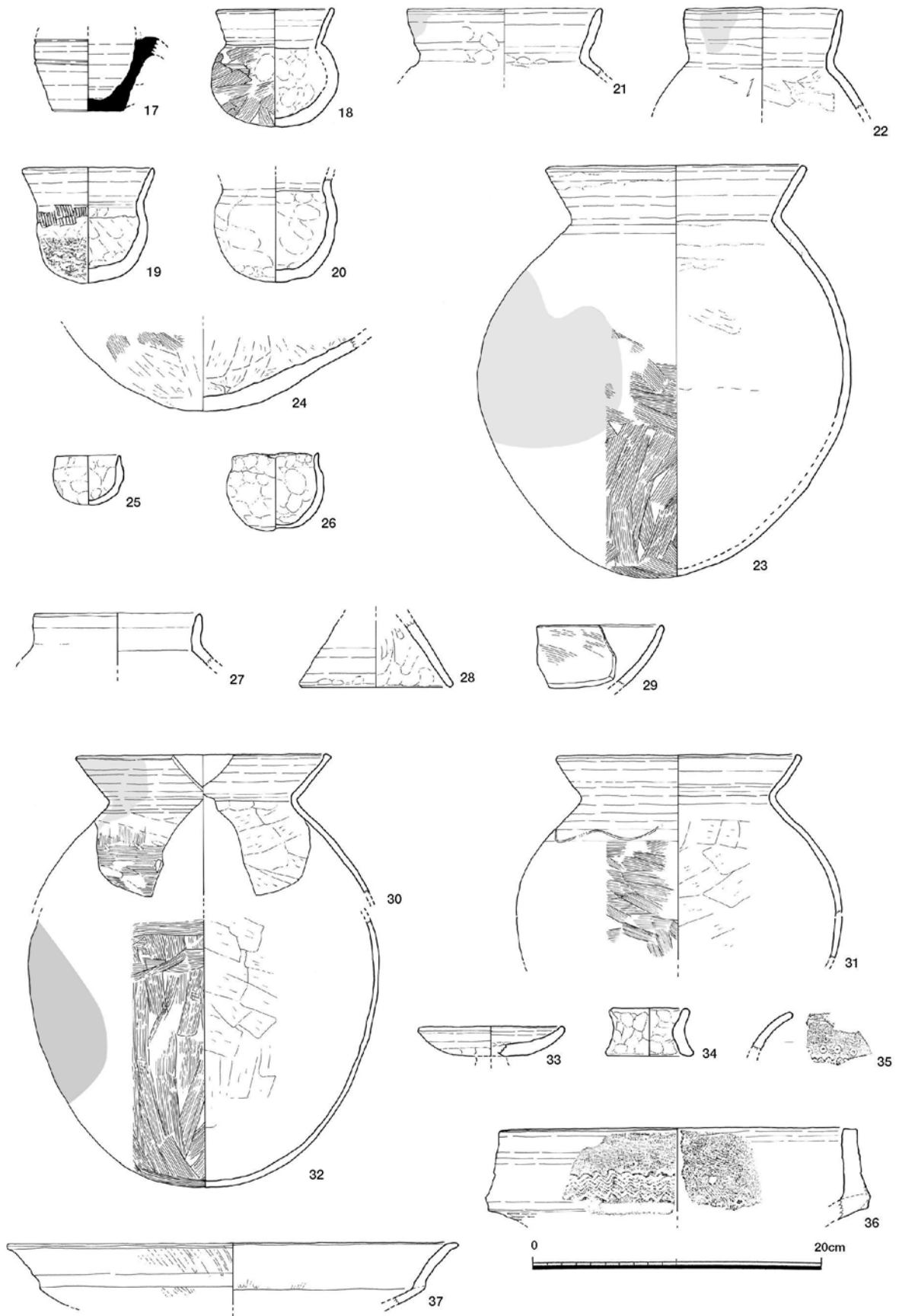


Fig.95 SD369出土土器 ① (1/4)

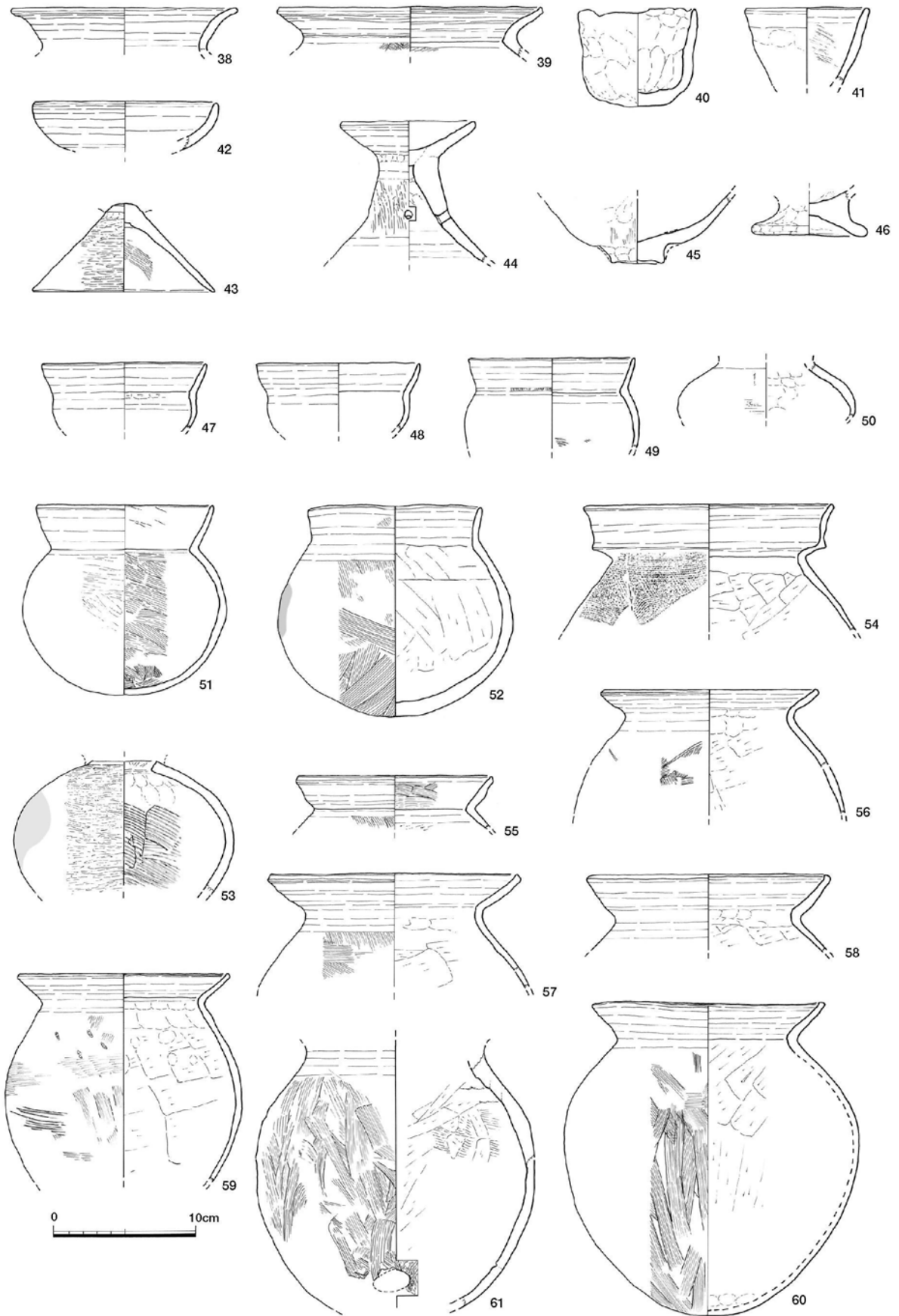


Fig.96 SD369出土土器 ② (1/4)

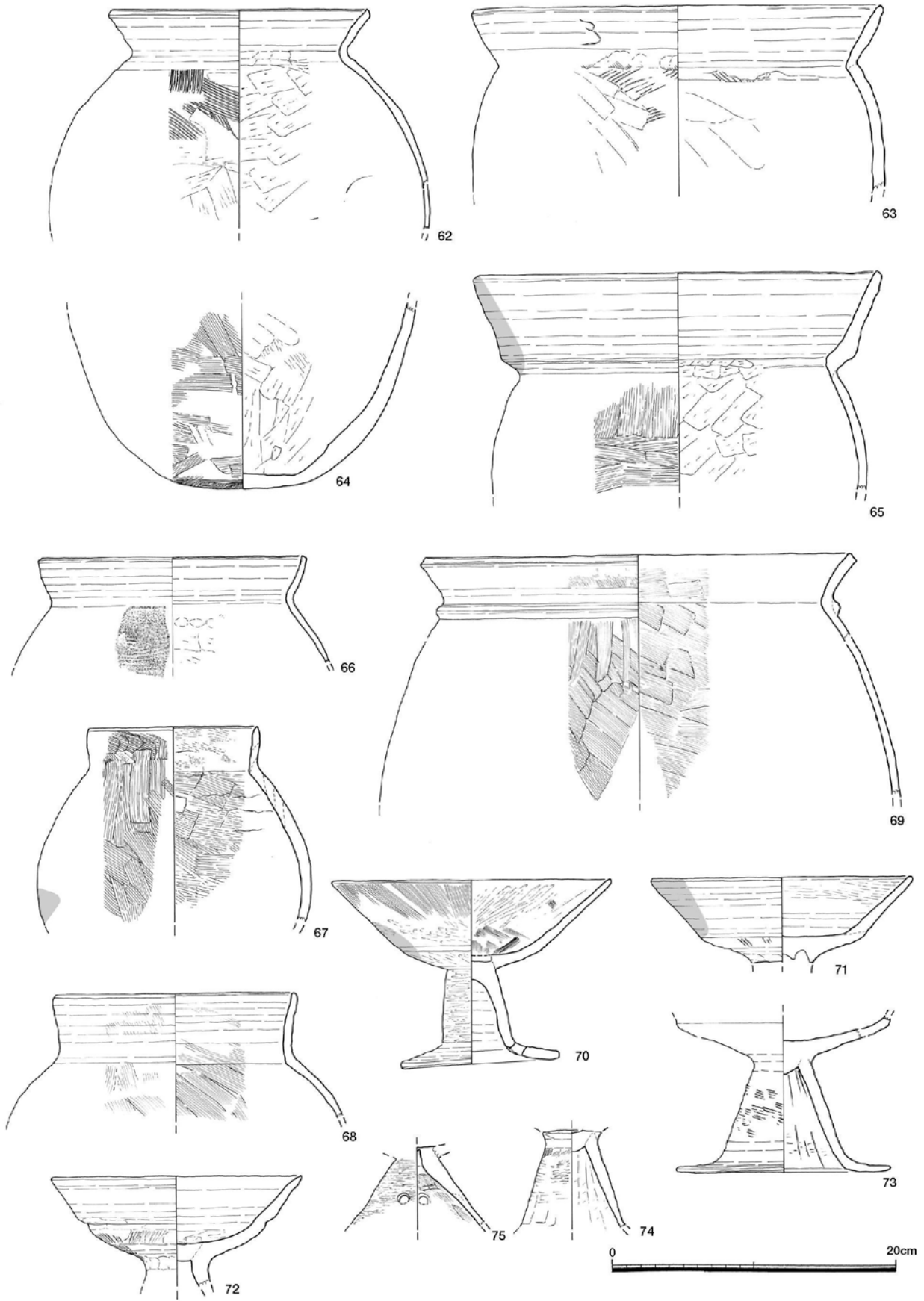


Fig.97 SD369出土土器 ③ (1/4)

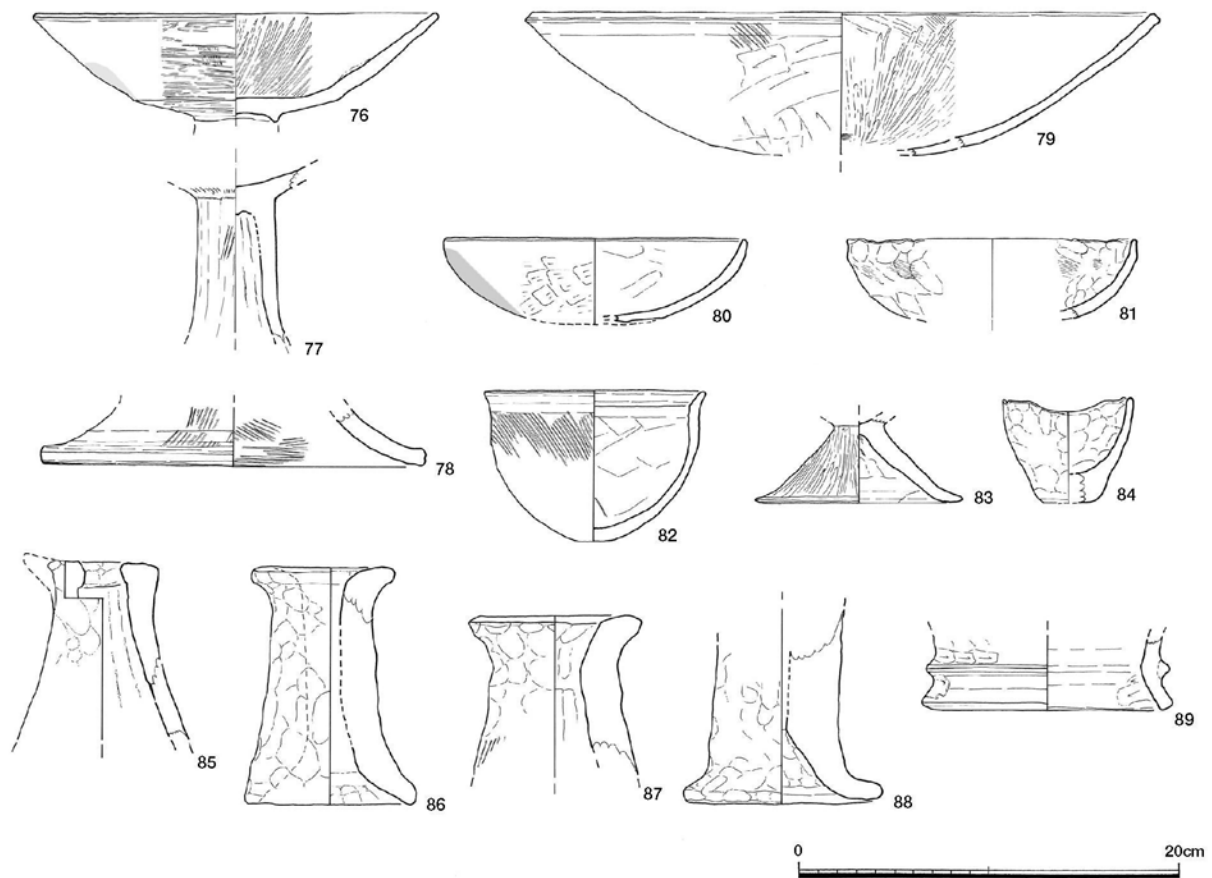


Fig.98 SD369出土土器④ (1/4)

ケ目後ナデ、内面はケズリ。32はやや長胴で外面タタキ後ハケ目、内面はヘラケズリ。30と32は同一個体の可能性がある。胴部最大径は上半部にある。ヨコ・ナナメのハケ目、内面ヘラケズリ。33は小型器台の坏部。調整はナデ。器壁は厚い。34は手捏ねのミニチュア土器器台。内外面指押さえ痕が残る。35・36は壺口縁部。35は細片で外面竹管文が施文される。36は古墳時代前期初めの二重口縁壺。口縁部外面は櫛描波状文、内面はハケ目。37は弥生時代後期中頃の高坏坏部片。内外面はヘラミガキ調整であるが、内面の器壁は剥離する。

38～46は5区出土。38は土師器壺口縁部。調整はヨコナデ。39は古墳時代前期の布留式甕口縁部。外面はタタキ後ハケ目調整。40～42は鉢。40は椀形の鉢。調整はヨコナデ。41は手捏ねの鉢、指押え痕が明瞭に残る。42の内面にはハケ目が残る。43は小型器台の脚部。外面ヘラミガキ、内面刷毛後ヨコナデ調整。44は器台か。脚外面はヘラミガキ、内面はナデ・ヨコナデで、透かし孔がある。45は脚部が短い台付鉢か。鉢部はナデ、調整はナデで脚部は指押え痕が残る。46は台付鉢脚部。内面ハケ目調整、外面指押え痕が残る。

47～89は6区出土。47～50は小型丸底壺。47・48は口縁部が胴部より開く形態。49は口縁の開きが胴部とほぼ同じ。50は口縁が小さく頸部が締まる形態。47・48の調整はナデ又はヨコナデ。49はナデ調整であるが部分的にハケ目が残る。50はナデで、内面指押え痕が残る。51～54は壺。51は口縁部が開き、52は直口气味、53はやや胴が張り頸部が締まる。54は二重口縁である。51は外面ナデ、内面は細かいハケ目。52は胴部外面がハケ目、内面はヘラケズリで底部は指押え痕が残る。53は胴部外面ヘラミガキ、内面は粗いハケ目。54は調整は口縁部ヨコナデ、胴部外面は櫛状工具に

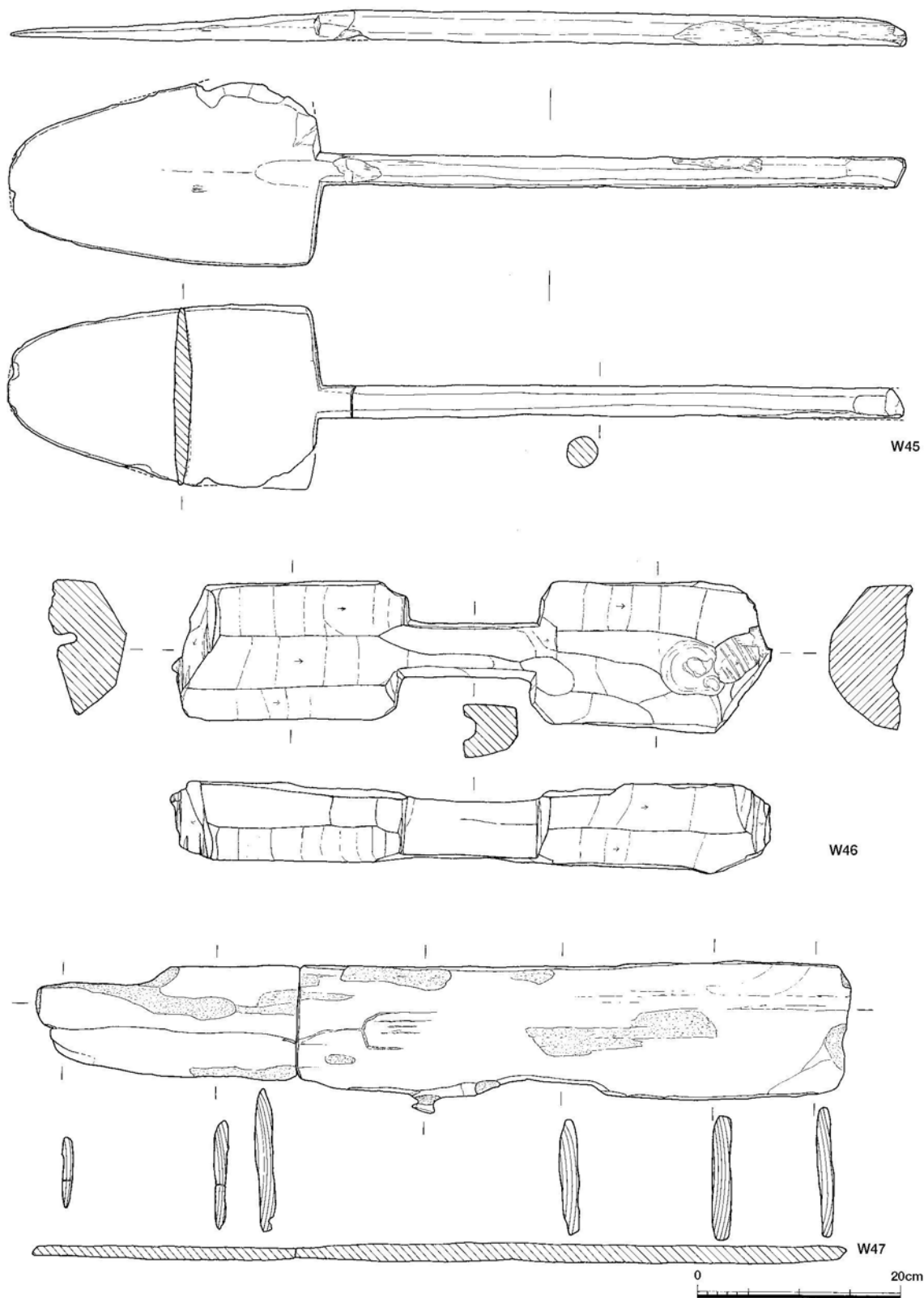


Fig.99 SD369出土木製品 ① (1/6)

よる平行文と波状文、その間がナナメハケ目、内面はヘラケズリ。古墳時代前期の山陰系の搬入品か。55~66は土師器の甕。55~60は古墳時代前期の布留式土器の甕である。55は口縁部の開きが

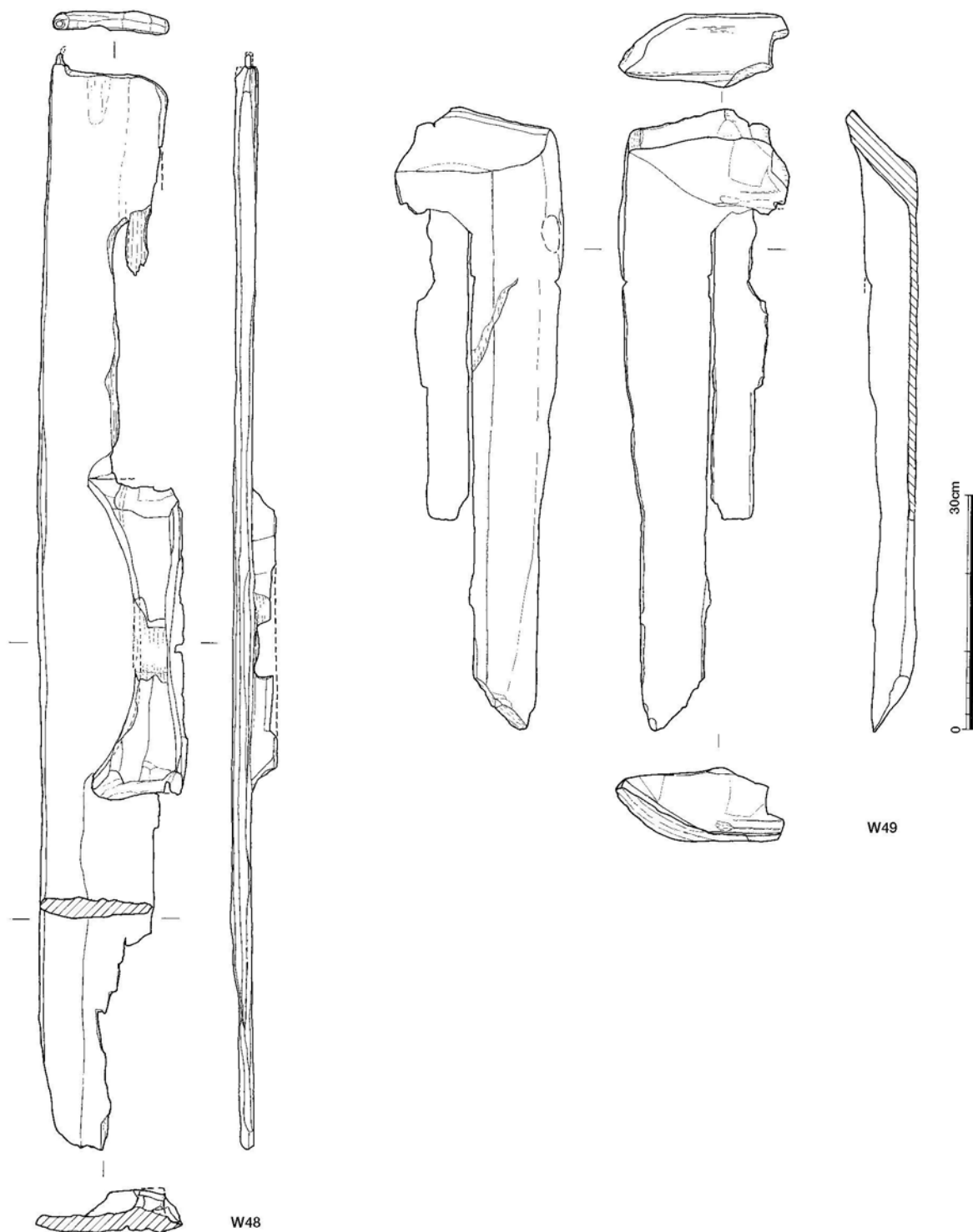


Fig.100 SD369出土木製品 ② (1/8)

小さく小型である。56・57の口縁部は内湾し開きが大きい。いずれも調整は胴部外面ハケ目、内面はヘラケズリ。56の胴部には波状の沈線がある。58～60の口縁部は内湾するが開きは小さい。胴部最大径は中央部に下がる。胴部外面はハケ目で、工具痕が残る。60は歪むがほぼ完形である。胴部最大径はやや上部にある。胴部外面調整はハケ目であるが比較的雑、内面はヘラケズリ。59・60

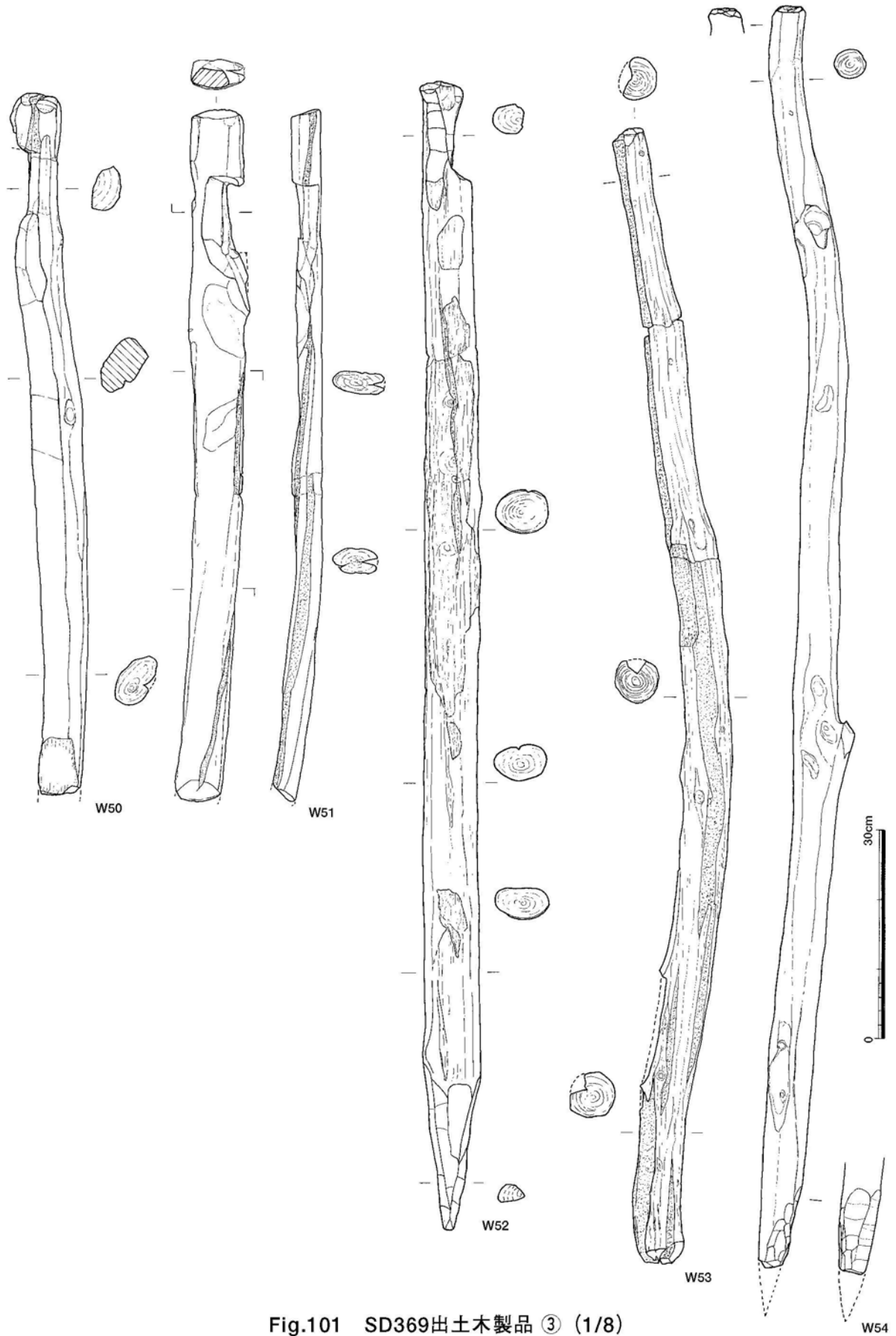


Fig.101 SD369出土木製品 ③ (1/8)

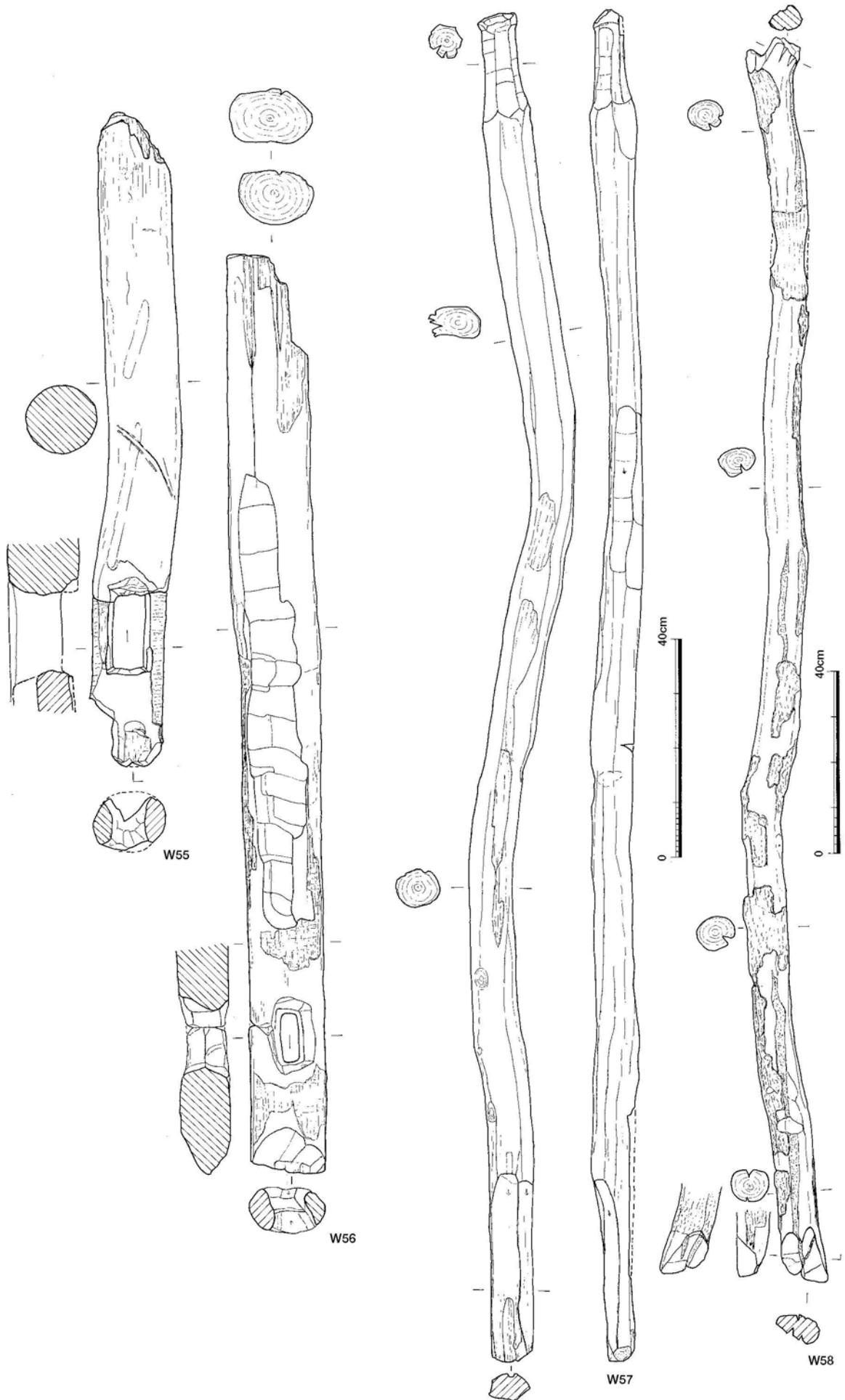


Fig.102 SD369出土木製品④ (1/10・1/12)

とも布留式土器の新様相か。61は厚手のぼてつとした作りで5世紀の甕。調整は胴部外面は雑な粗いタテハケ、内面は粗いヘラケズリでハケ目が残る。下胴部には穿孔がある。62は頸部が締まる口縁部で、胴部外面上半は粗いハケ目後ナデ、下半は強い板ナデ、内面はヘラケズリ調整。63は頸部の締まりの弱い広口の甕。口縁部ヨコナデ、胴部外面はタタキ後板ナデ、頸部は指押え痕とハケ目が残る。内面はナデ。内面頸部には粘土接合面が残る。64は平底気味の底部。調整は底部まで外面ハケ目、内面はヘラケズリ。65は古墳前期の二重口縁の甕で、調整は胴部外面はタテ・ヨコのハケ目、内面はヘラケズリである。山陽系土器か。66は在地系の甕で、復元口径は18.4cmを測る。胴部外面はヨコ方向のタタキ、内面はヘラケズリ調整。67～69は弥生土器。67・68は頸部が窄まる直口壺。67は内外面ハケ目調整で内面粘土帯接合面が残る。外面黒斑がある。68は口縁が直立気味で、調整は外面ハケ目後ナデ、胴部内面はハケ目。後期後半～終末期のもの。69は頸部に断面三角突帯を持つ大型甕。口縁・胴部内外面はハケ目である。70～74は土師器の高坏。4世紀～5世紀のもの。70は坏部口縁が底部から屈折して開く形態。全体の調整はヘラミガキとハケ目。脚筒部外面はミガキ。脚部に焼成前穿孔が2ヶ所ある。71・72は坏底部と口縁の境に段を有すほぼ同じ時期のもの。調整はナデとハケ目である。73・74は坏から脚部片。73の脚部外面はタタキ後ナデ、内面はヘラケズリ。74は細長い脚筒部で、外面ヘラミガキ、内面ナデだがシボリ痕が残る。75は小型器台の脚部。調整は外面は丁寧なヘラミガキ、内面はハケ目が残る。76～79は弥生土器の高坏。76は坏部が底部から開く形態。外面ヨコヘラミガキ、内面はタテヘラミガキ調整。接合部より剥離する。77は脚筒部。外面ハケ目後ナデ調整。78は脚裾部片。調整は内外面ハケ目後ナデ。79は大型の鉢形を呈す坏部の高坏。外面板ナデでハケ目残り、内面はハケ後ヘラミガキ。余り見かけない形態である。80～82は土師器の鉢。80・81は椀形の形態。80の外底は剥離するが、外面はヘラケズリ、口縁から内面はナデ調整。黒斑がある。81は手捏ねで、指押え後ナデで、外底部は強い板ナデ。82は口縁部が短く外折する形態。胴部外面はハケ目、内面は板ナデ調整。83は台鉢の脚部。外面ヘラケズリ、内面は奥にシボリ痕が残るがナデ調整。84は手捏ねの小型鉢。ナデ調整であるが、全面に指押え痕が残る。85～88は支脚。85は沓形であるが、突起部が欠損する。頂部に円孔を持つ。外面指押えでナデ、内面シボリ痕が残る。86～88は筒型器台である。中空のもの86・87と中実のもの88に分かれる。86は1/2片で両端部が外反する。調整は指押え後ナデで、内面シボリ痕が残る。87は頂部片。ハケ目後ナデであるが指押え痕が残る。89の調整は指押え後ナデ。以上は弥生時代後期から古墳時代初めのもの。89古墳時代前期の山陰系把手付甕の底部で突帯が1条巡る。外面調整はナデ・ヨコナデで、内面にハケ目が残る。

S2・3は磨石又は敲石。S2は半損品であるが、長軸長8.9cm、短軸長6.4cm、厚さ5.3cmを測る。平面は円形で、上面と底面は丁寧な擦り、側面は自然面であるが、下端には叩き使用痕が残る。石材は花崗岩。S3は1/4片で、側面と上面に敲打使用痕が残る。S4・5は敲石。S4は直径5～6cmの珪岩の角円礫を利用したもの。粗割面が残る。S5は石鱗形を呈す、長軸長12cm、短軸長7cm、厚さ2.8cmを測る。上下両小口面に叩き使用による打撃面、上面・底面と左右側面にかすかに敲打痕が残る。石材は石英斑岩か。S6は石庖丁片。残存長軸長6.2cm、短軸長5.7cm、厚み0.8cmを測る。表面は傷みで剥落がひどいが研磨調整面が残る。石材は粘板岩か。S7は軽石の浮子。幅4.0cm×4.7cmを測る。各側面中央部に紐をかける為の軽い欠き込みがある。

W45はスコップ状の刃の平鋤である。柄の部分欠損する。残存長は87.9cm、刃部長30.4cm、刃幅17.9cmを測る。全体に丁寧な削り仕上げである。W46は礎板。建物の柱穴から流れ込んだ物である。竪杵状の形態を呈す。全長58.7cm、幅13.5～14.9cmを呈す。全体に面をラフに削り込んで

おり、断面は蒲鋒形を呈す。W47は板目の板材。全長80cm、幅14.2cm、厚さ1.9cmを測る。W48は建築材の扉である。全体に傷みはひどい。残存長138.1cm、最大幅18.5cm、最大厚2.7cmを測る。中央右側に把手状の盛り上がりがあり、上小口左隅に回転するための軸が残る。幅が狭いので入口扉ではなく、窓用の扉か。W49は容器の槽の一部。残存長78.9cm、残存幅21.6cm、高さ9.3cmを測る。クリの辺材を削り込んで作製している。一部焼けている。W50～59迄は建築材。W50・51は一端の側面に削って欠き込した材。W50は残存長99.7cm、直径8.2×4.9cm程の断面楕円形の、広葉樹の芯持材を利用したもの。W51は残存長98.2cm、直径は6～8cm程の断面が楕円形を呈す。樹種は広葉樹である。W52は杭に転用された建築材か。下端は杭状に削られ、上端は丸く加工されている。全長163.7cm、直径6.2～7.8cmを測る。杭としては長いので、先端を杭状に尖らせた柱材の可能性もある。W53は樹皮が残る芯持ち材の両端に削り加工を加えた棒状の建築材か。全長161.4cm、径は6.2～7.3cmを測る。W54は一端が杭状に削って尖らせ、もう一端を丸く削った建築材か。全長175.6cm、径は6.2～9cmを測る。ツバキ属の自然木に加工を加えたものである。W55・56は貫穴を持つ建築材。W55芯持ち材の丸太を利用しているが欠損が激しい。残存長116.8cm、直径は12.6～13.1cmを測る。貫穴は5.9×13.5cmの長方形に削り穿たれ、その上側には欠き込みがされており、W56も欠損が激しいが残存長166.9cm、直径は10cmを超える芯持ちの丸太を利用している。先端は両側から削られ、貫穴は13×0.5cmで両側から穿たれる。表面は樹皮が残るが、部分的に削りを加えられている。いずれも梁や桁などの部材か。W57は梁材か。全長245.7cm、径は5.8～9.5cmを測る。両端は削り込んで仕口としている。W58は柱材か。一端は両端から削って尖らせ、もう一端は二又に分かれる。全長は264.9cm、径は7.5～9cmを測る。

SD388(Fig.94・103、PL.55・56) 調査区南東隅で検出した南西から北東方向に直線的に延びる。東壁部でSK384を切り、SD390に切られる。溝の規模は確認長42m、幅は1～3.2m、深さは0.3～1.1mを測る。埋土は東壁土層では大きく上下2層に分かれるようで、上層はにぶい黄色砂から黒色、黒褐色粘土を主体とし、下層は黒色粘土で間に灰色粘土を含む。1号ベルト土層では黒褐色粘土から黒色粘土もしくは粘質砂で間ににぶい黄色砂を含む。2号ベルト土層では上層がオリーブ黒色粘土、下層はにぶい黄色砂を含む。溝の時期は弥生時代後期後半から古墳時代前期迄であろう。

出土遺物(Fig.104～119・132・133・134、PL.88～92・106) 東壁下層で廃棄されたと思われる土器が大量に出土した。種類としては弥生前期～古墳時代前期迄の土器や石器、木製品などがある。時期的には弥生時代後期後半から古墳時代前期頃のものが多いが、層的な差は余りない。遺物は土器群や上層ベルト区間毎に取上げたので、それに従って説明する。

1区上層出土遺物。90・91は土師器の壺。90は小型丸底壺の胴部で、最大胴径は9.8cmを測る。武骨な作りであるが調整は外面ハケ目後ナデ、内面はヘラケズリとナデ。91は外反して開く口縁部を持つ。調整は口縁部外面はヘラミガキで黒色顔料が残る。内面はヨコナデ。胴部内面はケズリ。92～97は弥生土器の壺。92は扁球の胴部片。最大胴部径22.2cmを測る。外面ヘラミガキ、内面はハケ目調整である。93・94は同一個体と思われる後期後半の複合口縁壺。口縁部内外面に櫛状工具による波状文、胴肩部外面はナデで平行文と波状文を描く。95～97は後期後半の複合口縁壺。96・97の肩部には三角突帯が巡る。3点とも口縁部はヨコナデ、頸部内外面はハケ目調整である。98・99は土師器で古墳時代前期の布留式の甕口縁部。98の調整は口縁部ナデ。胴部内面はヘラケズリ。99は胴部内面ヘラケズリ、胴部外面はハケ目で波状の櫛描文を加える。100は後期終末頃の短頸の壺。調整は口縁部はヨコナデ、胴部外面タタキ後ハケ目、内面はハケ目後ナデ。101は甕で、口縁部が「く」字状に外反して開く形態。外面はやや摩滅するが内外面にハケ目を施す。102は後期後

半の大型甕。図上復元である。頸部に1条断面三角の突帯と胴部中央に2条の断面M形の突帯が巡る。調整は口縁部外面がヨコナデ、内面がハケ目後ナデ、胴部外面は上半がハケ目後ナデ、下半もハケ目であるが軽くナデ。底部はナデ、胴部内面は板ナデである。103・104は土師器。103は台坏鉢の脚部。内外面ナデ。104は小型器台の脚部で直径0.8cmの円形透かし孔が1ヶ所残る。脚外面はタテハケ目、内面はナデでハケ目が残る。105・106は高坏。弥生後期後半頃のもの。105は坏底部から短く外反する口縁部で、内外面ヘラミガキ調整。106は裾が外反して開く脚部。調整は脚外面はヘラミガキ、内面はナデとハケ目で奥はシボリ痕が残る。107・108は古墳時代前期の鉢。107は椀形であるが口縁部を欠損する。外面ナデ後ヘラミガキ、内面密なハケ目調整。108の器壁は厚く、外面粗いタタキ、内面板ナデ調整。109は口縁部が僅かに外折する鉢。調整は外面はやや摩滅するがヘラミガキ、口縁部から内面はナデで指押え痕が残る。110・111は口縁部が屈折して開く鉢。110は口端部が僅かに跳ね上がる。口縁部外面はヨコナデ、内面はヨコハケ、底部はハケ目とナデ、内面はナデである。弥生時代終末位か。111の調整はナデ。112は口縁と脚短部を欠くが、脚が付く鉢。鉢部内外面はハケ目、脚部はナデ。113は古墳時代前期前半の台付鉢の脚部。調整はナデ。114・115は両端が外反する筒形の支脚。いずれも外面ナデ調整で、内面にはシボリ痕が残る。弥生時代後期のもの。116～118は器台。口縁部のくびれを上部に持つ形態。116は脚部が内湾して開き、外面ハケ目後ナデ、内面ナデ調整。117は直に外に開く。脚外面はタタキ後ハケ、ナデ、内面はナデ調整。118は口縁・裾部とも湾曲して開く形態。外面ハケ目、口縁と脚内面はハケ目。弥生時代後期前半のもの。

1区中層出土遺物。119は複合口縁壺。頸部下に三角突帯が巡る。頸部は内外面ハケ目、口縁部外面はハケ目後ナデ調整。120は甕の口縁部。調整は胴部外面はハケ目、内面は指押え後ハケ目、ナデ。口縁部はヨコナデ。いずれも弥生時代後期後半のもの。121・122は古墳時代前期の土師器。121は高坏脚部か。調整はヨコナデとナデ。122は浅い鉢でナデ調整であるが、内面はヘラミガキ。123・124は弥生時代後期後半の鉢。123は大型で口縁部は僅かに外折する。調整は外面上半に細かいヨコハケであるが、その他はナデ。124は口縁部が外反し、胴部中央には焼成後穿孔の径約1.2cmの孔がある。125は杓形器台。突起部を欠損する。ナデ調整で指押え痕が残る。弥生時代終末から古墳時代前期のもの。

1区下層出土遺物。126は古墳時代前期の二重口縁壺。調整は口縁部ヨコナデ、胴部外面はハケ目でハケ目工具痕が残る。内面ヘラケズリ。127～129は弥生時代後期の壺。127は後半代の小型壺。胴部に1条の三角突帯が巡る。口縁部外面にはタタキ痕、内面には全面ハケ目が残る。128は広口の短頸壺。口縁部ヨコナデ、胴部はハケ目後ナデ調整。129は複合口縁壺の頸部片。全体に摩滅がひどく調整は不明。130は弥生時代後期後半の小型甕。胴部下半に1条の三角突帯が巡る。調整は胴部内外面粗いハケ目。底部はヘラ状工具のナデ。131～133は後期後半の胴底部片。131の底部は僅かに凸レンズ状を呈す。外面

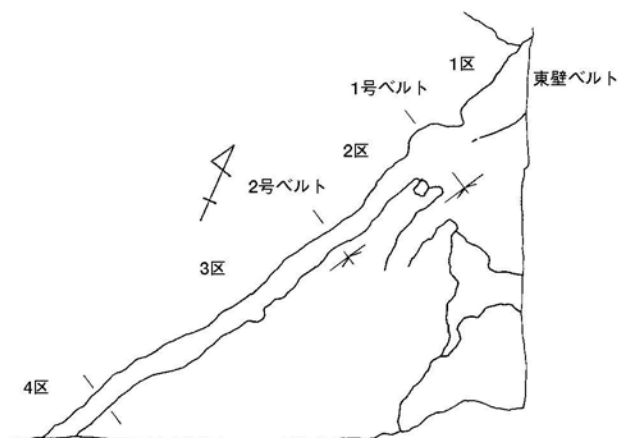


Fig.103 SD388遺物取り上げ図 (1/500)

タタキ後細かいハケ目が密に入り、内面ナデで当て具痕のような痕跡が残る。132は底部に段を有し厚手である。内面はナデ、外面はナデで指押え痕が残る。133は胴部から底部の外面はハケ目、内面はハケ目後ナデ調整。134・135は大型の甕胴部。いずれも胴部下半に断面台形の突帯が巡る。135の突帯は刻目が付く。いずれも内外面ハケ目調整である。136・137は椀形の鉢。136はミニチュア土器の鉢で手捏ねである。指押え後ナデ調整である。137は口縁部で外面はハケ目、内面はナデ調整。弥生時代後期。138は口端部が内湾する高坏。後期終末の北九州の高島式である。内外面ヘラミガキ。139は鉢口縁部。器壁は摩滅するが、内面ヘラミガキ調整である。140～142は弥生時代後期の器台。140は終末期で、口端部には刻目が付く。外面ハケ目後ナデ、内面はナデ調整。黒斑がある。141は口縁部外面から内面はヨコナデでハケ目残り、外面はハケ目。内面にシボリ痕が残る。142は底部片で、外面ハケ目、内面はナデ調整で裾部に指押え痕が残る。

1区底面出土遺物。143～146は弥生時代後期の袋状口縁壺。143は口縁部内外面ヨコナデ、頸部外面は細かいハケ目後ナデ調整。144は頸部に突帯を持つ口縁部。外面と口縁部内面はハケ目とナデ調整。肩部内面に指押え痕が残る。2点は後期前半のもの。145・146は胴部片で、いずれも頸部と胴部下半に突帯が巡り、胴部突帯には刻目が付く。145の胴部突帯の刻目はハケ目工具の木口による刻み。内外面粗いハケ目調整。147は壺か甕の底部か。胴部外面はハケ目後ナデ、内面はハケ目、外底部はハケ目でナデ調整。148～153は弥生時代後期の甕。148は中型の甕で、調整は口縁部ヨコナデ、内面にハケ目残り、胴部内外面はハケ目。外面にはススが付く。149は大型甕の口縁部片。頸部には刻目突帯が巡る。調整は胴部外面と内面はハケ目とナデ。丹塗りのようで赤色顔料が残る。150は胴部片。突帯部径は40.5cmを測る。突帯部には刻目が付く。内外面粗いハケ目。151・152は頸部に突帯を持つ甕口縁部。151は口端部下端が下がる。頸部突帯にハケ目工具による刻みが付く。調整は外面はハケ目後ナデで、内面は細かいヨコハケ目。152の口縁部外面はヨコナデ、内面はハケ目後ナデ、胴部内外面はハケ目。153の口縁部外面はヨコナデ、胴部外面はハケ目、口縁～胴部内面はハケ目後ナデ。154・155は鉢。154は台状の底部を持つ形態で、調整は外面から底部はナデ、内面はハケ目とナデ。155は厚手の器壁で口端部は窪む。内外面粗いハケ目調整。弥生時代後期。156は器台口縁部。外面は粗いハケ目、口縁部内面は粗いハケ目、内面はナデ。弥生時代後期前半。157は杳形の支脚で、頂部に径2.1×2.6cmの円孔を持つ。ナデ調整で内面にはシボリ痕を持つ。弥生時代後期のものか。

1区土器群上層出土遺物。158・159は壺。158は土師器の二重口縁壺。調整は口縁部内外面ヨコナデ、頸部外面にはハケ目後ナデで有軸羽状文が入る。頸部内面はハケ目。古墳時代前期。159は複合口縁壺。外面はハケ目、内面は口縁部ヨコナデ、頸部はハケ目。160は弥生時代後期の甕。調整は胴部外面ハケ目でススが付着する。内面はナデとハケ目。161～163は高坏で弥生時代終末から古墳時代初頭のもの。161・162は同形態の坏部。調整は外面ハケ目とナデ、内面はハケ目後ヘラミガキである。いずれも外面に黒斑がある。163は脚部。調整は外面タテヘラミガキ、内面は奥がシボリ痕、裾部はハケ目後ナデ。164は土師器の鉢。164は丸底の底部から口縁部が外反して開く形態。調整は外面はハケ目後ナデで、外底はヘラケズリ。内面はハケ目。165・166は弥生時代後期後半の器台。いずれも調整は胴部外面ハケ目、口縁部外面はヨコナデ、内面はハケ目で胴内面はナデ。166の下部はハケ目調整。

1区土器群下層出土遺物。167～175は古墳時代前期の土師器壺。167は小型壺で、内外面ナデ調整。168は直に開く口縁部。口縁部内外面はナデ後ヘラミガキ調整。169は短頸壺。調整は口縁部はヨコナデ、胴部外面はハケ目後ナデ、内面ヘラケズリ。170はやや長頸の壺。口縁部はヨコナ

デ、胴部内面はヘラケズリ調整。171は締まりの強い胴頸部片。調整は外面細かいヘラミガキ、口縁部内面はナデ、頸部はハケ目、胴部はヘラケズリ。172～174は二重口縁壺。調整は口縁部ヨコナデである。175は古墳時代初めの瀬戸内系酒津式の二重口縁甕。口縁部外面には沈線が巡る。口縁部はヨコナデ、胴部内外面はハケ目調整。176は畿内系の二重口縁壺。頸部に突帯、頸部と口縁部の境に断面三角形の突起が付く。口縁部はヨコナデと内面には櫛目波状文、胴部外面は櫛目波状文、内面は粗いハケ目後ナデ調整。177～180は弥生後期の壺。177は小型壺。内外面ナデで内底部に指押え痕が残る。頸部内面シボリ痕が残る。外面は黒斑がある。178は「く」字状に短く外反する壺。口縁部ヨコナデ、胴部外面はヘラミガキ、下半はヘラケズリ後ナデ、内面上半はミガキ、下半はナデ調整。黒斑がある。179は胴底部。胴部最大径は16.6cmを測る。外面ハケ目後ナデ、内面はハケ目後板ナデ調整。180は算盤形の胴部で、胴径18.4cmを測る。外面ヘラミガキ、内面はナデ調整。181～190は弥生時代後期の複合口縁壺。181～185は後期後半。いずれもハケ目とナデ調整である。181～183は同形態。181は頸部に三角突帯を持ち、口縁と頸部の境の稜に刻目が入る。182は口縁部片で頸部に小さな三角突帯が付く。外面ハケ目工具痕が残る。183は口縁部片で、184・185は同形態。口縁部ヨコナデ、頸部外面はハケ目、内面はハケ目とナデ調整。186・187は後期中頃である。口縁部は内湾し、口端部は内傾する。188～190は胴頸部。188・189は後期の複合口縁壺の頸部と思われる。いずれも頸部に三角突帯が巡る。188の突帯には刻目が付く。頸部内外面はハケ目。189は頸部から胴部外面はハケ目後ナデ、内面はナデ又はハケ後ナデ調整。頸部と胴部の境は指押え痕が残る。190の調整は頸部はナデ、胴部内面はハケ後ナデ。191・192は突帯が付く壺胴部。突帯部胴径は復元でそれぞれ29.8cm・28.5cmを測る。調整は191は胴部内外面ハケ目。192は内面ハケ目後ナデ。193は壺底部。外面は胴部から底部までハケ目、内面はナデ調整。194は壺か甕の底部。調整は胴部外面は細かいハケ目後ナデ、内面は粗いハケ目で底部は板ナデ、外底は板ナデ。後期か。

195～224はいずれも弥生時代後期の甕。195・196は小型甕。195は最大胴径が下半にある。胴部外面はハケ目、内面はハケ目後ナデ調整。197～202は中型甕。口縁部が「く」字状を呈す形態で、口端部は平坦で僅かに窪むものもある。調整は口縁部外面はヨコナデ又はハケ後ナデ、内面もナデかハケ目。胴部内外面はハケ目である。203～208・210・211は大型の甕で、208以外は頸部に突帯を持つ弥生時代後期のもの。210の口端下部には刻目が付き、外面粗いタタキ調整である。209は口縁部が短く直立気味の大型壺。内外面ナデ調整である。頸部に三角突帯が巡る。212・213は頸部から胴部上半片。212は頸部に三角突帯が巡る。外面はハケ目、内面は粗いハケ目とナデ調整。213は古墳時代前期の大型甕。器壁は薄い。外面はハケ目後ヨコナデ、内面はヘラケズリ後丁寧なナデでハケ目を加える。214は大型甕の胴部。下半部に三角突帯が巡る。突帯部はヨコナデ、その他はハケ目調整。215～224は甕胴部～底部片。216は壺か。全体に丸底から凸レンズ状の底部で、底部にもハケ目を加える。弥生時代後期後半から終末期、古墳時代初頭のものか。222・223は大型の甕又は壺底部片。内外面底部迄粗いハケ目。224は台付甕である。胴部はハケ目調整、台部はナデで内面に指押え痕が残る。225～239は高坏。弥生時代後期から古墳時代前期のものである。225・226は古墳前期後半のもの。エンタシス状の脚部で裾が外に屈折して形態。口縁部内面から脚部外面はヘラミガキ、脚内面はナデ調整で絞り痕が残る。226は同形態の裾部。外面ハケ目後ヨコナデ、内面ヘラケズリ調整。227～229は坏底部から口縁部が直立気味に内湾して外反して開く形態。228では脚部が中実で裾が下側で外に開く。裾部には透かし孔が3ヶ所入る。調整はヘラミガキやヨコナデで、229はハケ目が入る。230は外湾気味に開く口縁で端部は丸みを持つ。調整は

外面ヘラケズリ、内面はヘラミガキである。231・232は底部から屈折して開く坏部。231は坏外面ナデ、内面はヘラミガキ調整。232の坏部が内外面ヘラミガキ。233は内湾して開く脚部。外面細かいヘラミガキ、内面はナデ調整で工具痕が残る。234～238は弥生時代終末から古墳時代初めのもの、坏部の屈曲点の中ほどにあり、口縁部がやや内湾気味に大きく開く形態。外面はハケ目、内面はハケ目後ヘラミガキ調整。239は浅く広がる坏部である。内外面ハケ目後ヘラミガキ調整。弥生時代後期後半の口縁部が内屈する豊前系のものか。240～255は鉢。240～244は古墳時代前期の鉢で椀形の形態。240はミニチュア土器で、全面指押え痕が残る。底部黒斑がある。241はナデ調整。242は外面ハケ目後ナデ、内面はナデ調整。243は厚手で底部はやや屈折する。口縁はヨコナデで体部内外面はハケ目調整である。244は台付鉢の脚部。ナデ調整で脚部には指押え痕が残る。245は底に径0.8cmの円孔がある。両孔は両側から穿たれる。外面タタキ後ナデ、内面はハケ目調整である。畿内第V様式系か。246・247は体部から口縁が屈折して外反して開く形態。ナデ調整だが、246の口縁部外面と内底は板ナデ調整。247の底部はケズリ後ナデ調整。248は底部が深く平底気味を呈し、口縁が外折して端部が内屈する形態。外面ナデで、内面はハケ目で指押え痕が残る。弥生時代後期後半か。249は椀形で口端部が平坦を呈す形態。ナデ調整で外面はハケ目をナデ消す。弥生時代後期後半か。250・251は底が深く平底の形態。ナデ調整であるが、250の外面はハケ目後ナデ。251の内面は一部ハケ目調整で外面黒斑がある。弥生時代後期のもの。252・253は大型で口端部が平坦を呈す。252の外面はケズリとナデ、内面はナデ後ヘラミガキ調整。253はナデ調整。254～259は丸底気味の底部から口縁部が屈折して外に大きく開く形態。弥生時代後期後半から古墳時代初頭頃のもの。調整はハケ目とナデであるが、255は外面に僅かにタタキ痕が残る。256は僅かに平底の名残がある。内外面ナデ後ヘラミガキ調整。内面ハケ目。257～259は口端部が僅かに摘み上げ段を有す。外面はナデ調整で、内面はナデでヘラミガキを加える。260は深底で口縁が「く」字状に開く形態。外面はハケ目後ナデ、口縁部内面は細かいハケ目。胴内面は板ナデ調整。261～269は円筒状の器台。弥生時代後期のもの。261～264は口縁の屈折部が上部に持つ。261は小型で外面ハケ目、内面はハケ目とナデでシボリ痕が残る。262は内外面ハケ目調整で、脚端部にも一部ハケ目が残る。263・264は口縁部。263は外面タタキ痕が一部残るがハケ目後ナデ、内面はナデ調整でシボリ痕が残る。264は外面ハケ目で、内面ヘラ状工具による粗いナデ調整。265は頸部から胴脚部。外面ハケ目後ナデ。内面ハケ目とナデ調整でシボリ痕が残る。266は脚部。外面ハケ目、内面はハケ目後ナデ調整。267は屈曲が中央部にある形態。内外面ハケ目後ナデ調整。268・269は脚部。268は外面ハケ目、内面はシボリ痕が残り、裾部はハケ目とナデ調整。269は内外面ハケ目。270は支脚で、内外面は指押え後ナデ調整。271は低脚の器台か。外面ハケ目後ナデ、内面指押え後ナデ調整。

I区出土遺物。272・273は土師器小型丸底壺。古墳時代前期のもの。272は口縁部で内外面ナデ。273は口縁から胴部片。調整はハケ目後ナデで、外底部はケズリ後ナデ。274～277は甕。274は小型甕の胴頸部。ナデ調整であるが口縁部内面はハケ目後ナデ。275～277は古墳時代前期。275は口縁部で、調整は外面粗いハケ目後ナデ、内面は口縁部がヨコナデ、胴部はヘラケズリ。276は筑前系の庄内甕。口縁部外面はタタキ後ナデ、胴部外面はタタキ、口縁部内面はハケ目後ヨコナデ、胴部はヘラケズリ調整。古墳時代初頭のもの。277は頸胴部。外面ハケ目とナデでタタキ痕が残る。胴内面はヘラケズリ調整。278～281は高坏。古墳時代前期のもの。278・279は坏部。278は外面ナデ、内面はハケ目後ナデかミガキ調整。279は摩滅がひどく調整は不明。280は坏底部から脚部。外面はヘラミガキか。内面はナデ調整で脚内面はシボリ痕が残る。281は内湾して開

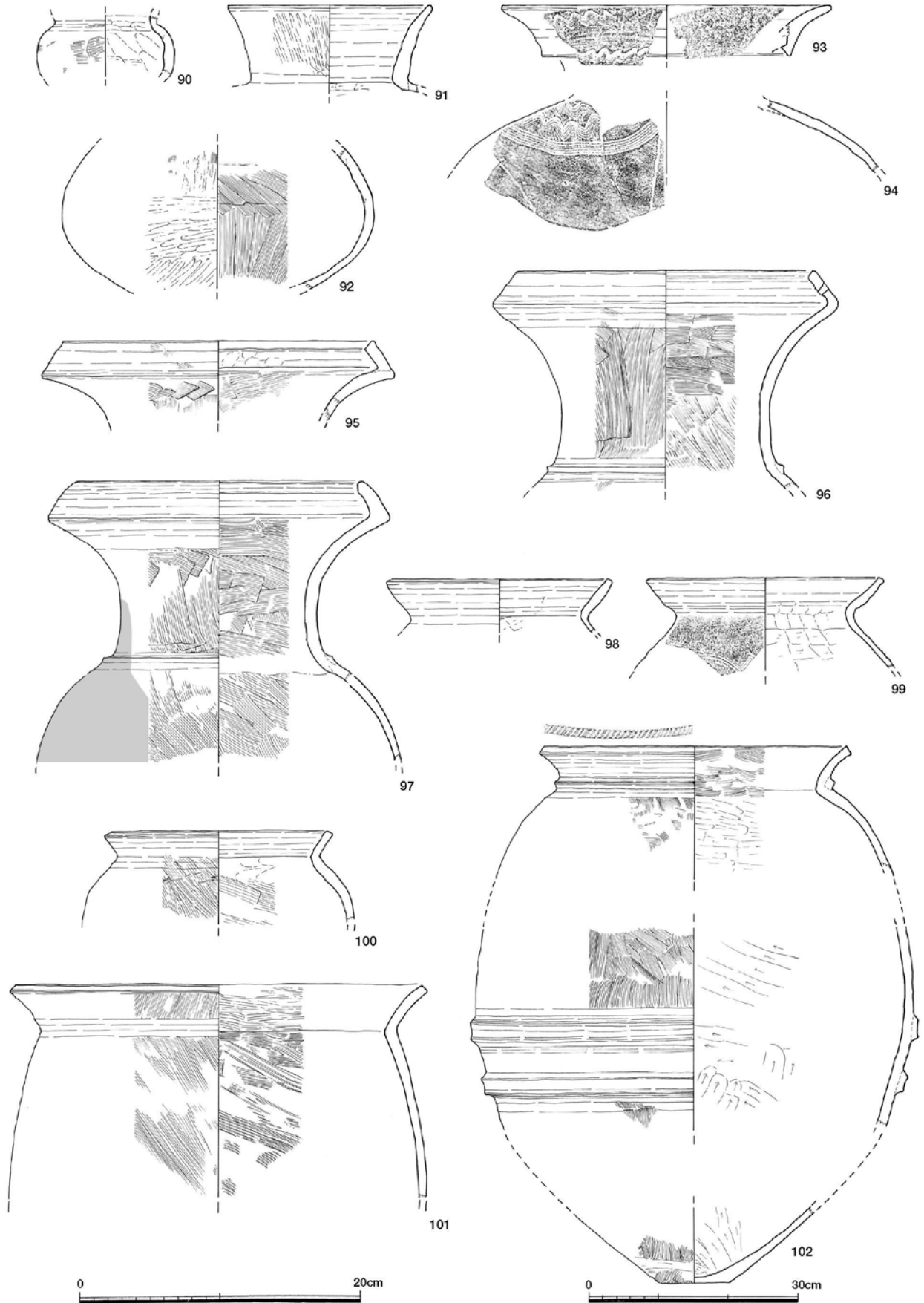


Fig.104 SD388-1区上層出土土器 (1/4・1/8)

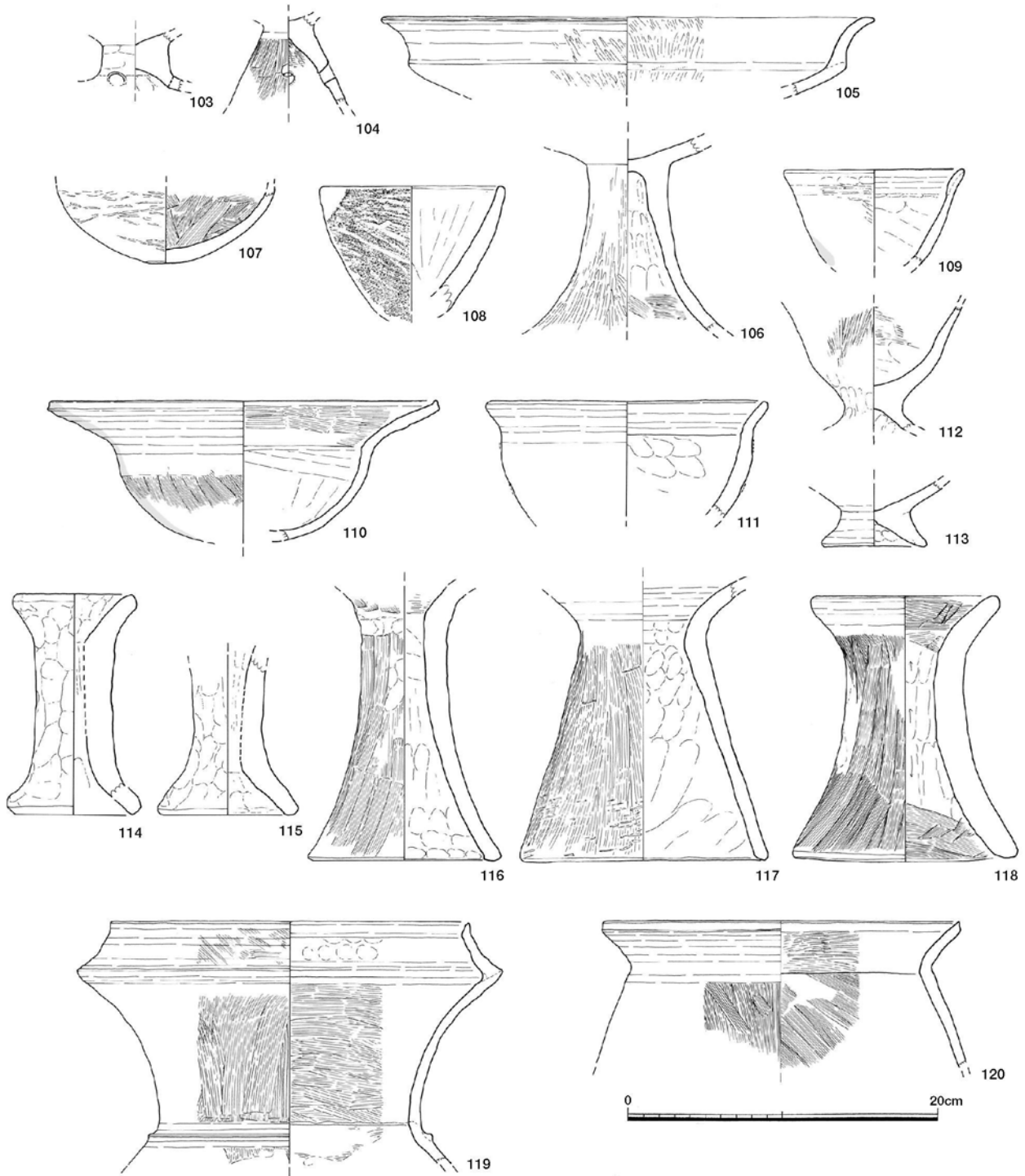


Fig.105 SD388-1区上層・中層出土土器 (1/4)

く短い脚部。外面はハケ目で部分的にナデ、内面はハケ目後軽いナデ調整。282は土師器の脚台部。古墳前期のもの。内外面ナデ調整。283～287は土師器の鉢で古墳時代前期である。287以外は椀形である。283は小型で、内外面ナデ調整。284の内外面は指押え後ナデ調整。285は外面ハケ目とナデ、内面粗いヘラミガキ調整。286は深底で、外面ナデ、口縁部はハケ目後ナデ、底部はヘラ

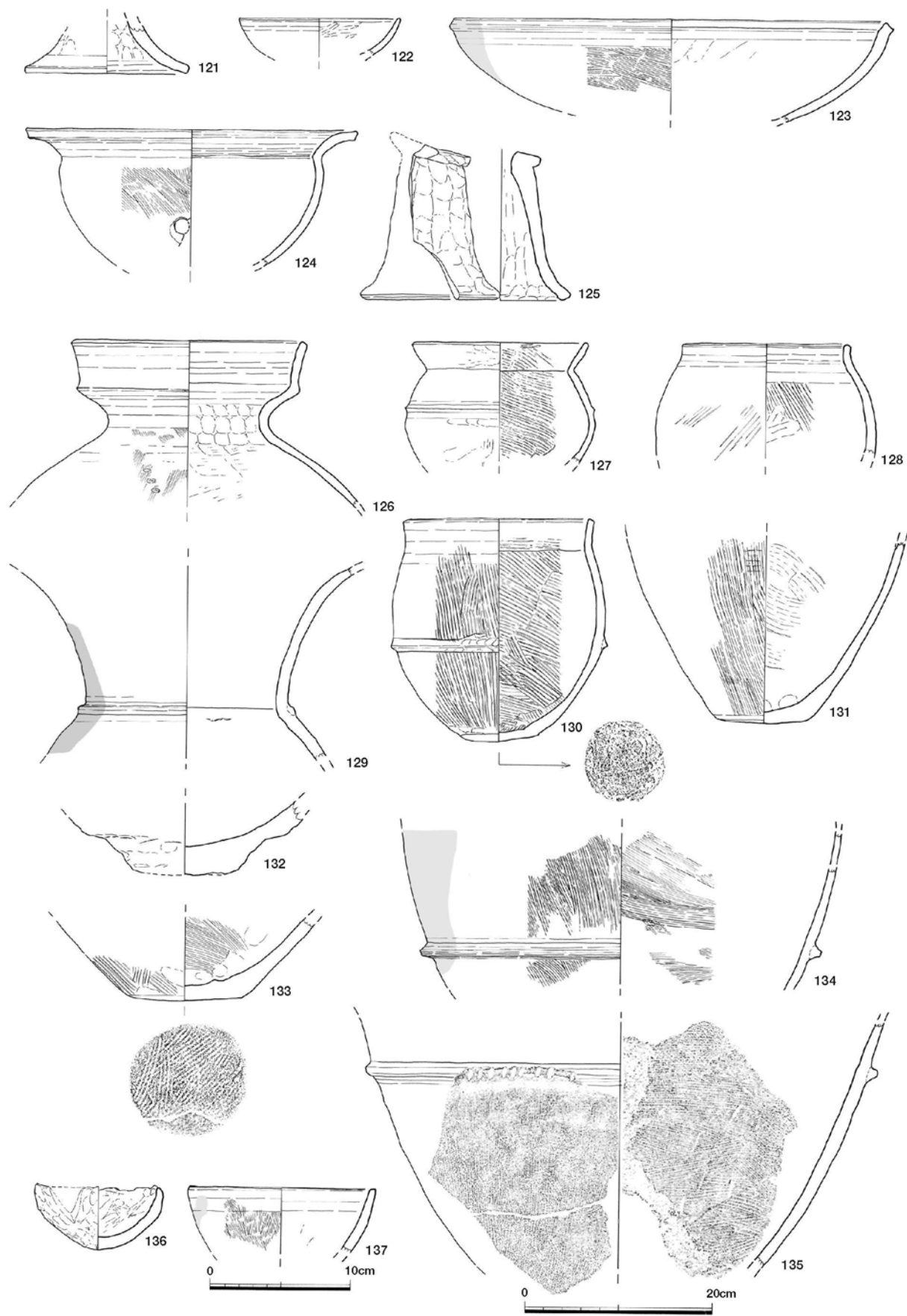


Fig.106 SD388-1区中層・下層出土土器 (1/4・1/6)

ケズリ、内面はハケ目調整。287は口縁部が屈曲して外に開く形態。調整は外面は口縁部がヨコナデで底部はヘラナデ、内面はナデ後粗いヘラミガキ。285・287は前期初頭のもの。288～290は弥生土器の壺。288は長頸壺の口縁部。口端部直下に二条の沈線が巡る。調整は外面ヘラミガキ、内面はナデで、内外面にシボリ痕が残る。289は大型の複合口縁壺か。頸部に1条の突帯が巡る。頸部外面から内面はハケ目後ナデ、胴部はナデ調整。弥生時代後期のもの。290は締まる頸部と胴部中央に突帯を持つ壺胴部。胴部内外面ハケ目、ハケ目を加えた後、突帯を貼り付ける。291～294は甕。291は胴部が丸い小型甕。口縁部はヨコナデ、胴部外面上半はハケ目、下半は板ナデ、内面はナデ調整。292は弥生時代後期後半の甕。口縁部外面はハケ目後ヨコナデ、内面はヨコナデ、胴部外面はタタキ後ハケ目、内面はハケ目。293は頸部に突帯を持つ弥生後期の大型甕。口縁部外面はヨコナデ、口縁内面と胴部外面はハケ目後ナデ、内面はハケ目とナデ。294は類例を見ないが壺か。外面ヘラミガキとハケ目、内面はナデ調整で、天地逆の可能性もある。295・296は高坏。弥生時代後期前半のもの。295は坏部で、内外面の調整はヘラミガキ。296は内湾して開く脚部。直径1cm位の円形の透かし孔が3ヶ所ある。竹管で打ち抜くが粘上が残る。外面ヘラミガキ、内面はシボリ痕が残るがナデでハケ目が残る。297～299は小型の鉢。297は弥生時代後期のもので、内外面ハケ目後ナデ調整である。298は後期後半から末のもの。外面タタキ、内面はハケ目。298は尖り気味の底部。手捏ねで外面指押え痕が残る。300・301は両端が反る筒型器台の口縁部で弥生時代後期のもの。外面ナデ後ハケ目、内面はナデでハケ目調整。シボリ痕が僅かに残る。

1区その他遺物。302は口縁部が屈曲して大きく開く上師器の小型丸底壺。内外面ヘラミガキ。古墳時代前期初頭のもの。303は二重口縁壺口縁片。外面ハケ目後ヘラミガキ、内面ヘラミガキ調整。304は古墳時代前期の甕口縁部で歪みが大きい。ナデ調整で、胴部内面はヘラケズリ。305は鉢口縁部細片。内外面ナデ調整であるが、外面ハケ目が残る。306は弥生土器の胴部細片。307・308は両端が外反する円筒型の器台。弥生時代中期後半。外面ハケ目又はハケ目後ナデ、内面はナデ調整で、307の口縁部にはハケ目。309・310は突帯文期の夜白式土器鉢。309は椀形で、外面は工具ナデ、内面はナデで貝殻条痕調整。310は深鉢の胴部突帯片。棒状工具による刻目。外面貝殻上痕で、内面はナデ。311・312は祭祀のミニチュア土器鉢。手捏ねである。口径3cm位である。313は弥生後期後半の甕の底部片。外底はハケ目、内面はナデ調整で指押え痕が残る。周縁部を打ち欠いており、土製品として再利用したのか。

2区出土遺物。古墳時代前期から中期前半の土師器。314は土師器の小型丸底壺。調整は口縁部外面はヨコナデ、胴部外面と口縁部内面はハケ目後ナデ、胴部はヘラケズリ。外面にはススが付着する。315は壺胴部片。外面ハケ目でヨコナデ、内面はヘラケズリ調整。316は二重口縁壺か。頸部にはハケ目工具による刻目の突帯が巡る。外面ヘラミガキ、内面はヨコナデとヘラケズリ調整。前期初頭のものか。317はなだらかな肩部を持つ甕。胴部外面はハケ目でススが厚く付着する。胴部内面はヘラケズリ。318～321は鉢。古墳時代前期のもの。調整は318がナデとヘラケズリ、319は外面ハケ目、内面はヘラミガキ。320は外面ハケ目後ナデ、内面はナデ。321は外面ハケ目後ナデ、内面はナデ。322は沓形の支脚か。頂部径6.2cmを測る。指押え後ナデであるが、外面タタキ痕が残る。脚内面はハケ目調整。弥生終末から古墳時代初め。323は器台。口縁部内面から外面ハケ目後ナデ、内面はナデ調整。324は弥生時代中期後半の筒型器台の透かし部か。ナデ調整で、透かし部はヘラ切り。赤色顔料が残るか。

3区出土遺物。325は台付壺。弥生時代終末頃か。壺胴径は12cmを測る。調整は壺部外面はハケ目後ナデ、脚部はハケ目後ヘラミガキ。壺内面はナデ、脚部内面はヘラケズリ。

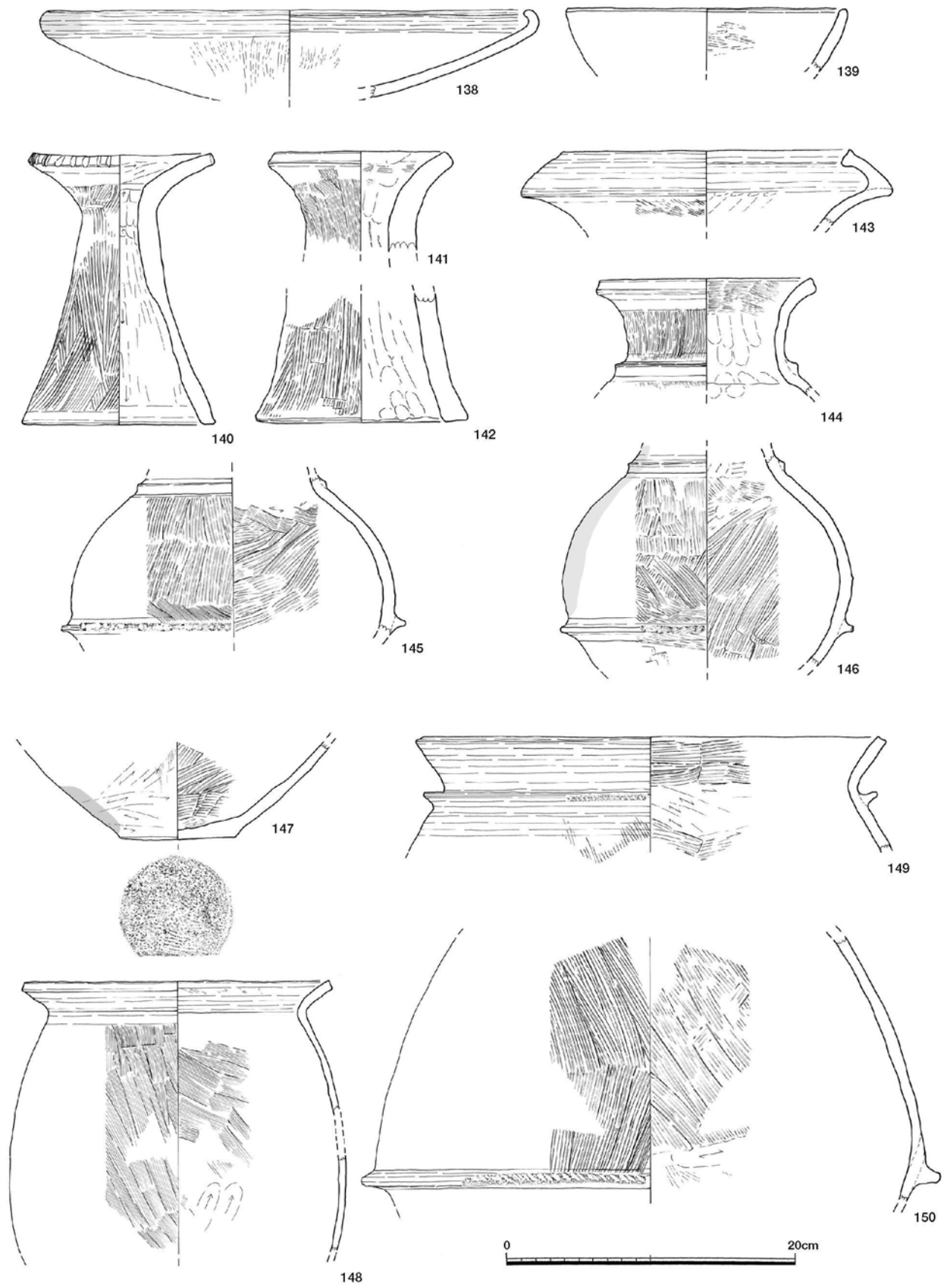


Fig.107 SD388-1区下層・底面出土土器 (1/4)

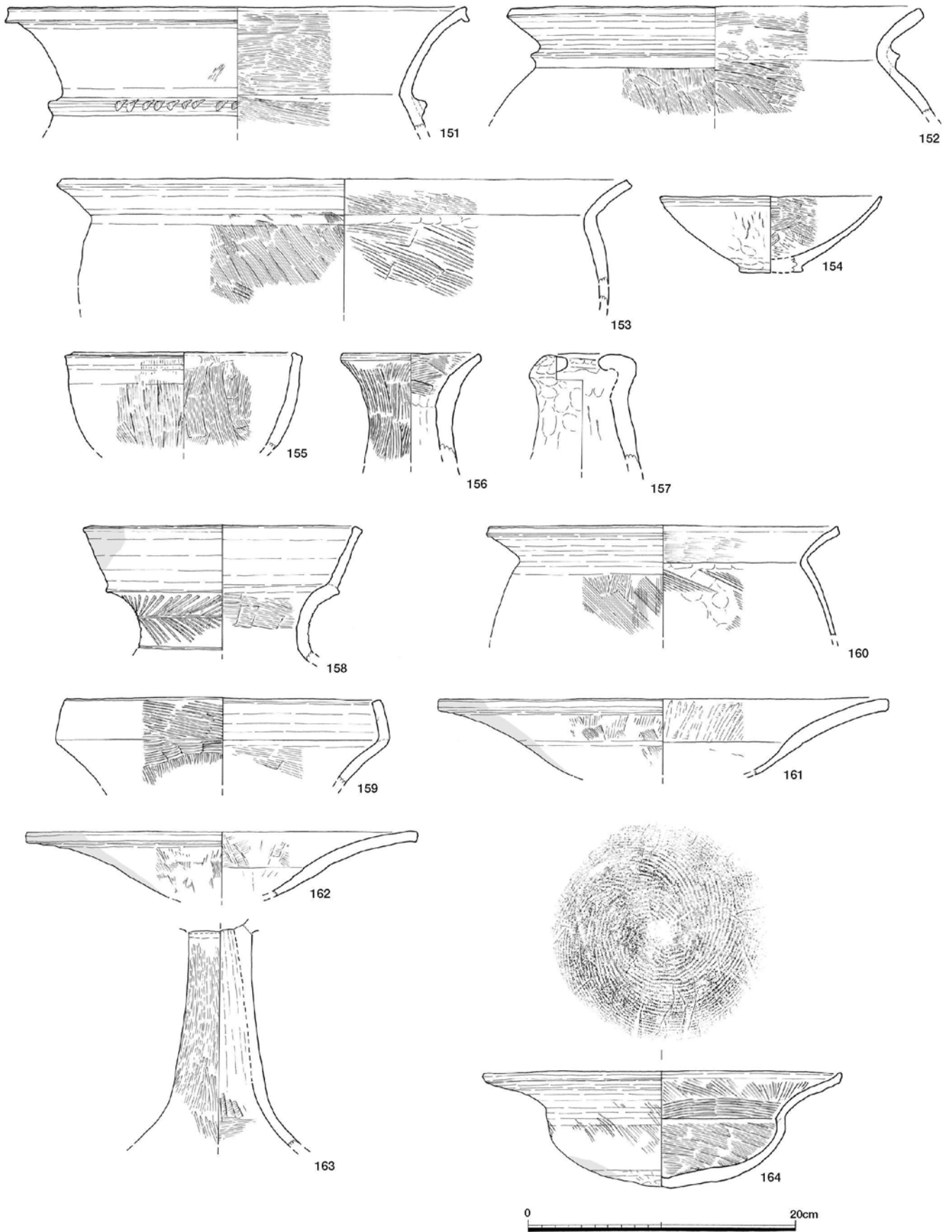


Fig.108 SD388-1区底面・土器群出土土器 (1/4)

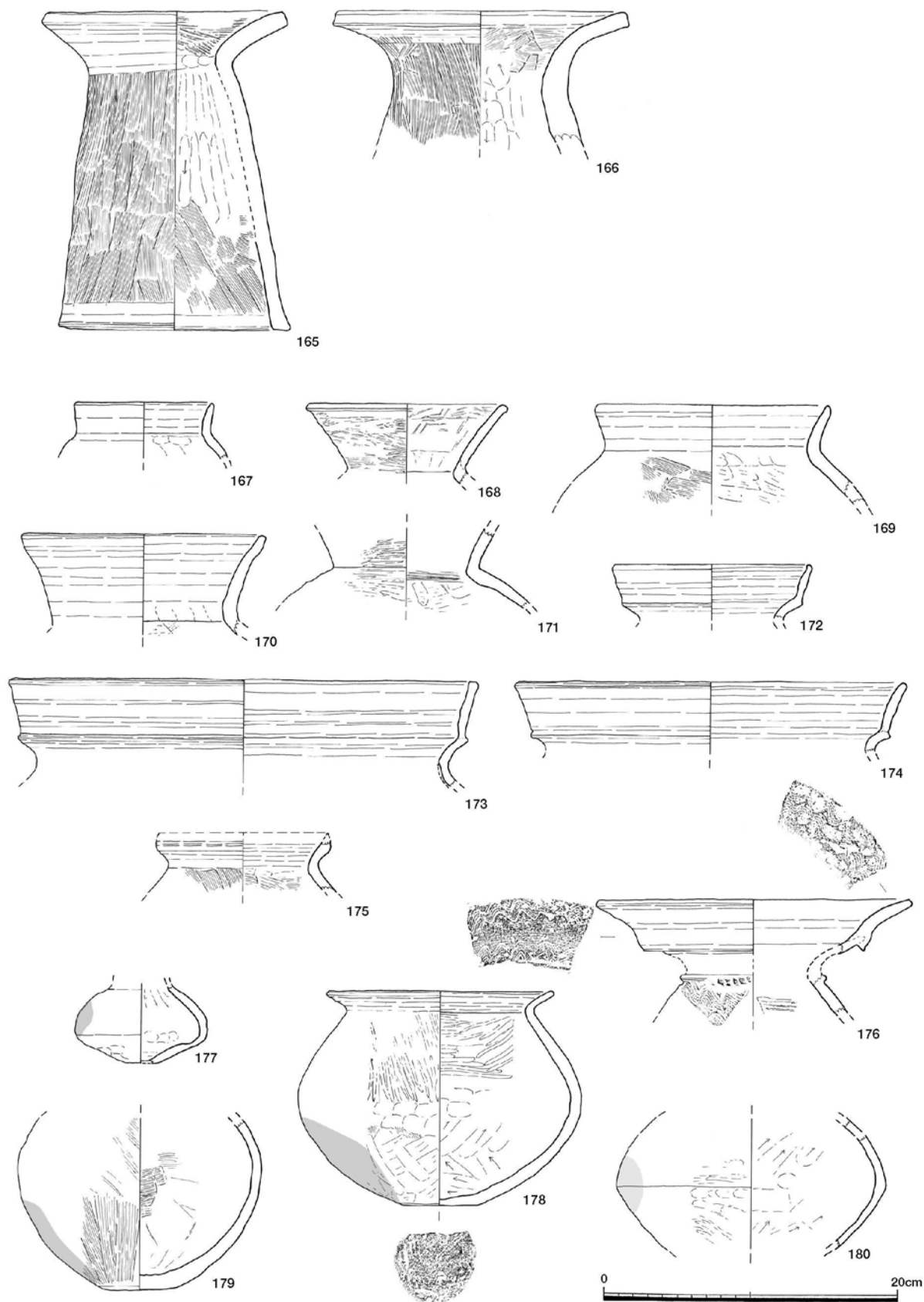


Fig.109 SD388-1区土器群上層・下層出土土器 ① (1/4)

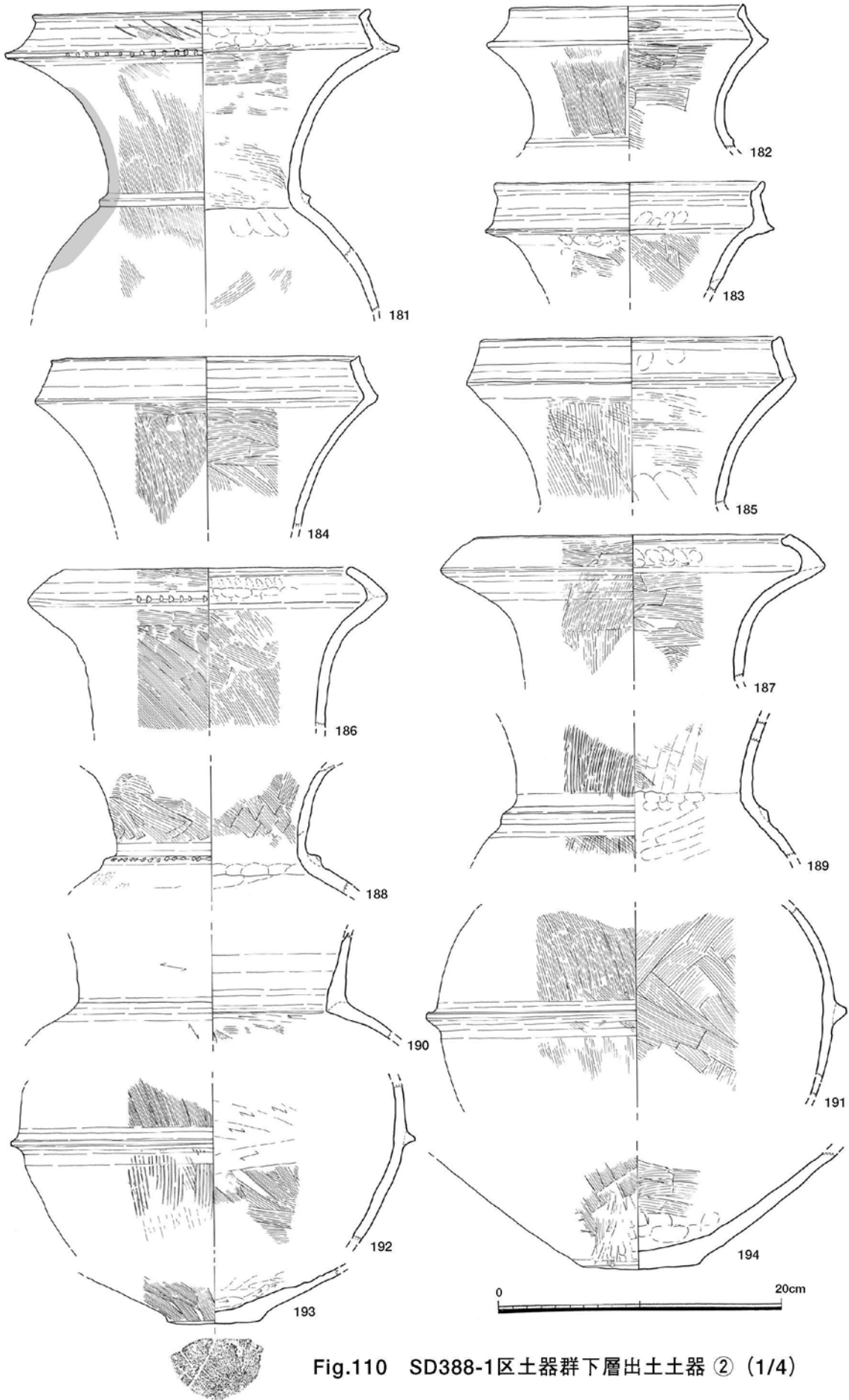


Fig.110 SD388-1区土器群下層出土土器 ② (1/4)

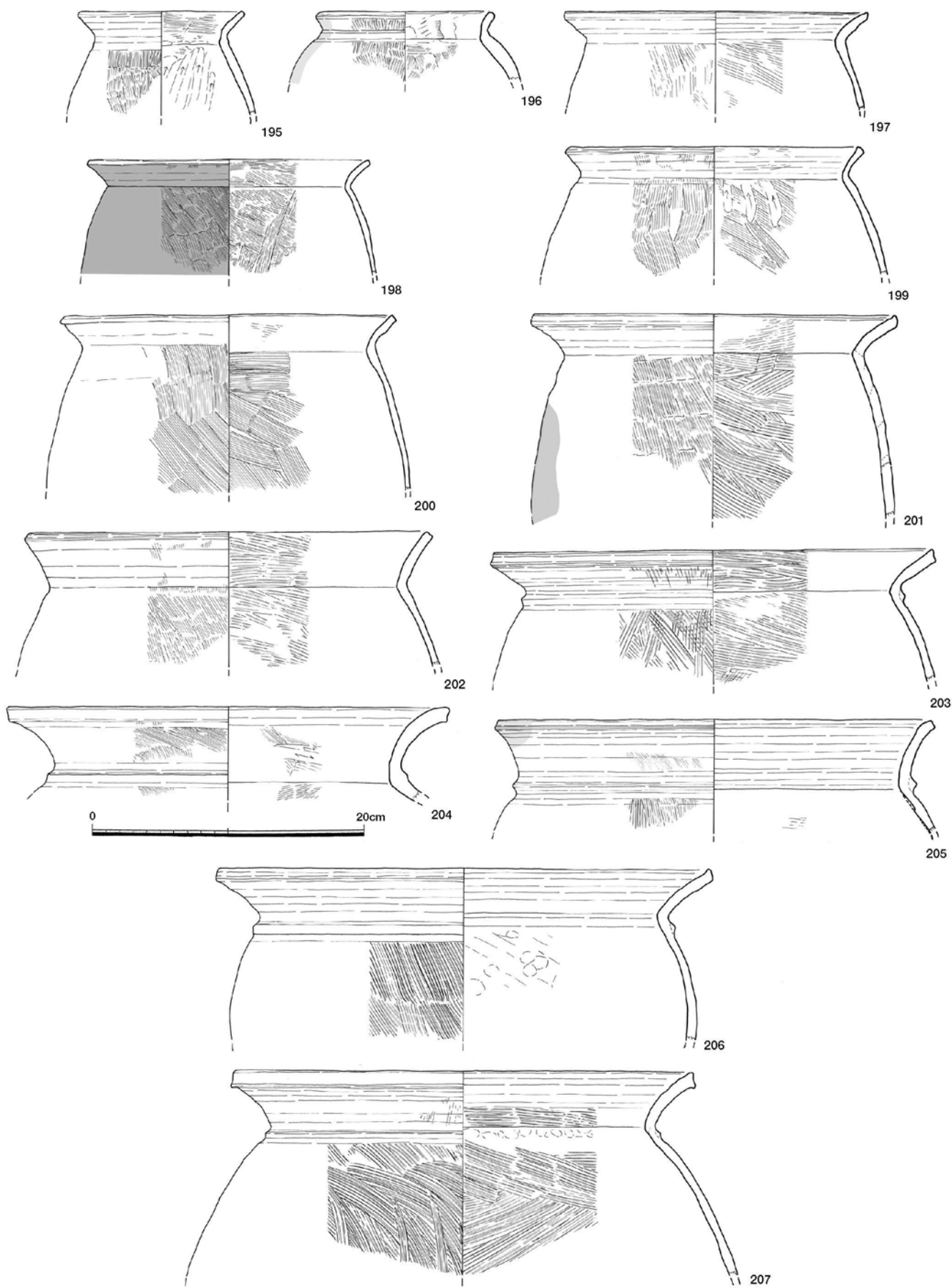


Fig.111 SD388-1区土器群下層出土土器 ③ (1/4)

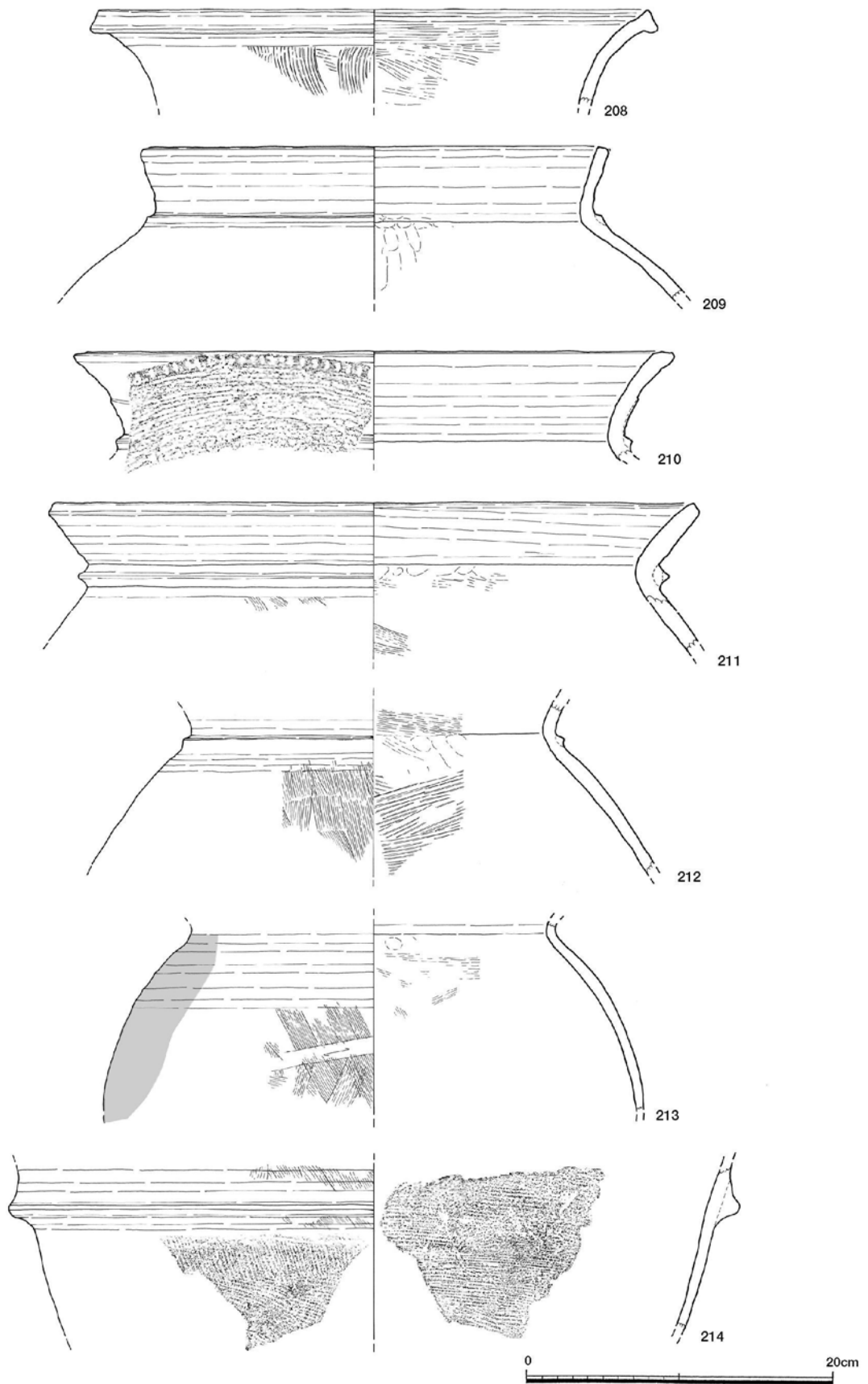


Fig.112 SD388-1区土器群下層出土土器 ④ (1/4)

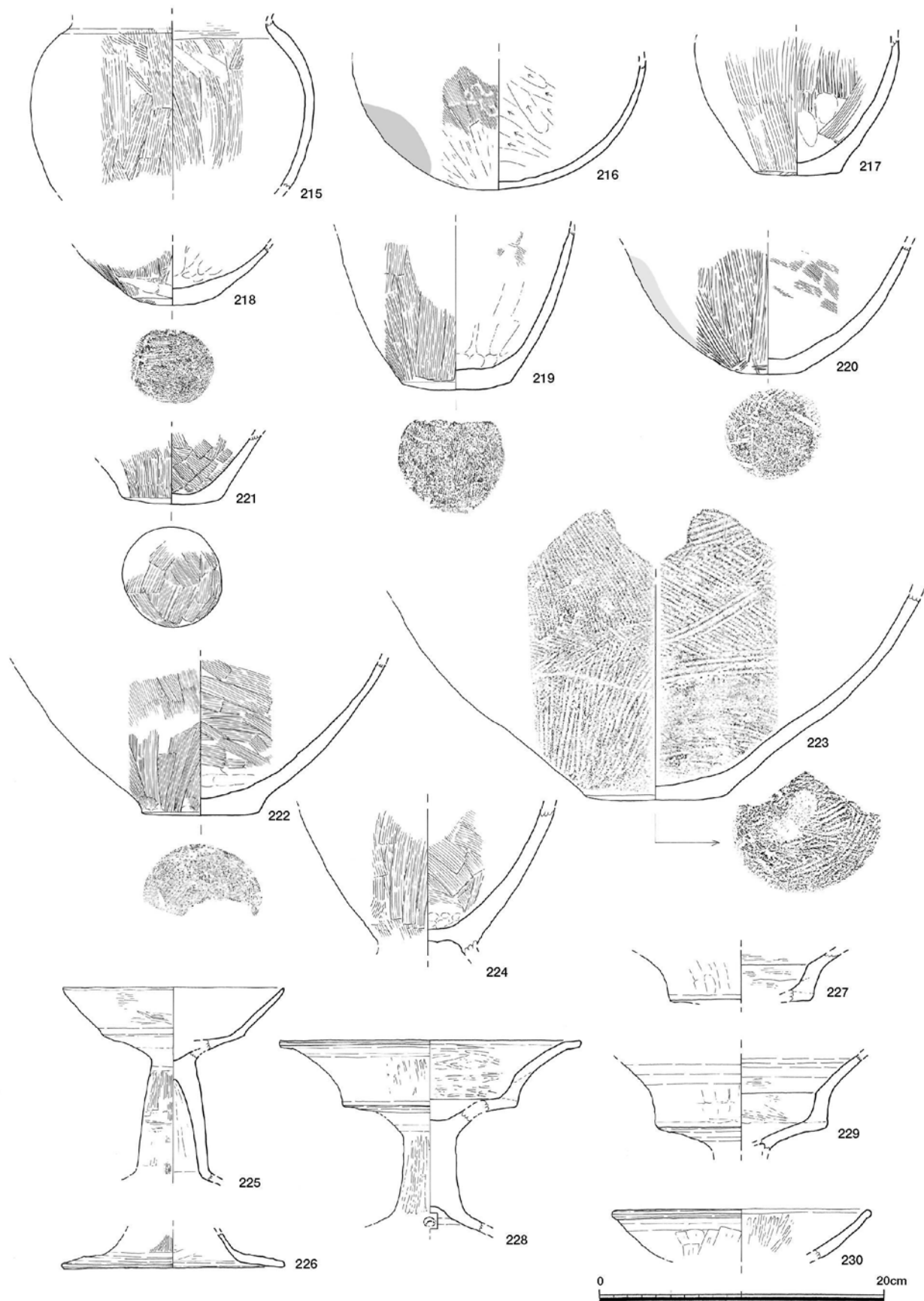


Fig.113 SD388-1区土器群下層出土土器 ⑤ (1/4)

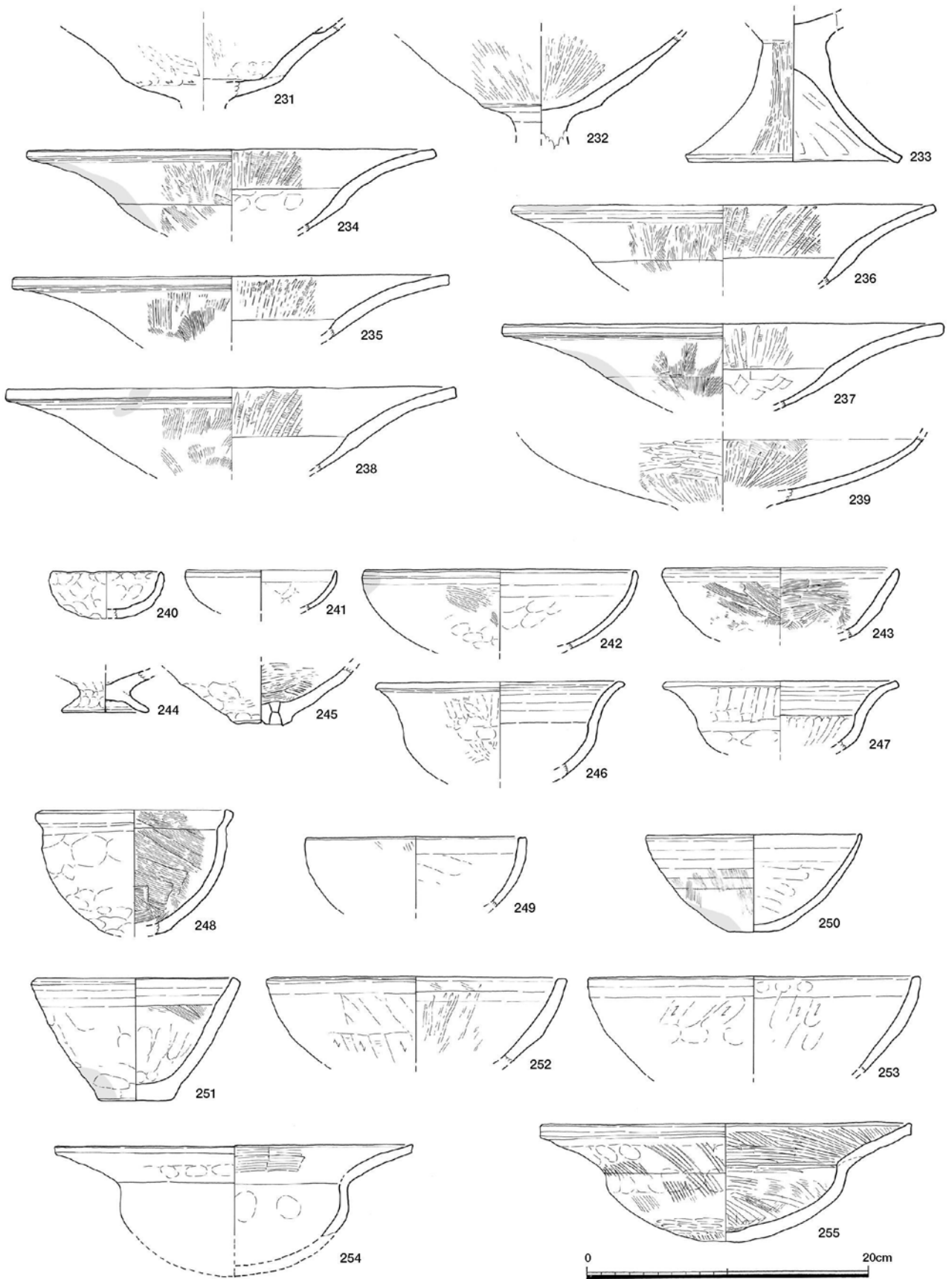


Fig.114 SD388-1区土器群下層出土土器 ⑥ (1/4)

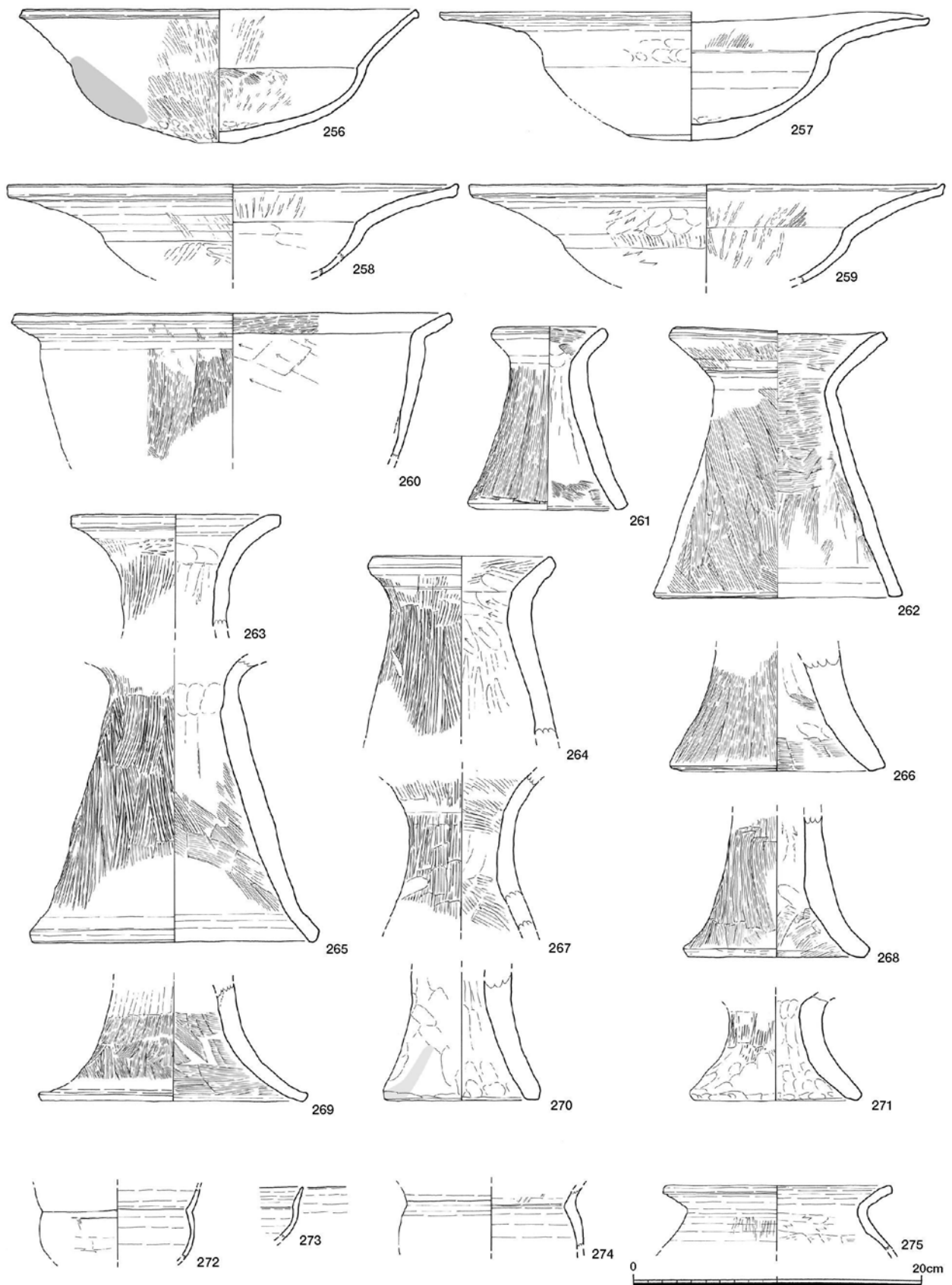


Fig.115 SD388-1区土器群下層 ⑦、1区出土土器 ① (1/4)

4区・1号ベルト出土遺物。326～331は古墳時代前期の土師器。326は小型丸底壺。調整は内外面ハケ目とナデ。327は二重口縁壺で畿内系か。口縁内外面ナデ調整で櫛目波状文。328・329は高坏。328は坏部。調整はナデで外底部は板ナデ。329は短脚でエンタシス状の筒部を持つ。三ヶ所径0.8cmの円形透かし孔を持つ。内外面はハケ目後ナデ。330・331は鉢。330は楕形で、外面はナデ、内面は板ナデ調整。331は尖り気味の底部で、外面ヘラミガキと板ナデ、内面は板ナデ調整。332は後期後半の複合口縁壺。口縁部はナデ、頸部はハケ目である。333は頂部が突起する沓形器台。頂部はナデ調整で、外面はタタキ。334は小型丸底壺で、手捏ね仕上げで器壁は厚い。ナデ調整であるが指押え痕が全面に残る。黒斑がある。

446～450は土製品。446～448は把手。手捏ね成形で指押え痕が残る。446は口が欠けるがほぼ完形。大型で残存長13.7cm、杓部径は7.4cm、深さ4cmを測る。447は杓部が半欠けで短い柄が付く。残存長9.2cm、残存杓部径5.3cm、残存深さ2.7cmを測る。448は柄の部分で残存長5.3cmを測る。いずれも1区下層出土。449・450は焼けた粘土塊。大きさは8cm前後である。449は表面凹凸があるが、指押え痕やナデ仕上げ。450は全面指押え痕が残り、雑な仕上げ。表面は部分的に黒化する。

S8は石斧未製品。全長14.6cm、最大幅7.2cm、最大厚4.4cmを測る。断面は楕円形。粗割面と敲打調整痕が全面に残る。石材は安山岩か。S9・10は磨石又は敲石。S9は不整形円形状を呈すが下小口部は使用により平坦を呈す。縦長7.5cm、横長9.5cm、最大厚さ6.15cmを測る。上・底面は擦られ摩滅し、上面には敲打痕が残る。S10は半円形の欠損品。縦長8.25cm、横長9.35cm、最大厚は3.9cmを測る。底面は自然面であるが、上面は擦られ敲打痕が残る。側面は使用面なのか敲打痕が残る。石材は玄武岩。S11は凹石。S11は縦長10.3cm、横長6.1cm、最大厚み3.8cmを測る。側面は敲打痕が残り、上・底面は使用による窪みが明瞭に残る。石材は砂岩。S12は敲石。径7.6×4.3cm、厚み3.6cmを測る。粗割の各面に使用による敲打痕が残る。石材は緑泥片岩か。S13・14は砥石。S13は長方形の扁平な形態。縦長20.5cm、最大横幅9cm、厚み1.8cmを測る。上・底面、左右側面は砥面、上下両小口部は欠損面。底面には敲打痕が残る。石材は目の細かい砂岩。S14は欠損し三角形形状を呈す。縦長19.2cm、残存横幅11.7cm、最大厚5.4cmを測る。上・底面、左側面、下小口面は砥面で、底面と左側面から下小口面には敲打痕が残る。石材は砂岩。S15は楕円形状の石庖丁片。残存長7cm、幅4.15cm、厚さ0.4cmを測る。表面は研磨仕上げ。色調は暗赤褐色を呈し、石材は輝緑凝灰岩。S27～28は黒曜石の石鏃。S27は基部が凸基で先端は欠損する。鏃身長2.2cm、幅1.3cm、厚み0.4cmを測る。雑な調整である。S28は平基で鏃身長2.85cm、幅2.1cm、厚み0.9cmを測る。雑な調整である。S29は基部が凸基で先端を欠損する。鏃長3.5cm、幅1.7cm、厚み1.8cmを測る。剥片に簡易な調整を加える。

W59は又鋏の一部。残存長33cm、刃幅3.8cm、厚みは薄く0.6cmを測る。柁目材の利用である。W60は農具のエブリ或いは鋏片。残存縦長13.8cm、横幅13cm、厚み1.2cmを測る。

SD444 調査区高所部の北側縁辺N-25区からQ-25区にかけて東西に延びる小溝。幅は0.5～1m、深さは浅く最大0.1mを測る。埋土は黒褐色粘土である。

出土遺物(Fig.120) 弥生時代前期～後期の上器片や黒曜石剥片などが出土。

335～341は弥生土器。弥生時代前期から中期後半迄である。335～338は中期中頃から後半(須玖II式)のもの。335・336は甕の逆L形の口縁部細片。ナデ調整で外面ハケ目が残る。337・338は壺。337は鋤先状の口縁部、338は小型壺で、いずれも調整はヨコナデである。339・340は前期で大型の丹塗壺。339の口端部は強く外反する。器表面は摩滅するが、表面に赤色顔料が残る。340は口縁部外面から内面はヘラミガキで胴部内面はハケ目調整。外面から口縁部内面は丹塗。341は突帯文の深鉢。胴部上半で屈曲し、屈曲部に刻み目突帯が付く。外面貝殻による状痕、内面はハケ目工

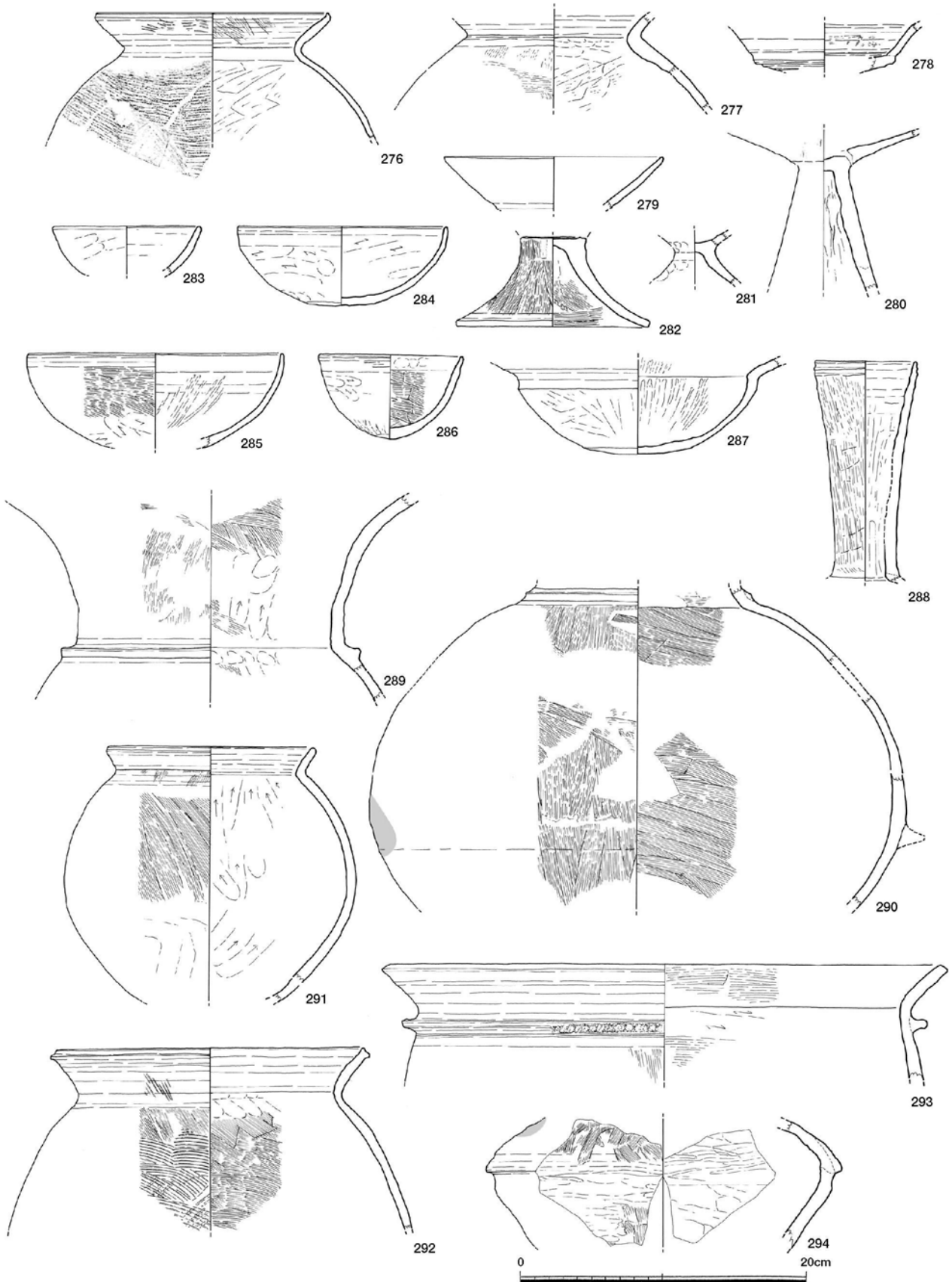


Fig.116 SD388-1区出土土器② (1/4)

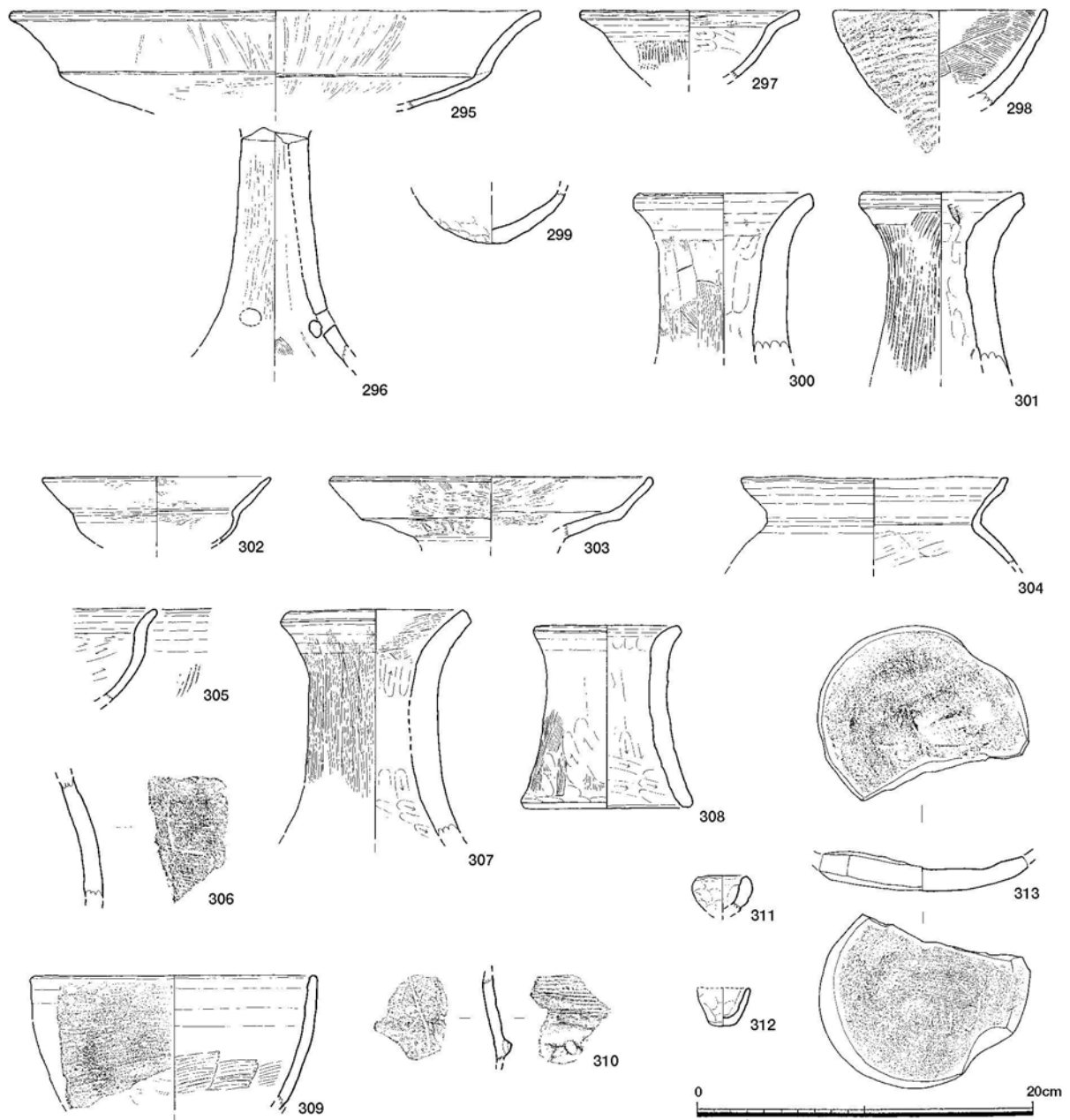


Fig.117 SD388-1区出土土器 ③ (1/4)

具によるナデ。底部はナデ調整で、内面指押え痕が残る。

SD451 (Fig.120) SD441の南側を平行して延びる小溝。0.7~1.2m、浅く深さは最大で0.15mを測る。埋土は黒褐色粘土である。

出土遺物 (Fig.120) 弥生時代前期から古墳時代前期の上器片が出土。

342~348は弥生時代中期中頃から古墳時代前期。342は瀬戸内系の甕の口縁部。口端部は上部に摘み上げる。外面タタキ後ナデ、内面はハケ目調整。343は高坏坏部で、弥生時代終末頃か。坏外面から口縁部内面はヘラミガキ。内底はハケ目とナデ。344・345は土師器の脚部。344は高坏、345は台付鉢か。いずれも接合部には刻みが付く。調整は外面ヘラミガキ、内面はナデでシボリ痕が残る。346・347は甕口縁部。346はヨコナデで工具痕が残る。347の外面はタタキ後ナデ調整、口縁部から内面にはハケ目が残る。348は中期中頃の甕口縁部。ナデ調整。